
HTML殺人事件

ame*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HTML殺人事件

【Nコード】

N7759A

【作者名】

ame*

【あらすじ】

あるネット詩人の死の噂からWEBを巡るルネ。詩の投稿サイト、巨大掲示板・・・、無数のページを表示するディスプレイの向こうには、さまざまな人々が潜み、蠢いている。その姿を垣間見ながら彷徨するのは、まるで、現代におけるサテリコンを体験しているようだ。400字詰で、およそ970枚です。

第1話（前書き）

文中で、`br`のタグ（改行を表わす）が表示されなくなるようです
ので、

タグを全角で、`<br>`のように表記していますが、
HTMLにおいて、正しくは半角で書きます。

第1話

01 >html<

脳内を網の目のように走っている神経が、いちようにテンションをはらんでいる。そして、それは微量の刺激と痺れを伴う波になって、じわじわと身体中に拡がって行くようだった。

自分の身体が変容していく感覚。

ドーパミンかエンドルフィンか、詳しくはわからない。とにかく、そういった脳内麻薬と呼ばれる物質が頭の中で生じ、作用し始めているのだろう。

インターネットの仮想空間に入っていく時は、いつも自分が何かの力によってハイな状態に導かれているような気がする。もしかすると人間のシステムがどこかで、そのように作られているからなのだろうか。

アイコンをクリックしてディスプレイに広がったIE（Internet Explorer）の画面。そこに、どこか遠くのサーバーからHTMLファイルがダウンロードされる。表示されるウェブページ。

それを見ているルネの意識の中に、そういった思考が細かい泡のように現れ、緩やかに浮かび上がって行く。

ルネは昼下がりにマックでフィレオフィッシュを食べて以後、何

も胃に入れてなかった。あまり食欲が無かったのでポテトは頼んでいない。考えてみると、あれから、もう10時間を超えていた。夕方、部屋に帰って、それからずっと、地球の表面に張り巡らされた電子の蜘蛛の巣をさまよっていたのだ。帰り道の自販機でコーヒーを買ってからは、飲み物も摂っていなかった

キッチンへ行って冷蔵庫からコーラを取り出す。

真冬の深夜で、暖房の強いのは好みでないから室内の温度は高くなかったが、なぜか暖かいものよりもコーラが飲みたかった。炭酸飲料だから、強いて言うなら、そんなことしか思い浮かばない。

ボトル型をしたアルミ缶のキャップを回して外し、口に運んだ。自己暗示かもしれないが胃壁から血管に入ったカフェインが脳まで昇って神経を刺激する感覚が生じる。

狩猟民は、たいてい空腹状態で獲物を探した。手持ちの食料を食べ尽くして、すぐに次を確保できるわけではないからだ。

だが、そういう時、彼らの感覚は日常を超えて冴えわたる。日常の知覚を超えた何かがはたらくようになり、そうして新たな獲物を捕らえることができるのだ。

その狩猟民のDNAは現在の人類にも伝えられている。

何かの本で、そんなことを読んだことをルネは突然思い出す。

獲物を求めて未知の土地の奥深く踏み込んで行く狩猟民。彼らの脳内では、たぶん高揚感を与える物質が分泌されて空腹によるストレスを消滅させたのだろう。

ルネは、そんなものが今、ディスプレイを見つめている自分の内部でも生み出されているように感じていた。

缶のキャップをしつかり閉めて、マウスパッドの横に置く。これで、不意に倒しても液体がPCを濡らす心配はない。

再びディスプレイに集中した。よく造られたサイトに出会うと彼は、それに引き込まれ。周囲のすべてが消え去って、世界には彼とPCの融合体しか存在しなくなる。

そこにあるのは人類の営みを集積した巨大なアーカイブやログだ。歴史の流れの中で集積されてきた学問と知識。魚類や昆虫の卵のように途切れることなく産み出されてきたアート。そういったものから日常の中の喜怒哀楽・恋愛感情、不満・嫉妬・執着や好奇心・探求心。そして野心や願望から性欲のような無意識の闇に至る領域までが、そこには格納されている。

膨大な人々の体験、記憶、知識、欲望……。それらを繋ぐ地下茎は光ファイバーや銅線で網状に地球を覆っている。

それは心理学でいわれる集合的無意識の世界のようでもあり、また、世界の始まりから終わりまでのあらゆる出来事が記されているとオカルティストたちが述べるところのアカシックレコードのようでもある。実際その規模には遠く及ばないのだろうが、それでもルネはネットを基に想像を膨らませていくと、やがて、ぼんやりとだが、そういったものの姿を垣間見ることができるような気がした。

02 > head <

めばしいサイトの更新状況は、すべてチェックした。興味があったけれど、まだ行ってなかったところも今日は、ほとんど覗いている。

ルネはIEを閉じる。そして、<ちゃんねる・ゼロ専用ブラウザ

>を開いた。

言うまでもないが、ちゃんねる・ゼロはネットで超有名な巨大掲示板サイトだ。ここはIEでアクセスするよりも、専用ブラウザで見るほうが何かと使い勝手が良い。

興味のあるスレッドを見つけたり書きこみやすいし、再びそのスレを見る時には、ブラウザが前回読み進んでいた部分を記憶していて、そこを表示するようになっていたりするのだ。

ニュース板のスレッドでは、最近起きたニュースに対して、さまざまな感想が述べられたり、議論が戦わされたりしている。

クリスマスも過ぎた歳末の日本と世界は、しかし、平穩に年を越して行くというわけではないようで、このサイトでは話題に事欠かない。

少年たちはホームレスを襲い、金に困った者はコンビ二へ強盗に押し入る。残忍で猟奇的な犯罪の数々は迷宮の深い闇の彼方に消え去って行くように見え、世界に目を移せば、あちこちで自爆テロが頻発していた。

書き込みのところどころに漫画や似顔絵のようなAAが投稿されているのが見える。このサイト特有のキャラや有名人をテキストの組合せで描いているのだが、それは、このサイト独特の言葉遣いと相俟ってアナキーな雰囲気さらに強めていた。

ちゃんねる・ゼロを“Webの魔境”と呼ぶ人も多い。「あそこへ行くと性格が変わる」と恐れ、けっして近づくことのない人たちもいる。

まあ、こういうのは極めて気が小さい場合の例だろうが、たしかに常識的な一般ピープルだと眉をひそめるような書き込みが、このサイトに満ち満ちているのは事実だった。

・ ・ ・

285：私も匿名さん

現場は漏れの家から2キロ程だYO　ガクガクブルブル（AA

ry

285：私も匿名さん

妹は豚。死んでよかった。

姉の優香莉ちゃんはカワイソ。

犯人を憎む。

286：私も匿名さん

現場検証をした捜査員は、今夜レバ刺が美味いだろう（藁

287：私も匿名さん

優香莉ちゃん萌えゝ

288：私も匿名さん

これは將軍様の指令を受けた工作員の仕業です。

289：鞠林満村

天罰だ！！

290：私も匿名さん

藻前ら、いっていいことと悪いことがあるのがわからんのか。
被害者や遺族のお気持ちを考えてみる。

291：天使@地獄

<<281

これを書いた香具師は死刑。

291：私も匿名さん

朝まで山本さんの家で過ごした犯人は、
その間、ネットサーフィンをしていたということです。
切り裂いた4人の死体の脇ですよ。
これは間違いなくキティの仕業ですね。

292：私も匿名さん

犯人は無職、DQN、B、K、のいずれかと思われ。

293：私も匿名さん

<<291

どこへアクセスしていたのでつか？情報きぼるん。

294：私も匿名さん

<<291

ソースキボヌ。

295：私も匿名さん

<<294 <<291

ネタだよ。ネタ(藁

296：私も匿名さん

<<291

ここにカキコがありますた。 <<76

.

・
・
“ << 76 ” にマウスを当てると小さなボックスが現れて、その発言が表示された。

これは専用ブラウザ独自の機能だ。IEだとリンクになっているだけだから、書き込みを読むにはクリックしてそこまでジャンプしなければならない。

76：銭形

とっておきの情報を出そう。

犯人が現場を離れたのは、

朝十時を過ぎてからだ。

それまで、香具師は何をしていたか？

ネットを見てたのさ。

3日前に起きた一家惨殺事件のスレッドでは、まだ“祭り”が続いている。書き込みが1000になるとストップで次のスレが立てられるのだが、もうスレのナンバーは30を超えていた。

いちばん下まで読み終えたルネはリロードボタンを押した。

数分の間に60近い投稿があつて、スレが伸びている。だが、そのほとんどは、それまでに読んできたのと同じ調子のジャンクな書き込みで、特に興味を引かれるものは見当たらなかった。

下端に近いところにあつた書き込みを通り過ぎようとした時、ルネは何かを感じた。数時間ディスプレイを見つめ続けていたので眼が疲れている。でも、眼筋に力を入れ、揺るんでいたフォーカスを

合わせた。

そこにはURLだけが書かれていた。

投稿者は「私も匿名さん」。このスレッドでは名前の欄を空白のまま送信すると、これが自動的に挿入される。

そのURLのサイトにはルネも行ったことがあった。というか、時々アクセスしている。でも、彼の知る限りでは、あの殺人事件と関係のあるような何かは思い浮かばない。

そこはPoem Villageという詩の投稿サイトだった。何か事件の謎に関わるような作品があるのか？それとも訪れるメンバーの中に犯人がいるとでもいうのだろうか？

もつとも、ちゃんねる・ゼロの情報には、それほど信頼性があるわけではない。スレの内容とは無関係なものが意味不明で書き込まれたりしているのは良く見かけることだ。

ガセネタや悪意をもった意図で行われる投稿もある。面白半分にPoem Villageが荒らしの標的になることを狙っている可能性もあった。

ルネはURLをクリックした。けれども、そこに何かがあることを期待していたわけではない。ただ何となく気になって、覗いてみようと思っただけだ。

IEが別ウィンドウで現れる。背後の専用ブラウザを右上隅の×ボタンで閉じ、Poem Villageのトップページが表示されたIEを最大化する。

```
03 >title<}>/title<
```

```
>!DOCTYPE HTML PUBLIC "-//W3C/  
/DTD HTML 4.01 Transitional/E  
N"<  
>html lang="ja"<  
>META http-equiv="Content-Type  
" content="text/html; charset"  
Shift-JIS"<  
>head<  
>title<HTML殺人事件>/title<  
>style type="text/css"<  
body {color:#000000;font-size:  
14;background-color:#666666;  
h2 {color:#ff4500};  
>/style<  
>/head<  
>body bgcolor="#cccccc" text"  
#000000"<  
<br>  
>center<  
>h2<HTML殺人事件>/h2<  
>/center<  
<br>  
>hr<
```

この作品はフィクションであり>br<
実在する人物・団体・事件とは関係ありません。>br<

> h r <
< b r >
< b r >
< b r >

.

0 4 > / h e a d <

P o e m V i l l a g e のトップは、それほど凝ったデザインではない。t a b l e タグをうまく使い、パステルカラーの背景色にコンテンツへのリンクと説明が要領よく割りつけられた、機能重視のシンプルなページだ。

『P o e m V i l l a g e』のロゴの下には、このサイトの“村長”の言葉が書かれている。

- ・ここは詩によるコミュニティサイトです。
- ・だから、辛辣な批評・批判は禁止。
- ・「人にやさしく」を、このキーワードにしましょうね。

その下のI n f o r m a t i o n は、4日ほど前のものが最新だった。

< 最近、規定違反の投稿が増えています。
新しく来られた方は投稿マニユアルを熟読されるようお願いしま
す。 >

会員登録をすると定期的なメールのお知らせが来るが、ただアクセスしただけの単純なビジターでも投稿はOKだ。HTMLの知識があれば画像を使ったりwebならではのビジュアル的に凝った作品の発表も可能になっている。

投稿板には4つのジャンルがある。メイン、恋愛、ジャパネスク、マニアックだ。ルネは、だいたい1日に1度、このサイトにアクセスするが、メインだけ覗くことが多い。

『恋愛』は言うまでもなく恋愛詩、『ジャパネスク』は短歌・俳句、『マニアック』は村長によれば「メインでは飽きたりないと思う人、ユニークな作品が目立ちたい人、世をすねた人、のためのコーナー」だそうだ。ここは、けっこうルネの好みの作品が寄せられるのだが、投稿頻度が少ないので毎日チェックしなかった。

投稿数もアクセスも『メイン』が圧倒的に多い。だから、どの作品にも必ず幾つかは感想が書き込まれる。何かしら反応があるのはうれしいものだし、ここはサイトの方針もあって、皆、好意的なレスを書いてくれる。

最近、このサイトのアクセスが急激に増えているのは、そういったwebのインタラクティブな性質を生かしたことによって生じる魅力があるからだろう。

ルネはアイコンをクリックして『メイン』に入った。1ページに50篇の作品タイトルが、上から新しい順に表示されている。そし

て、次の投稿があると、いちばん下のものから次のページに移されるようになっていた。

上から2作品には、まだレスがついていなかった。

3つめのカン太という作者の投稿は、感想欄にこんな書き込みがある。

<当サイトでは1日1投稿が原則となっています。ご注意ください。
い。

守られない場合は、スタッフ削除することもあります。

なお、新しく来られた方は、規定をよく読まれるようお願いします。

rie@スタ

ツフ >

ページの中程あたりに同じ作者の作品タイトルがある。昼頃投稿されたものだ。

ルネは、もう数時間も、あちこちのサイトを巡り歩いていたので、このページの50作品全部をチェックする気力はなかった。タイトルと作者名から、めばしいものだけを読む。そして、以前から馴染みの詩人数人の作品に、簡単なレスを書いた。

そろそろネットを終えて、TVでも見ようかと思った時、何気のひとつのタイトルに目を止めた。クリックして中に入る。

HTML

希羅々

PCの前で待ちつつづけている
ディスプレイを見つめて
あなたも 私も
いつ やってくるのか わからない 何かを

来る日も来る日も
それを探していて でも
家にも街にも学校にも会社にも
それは見当たらないから
私は待ちつつづけている

毎日ドアの前で
郵便配達を待っているのは
とつくに飽きてしまったし
大人になっ たら叶う夢なんて
信じてもないなくて

窓の向こうには ただ
埃まみれの町があるだけ

ひとり呟くのは
誰の耳に留まることもない言葉

「私の居場所はどこですか？」
でも

たぶん 世界中が

それを待ちつつづけている
膨大な数の眼が
それを

それは何ですか？

それは愛ですか？

それは至福ですか

それは……？

7日XX時XX分XX秒

200X年12月2

作者のHP： - - -

- この作品の著作権は 希羅々 さんに帰属します。
- 無断で転載することは禁止します。

作者からのコメント

いつも暖かい感想をありがとうございます。

そんなに深い意味は無いけど、こんなタイトルをつけてみました。
HTMLってHyper Text Markup Languageの略でしたね。

じつは私、まだタグとか、よくわからないんです。
これから勉強して、早く自分のホームページを作りたいと思います。

す。

ヒキコモリだから、時間はたっぷりあるのですが（^^；
時々、病気が出たりするので（謎

感想

私は、いつか来る王子様を待っています。 ：美鈴

いつか、きっと、やってきますよ！！ ：いつちゃん

希羅々さん、ご無沙汰でした。やっとネットに復帰できました。
相変わらず、心に響く詩を書かれていますね。 ：赤土

HTMLを知らなくてもHPは作れますよ。ソフトを使えば出来ます。
例えばHPビルダーとか、Dream Weaberとか。

後者は俺も欲しいんだけど、高いです（泣 ：JIN

サイコーです（はあと ：タクヤ

・ ・ ・

レスは20以上ある。

この作者の名前は数ヶ月前から見かけていた。かなり速いペースで新作を投稿していて、なかなか人気を集めてもいるようだった。

ルネは半ば無意識で、感想のフォームに書き込んでいた。

>
<ディスプレイの向こうには天使も悪魔もいるのかもしれませんが。

Submitのボタンを押してから、ちょっと表現が良くなかったかなと思った。

内容に対する感想になっていないことは、このサイトでは許されるにしても、これまで、この作者とコンタクトをもったことはないのだ。気心が知れているわけではないから、悪意をもった書き込みのように思うかもしれない。

ルネ自身は、まだ、そういう経験をしたことは無かったが、ネットでのテキストだけのコミュニケーションだと、意図したことが伝わらずに誤解を招いたりするのは、よくあることらしい。

パスワードを入れて削除しようかとも思ったが、けっきょく、そのままにした。

何か、おかしい気分だ。疲れているのだろうか？

ルネはPCを終了させ、TVをつける。

ニュースの時間で、相変わらず、一家惨殺事件に番組の多くを割いているようだった。

<惨殺された山本さん一家の遺体は司法解剖を終え、今夜は都内の祭儀場で、しめやかに通夜が執り行われています。会場には優香莉ちゃん、未比呂ちゃんのお友達をはじめ、多くの人々が訪れて一家の突然の死を悲しみ、残忍な犯人への怒りをあらたにしています。

……>

通夜の会場の、花に囲まれた4人の遺影。被害者の級友の園児た

ち。近所の人の談話。

そして、あらゆるものが商品であるこの社会で、ただ売れ筋の商品としてのコメントを述べる心理学者や推理作家。

<……プロファイリングによりますとですね。……犯人は、強度のサディズム……それに、死体を著しく損壊しているという状況からみて……社会に対して違和を感じていると……>

ルネは、ふと本棚に目をやり、空いたスペースにHeaven Hillが置いてあったのを思い出した。バーボンで、たしかケンタッキー産だったと思う。

グラスに注ぎ、口腔に移したものを一気に喉に流し込む。食道と胃が熱を発して、それが体に拡がって行く。

何だか落ち着かない気分だった。胸の中に空虚が生じたような感覚にとらわれる。

口に含んだチーズを時々、舌で遊びながら、グラスを3杯ほど空にしたので、ルネは、とりあえず朝まで眠ることにした。

05 > body <

朝のメールチェックをした。

ここ数日、ウィルスメールが多く、1日に10通を超える。

交流のない相手からファイル添付できているものは原則として削除する。メーラーはテキストの設定にしてあるので、いきなり怪しいサイトと繋がることはない。

ルネは、掲示板への書き込みの時、メールアドレスは書き込まず、サイトのURLだけを書くことにしている。ウイルスに感染したPCが閲覧していたページの中にルネのメールアドレスがあつて、それがまだキャッシュに残っていた場合、ウイルスがそれを見つけてメールを送ってくるからだ。

しかし、それでもウイルスメールはどこかで彼のアドレスを見つけてやって来る。メールアドレス業者が何らかの方法で収集したデータの中に彼のメールアドレスもあつて、それを買ってインプットしたPCが感染したのだろうか。

コミュニティ系サイトの管理人だと、1日に100通以上のウイルスメールが来ていると聞いたことがある。

マルチと違法コピーソフトの販売と出会い系サイトらしい数通のスパムメールは、長ったらしいSubjectの始めの部分を見ただけで削除する。

BBSのレポートメールがあるが、ビジターに、昨夜、ルネがレスしたものだ。

数通のメルマガなど、残った未読のメールの中に希羅々からのものがあつた。

□ □ □ □ □

送信者 希羅々

宛先 ルネ様

件名 感想お礼

はじめまして。

ぼえ村での感想、ありがとうございました。
ルネさんのおっしゃる通り、
ネットには天使も悪魔もいることを
思い知らされる今日この頃です。

あ、こんなこと、書いても
ルネさんには何の事かわかりませんね。
まあ、ごく私的な事ですの…。

ルネさんのサイトも拝見させていただきました。
音楽なども流れていて、
独特の雰囲気がありますね。
オリジナルなのですか？

ところで、
ちよつと伺いたいことがあるのですが、
ルネさんのところには
変なメールが来ていませんか？
蝙蝠さんのことを
いろいろ尋ねてるんですが、
私の他にも数人の詩人さんたちに
同じようなメールが来ているようです。

私は蝙蝠さんについては
ぼえ村で作品を拝見してるくらいで、
別に交流はないんです。
1度感想をいただいたんで、
蝙蝠さんの投稿を見かけた時に

レスをしましたが。
それくらいです。

こんな質問をして
気分を悪くされたら、ごめんなさい。
知らない人から、そんなメールが来て、
何だか不気味な感じがしたので。
少し怖いんです。
私の病気のせいかもしれませんが。

ということで、
もし、よろしければ、
今後ともよろしくお願い致します。

希羅々

問題のメールが具体的にどういうものなのか、よくつかめないが、
直接、脅迫をされているような内容ではないらしかった。

ただ、何かが彼女を不安な気持ちにさせているらしい。

メールやBBSへ書き込まれた、ちょっとした言葉にでも過剰反
応する人たちがいる。ルネの知っている限りでも、たいしたこと
ない脅迫メールや書き込みがあったため、サイトを閉鎖したりネッ
トから姿を消したしまった例が幾つかあった。

彼女はどんなのだろう？

妄想的な過剰反応のようにも思えるし、そうでないような気がする。

文章を書いたり、絵を描いたり、音楽をやっていたり、そういったクリエイティブな人間の中にシックスセンスのような超常的能力をもっている者がいるのは、ある程度確かだろう。けれど、たぶん、それは才能のレベルと比例するわけではない。

彼女が、そういう範疇に入るのかどうかは、まだ、何とも判断がつかなかった。

ルネは、とりあえずレスを書いた。

□ □ □ □ □

宛先 希羅々

件名 Re： 感想お礼

希羅々さま

ルネです。

はじめまして。

メールありがとうございます。

あの感想は、もしかして
お気に障ったんじゃないかと
あとで心配してました。

それほどのことは、なかったようで
良かったです。

ああそうそう、

音楽は僕が作ったものですよ。

それから、

僕も蝙蝠さんて方とは、

ぜんぜん、お付き合いがないです。

だから、何だかよくわかりませんが、

希羅々さんのところへ来ているメールが、

もし、脅迫とか名誉毀損とか…

法律に触れるものでしたら、

しかるべきところへ訴えた方がいいと思いますが。

強制捜査でアクセスログとか調べれば、

誰がやっているのか、つきとめられるはずです。

相手がよほどのハッカーでなければですが、

そんな人は、レベルの低い脅しなどやらないでしょうしね。

もし、僕に出来る事があれば協力しますので、

何かあったら、お知らせください。

こちらこそ、よろしくお願いします。

ルネ

ルネは周囲より、やや遅れて、それを知った。
年が明けて数日してからのことだ。

ルネはPoem Village、通称『ぽえ村』のメンバーとのコミュニケーションに、それほど熱心ではない。たまに、投稿したり感想を書き込んだりするだけで、メーリングリストにも参加していなかった。

だが、後で聞いた話では、その間、メンバーの間でMLやメッセなど、水面下の動きが活発だったらしい。

その日、投稿板を覗くと『空に行った人へ』という作品があった。アサリという常連の作者だけれど、過去にルネとのコンタクトはなかった。作者のコメント欄には、簡単に1行だけが書かれている。

—— 先日、ネットでお付き合いしていた方が亡くなったようです。——

投稿されて2時間ほどしか経っていなかったが、感想欄には、もう40を超えるレスがついている。「悲しいね」とか「ご冥福をお祈りします」といった感じで、具体的なことに触れているものはないが、共通の友人らしい人に不幸があったことは想像された。

ルネは詩の末尾にある作者のサイトへのリンクをクリックした。トップからひとつ入ったフレームページのメニューで、BBSを探し、行ってみる。

そこで、すぐ目に入ったのは、管理人のこんな書き込みだった。

—— 昨年末、12月31日。

ばえ村にも、よく投稿されていた希羅々さんが亡くなりました。

06 > h1 <

短いサウンドが鳴り、小さなボックスがタスクバーから現れる。

< Junko Yokoe から新着メッセージが届きました。 >

メールが来たらしい。でも、差出人は知らない名前だった。

スパムかもしれない。出会い系サイトやポルノサイトの宣伝メールには女性の名で送られてくるものがよくあるのだ。不倫を誘っているものもある。コンタクトを取るだけでも料金を請求されたり、恐喝の対象にされかねないが、世の中には能天気な人間もいて、けっこう商売になるのかもしれない。

ルネはボックスをクリックした。IEの別画面が出る。ネットでの匿名的な付き合いに使っているフリーメールで、送受信はメールソフトを使わず、webブラウザで行うシステムになっている。

□ □ □ □ □

送信者 Junko Yokoe

宛先 disclosed recipient

件名 広川美奈子（希羅々）について

はじめまして。

広川美奈子（希羅々）の従妹で、横江潤子と申します。

突然ですが、美奈子（希羅々）は昨年末12月31日、不慮の事故により他界致しました。

生前、皆様が従妹に寄せられましたご厚情には

両親をはじめ、親族一同、深く感謝致しております。

葬儀から何日かが過ぎて、

周囲もようやく、落ち着きを取り戻し、

私が形見の品として彼女のノートパソコンを譲り受けました。

それで、中に残されていたアドレス帖や受信メールなどから皆様のアドレスを知り、

このようなメールを送らせて戴いたわけです。

皆様のお心の片隅にでも、

美奈子（希羅々）のことを長くお留め戴ければ、
本人も幸せな事と思います。

それでは皆様のご健康、ご活躍をお祈り致します。

横江潤子

彼女が亡くなったことは、どうやら本当らしい。

それからルネは、希羅々と関係のありそうなサイトを幾つかまわってみた。

詩を書いている管理人のサイトでは、ゲストブックやBBSのほかに、投稿掲示板を置いているところも多い。希羅々の作品は、そういうところで、よく見かけられた。

BBSに、彼女への追悼の書き込みは多かったが、詳しい死の状況などが書かれていることはなかった。

あるサイトのリンクページで、希羅々とよく感想を書き合っていたtakayoのサイトを見つけた。

そこには投稿板は置いてないようだ。チャットルームがあったので、ルネは、そこを覗いてみた。

07 >/h1<

ROM 2

メンバー 5

takayo なっちゃん 純 りょう ヒロキ ぴんくていんく

なっちゃん：希羅々さんの従妹の人からメール来てたよ。

りょう：俺のところにも来てた。

ぴんくていんく：ついさっきだよ。着いたの。

純：あ、待ってて。メールチェックしてみる。

ヒロキ：俺はトイレ、行って来るw

純：うん、来てた来てた。不慮の事故かあ。

takayo：事故って何、交通事故？

りょう：交通事故とは限らないよ。転落とか、いろいろあるだろ。

BB：こんばんわ>皆さん

なっちゃん：こんばんは>BB

純：1年前、知り合いの女の子が死んでね。家の人たちは事故って言うてた。

ただどね。ただ事故ってだけで、どんな事故か言わないの。はろー>BB

BB：何？希羅々さんの話？俺のところにメール来てますた。

ヒロキ：おばんです>BB

りょう：えーと、自分の集めた情報ではね。希羅々さんは心の病気だったらしい。

なっちゃん：ふうん。ま、めずらしくはないよね。

ぴんくていんく：ネットには腐るほどいるよ。メルヘンは。

ヒロキ：メルヘンて何？

りょう：メンタルヘルス↓メンヘル↓メルヘン

ヒロキ：謝謝　　>りょう

ぴんくていんく：デバスだとかハルシオンだとか薬自慢大会みたいのを繰り広げてさ。

リスカの写真を載付けたりね。障害者年金を受けてるんだけど、

夜な夜な遊びまわってることを自慢げに日記に書いてたりする。

りょう：年金が出るほどの障害者認定って、ひとりで外出や買い物をするのが

出来ないくらいひどくないと出ないだろ。

ヒロキ：身体障害者は手や足が片方不自由だって、ＪＲが安くなるくらいの恩恵しかないんだぜ。

バイト先で顔見知りのオジさんがいるんだけど、ほんと、一生懸命働いてるよ。

ヒロキ：医者がつるんでるんじゃないか。国費から費用が出るんなら、どんどん請求できるだろうし。

takayo：精神科や心療内科の薬は高いよ。

ＢＢ：じゃあ、そのメルヘンは俺たちの血税を騙し取ってるのか。医者も詐欺の共犯だな。

本名や住所をつきとめて、ちゃんねる・ゼロで晒し上げなく

ちや（激怒）

takayo：消費税くらいしか払ってないだろ（嘲＞BB

なつちゃん：まあ、そういう悪質なのは、ごく一部だろうけどね。

純：でも心の病気なら、自殺ってのも頷ける話だな。

りょう：希羅々さんは一人で外出とか満足に出来なかったらしい。

BB：ヒッキーだったのか。

なつちゃん：希羅々さんは、よく自分でヒキコモリって言うてはいたね。

takayo：世間体が悪いから自殺は事故ってことにするんだよ。

ぴんくていんく：うん、よくあることだよ。

takayo：でも、希羅々さんのことで、前から、ちょっと気になってたことがあるんだよね。

ぴんくていんく：何？

takayo：あたし、希羅々さんと一緒に仕事してたことあるんじゃないかなあ。

なつちゃん：何の仕事？

takayo：ううん…、今日のところは黙秘w

純：でも、それならtakayoさんは、このサイトに自分の写真をUPしてるじゃない。

希羅々さんはtakayoさんのサイトを見てるよね。ときどきBBSにカキコしてたし。

何か反応は無かったの？

なつちゃん：けんかとか、気まずい別れ方でもしてたのかな？

takayo：そういうことはないんだけどね。まあ、ちょっと変わった仕事だから。

お互い、顔は知らないのよ。

BB：あれ、ヒロキが消えてるよ。

ぴんくていんく：フリーズしたんじゃない？彼はWindows meを使ってるからね。

りょう：meだったら98のほうが、まだ、ましだよ。

ところで、さっきからずっと約2名様がROMしてるんだけど。こちらに入りませんか。

なつちゃん：はい。2名様ごあんない。

画面は30秒毎に自動更新されるが、次のリロードでROMは1名になっていた。もうひとりも素早く立ち去ったらしい。

ルネは、どうしようか迷ったが、チャットは、あまり好きではない。チャットに限らず日常の取りとめのない会話のようなものはど

うも苦手なので、よほど気分がのっている時でなければ、やる気にならなかった。

それで、彼もここから消えることにする。

08 > front <

昼間は溜まった本を読んでいた。

ネットを始める前は、買った本をすぐ読んでしまったものだが、最近では、どうも、そのようにいかない。集中力自体が落ちているとは思わないが、読書に関して言えば低下しているだろう。集中力の質が変化しているのかもしれない。

ルネはTVで8時からの音楽番組を見て、それからPCに向かう。

エラーのアラートとは違う短いサウンドが鳴って、縦に細長いメッセのウィンドウが現れた。メッセというのは、インストールして登録するとメンバーにリストアップした同士でテキストや音声などでのチャットができるソフトだ。

takayoがメッセしようよと誘っている。昨夜、ルネがチャットをROMった詩と小説のサイトの管理人だ。

ルネは、とかく馴れ合いのコミュニケーションになりがちなチャットやメッセは苦手なのだが、別に拒む理由もなかった。

と言うより、昨夜のチャットでtakayoが言ったことに興味があったので、むしろ歓迎したい気持ちだった。

R e n e の発言 :

なんだ、t a k a y o さんか (笑)

t a k a y o の発言 :

なんだはないだろうつつつ、

ルネ君がめずらしくオンラインのメンバだったからね。

R e n e の発言 :

あ、メッセをオフにしとくの忘れてた。

起動してメールが来てなければオフだよ。

t a k a y o の発言 :

だから、いつもメンバにいないんだw

あ、メンバにいたんだけど、

すぐ、スーと消えちゃったのが1度か2度ある。

そうかそうか。

R e n e の発言 :

ネットでも何でもだけど、

集中してる時、中断されるの

好きじゃないんだよね。

仕事中的こともあるし。

t a k a y o の発言 :

あれ、ネットで仕事してるの？

R e n e の発言 :

まあ、ちよつとね。

t a k a y o の発言 :

今、仕事してたの？

邪魔してるんじゃない？

R e n e の発言 :

構わないよ。

別にそういうわけじゃないから。

今夜は夫が出張で帰らないのだと t a k a y o は言った。子供たち
は友人の誕生パーティーへお呼ばれたそうだ。

t a k a y o の発言 :

ああ、私もね、ネット業界の人間だよ。

というか、今は失業しちゃったけど。

ところで、今ひとりで酒飲んでるんだよ。

キー打つのめんどいから音声チャットにしている。

チャットで言ってた希羅々と一緒の仕事とは、これだろうか？と
考えながら、ルネはOKした。

t a k a y o の発言 :

サンキユ、もうタイプミスが多くてやんなっちゃうんだよ。

ひとりでお酒を飲んで酔っ払ってるからさ。

そうだ、一緒に飲まない？

といっても、これじゃご馳走するわけにいかないから、
ルネ君の自前でだけだね。

ルネはキッチンへ行って冷蔵庫からワインを取り出した。赤を飲むことが多いのだが、今夜はしばらく入れてあった白にして、ローテーションをこなすことにする。

PCの前に戻り、ヘッドセットを着ける。マイクの具合を調整した。

「ルネ君、何飲んでるの？」

「ワイン」

「私はオールドだけどね。去年のお歳暮で貰ったの隠してあったやつ。」

いつもは安売り店で1・8リットル500円の日本酒だけど、今日は、鬼のいぬ間の何とかだから、少しは羽根を伸ばさなきゃね」

そして、呟くように80年代のJ・POPを歌う。

つばさーのおれたーえんじえーる。

「子供たちが帰ってくるの遅いんだろうな。真夜中かな。友達の親が車で送ってくれるからまあ心配ないんだけどね。今どきは小学校高学年ともなるといっちょまえでさあ。ま、私も親に隠れて悪いこととしてたんだから、しょうがないか」

しばらく会話に間が生じた。takayoは、また、小さく何かハミングしている。ルネが聴いたことのある昔のフォークみたいだ。題名は忘れた。言われれば思い出さるうけど。

「何の仕事してるかなんて話題にするのは野暮なんだけどさ。今夜はなんか、わたしのしてたこと、話したいんだ。酔っ払いの戯言だ

「と思って聴いてくれないかなあ？」

ルネは、いいよ、と答えた。

「うん、その仕事はね、もしかすると、というか、もうほとんど確
実だけど、このあいだ亡くなった希羅々さんもやってたみたいなの。
それで、あんなことになったのを聞いて、私もちよつと落ちこん
でるんだ。だから、誰かに聞いて欲しかったんだよね」

ルネはグラスのワインを空け、ボトルを取って注ぎ足した。 t a
k a y o は話を続ける。

09 > / f o n t <

「『HP小僧』って、知ってる？ いろんなサイトを紹介してたメー
ルマガジンなんだけどさ。最盛期には購読者が6万くらいいたんじ
やないかな。」

タツヒコって、いま二十何歳かの子が5年前、まだ学生の頃に始
めたんだけどね」

そのメルマガはルネも読んでいたことがある。

掲載依頼をしたサイトの中から優良なものを選び、スタッフがコ
メントをつけて紹介するのだ。サイトの管理人が書いた宣伝文をそ
のまま載せる形式のメルマガは幾つかあったが、それと違って客観
的で、コメントも適切に書かれている。読者とのコミュニケーション
も大事にしていたので、ファンも多かったようだ。

そつえば最近、送られて来ないなとルネは思った。彼も以前、
自分のサイトの掲載依頼をしたことがあった。

「見たことあるよ」

「そう、私、そのコメンターやってたのよ」

「へえ、凄いじゃん。ネットではけっこうメジャーなことだね」

「うっん、まあ、応募が500人あったとかで、そこから6人採用されたんだけどね。内情をぶっちゃければギャラは時給うまい棒何本てなもんだったしさあ」

“うまい棒”は、ちゃんねる・ゼロの住人たちが僅かな金額を例える時、よく用いられる。もっとも、最近のネットでは広く普及してきているが。

「去年の11月上旬に潰れたんだけど、私が入ったのは、その半年前くらいだったね。でも、その頃もう、ひどかった。

毎日発行のはずなんだけど、週に1回くらいしか出ないんだよね。掲載依頼の投稿も凄く溜まっててさあ。私たちが作業してたのは7ヶ月前だよ。紙面には審査通過のものは2週間ほどで掲載しますとか書いてあるのにな。まあ、少し遅れてるとか断ってはいたけど」

takayoの話がちよつと途切れた。ちよつと咳払いをして、さっきの曲をまた、詞をつけて短く歌う。ながあいゝ、よるうをゝ。松山千春の曲かな？サイトのプロフでは、彼女は北海道在住だったろうか。

これがリリースされた頃、自分は、まだ生まれていなかったかもしれないとルネは考える。

「編集する時のシステムっていうか、そんなのも、めちゃめちゃな感じだった。

まあ、私にc g iだとか、あんまりわかんないんだけど。

それに、普通の会社なら、指揮系統とかあるでしょ？それが、ど

うもはつきりしてない感じなのよね。仕事のことで質問しても、ぜんぜん反応がなかったり。疑問を感じてるスタッフから横の連絡でメールが来たりしてたわ。

まあ、それはともかくとして、スタッフの中にナツヲさんって人がいたんだけどね。この人が、たぶん希羅々さんなの。

仕事の報告とか連絡とかはメーリングリストでやるからメールアドレスがわかるんだよ。希羅々さんが投稿や書き込みの時に使ってたメルアドは、ナツヲさんのと同じなんだ。

私は、ぼえ村なんかの付き合いには別のフリーメール使ってるから、彼女は私がHP小僧のスタッフだったことには気づいてなかっただろうけどね」

グラスに氷の当たる音が聞こえる。takayoがマイクの前で揺らしているのだろう。

「でも、タツヒコは、けっこう頭がはたらくんだよね。

ひとつのサイトについて、二人のスタッフにコメントを書かせるの。そして、編集長が、その中でいい方を選ぶんだよね。採用された方にだけギャラが出るの。そうやってスタッフに競争させて手を抜かせず、コメントの質を上げようっていうのかな」

「なかなか考えるね」

あるバーガーショップでは、階級を作って、それぞれ帽子の色を変える店員管理法を使っているらしい。こうするとスタッフたちは、時給はいくらも違わないのに成績を上げて上の階級へ昇ろうと努力するのだ。

これに勝るとも劣らないシステムかもしれない、とルネが言おうとした時、先にtakayoが話し始めた。

「でも私たちにしたらきついよね。下手したら、ただ働きなんだか

らさ。現に必死で書いたコメントがぜんぜん採用されないで、やる気なくしちゃった人もいたしね。

もっともギャラなんて、みんな、それほど期待してなかったんだと思うよ。HP小僧でコメンターしてたって実績が何かで使えそうだって、私には、それが目当てだったし、みんなもそうだったと思う。ナツヲさんというか希羅々さたぶん、そんな感じかな？想像なだけでさ」

「バックに誰か海千山千の大人がいて、タツヒコ氏に知恵をつけたんじゃないかな？」

「そうそう、タツヒコはHP小僧がちょっと当たったもんだからさ、会社を作ったんだよ。ネット専門の広告代理店ね。どこかの大人にうまくのせられて、けっきょく、そいつらに騙されてたのかな。」

その会社はあるところに吸収されてしまったらしいけど」

ひと呼吸置いて、takayoは続けた。

「そうだ、もうひとつ教えちゃおう。ぽえ村に、たまに投稿する藤壺さんっているでしょ。たぶん、その人はタツヒコだと思う」

「何でわかったの？」

「私は読者としては長くてさ。初期のHP小僧から読んでるんだけど、メインのサイト紹介のほかにタツヒコが自分の書いた詩なんか載せてた時期があるんだよ。藤壺さんの投稿のなかには、その頃見かけたのがあるのさ。多少、ライトしたり、タイトルが変わってるものもあるけどね」

「藤壺さんは最近ぽえ村に姿を見せてないね。まあ、何ヶ月も来ない人ってのは、よくあることだけど」

takayoは、また『長い夜』を小さく歌った。

「ああ、だいぶ酔っ払ったなあ。

ルネ君、ごめんね。こんな話に付き合わせて。でもね、誰かに聞いて欲しかったんだよね。希羅々さんというかナツヲさんのことを。

でも、ぜんぜん話し足りないうちに眠くなっちゃったなあ。あんまり長いとルネ君にも迷惑だろうしさ」

「ぼくは別にいいけどね」

takayoは少しの間、何か考えているようだった。

どうしようかな？と2回ほど自問自答し、それから話し始めた。

「HP小僧のスタッフのMLなんだけど、ナツヲさんが書いたので、ぜひ誰かに見て欲しいのがあるな。まだ取ってあるんだよ。でも、第三者に見せちゃ、まずいのかな？いいよね。あそこはもう潰れちゃったんだし、彼女も亡くなったんだしね。

転送するからさ、見てよ。何通か送るけどメールボムじゃないからね。私、誰かが見てくれれば少しは供養になるような気がするんだ」

「わかった」

takayoは最後に、少し、かすれた声で言った。

「私ね、スタッフのログインページをまだブックマークに残してあるんだ。もうアクセスしても404エラーでページが見つかりませんだけだよ。

さっきもクリックしてみて、希羅々さんのこと思い出して涙が出てきたよ。あれも一時は、とてもいいメルマガで、読むのが楽しみだった。ファンも多かったんだよね。

じゃ、ありがとう、おやすみ」

1月の半ばと言えば最も寒い時期だが、今日の多摩川の河川敷には夥しい量の光が降り注いでいるように感じる。

冬至を過ぎて、まだ何週も経っていないのだから気のせいかもしれないが、太陽のパワーはなかなか強いように見えた。

前を蛇行しながらのろろ走っていたサエジマさんのママチャリが止まる。スタンドを立てて補助椅子のマミちゃんを降ろした。

「おおい、遠くへ行っちゃだめだよ」

走り出したマミちゃんにサエジマさんは、うろたえ気味に叫んだ。

「この辺の治安も悪くなつてさ。最近、連れ去り未遂みたいなのが何件か起きてるんだ。ホームレスも増えてるし。もうちよつと下流へ行くとダンボールハウスが立ち並んでるんだよね」

サエジマさんはマミちゃんの行方に視線を送る。

「まあ、こんなこと言うのは差別かもしれないけど、親としちゃ心配だね」

サエジマさんは、たしか障害者関係のボランティアもやってたはずだ。偏見じみた悪意の持ち主でないのはルネにもわかっていた。

「まあ、危ないのは、そこら中どこでもだけどさ。例えば、うちの業界にしたって怖い状況は出てきてるんだよね」

企業舎弟っていうの？ヤクザの資金源なんだけど、そういうのが入り込んでIT企業をやってるって噂がある。そんなところに、うつかり個人情報なんて送っちゃうとやばいぜ。まあ、懸賞なんかにつられて教えちゃってる人が相当いるみたいだね。生年月日や住所ばかりでなく、家族構成や学歴、年収まで尋ねるところもあるからさ。名簿にして売られるくらいなら、まだいい方だけど、もっと恐ろしい成り行きだって考えられる」

「振り込め詐欺なんかもそれでしょうか？」
「うーん、わからないけど」

サエジマさんは西の、空の状態が良ければ富士山が見える方向に目を向けた。その視線を追ったルネは、雲の形も春に近づいているように感じる。

でも、まだまだ、これから寒い日が多いのだ。

「その会社がヤクザ関係だって知ってるのは経営者と幹部の一部だけで、あとの社員は、そんなこと、まったく知らないで勤めてるらしい」

マミちゃんが駆け戻ってくる。だが、ルネたちの手前で身を翻して、また駆けて行こうとする。サエジマさんが追いかけて、マミちゃんは笑い声を上げて逃げる。

<父親を殺す時。それが神話の世界の始まりと終わりと、そして、すべてだ>

突然、ルネの頭の中で響く声がある。世界が黒い靄で覆われ、その底深くから響いてくる声。

この言葉をいつ聞いたのだろうか？とても幼い頃、ルネの父親が言っていたような気もする。これは父親の声だろうか？

それとも、それは遠い昔に見た、夢の中の出来事だっただろうか？

「いいなあ、このマウンテンバイク。俺も欲しいけど、けっこうす

るんだろ？女房のお許しが出るかなあ」

サエジマさんはルネのチャリを様々な角度から眺めている。

微風というよりやや強めの風が断続的に吹きかけてきた。サエジマさんの頭頂部は明らかに薄くなりかけている。でも、数年前に出来ちゃった結婚をした頃は、まだ20代だったと聞いているから、それほどの年齢ではないわけだ。

「こういうサスペンションなんかがちよっと目立ってて高そうに見えるのは、意外と、たいしたことないのが多いんですよ。これはマチャリより多少高い程度だし。」

まあ、これで本当に山の険しいところなんか走ったら、壊れたり怪我したりしかねなくて、ちよっとやばいですね。本格的なMTBなら10万は出さないと……。いや、30万かな」

「いや、もうこの歳この身体で、そんな大それたこと考えてないよ。それなら俺も安いのが買おうかなあ。いつの間にか、こんなに腹が出てきちゃったし。運動しなくちゃ。」

これならスピードも出そうだなあ」

対岸を白いロードレーサーが走っている。赤いヘルメットに黒と黄色のウェア。

ルネは、それを指差しながら言った。

「ねえ、サエジマさん。ああいうのどうですか？」

「あれは鉄人レースなんかのやつだろ？とてもとても」

「いえ、あれはロードレーサーで、トライアスロンには、それ専用のがあるんです。まあ、ああいうのでやってる人もいることはいますけどね。でもロードレーサーに似たタイプですがドロップハンドルじゃなくて、T字になってるクロスバイクっていうのがあります。それは、タイヤが細いからMTBよりスピードが出ますよ。こんどは、そちらで来ましようか。でも、歩道を走ると淵の角張った部分

でタイヤをいためるんですね。都内だと違法駐車が多いから車道は走りにくいし」

「歩道は車椅子の人にも不便にきてるよね」

サエジマさんは戻ってきたマミちゃんの頭に手を置いた。マミちゃんも笑い声をあげて身をくねらしている。

「ここへ登って来る時だって、君は楽々だもん。このママチャリは、この子が乗ってるとはいえ…、それにしてもきつかった」

サエジマさんは苦笑する。

「サドルは、ペダルがいちばん下へ行った時、脚が伸びきる少し手前くらいの高さがいいんですよ。路面につま先が届くくらい。そうすると力が効率よく入ってスピードが出るし、坂だって楽に登れます。よく言われてる路面に踵がつく高さは間違った常識」

ルネは、物を持ち上げる時だって、この方がやりやすいでしょう？と手のひらを上向きにして膝を屈伸させ、ジエスチャーで示した。

「そうだったのか、これはママが乗るのに合わせてあるから疲れるわけだ。やっぱり買うつきゃないかな…。クロスバイク」

「うん、何てだったって、ライダーズハイとランナーズハイを同時に味わえますよ」

長距離ランナーが疲労や苦痛を感じた時、脳内で分泌される物質がそれらを打ち消し、やがて快感の域にまで達するようになる。ランナーズハイと呼ばれる現象だ。

これとバイクで高速疾走する時の快感。このふたつを同時に味わえるのがチャリダーだ。とルネは半ば冗談めかして言った。

「じゃあ、よろしくね。君なら携帯サイトなんてちよるいもんだろ？あれだけのページ作ってるし。機種のチェックはこちらで手配するから」

「XHTMLで書けばいいんですね。まあ、タグも少ないし…」
「急な仕事で悪いけどさ」

サエジマさんが支えようとマミちゃんは補助椅子によじ登る。マミちゃんがルネにバイバイと手を振り、ママチャリは走り出した。

1キロ程離れた一戸建てがサエジマさんの仕事場兼住居だ。2階の和室と廊下にはLANケーブルが所狭しと走り、今も数人のスタッフがディスプレイに向かいキーを叩いているだろう。

サエジマさん親子の姿が遠ざかると、ルネも走り出した。246まで回って環七へ入るので、そこまでの川沿いは車がいなくて快適だ。スピードが乗るとフロントギアをハイに上げ、更に左手をひねってリアも上げる。

走りながら彼の脳裏に今朝、takayoが転送してきた数通のメールのことが浮かんた。

ペダルを踏んだ。足の力を少しづつ増し、回転を上げていく。自分の生み出す速度が作り出す風は無数の微細に振動する紐のようで、その流れを顔や身体に感じながら、ルネはメールの内容を反芻していた。

11 > u <

ルネのMTBは折り畳みなので、マンションのエレベーターに乗

るのも楽だ。2DKのうち、ほとんど物置になっている方の部屋には、もう1台のクロスバイクもあるが、こちらはレバーの操作で車輪をすぐ外せる。だから自転車を2台置いてしまったほどは場所を取らない。

午後6時だった。別に空腹を感じないので食事はもつと後で取ることにした。コーヒーを飲む前にPCのスイッチを入れておく。

メールチェックの後、takayoが転送したメールをもう1度開いてみた。今朝は昼近くに起きたため、あまり時間がなくて、ざっと目を通しただけだったのだ。

□ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

件名 読んでね

ルネ君、昨夜はどうも。

言ってたML、転送するよ。

なんで、こんなの送る気になったのかな？
だいぶ酔っ払ってたからだ↑自分

こついう業務報告を、毎日やってたんだけど…。

気が向いたら読んでね。

下の方にあるのは、私のちょっとした感想だよ。

t a k a y o

転送メールにはt a k a y oの簡単なコメントがつけられている
ものもあった。

□ □ □ □ □

送信者 t a k a y o

宛先 ルネ

- - - o r i g i n a l m e s s a g e - - -

送信者：n a t s u w o

宛先 ：H P小僧スタッフ

件名 ：F w d：業務連絡

報告日：2 0 0 X . 0 5 . 1 2

スタッフ名：ナツヲ

本日の作業数：1 0 サイト

連絡事項：特にありません。

その他：仕事を始めて1ヶ月が過ぎ、作業にも慣れてきました。

自分の文章が多くの人に読んでもらえることに、

喜びと同時に責任も感じています。

ただ、いまだに発行が再開されないのが少し不安です。

何かとたいへんだと思いますが、皆さん頑張ってください。

- - 「PR」 - - - - -

ハゲ・薄毛よ、さようなら。

アツと驚く効果。脅威のOTASUKE MAN - HAIR
試供品、無料配布キャンペーン実施中!!

http://fusafusa.**.*/

■ Cyber Ager - Free ML Service

takayo:これは、まだ発行が滞っていた時期のだね。

その3・4ヶ月の間に1回だけスタッフ募集号が出たので、
私も応募したんだ。

ML部分には末尾に広告が入っている。どうやら無料サービスの
メーリングリストを使っているようだった。

まがりなりにも株式会社を名乗っているのに、随分けちな話だ。

次のメールを開いた。

□ □ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

- - - original message - - -

送信者:natsuwō

宛先 :HP小僧スタッフ

件名 : Fwd:業務連絡

報告日:200X.06.9

スタッフ名:ナツヲ

本日の作業数:15サイト

連絡事項:「7216」は規定違反(出会い系)と思われるのでと
ばしました。

その他:今日は時間があつたのでノルマより5サイト多く作業しま
した。

やっと発行が始まって、胸をなでおろしました。
早く正常の毎日発行に戻るよう、大変でしょうが頑張ってください。
い。

自分の文章が、ひじょうに多くの方に読まれていることを思うと
自分は曲がりなりにもライターなのだと思います、
ちよっぴり誇りと、また責任も感じます。

明日も、作業頑張ります。

- 「PR」 - - - - -

噂のバイ。グラ。これで、あなたの息子も復活!!

合法的な輸入代行なので安心です。

今すぐ、URLをクリック!! http://www.***

* ** */ zeturin /

■ Cyber Ager - Free ML Service

□ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

- - - original message - - -

送信者 : natsuw

宛先 : HP小僧スタッフ

件名 : Fwd:業務連絡

□ □ □ □

報告日 : 200X.07.16

スタッフ名 : ナツヲ

本日の作業数 : 10サイト

連絡事項 : 特にありません。

その他 : 今日、お給料が振込まれているのを確認しました。

ですが、金額が間違っているのではないのでしょうか。

先月私の採用されたコメントは12あったはずですが、

8コメント分しか振込まれていません。

調べて下さいますよう、お願いします。

- - 「PR」 - - - - -

市場空前のWeb・ショッピングモール。

プレゼントもガバガバ貰えちゃう!!

http://www.urisen.*/

■ Cyber Ager - Free ML Service

takayo:なんか、この辺から私も、

株式会社とかなってるのに何やってんだろっ、

うさんくさいなつて、思いはじめたよ。
他のスタッフのギャラにも間違いがあってね。
すぐ、訂正して振込まれたけど。
こんなの、エクセルにでも打ち込んでおけば
違っちゃうはずはないだろ。

□ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

- - - original message - - -

送信者 natsuwow

宛先 HP小僧スタッフ

件名 Fwd:業務連絡

報告日:200X.07.22

スタッフ名:ナツヲ

本日の作業数:10サイト

連絡事項:ありません。

その他:タツヒコさんから、直接お話を伺いたいことがあったので、
会社に電話したのですが、繋がったのは親会社で、
電話を受けられた方は、何だか、要領を得ない感じでした。
どうなっているのでしょうか？

- - 「PR」 - - - - -

あなたも、すぐ、カレシ・カノジョが出来ちゃう!!
健全な出会いの場に即アクセス

http://motelmote.**/

■ Cyber Ager - Free ML Service

takayo: 発行が、ちゃんと行われなし、でも、タツヒコからは溜まってる審査依頼をどんどん片付けてってくれて言うんだよね。掲載されないとギャラが出ないんだから、みんな頭に来てたと思う。
ナツヲさんは、そのこと言おうとしたんじゃないかな？

12 > / u <

次のメールはナツヲに対するタツヒコからのレスだった。

□ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

- - - original message - - -

送信者: Tatsuhiko Mizuno

宛先: HP小僧スタッフ

件名: Fwd: 編集部より

株式会社アクセスパル HP小僧編集部より
コメントスタッフ各位

皆さんお疲れ様です。

水野達彦です。

ナツヲ様

> 会社に電話したのですが、繋がったのは親会社の方で、

> 電話を受けられた方は、わけがわからないような雰囲気でした。

当方の間で連絡が不充分だったようです。そちらは善処しましたので、ご安心ください。なお、私の携帯に電話して頂いてもけっこうです。

0990-XXXX-XXXX

それでは、よろしく。

水野達彦@アクセスパル

- 「PR」 - - - - -

困ったら今すぐ、3分間キャッシング。

東京都登録業者：マルゼニ（株）

<http://www.maruzeni.com/imasugug.html>

■ Cyber Ager - Free ML Service

t a k a y o : 何だか凄い事務的な文章だろ？

HP小僧の始めの頃は、

タツヒコが自分の書いた雑文を載せたり

読者とのコミュニケーションのコーナーにも書いたり、

そんなフレンドリーな魅力もあって部数が伸びたんだと思うよ。

会社システムにしてからのHP小僧には、

そういうのが、ぜんぜんなくなっただね。

それに代わってIT関係のニュースなんかが入ったけど、

そんなの、他でも見れるんだからさ。

□ □ □ □ □

送信者 t a k a y o

宛先 ルネ

- - - o r i g i n a l m e s s a g e - - -

送信者 : n a t s u w o

宛先 : HP小僧スタッフ

件名 : F w d : 業務連絡

報告日 : 2 0 0 X . 0 9 . 1 8

スタッフ名 : ナツヲ

本日の作業数 : 5 サイト

連絡事項 : 体調不良のため、これだけしか出来ませんでした。

その他 : タツヒコさん、それからスタッフの皆さんにも聞いて欲し

いんです。

いろいろな事情があつて、毎日発行が難しいのだと思います。でも、これでは、せっかくコメントを書いてもそれが、いつ、読者の目に触れるのかわかりません。ギャラだって、掲載されなければ頂けないんですよ。

私は、ある病気で、ほとんど外を出歩くことも出来ません。それで、このスタッフ募集の記事を見た時、これなら私でも家で仕事をして、多少の収入を得られるなと考えました。私は文章を書くことが好きですし、自分のペースで出来るので病気に最大の悪影響を及ぼすストレスも感じないで済みそうです。

こんな素晴らしい仕事は滅多にありませんから、採用通知のメールが来た時は、とても嬉しかったです。

私は不器用な性格というのか、自分が納得いくまでやらないと気が済まないので、コメントを書くのも、あれこれ考えたり書き直したり、ひじょうに時間をかけてしまいます。失礼ですが、このお仕事のギャラは、かなり安いので（笑）時給とかに換算したら、いくらでもないでしょう。それでも少し頑張つて、ノルマより多めのコメントをこなせば、月、数万円くらいは得られるかもしれない。そう、思いました。

皆さんには笑われるような話かもしれないけど、これは私にとっての現実なのです。そして、どのくらい収入を得られているのかと言えば皆さんも、ご承知の通りです。

でも、そのことは、まだいいんです。
せつかく書いた文章が、ただ埋もれてしまっている。

私にとって、世界との繋がりには文章を書いて、
誰かに読んで貰う、それくらいしかありません。
これからHP小僧が以前のように発行されて、
私の文章が人々に読まれるようになるのでしょうか？

- - 「PR」 - - - - -

1000万円の当選者続々!!

懸賞サイトの極致、Web Millionaire

<http://www.getcash.com/top.html>

■ Cyber Ager - Free ML Service

takayo:MLではタツヒコからのレスはなかったね。
まあ、ナツヲさん個人には何か伝えたのかもしれないが、
そこは、どうなってるのか、わからない。

□ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

- - - original message - - -

送信者 natsuwow

宛先 HP小僧スタッフ
件名 Fwd: 業務連絡

報告日: 200X.10.03

スタッフ名: ナツヲ

本日の作業数: 10サイト

連絡事項: 特にありません。

その他: すみません。しばらく休ませてください。

自分が文章を書く意味がわからなくなってきました。

最近の仕事を始めようとすると不安感が湧き上がって
続けるのが苦痛以外の何物でもない状態です。

誠は無責任ですが、でも、自分で納得がいかないまま
書いた文章を人様にお送りするのは心苦しくて、
とても続けて行くことが出来ません。
しばらく時間を頂いて、よく考えてみたいんです。
ご迷惑をかけてすみません。

- 「PR」 - - - - -

濡れ濡れアヘアへ画像がいっぱい。

好き者必見サイト Net-Storker

http://net-storker.**/index.html

■ Cyber Ager - Free ML Service

takayo: この後、発行はかなり間を置いて2回くらいあった
かな?

11月初めに、編集部の佐藤とかいう、今までぜんぜん知らない

人から

廃刊のお知らせが来たんだ。

「皆様の今後のご活躍をお祈り致します」ってね（爆）

読み終えたルネは、サエジマさんに依頼された携帯サイトを作る仕事があったので、その関係のページをいくつか覗いてみようと思った。

サーチエンジンにアクセスした。トップページには今日のニュースも掲載されている。その中に、こんなものがあった。

< ● 自殺の女性、他殺の疑いも >

ルネは、その標題をクリックした。

< 昨年末12月31日、神奈川県小田原市のビル屋上から転落死した23歳の女性は、心療内科へ通院中だったこともあって当初自殺と見られていたが、現場付近で男と一緒にいたとの目撃情報が寄せられたため、警察は自殺、事件の両面で再捜査することになった。 >

この女性は希羅々ではないだろうか、とルネは思った。

何も根拠はないのだが、本文を読むより前、タイトルだけで、そう閃いたと思う。それは確信みたいなものだった。

そんな何かはたらくことが、時々、ルネにはある。それは単なる妄想とは一線を画したものだ。

ルネの仕事は“ウェブコーディネーター”ということになっている。しかし、それは、あまり実体のない仕事で、たとえば検索をしても、web上に存在するその言葉の数はたいしたものではなく、その中にはソフトウェアの製品名も含まれている。まあ、何となく思いつきで使い始めた言葉だ。

意味から考えれば、その内容は、ウェブサイトを作る際の企画やクリエイター、エンジニアの手配、その他さまざまなアドバイス、というようなことになるのだろう。でも、実際はあまり大規模でないホームページ製作とか、サーチエンジンへの登録代行や宣伝の書き込みもやつたりする。

そのほか、ネット上での調べ物。これは取引先へのサービスの場が多いが、やっておくと見返りで何かの仕事が来るので、けっこう重要だ。

スパムを送るような仕事は嫌いなので、まず引き受けない。

何か肩書きがあると話が速いので、こういうものを考えたのだが、要するにネットの便利屋といったところだ。

携帯ページを作る仕事が入ったので、そちらのサイトをいくつか覗いてみる。モバイルサイトといっても多くはPCでアクセスできるのだが、やはりPCでは何だか間が抜けて見えた。

面白そうなページはシミュレーターでもう1度見た。このツールを使うとモバイルと同じ大きさの画面だし、ダイヤルボタンを押してジャンプするaccesskeyも動作する。

モバイルサイトを幾つか周って、コーヒーを淹れた。クッキーを口に入れ、IEを開く。ブックマークを眺めながらどこへ行くかと考え、Poem Villageをクリックした。

BBSやフォーラムには小田原の転落死した女性が希羅々（ナツヲ）だという情報は見当たらなかった。

投稿板は相変わらず賑わっている。1ページにある50篇の作品が、ほぼ1日で次ページに押し出されて入れ替わってしまうペースで投稿がある。

takayoの話ではHP小僧をやっていたタツヒコだという“藤壺”の名前は、投稿者にも感想のレスにも見えなかった。もう3・4ヶ月は現れていないようだ。自分の興した事業に挫折したのだから、詩など読んだり書いたりしている気分ではないのだろうか。

しかし彼も、そのうち帰って来るかもしれない。今日も、何ヶ月かのブランクの後で投稿している詩人がいる。ルネは、その『物語を編む人』というタイトルにマウスを当てた。クリックして作品ページに入る。

物語を編む人

赤土

物語を編む人

夜となく昼となく

春となく夏となく

秋となく冬となく

物語を編む人

冷気が忍び寄る予感に
目を瞑り
耳を押さえ

世界のためという妄想
殉教者の悲壮感に駆られ
ただ ひたすら
触れることも出来ない
さして精緻でもないものを
それでも編みつづける人よ
淋しく悲しい人よ

昼は灼熱
夜は酷寒
世界は砂漠で
そこをさまよう私に
水分といえば自分の唾液だけ

長く伸びる私の影
それは そのまま黒い罪
そして希薄な大気の中に
投げつつける言葉

神は もはや信じないのですが
でも誰かに語りかけずにはいられません
けっして悪意はなかったのです
すべては自然の営みと言って下さい
そう言って私を救ってください。

消滅の願望だけが脳髓を浸しながら
現在を生き延びていくしかないのです
いつかは必ず死ぬ定めなのに

書き綴るのは 実は

物語とも認知されない

ただ 自分を慰める言葉たち

それを生きている証といえるのか

暗く寒い夜から避難した椅子の上

物語を窓の向こうに投げれば

誰か拾う人がいますか？

それとも向こうは ただ

空虚な世界

あるいは・・・

200X年01月17日XX時XX分XX秒

作者のHP： - - -

- この作品の著作権は 赤土 さんに帰属します。
- 無断で転載することは禁止します。

作者からのコメント

みなさん、ご無沙汰です。

ちょっと事情があつて、しばらく、こちらに来れませんでしたが。
また時々参りますので、以前のようによろしくお願いします。

感想

祝 赤土さん復活!!! : Kenya

おひさです。就職活動がたいへんで、なかなかここにも来れませんでした。久しぶりに覗いたら赤土さんの作品がありました。嬉しいです。 : Peeスケ

以前、読んだお子さんへの愛情が溢れた詩も感動しましたが、これも孤独感のようなものを感じて好きです。 : たえこママ

赤土さんは、きっと僕より年齢も上で人生経験が豊富なんでしょう。赤土さんの作品に触れるたび、僕は、まだまだ人生を勉強しなければと思います。 : 輝義

赤土さん、復活おめでとうございます。私は赤土さんの詩では会社からの帰り道を書いたのが好きですが、これもとてもいいと思います。 : e - k o

. . .

赤土氏は昨年暮れ、久しぶりにPoem Villageの投稿板に感想を書き込んでいたように記憶している。

そういえば、希羅々と赤土氏は、お互いに感想などをよく書き合っていたようだったなとルネは思った。でも、希羅々の死について

赤土氏が何か書き込んでいるのは、Poem Villageの中には見当たらない。

ぽえ村では彼女の死を悼む書き込みも多かったが、名前を出すような直接的な表現は憚られていたので、それを他のサイトで目につかない限り、気づかなかったのかもしれない。

ルネは、そのままIEで、ちゃんねる・ゼロにアクセスした。

専用ブラウザと違い、最初のページではスレッド一覧が上の方しか見えないのだが、ニュース板に小田原の女性転落死のスレを見つけた。

<【自殺？他殺】小田原の女性転落死を再捜査>

昨夜立てられたスレだが書き込みは100に満たないから、あまり注目を集めていないようだ。投稿の間隔も長くなっているのも、そのうち下に行って目立たなくなり、消えてしまうのではないだろうか。

・
・
・

72：私も匿名さん

なんだ、メンヘル系か。これは自然淘汰。

73：私も匿名さん

嗚呼、貴重なマ。コが…。

74：金田一コナン

これはDQNどもが被害者をレイプしようとビル屋上に拉致しますが、

騒がれたため、突き落とされたものと考えられまつ。
地元の珍走団を調べれば犯人がいまつ。

・
・
・

投稿の内容も、これといって注目に値するものはない。心の病を茶化した差別的な発言や、セクハラ的発想のもの、犯人をほとんど妄想的に推理するものなど、このサイトにはよくある論調がほとんどだった。

ルネはひと通り読み終わったので、そのページをリロードした。読んでいる間に書き込みのあったスレが上がって来ているので、一覧は、かなり変化している。

< 【HP小僧】 IT起業の夢破れた青年が腐乱死体でハケーン >

その中のひとつに目をやった時、ルネは自分の身体に軽い衝撃が巡ったような気がした。

14 > i <

1：匿名匿搜部 【HP小僧】 IT起業の夢破れた青年が腐乱死体でハケーン

（毎朝新聞）

1月×日午後、神奈川県松田町の登山道から30メートルほど入った脇道で

トレッキング中の男性（63）が腐乱した男性の死体を発見し、警察に通報した。

男性は年齢16〜40歳、身長174センチで、死後数ヶ月経過していると見られる。

警察では事故、自殺、事件の可能性をふまえ、男性の身元を調べている。

（共同報道）

1月×日午後、神奈川県松田町の山中で発見された男性の腐乱死体は、

歯型とDNAなどから東京都杉並区の元会社役員水野達彦さん（25）と確認された。

水野さんは昨年後半、会社の経営に行き詰まっており、警察では自殺の可能性が高いと見て、周囲から事情を聞いている。

水野達彦さんはwebの広告代理店、HP紹介サービス、出会い系サイト運営

などをしていた「株式会社アクセスパル」の起業者です。

彼のやってた「HP小僧」というメルマガは購読していた方もあるでしょう。

2：私も匿名さん

2ゲットオオオオオオオオ！！

3：私も匿名さん

タツヒコ、死んだか…。

4：私も匿名さん

ご愁傷様。

・ ・ ・

23：私も匿名さん

俺は自分のサイト、掲載依頼出したけど、無視された。
死んだか？ザマアミロ（藁

24：私も匿名さん

漏れ、読んでた。けっこうオモロカッタ。
ご冥福をお祈りします。

25：私も匿名さん

<<23

それは藻前のサイトのレベルが低いから（嘲

26：私も匿名さん

一時は、なかなかいいメルマガだったな。
読者とのコミュニケーションも盛んで。

まあ、ネットの一時代を築いたといつては大げさかもしれないが。

27：私も匿名さん

俺のサイトは掲載されたよ。その時けっこうアクセスが増えた。

・ ・ ・

41：私も匿名さん

ライターのコメントはシロウトっぽかったな。

まあ、その辺が親しみやすかったのかw

42：私も匿名さん
タツヒコか。

一時、ネットでは、なかなかの有名人だったな。
ここでは、だいぶ晒し上げられたりもしたが。

43：私も匿名さん
祭りの予感…。

・ ・ ・

このスレッドが立てられてから、まだ1時間も経っていなかったが、けっこう書き込みがある。ネットでは多少、名の知れた人物だったから注目を集めているようだ。

希羅々が、もし殺害されたのだとすれば、タツヒコは彼女と接点があったのだから、事件への関与が疑われるひとりということになるが、彼は希羅々より先に死んでいたことになるから、直接の関わりはなかったということなのだろうか。

ルネはtakayoが転送してきたメールの内容で、ちょっと気になる何かがあったなと思い、それを思い出そうとしていた。
その時、メールの着信を告げるサインがあった。

□ □ □ □ □

送信者：Junko Yokoe

宛先：Rene

件名：聞いていたきたいことがあります。

ルネ様

広川美奈子（希羅々）の従妹、横江潤子です。

先日は突然のメールにもかかわらず、

お悔みのレス、ありがとうございます。

故人も喜んでいると思います。

じつは、聞いて頂きたいことがあるのでメールしました。

もしよろしければ、ご助言など頂ければ幸いです。

私は今、親戚である広川の家の下宿して大学に通っております。

美奈子の母は私の母の姉ですので。

そういうわけで、美奈子の形見としてPCを譲り受けましたが、インターネットも美奈子の父の名義で契約していましたので、それを私が継続して使うことになりました。

（私は学校でネットが出来るので、生前は、ほとんど美奈子専用でした）

美奈子のメールアドレスは、生前お世話になった方から連絡があるかとも思い

私がチェックしておりました。

それで、ここからが本題なのですが、

美奈子のメルアドに時々、異様なメールが送られて来るのです。

その人は、たぶん、まだ彼女の死を知らないのでしょうか。

返信しても戻って来てしまうので、対処のしようがありません。

ルネさん、何かお心当たりはないでしょうか？
こんな不躰なお願いをして申し訳ないのですが、
不気味な感じがして、気になってしまっているので…。

もし、興味がおありでしたら、そのメールを転送します。

でも、こんなことに関わりたくないと思われたら、どうぞ無視してください。

（こんな問題にはその方が当然だと思っています）

それでは。

横江潤子

たしか、希羅々がルネに送ったメールには蝙蝠という人物に関して質問をされているとあったが、そのことだろうか？

ルネは、すぐ潤子に返信した。

—— お力になれるかどうか、わかりませんが、よろしければ、そのメールを見せてください。——

それから、自分のサイトの更新をどうしようか、少し考えた。

シーケンサーソフトで、作りかけたまま放つてあるmidiの続きをやるうと思ったが、どうも集中できない。

ベースとストリングスの間にテンションコードとは違った、現代音楽のような緊張関係を作りたくて、いくつかのパターンを試してみたが、どうも平凡な感じにしかならなかった。音色を換えた方がいいのだろうか？それともコーラスやリバーブに工夫するべきなのか。

結局、元に戻したかたちで終了する。

コーヒーか紅茶を飲もうかと思ってキッチンへ行ったが、気が変わって冷蔵庫からハイネケンを取り出す。部屋に戻ってPCを終了させた。

緑色の缶のプルトップを起こす。

Stay tune!!

FMのパーソナリティーは抑揚の激しい、決り文句のような英語をはさみながら80年代のポップスとCMを交互に流している。

曲名は忘れたが、アーティストはたぶんCulture ClubやDuran Duran...といったところだろう。

番組の進行と共に窓の外は薄暗さを増していく。

第1話（後書き）

クエスチョンマークなどの記号は、その後にスペースを入れるのが文章作法というご指摘をいただきました。しかし、ここでは、携帯で見た場合のレイアウトを考慮して、現状のままにしておきますので、ご了承ください。

第2話

15 > / i <

ルネは女とベッドの上にいる。その女は少女のようでもあり成熟した女性のようにもある。

彼女はPoem Villageで見かけるネット詩人の誰かなのかもしれない。希羅々だろうか。そうかもしれないし、違うかもしれない。ルネは、オフで彼女たちに会ったことはないから、サイトに写真を掲載している数人のほかは、どんな容姿なのかわからない。

いや、それを明確なものとして伝えられないだけで、彼女が誰かをルネはわかつている。でも、実際の彼女は、たぶん、今見ているような顔やヘアや身体のラインではないだろう。

そこには流れがあった。川のような、あるいは海流のような微温の液体の流れ。彼女は、その流れの中のひとつの波だ。波はルネを捉えようとしている。そして、流れが彼を取り込もうとしている。

精液が波に吸い込まれ、そして、流れに吸収されていく。流れの中で薄められ、やがて、まったくそこにあるのを認識できなくなり、精液は完全に、そのアイデンティティーを失う。

それが至福よ、あなたを悦ばせてあげるわ。彼女の表情の中に支配の優越感が読み取れる。彼女は母に変化する。ルネの現実の母親ではない。ユングのいうグレートマザーのような母だ。でも、このグレートマザーは醜く、生臭さを伴っている。ルネは母をきわめて冷静に忌避する。

もう、そこには、あの大河や海のような膨大な量の液体はなく、流れも波も存在しない。足元にあるのは土だ。まだ沼地のように湿っているが、しだいに乾いていくだろう。母は死んだのだ。死んで土になる。それを止めてはいけない。それは、この世界の生成と変化の過程で推し進められなくてはならないものだ。

そして、固まった大地の向こうに父親が現れる。彼もルネのリアルな父親ではなくシンボルとしての父だ。もともとルネには、父親の記憶は幼児期のおぼろげなものしかない。

その大地に立っている父は殺されなければならない。ルネに殺されるのだ。父親を殺す時。それが神話の世界の始まりと終わりと、そして、すべてだ。

さあ、彼を殺しなさい。

——それが神話の世界の始まりと終わりと、そして、すべてだ。

ハイネケンの缶をひとつ飲んだだけだったが、しばらく眠ってしまっただけだ。目を開くとルネは、ソファの上で横になっていて、室内も窓の外も暗くなっている。

この部屋は西日が当たるので午後は暖かく、まだ、その温もりが残っている。だから、しばらく眠ってしまったけれど風邪はひかなかったようだ。

眠りはPCでいえばメンテナンスにあたるもののような気がする。ルネは病弱だった幼児期を過ぎてからは、ほとんど医者のお世話になっっていない健康体なので、発熱や腹痛などは少し眠れば治ってし

まう。それから、眠りは鬱状態にも有効だ。
スキャンディスクやデフラグの時、PCは夢を見ているのだろうか？

誰かが書き込んでいた通り、来訪者が増える夜の時間帯に入ったちゃんねる・ゼロでは、タツヒコの死を扱ったスレッドが祭りになった。

投稿のペースがひじょうに速い。新しいものを読み終わってリロードすると、またかなりの数が書き込まれていて、読んでいくのが追いつかないくらいだ。

だが、これといって注目するような情報にはなかなか出会わなかった。相変わらず常識人たちの神経を逆なでするようなジャンクな書き込みが続いている。

それでも、ずっと流し読みしていくと、こんなものに巡り会った。

・ ・ ・

468: 私も匿名さん

私は「HP小僧」のコメントスタッフに応募して、採用されたことがあります。

でも内情は、ひどいものでした。まず、何ヶ月分も掲載依頼が溜まっていたんです。

そして、それに古いものから順にコメントをつけるわけなのですが、

あそここの編集システムというのは、ログインして、すぐに編集の個所に行けないんです。

20サイトの情報（URL、タイトル、管理人の宣伝文などがあるので、相当長い）

があるページをスクロールして、いちばん下にあるボタンを押し、その前のページに行く。

それを何十回も繰り返して、奥にある編集個所に行かなければなりません。

私はc g iとか詳しくないんですが、こういうの、何とか出来るはずですよ。

けっこう有名なところなのに、その程度のスキルもないのかと疑問に思いました

ギヤラも微々たるものだったし、こんな状態では、仕事をしても支払われず、

踏み倒されるかもしれないと考え、すぐに辞めました（笑）

469：私も匿名さん

タツヒコって、ITブームの頃、テレビの取材を受けたりしてたね。

ベンチャーの星って感じで。

470：私も匿名さん

<<468

なんだよ、そのシステム。初心者以下のレベルじゃん。

それ、HP小僧の初めの頃？

471：私も匿名さん

HP小僧の投稿システムもひどかったよ。やたら重くてさ。

まだテレホーダイ全盛の頃だから、11時過ぎの2時間くらいは、

とても入れなかった。

472：私も匿名さん

香具師のスキルは厨房以下。

473：私も匿名さん

<<470

468です。

いいえ、昨年のことですよ。

同じようなスタッフの人に個人的なメールを出して聞いてみたんですが、

その人もレスに、初心者としか言えないスキルだと書いてました。

474：私も匿名さん

<<471

テレホ。懐かしいね。

従量制のユーザーも多かったし、

やたらネットに繋がてると通信費が大変な時代だったから

HP小僧みたいなので情報を得ると便利だったんだな。

常時接続が一般的になると、いくらでも自分で検索して見て周れるから

ああいいうのは必要なくなるね。

472：私も匿名さん

編集システムは見てないからわからんが、投稿システムは最低だった。

あれはフリーのcgiをほんのちよつと書き換えただけなんだよな。

しかも、奴は恥知らずなことに、そんなものに著作権を主張したりしてた（藁

あの頃はプログラム板でさんざん晒し上げてやったもんだ。

リロードすると、その後は、またジャンクな書き込みが続く。興味深い書き込みをしていた連中は、姿を消したようだった。ちょうどTVの人気番組や食事や風呂などでPCを離れる時間だ。これから夜遊びに出かける者もいるだろう。

ちゃんねる・ゼロを離れ、タツヒコが作ったアクセスパルという会社を検索してみた。IT業界向けに発行されているメルマガのバックナンバーのページがヒットした。一昨年秋の記事だった。

<株式会社アクセスパル（東京都渋谷区 水野達彦代表）は、ふれんどウェブ（株）（東京都港区 中山栄治社長）に全株式を5千万円で譲渡し、今後はふれんどウェブの傘下として活動することになった。懸賞を通じてさまざまな情報を収集し、販促資料として企業に提供してきたふれんどウェブは、これによって、広告アフィリエイトサービス部門の強化を進めていくと中山社長は述べている。>

たしか、HP小僧のスタッフ間のやり取りにはフリーのMLを使っていたようだ。takayoの話や、ちゃんねる・ゼロの書き込みでも、素人レベルのシステムを使っているらしい。

そんな会社に5千万円の価値があるのだろうか。もちろん、一概には言えないが。

バックボタンで検索のページに戻ると、そのページの少し下に同じメルマガで4年ほど前のバックナンバーもヒットしている。それは有限会社だったアクセスパルが株式会社に移行した時のものだった。役員の顔ぶれにはふれんどウェブ社長の中山氏も見えた。

食事にするのでPCを終了させようとした時、メールの着信メッセージがあった。希羅々の従妹からのものだと、ルネは直感的に思った。

16 > / p <

□ □ □ □ □

送信者 Junko Yokoe

宛先 Rene

件名 送ります。よろしくお願いします。

ルネ様

こんばんは。

こんなメールが来ています。

あんなことがあった後ですし、恐怖を感じるような言葉や内容もあり時々、背後に誰かが忍び寄っているような気がして、

心臓がときどきしたり、そんな不安な日々を送っています。

でも、従姉のお友達の方々が、いろいろ助けてくださるので何とかやっています。

突然メールを差し上げたので不審に思われるのはもつともです。ルネさんにメールしたのは、ある方が、自分はインターネットに詳しくないけれど、

この人なら頼りになるだろうと教えてくださったからです。
その方のお名前を書いていいかわかりませんので
ここではある方ということで、お許し下さい。

この3通のメールは、いずれも、返信しても戻ってきてしまいます。
それと、以前のメールで同じメルアドからのものや
内容の似たものはぜんぜん残っていません。

気分のいいものではないので、従姉が削除してしまったのだと思います。

それでは、お暇な時にでも見て下さって、
何か気づかれた事があつたら、アドバイス頂ければ幸いです。

横江 潤子

ルネは料理するのが嫌いではない。でも、今夜は、あまり時間を
かけたくなかったので近くの中華ファミレスで夕食を済ました。

比較的空いていたのでゆっくりしても良かったのだが、アルコール類やコーヒーも頼まず、食べ終わるとすぐ部屋に戻る。

ブラウザの受信ページにアクセスし、さつき、軽く目を通して
いた潤子からの転送メールをもう一度読んだ。
どれも、あまり長くはない。

□ □ □ □ □

送信者 Junko Yokoe

宛先 Rene

件名 Fwd :

- - - original message - - -

送信者

宛先 希羅々

件名

昨年末にメールを差し上げたんですが、お返事を頂けないので再度送ります。昨年後半に、蝙蝠さんから何かをお預かりしていないでしょうか？メールに添付されたファイルなのですが、お心当たりはありませんか？

理由や経緯を申し上げることは出来ないのですが、この件について早急に対処しないと、あなたの身边に危険が及ぶ可能性があります。ぜひ、返信をお願いします。

送信者欄と件名にはスペースが入れてあるだけだった。受取人の性格によつては、けっこう不気味に感じられたりするだろう。

生前、希羅々からルネへ送ってきたメールで「蝙蝠さんのことをいろいろ尋ねてる」変なメールに触れられていた。それと同じ差出人からのようにも思える。

でも、返事を求めているのに返信しても戻ってきてしまうのは変な話だ。設定を間違えているのか、それとも、何か別の意図があるのだろうか？

□ □ □ □ □

送信者 Junko Yokoe

宛先 Rene

件名 FW: FW: Re: ふふふ

- - - original message - - -

送信者 レイカ

件名 Fwd: Re: ふふふ

いちばん高い塔の歌

束縛されて手も足もでない

ひきこもりの青春

いらぬ気づかいだが、ただ彼女は

自分の生涯をふいにした。

これはアルチュール・ランボオの『いちばん高い塔の歌』がベ
スらしい。

金子光春訳だと、該当する部分是这样なっている。

束縛されて手も足もでない

うつろな青春

こまかい気づかいゆえに、僕は

自分の生涯をふいにした。

このメールで注目すべき点は、件名を見ると、この送り主が誰か

に「ふふふ」という件名のメールを送り、それに対して返ってきたレスを転送してきていることだ。だから、この文章は、その相手が書いたものだと思うわれる。

内容は希羅々のことを示していると考えられないでもないが、そうすると相手も彼女を知っていることになる。“いちばん高い塔”は彼女が転落、あるいは飛び降りた建物を暗示したものと考えられ、ということは、彼女の死について、ある程度の情報を得ているわけだ。

シニカルな文面から、その相手は彼女に対して悪意をもっているようにも想像できた。

ランボオを踏まえていることから詩に関心のある人物であることが考えられる。

□ □ □ □ □

送信者 Junko Yokoe

宛先 Rene

件名 Fwd: 悔い改めよ

- - - original message - - -

送信者 The muse

宛先 希羅々

件名 悔い改めよ

一篇の詩が生まれるためには、あなたたちは殺されなければならない多くの凡庸で下品で貧困な想像力は屠殺されるのだ

ルネはこれに似た文章を読んだ記憶があった。かなり有名な詩人の作品を書き換えたもののはずだ。

“一篇の詩が生まれるためには”で検索して、その結果から田村隆一の『四千の日と夜』を元ネタにしていることがわかった。

一篇の詩が生まれるためには、

われわれは殺さなければならない

多くのものを殺さなくてはならない

メールはいずれもメーラー設定でReplyToをでたらめなものにしてあるようだった。だから潤子が返信しても戻ってきてしまったのだ。

ヘッダーを見ると2番目と3番目のメールは希羅々宛てに同じメールサーバーから送信されている。同一人物が送っている可能性があった。

しかし、2通目の内容は、すでに希羅々の死を知っていることを窺わせるのに対し、3通目は彼女にたいして脅しをかけているようにも感じられた。時間的には3通目の方が5日ほど後なので、そこに矛盾が生じることになる。

何かの糸口になりそうなのは2通目の送信者になっている“レイカ”というHNだろう。このところ、あまり見かけないが、一時はPoem Villageの常連にレイカという詩人がいたのをルネは覚えている。

もちろん、同じHNに過ぎないかもしれないし、本人が実際に関わっているかどうかもわからない。誰かが何らかの目的でレイカというHNを使っている可能性もある。

もし、直接にしる間接にしる、レイカが何か関係しているなら、

すこし成り行きを観察しているほうがいいかもしれない。

すぐにメールなどで尋ねるべきではないな。

ルネは、とりあえず“ぽえ村”でログを覗いて、レイカについて調べてみることにした。

17 >table<

P o e m V i l l a g eでレイカについて調べてみた。

投稿板の左上に「作者一覧」のボタンがあり、それを押して目当ての詩人を選択すると、その板での作品タイトルが一覧表示される。投稿板は容量が大きくなると動作が重くなるので、投稿数が1000作品になるとストップし、新しいものが立てられるシステムだ。レイカはこしばらく投稿していないので、彼女の作品を見つけるには6つ前の板まで遡る必要があった。

レイカは2ヶ月ほど前までは週1・2度のペースで投稿していた。作品は、たぶん、テクニク的に言えば高いレベルにあるのだろう。ルネは、あまり好みでないから、それほど読んでいないのだが、いわゆる現代詩、飯島耕一とか吉増剛造などの影響を受けているのではないかと思われるものが多かった。それから時々はシティー派J・POPのようなものも書いているが、やはり、どこかに現代詩特有の硬質な雰囲気があるのは否めない。

彼女に寄せられる感想は平均して3〜4くらい。P o e m V i l l a g eで人気のある詩人は常に20以上のレスがつくから、レイカはあまり多くを獲得している方ではない。

もつとも、このサイトで現代詩系は、あまり注目を集めない傾向にある。ここで、よく書かれたり人気を集めたりするのは銀色夏生や三代目魚武濱田成夫、金子みすゞなどの雰囲気をもつもの、あるいはヒット曲やロックの歌詞のような作品だ。もう、ほとんど古典と呼んでいい中原中也や宮沢賢治なら人気が高いが、比較的名前を知られ、作品を読まれている現代詩人といったら、教科書に載っている谷川俊太郎くらいではないだろうか。

だからネット詩人でも現代詩系の中には、Poem Villageを快く思っていない連中もいるようだった。もつとも、それは、自分が詩の真髄を見せてやろうと意気込んで、推敲を重ねた作品を投稿しても、ふたつみつつの単純な感想しかつかなくて、仲間うちでは高い評価を得ている彼らが、いたくプライドを傷つけられたためかもしれない。

ぼえ村のリンク集に登録されているレイカのサイトにアクセスする。トップページを開いてからルネは、数ヶ月前、一度このサイトを見ていたことに気がついた。

その時とはデザインがかなり変わっている。でも、使われている色などは違うのだが、淡いトーンや悪くないセンスのレイアウトなど、以前と共通した雰囲気をもっていた。スタイルシートの扱いに慣れている感じた。

サイトの中を周ってみる。作品は、Poem Villageで見かけていたものだった。必ずしも中まで読んでいないのだが、かなりの数はタイトルに見覚えがある。

レイカの詩は、あまりルネの趣味ではないので、10篇くらい流し読みしてメニューのページに戻った。残りの作品がどんなものか

は、だいたい想像がつく。

●女流詩人さんに100の質問

Q 1 ・お名前（P N）は？

A 1 ・レイカ

Q 2 ・どうして、その名前を付けましたか？

A 2 ・戸籍上の名前にきわめて近いw

Q 3 ・あなたの詩のジャンルは？

A 3 ・現代詩。でも、ノンジャンルかも。

Q 4 ・尊敬する詩人は？

A 4 ・谷川俊太郎さん、吉増剛造さん、飯島耕一さん、
それと、父が短歌を作るので、父かな。

Q 5 ・好きなミュージシャンは？

A 5 ・日本ではドリカム、M i s s i a、それとユーミンは尊敬しています。

・ ・ ・

Q 2 6 ・最近、ネットでも詩が盛んなようですが、

それについて、どう思いますか？

A 2 6 ・みんな、言葉に対する真摯さに欠けていると思います。

あまりにもイージーで短絡的な表現に走っています。

Q 2 7 ・ プロになりたいと思いますか？

A 2 7 ・ まじめに取り組んで、その道を極めたいと思ったら、
そう思わないほうが、おかしくありませんか？

・
・
・

Q 8 3 ・ 好きな男性のタイプは？

A 8 3 ・ 私より優れていることです。何らかのかたちで。
それがなければ失格！！

Q 8 4 ・ 詩のほかに特技はありますか？

A 8 4 ・ 小さい頃からピアノ、バレエ、それと華道。

Q 8 5 ・ 自分を分析すると言で…

A 8 5 ・ 負けず嫌いかも。

・
・
・

サイトをひととり見て周ったので、今度は“レイカ”で検索を
かけてみることにした。レイカという名前やHNは、かなりあるよ
うなので、スペースの後に“詩”を入れて絞り込んでみる。

こうするとネット詩人のレイカに関する情報が、かなりヒットし
た。上位に来ているのはレイカのサイトか、または数人のメンバー

で運営している同人誌サイトの中のページだった。
次のページにいくと、こんなものがあつた。

♪ Room Bluebird 掲示板

ここで詩人Bluebirdとお話しましょう．．．する時は他の人の詩に．．．レイカの評判が最悪なことは確か．．．

どこかの掲示板らしい。そこにレイカのこと書きこまれているようだ。クリックしてみたが<ページが見つかりません>だった。そこは、もう閉鎖されてしまったらしい。

検索ページへ戻り、項目のいちばん下にある「キャッシュ」をクリックしてみる。

キャッシュには、検索サイトのロボットがアクセスした頃の状態で、まだ、そのページが保存されていた。

18 >tr<

♪ Room Bluebird 掲示板

ここで詩人Bluebirdとお話しましょう。
何か一言でも、カキコしていつてね。ROMは、イ・ヤ・ヨW

ごちゅうい：根拠のない誹謗中傷、卑猥な内容、など

皆様を不快にするものは、管理人が削除する場合があります。

キャッシュに保存されていたのは、昨年9月あたりに書き込まれた掲示板のページだった。BluebirdというHNはPoe m Villageで見かけたことがある。常連らしい名前も記憶にあるものが多かった。

日常の雑談のような話題が多いのだが、その中で、きわだって返信が多く、長く伸びているスレッドがあった。

読み進んで行くと、キャッシュページの機能でバックに色がついた“レイカ”の文字があちこちに見られるようになる。

嫌がらせメール / 雪華
4日22時18分

200X年9月1

みんな聞いてよー！！

最近、嫌がらせメールがすごいんだあ。

誰かの詩を幾つもコピペして送りつけてくる。

しかも画像添付、それもエロい画像。

私はNTTに騙されてISDNに入って、まだそのままだから、
受信が重いなの…（泣）

何で私が、こんな目に会わなきゃならないの？キーーッ

Re： 嫌がらせメール / のろ
月15日0時22分
200X年9

NTTふざけてるよな。

すぐにADSLが出て来るの、知らないわけないのに
ISDN勧誘しまくってたもんな。

それはそうと、

それ、誰の詩なの？ネットで書いてる人？

Re： 嫌がらせメール / エツシ
2000X年9月15日0時46分

そんなの、俺のメル友んところにも来るらしいよ。
返信しても戻ってきちゃうし、
誰から来てるのか、わかんないって。

また来てるんだよね / 雪華
2000X年9月15日2時26分

ほんと、頭来ちゃう。
犯人を突き止めて、Webから追放してやりたいんだけどね。

Re： 嫌がらせメール / なつちゃん
2000X年9月15日12時39分

雪華ちゃん、おひさです。
嫌がらせメールのことなんだけどね。

こちらのblogでも話題になってるみたい。
<http://www.xxxxx.jp/members/poetnews>

Re: 嫌がらせメール / Bluebird 200X年9月15日16時38分

昨日は飲み会で、友達のとこにお泊りになっちゃった。
なんか、盛り上がってるのかな？あまりいい話じゃないみたい
だけど。

なっちゃん情報のブログ、かなり詳しく書いてあるね。
どうやって調べたんだろう？

Re: 嫌がらせメール / 雪華 200X年9月15日20時46分

> なっちゃん

教えてくれたの見たよ。そういえば、私にも覚えがある。
ばえ村で希羅々さんに、よく感想書いてるもの。

だって、現代詩なんて難しくてワケワカメだもんね。
希羅々さんののは、自然にいいと思うところ、あるんだよ。
でも、それにジェラシー感じてる人いるの？

馬鹿みたい。

こんばんは / BB

2000年9月

15日22時12分

みなさん、こちらでは始めて。

ぼえ村を覗いたり投稿したりしてるBBです。

なつちゃんさんから、ここのことを聞きました。

>Bluebirdさん

くなつちゃん情報のblog、かなり詳しく書いてあるね。

くどうやって調べたんだろう？

レイカさんは以前、ちゃんねる・ゼロのポエム板で
晒しあげられたこともありますです。

えーと、それで、レイカさんはですね。

ぼえ村の規程「投稿する時は他の人の詩に感想を書いてから…」
をいつも無視してる香具師っす。

あまりひどいんで、漏れの友達が彼女にメールしたんですが、

「私は自分の作品を客観的に評価されたい。

馴れ合いで誉め合ってるようなぼえ村の人たちには向上心がない。
い。

だから、私は他の人のに感想を書きません」

というタカビーなレスが返ってきたそうです。

Re： 嫌がらせメール / のろ 200X年9月15日23時8分

ま、ぼえ村ではレイカの評判が最悪なことは確かのような。
でも、あいつ、高瀬川流の家元の娘だったのか。
本名：高瀬川麗佳…むむむ。

親父はよくテレビに出てるよな。
そうすると、あそこの後継者にあたるのか？

あいつ、何様のつもり？ / 雪華 200X年9月16日0時32分

華道の後継者だろうが何だろうが詩とは関係ないよ。
私は希羅々さんみたいな詩が好きだなあ。
誰かああいう感じのぼえ村の詩人さんがメジャーになるといい
ね。

銀色夏生とかみたいだね。

でも、私に嫌がらせメール送ってきたのもレイカさんなのかな
あ？

Re： あいつ、何様のつもり？ / BB 200X年9月16日3時8分

>雪華さん

送ってるのはレイカさんじゃなくて、dark blueですよ。
あのブログにも書いてあったでしょう。でも、共犯か？

dark blueが、懐かしいHNだ（藁
あの童貞ヒキモリ野郎はexitさんにボコボコにされたから
ネット詩には2度と戻れないかと思ってますが。
別HNを使ってるようですね。

でも、こんな犯罪行為やってると、今に捕まりますね。
まだ未成年だからいいか。

Re: 嫌がらせメール / Bluebird 20
0X年9月16日18時21分

このスレ、異常に長くなったから、
もし、続けたいなら、誰か別スレプリーズ。

私にも激重メール、来てる。ウイルスもいっぱい。
うわあ…。

続きのスレッドは見当たらなかった。立てられなかったのか、あ
るいは削除されたかだろう。

書き込みの中にあるblogにアクセスしようとしたけれど、「

ページが見つかりません」だった。blogのサービス自体がなくなっているようだ。

webのサービスは、自分独自の視点からコラムや写真をUPするblogをはじめ、日記、掲示板、チャットなど無料で提供されているものが多い。収入は広告費などで得ているわけだが採算が取れているとは限らない。というか、大手以外の零細なベンチャーはたいした利益が上がってはいないのかもしれない。

BBの書き込み、レイカがちゃんねる・ゼロで晒し上げられたとあったので、ポエム板へ行ってみた。もちろんスレッドも投稿も膨大な量だし、おそらく目当ての部分は過去ログの中だろうから、しらみつぶしに当たるわけにはいかない。

<ウザい詩人、キモい詩人を語るスレ>というのがあったので、そこに書き込んでみた。

462：匿名詩人さん

以前、レイカこと高瀬川麗佳が晒されてたと聞いたんですが、どこにあるか、ご存知の方、教えてください。

19 > t d <

ポエム板はニュース板と違い頻繁に書き込みがされるわけではないから、レイカが晒されている場所についての質問にレスが来るまでには、多少時間がかかるかもしれない。

ルネは議論板へ行ってみることにする。ニュース板ではタツヒコの死体が発見された事件について、もう興味が失われ、書き込みもなくなったのだろう。そのスレッドは消えてしまっていた。でも、誰かが議論板にスレを立てたので、そちらでまったりと話し合われているようだ。

議論板は内容のない書き込みが比較的少ないので、延々と続くジャンクにうんざりしないで済むし、書き込みの内容が濃いので何かめばしいものに行き会う可能性だってある。

・ ・ ・

247：私も匿名さん

タツヒコ殺害説が優勢になってきましたね（藁

248：私も匿名さん

<<236

「DE愛ランド」って何？

249：私も匿名さん

<<248

タツヒコはHP小僧の陰で出会い系サイトを運営してた。

HP小僧の方ではイメージを悪くしないためか、

そのことを、ほとんど表に出してなかったけどな。

それが「DE愛ランド」。

250：私も匿名さん

HP小僧で殺されるほどのことがあったとは思えない。
出会い系のトラブルか？

でも、規正法が国会を通過した時点で閉鎖してるから、
それだと、けっこう長いこと恨みを引きずってるわけだ。

251：銭形

<<250

DE愛ランドとほとんど同じノウハウでやっているとあるよ。
ヤクザ系みたいだが。まあ、興味があつたら調べてみてごらん。

HP小僧にだって、恨みをもってた奴はいたみたいだよ。

自分のサイトが審査で落とされた連中は多いわけだからな。

コメントスタッフで自分のサイトに侵入されて

ファイルを全部消されたなんてのもあつたし。

HP小僧のシステムがクラックされて発行が止まったこともあつ
たな。

ま、それについてはタツヒコの自作自演説もあるんだけど（爆）

252：私も匿名さん

常識では考えられないような事をするビューキのヤシもいるのが
webの恐ろしいところだよ。

ほんのちよつとした事で殺されちゃうのだって充分あり得る。

253：私も匿名さん

<<251

>HP小僧のシステムがクラックされて発行が止まったこともあ
つたな。

皆さんの話だと、初心者レベルのシステムだったそうですからね。

それはそうと、俺は、ふれんどウェブの方が、なんか胡散臭いと思う。

タツヒコの作ったアクセスパルは乗っ取られちゃったわけだし。

254:Kent

アクセスパルは赤字経営で負債を抱えてたみたいだぜ。

タツヒコは助けられたんじゃないか？

255:私も匿名さん

<<253

ふれんどウェブって、何やってる会社？

256:私も匿名さん

<<255

要するにスパマー。

257:私も匿名さん

迷惑な宣伝メールを送って儲けてるのか。

毎日必ずスパムメール何通来るんだよ、ウザいな。

あいつら、ネットのダニだ。

258:AKED

まあ、ふれんどは超悪質なスパマーのように、ぜんぜん知らない相手に

送りつけるわけじゃない。登録をした会員に、年齢や収入、嗜好などの

データからそれぞれに応じた賞品情報を送るということになる。

また、データは販促の資料として厳重に秘密保持をされながら企

業に

提供される ということは契約条項にあるな。

実際、どのように使われてるかはわかったものじゃないが（笑）

それと、ふれんどはwebの広告代理店もやってる。アフィリエイトサービス

というやつだね。自分のHPにリンクのソースを貼って、そこからアクセスが

あったり売上があったりすると、リベートが貰えるシステムだ。

世の中には只で物を貰おうという乞食根性や、楽しんで金を儲けようという

虫のいい奴らが多いから、現在、ふれんどの会員数は100万を超えるらしい。

259：私も匿名さん

漏れも懸賞に応募したくてふれんどウェブの会員登録しようと思います。

でも、個人情報をやたらと書かせるんでつよ。
年齢、住所、職業から学歴、年収、家族構成、持ち家が借家かとか。

未成年者からは親の情報まで集めてまつ。
なんかヤヴァそうなので登録やめますた。

・ ・ ・

まだ、書き込んでから、あまり時間が経過していなかったが、ル

ネはポエム板の様子を覗いてみた。質問に対する答はまだなかったが、ルネの書き込みで話題がレイカに移ってきているようだ。

・
・
・

462：匿名詩人さん

以前、レイカこと高瀬川麗佳が晒されてたと聞いたんですが、どこにあるか、ご存知の方、教えてください。

463：中原厨也

レイカで祭りになったのは去年の夏頃だったな。
ちゃんねる・ゼロポエム板の夏祭りってとこだ。

464：匿名詩人さん

レイカの仲間でdarkblueって香具師もいたな。
ネットゲーヲタでアニメ萌えのくせに、現代詩とか粹がつてて（笑）

465：匿名詩人さん

レイカはdarkblueなんてパシリくらいにしか思ってたなかっただろ。

そもそも、あんなキモい高校中退のヒキコモリを、

高瀬川流華道家元のお嬢様が、まともに相手にするはずないもんね。

ルネの好みの曲が多いグランジ系のネットラジオが、今日、更新されているはずだった。それを聴くためにちゃんねる・ゼロを閉じようかと思ったが、その前にもう1度リロードしてみる。

書き込みがひとつ増えていた。

466：ドドメ色秋生

<<462

探して来るから、しばらく待っててちょ。

20 >/td<

次の朝、覗いてみたが、ポエム板には、まだルネの求めた情報は書き込まれていなかった。書き込み自体が昨夜のままで止まっている。

その日は一日、携帯サイトを作る仕事をした。携帯サイトは単純なので、ページ数は多いのだが、テンプレートを作って要領よく仕事をこなし、夕方には一応完了した。

夜になって、またポエム板を見たが、朝と同じ状態だ。それで、ルネは議論板に移動して、タツヒコ関連のスレッドを開いた。昨日から、その後数人が書き込んでいるが、これといって注目に値するものはない。

だが、そこにある書き込みを眺めているうち、ルネはふと、あることを思いついた。暇つぶしに、それを実行してみることにする。

アクセスパルはHP小僧が部数を飛躍的に伸ばし始めた頃に取得したドメイン“hp-kozo.xxx”を継続して使っていたようだ。それで、まずトップページへアクセスを試みた。

ブラウザの応えは予想通り「ページを表示できません」だった。

次にドメインから登録者の情報を調べてみることにする。これは検索サービスを行っているサイトのフォームに“xxxxx.com”とか“xxxxx.net”：のようなドメイン、あるいは“24.135.102.9”のようなIPを打ち込むと、登録者名や有効期限などの情報を見ることができるようだ。ただし、業者が代理になっている場合は、わからないこともある。

ルネは検索窓にHP小僧のドメインを入れボタンを押した。

「Domain Name」 HP-KOZO.XXX
「登録者名」 水野 達彦
「Registrant」 Tatsuhiko Mizuno

「登録年月日」 2000/07/25
「有効期限」 200X/07/25
「状態」 Active
「最終更新」 200X/07/25 00:30:00 (JST)

このほかにContact Information：「公開連絡窓口」 として、名前、住所、Email、電話番号がある。

しかし、ここで特に変わったことは見つからない。

有効期限は今年の7月になっていた。でも今、確認したように少なくともトップページは削除されている。Takayoの話では、スタッフのログインページもアクセスできないそうだ。

次に串情報のサイトへ行った。“串”とは“プロキシ”proxy”からきた言葉で、プロキシサーバーを指すネットでの通称だ。

プロキシサーバーは、アクセス制御やトラフィックを軽減する役割をもっている。

しかし、この過程を“串を通す”と呼ぶような連中がプロキシに期待するのは、匿名性という、もうひとつの要素だ。

ページにアクセスすると、時間、ブラウザ、OSをはじめ、Hostの名前、HostIPなどの環境変数といわれる情報がサーバーのアクセスログに残ってしまうのだが、プロキシサーバーを介してアクセスすると、ログに残るのはプロキシの環境変数になるので、自分の重要な情報を知られずにすむ。

別に被害を及ぼすわけではないし、もう会社は消滅してタツヒコも死んだのだから訴えられることもないと思う。でも、これから行うことは不正アクセスにあたるかもしれないので、ルネはプロキシを介して自分の姿を消し、慎重に事を運ぶことにしたのだ。

信頼できる串情報のあるサイトへ行つて、串のアドレスを手に入る。海外にあるサーバーだ。プロキシサーバーには自分の情報が残るから、アクセスを辿れば、結局はわかってしまう。わかりにくくするために複数の串を通すやり方もあるが、そこまでする必要はないだろう。サーバー管理者は、めったなことでは部外者にログを見せないし、何の実害もない侵入程度で外国まで捜査に行くほど警察も暇ではないはずだ。

ルネは次に、まず、串を通さずにアクセス解析のページにログインした。プロキシサーバーを通るとパスワードがログに残ってしまい、管理者に読まれる恐れがあるからだ。

アクセス解析サービスはページにソースを貼るとアクセス推移や生ログの閲覧をすることができるもので、無料のサービスも多い。生ログを見ると上で述べたような様々な環境変数が把握できるので、

ビジターがどのページのリンクから来たかも知ることができる。

ルネは、こう考えた。

彼がHP小僧に掲載依頼をしたのは去年の3月だが、Takayoは、コメントを付ける作業が7ヶ月遅れだったと言っていた。だから、ルネのサイトをコメントスタッフが見たとすれば10月ということになるだろう。それがアクセス解析のデータに現れていないだろうか。

掲載依頼時のチェックだけではねられるサイトもあるのだが、それは怪しいビジネスや、あまりにも内容のないサイトだろう。ルネは自分のサイトが、そこまでレベルの低いものではないと思っていた。だから、10月頃の生ログを見ればHP小僧からのアクセスが見つかるかもしれない。それは、たぶん編集システムからのものだろう。

そして、ちゃんねる・ゼロの書き込みによるとHP小僧のシステムは、ひじょうにレベルの低いものだったらしいから、もしリンク元のアドレスがわかれば、そこからシステムに侵入が可能かもしれない。

もっとも一般的にはセキュリティ上の配慮がなされ、このような方法はとれないよう、何らかの措置がとられている。

だからルネは、それほど期待していたわけではない。たぶん駄目だろうが、ちょっとした暇つぶしのつもりだった。

ルネの使用しているサービスでは、生ログは4ヶ月前のものまでしか保存されていないが、あるとすれば、たぶん10月だろうから今、調べれば問題なかった。

10月の生ログを30日から遡って見ていった。19日のページでルネはhp-kozo.xxx”の入ったURLを見つけた。cgiのページのようにだから編集システムの中だろう。

ルネはURLをドラッグしてメモ帳にコピペした。管理ページか

らログアウトする。

串の設定はIEの“ツール”からできるが、アドレスを打ち込めば、後は一発でプロクシを通せるソフトがインストールしてあるので、それを使った。

メモ帳にコピペしてあったURLにアクセスを試みる。

しかし、ページは表示されない。

接続中の白い画面の状態が数分続いた。やはり、もうサイトがすべて削除されたのかもしれない。だが、ページが見つからないという表示が出ないので、ルネは、それまで待ってみようと思う。

しばらくして、やっと、ページが表示された。

上から順にサイト名、URL、管理人のメールアドレス、そして管理人の書いた紹介文が並び、その下にスタッフがHNとコメントを書きこむフォームがひとつのボックスで、それが1ページに20サイト分並んでいる。

ルネは上から6個目に、自分のサイト『R e n e t i c』の名前を見つけた。

< 詩のようなもの、あるいは、どこにもない洋楽の対訳。オリジナルm i d iもあります。 >

紹介文は、コメンターが自分のサイトをどう感じるのかに興味があったので、あまり具体的な表現を避けた覚えがある。

システムに侵入はできたが、別に何があるというわけでもない。

ページの最下部までスクロールして、<NEXT>のボタンを押す。動作が重くて、すぐに次のページには移らない。

『バリハイ』<http://www.xxxx.ne.jp/barihai/>

<バリ島に移住したKeikoと夫が現地での生活を書き記す日記が好評です。二人で厳選したバリのエスニックグッズも販売します。>

『ファンファンルーム』<http://fanfan.xx.xxx.jp/top.html>

<管理人efoが書いたファンタジー小説を発表しているHPです。ユニコーンの秘宝を探して旅する少年3人の冒険と友情を描いた作品など。ぜひ読んで下さい。>

. . .

いくつかのサイトの紹介文を読んだ時、やっとページが代わる。

一般的には串を通すと重くなるのだが、それだけでは、こんなにひどくならない。サーバーの状態が悪いのかもしれないが、やはりシステムに問題があるのではとルネは思った。たぶん普通の状態でも相当重いはずだ。

ルネは表示の重さに閉口しながらも、次のページ次のページと進んでいった。4ページ目の途中からは、もう、各サイトにコメントのついた表示がなくなっている。ここで、HP小僧は活動をすべてストップしたのだろう。

最後のページへ行きつくには、それから1時間以上を要した。そのページには6サイトの情報しかなかった。

最後のサイトはタイトルとURLだけで、管理人のメルアドや紹介文の欄は空白になっていた。

それは、こんなタイトルだった。

『人間は表現する葦である』

21 >/tr<

『人間は表現する葦である』というサイトの部分は、ルネが今まで見てきた編集システムのページの中で、何か違和感のあるものだった。それまでのページでは必ず管理人のメルアドと紹介文の欄は埋められていたのに、ここだけは、その2点が空白になっている。

HP小僧で紹介される時のコメントはスタッフが書くのだから、管理人の紹介文がなくてもいいとは言えるだろうが、メールアドレスがないのはおかしい。ルネが掲載依頼をした時にも、投稿フォームにメルアドは必須とあったのを記憶している。

それから、URLも、最後がconfes.htmlとなっていてトップページを表わすindex.htmlやindex.htmではない。投稿規程には、必ずトップページのURLを記入するようにと書かれていたと思う。同一サイト内のいくつものページで掲載依頼してくることを避けるためだろう。

このサイトの部分に関しては、どうもおかしい点が多いようだが、

チェック漏れしているだろうか。

ルネは、その受付日が12月25日になっていることに気づいた。その前の『りえこママの幸せレシピ』というサイトは10月23日受付になっているから、そこには2カ月の間隔がある。その頃にはもうアクセスパルはなくなってしまうのだから、HP小僧も、もちろん活動してはいないのだ。

それにタツヒコの死亡時期だって11月ということなのだから、その頃は当然、この世にいない。

管理ページのパスワードを知っているスタッフが、何かの理由で『人間は表現する葦である』をここに加えたのだろうか？しかし、たぶんもう、ここに入ってきて来る人間はいないだろうし、システムをチェックする必要があつたとも思えない。

このタイトルは、もちろん、フランスの思想家、数学者、物理学者、パスカルの名著『パンセ』の中の「人間は考える葦である」が元ネタだろう。とにかくサイトを見てみよう。とルネは思った。

マウスポインターがURL部分に触れて手の形に変わる。ルネはしばらく、それを見つめてからクリックした。

そのページの表示には、それほど時間がかからなかった。ひじょうにシンプルということもあるが、ダイヤルアップの頃の表示時間程度だ。やはり、あの編集システムのページが重いのは、スク립トの書き方に問題があるのだろうか。

フリーのHPスペースに作られたサイトなので上下に広告バナーがある。メインの部分は白の背景に黒いテキストで、改行のない、詩のようなものが書かれていた。他には何も無い。

t t 夢 の 圧 力 に 歌 ふ 造 花 た ち 青 い 船 着 場 と 蜜 の 地 図
そ し て 破 壊 す る ま だ 固 有 な 少 女 の 嘘 は 森 に 繁 茂 す る
そ の 理 由 狼 男 よ 白 き 子 供 ら の 溶 鉱 炉 に 星 と 偽 詩 人 が 重
なり 佇 む 暁

あまりにも単純なつくりなので、画面のあちらこちらをドラッグしてみた。文字色を背景と同じにして隠していないかと思ったからだ。もし、そういう仕掛けをしていた場合、これで問題の個所が浮き出すが、そういう部分を見かけることはない。

ソースを見たが、こちらも特に変わったことはなかった。

単純に<html><head>で始まるソースで上下には広告バナーのスク립トが挿入されているが、HTMLのバージョン宣言やMETA情報は記述されてなかった。しかし普通の場合には、別にそれがなくても、表示に支障があることは、まずないということだ。

このページの作者は、おそらく、上のような情報が自動的に挿入されるHP製作ソフトを使ったのではなく、テキストエディターで生のソースを書いたのだろう。簡単なソースだからメモ帳を使ったのかもしれない。

“人間は考える葦である”が<title>と</title>のタグに挟まれている。

本文は、こちらでは改行して書かれていた。

t t

夢の圧力に
歌ふ造花たち
青い船着場と
蜜の地 図
そして破壊する

まだ 固有な
少女の嘘 は森に
繁茂する
その理由
狼男よ

白き 子供らの
溶 鉱 炉に 星と
偽 詩人が
重なり佇む 暁

行末に
タグを入れないから画面では繋がって表示されてしまう。上では冒頭の“tt”の意味がわからなかったが、タイトルか、あるいは作者のHNなのだろうか。

>/body</html<の前の行にはセンタリングを閉じるタグがあった。上にセンタリングのタグはないから消し忘れたのかもしれないが、まあ、これが残っていても表示に影響することはない。タグに囲まれていればブラウザでは見えない。

まだ製作中のページをサーバーにUPしたようにも見えるが、いろいろ考えてもルネには、どういう経緯でそんなことが行われたのか、これといったものを想像することができなかった。

ルネは、いちおう、そのページを保存しておいた。フリーのスペースでは、一定期間更新されないページは削除されてしまうところが多い。

22 >/table<

少し喉が渴いたので、ルネはキッチンへ行った。笛付きケトルに少し水を入れ、レンジに点火する。ガラスのティーポットに四面体のティーバッグを入れ、カップやスプーンを用意した。

ガスの青い炎は無機質で、見た目には熱を感じない。その微かな揺れを見ながら考えた。あと、やっておくべきことは何だろうか。ケトルが鳴り始めたので火を止める。

PCの前に戻ったルネは、アドレスバーのURLから末尾の“confes.html”を消し、エンターキーを押してみる。

こうするとサイトURLへのアクセスになるので、通常は“index.html”または“index.htm”と名づけられたファイルが開かれるようになっていく。けれども、そのページは存在しないようだった。この『人間は表現する葦である』というサイトに置いてあるのは“confes.html”というファイルだけなのかもしれない。

ルネはブラウザをIEから、ちゃんねる・ぜろ専用に代えた。

<ウザい詩人、キモい詩人を語るスレ>でレイカの晒されている場所を尋ねたのだったが、それに答が来ていないかチェックしてみる。

短いレイカへの批判ふたつの後に待っていた書き込みがあった。

469:ドドメ色秋生

<<462 <<466

レイカの晒し上げ、ハケーンしますた。

<http://chanzero.xxx/archive/culture.cgi/pom0003249185>

本来なら“http://:”の部分なのに最初の“h”を省いている。リンクは普通のテキスト部分よりバイト数を使うため、あまり多いと書き込みが1000に達する前に容量をオーバーしてしまっからだ。もう改善されているかもしれないのだが、古くからの常連の間では書きこむ時、URLから“h”を省くのが慣わしになっている。

471:匿名詩人さん

<<470

乙 Thanks.

とりあえず、ドドメ色秋生にお礼の書き込みをしておいた。“乙”は、このサイトでよく使われる表現で、「お疲れさま」の意味だ。彼が教えてくれたURLをクリックしてみる。そのURLは冒頭の“h”を抜いているので、IEで見た場合はただのテキストだが、専用ブラウザだと、それでもリンクが動作するように作られているのだ。

『困ったネット詩人』というスレッドは去年の5月から数ヶ月の期間、立っていたもので、書き込み数がリミットの1000に達したので終了している。8月に300を少し過ぎたあたりから、レイカについての書き込みが集中して“祭り”と呼ばれるネット掲示板の騒擾現象が起きていた。

312：匿名詩人さん

レイカってウザいと思わない？

313：匿名詩人さん

ここでレイカを晒し上げ、ネットから追放しようではないか。

314：匿名詩人さん

禿同

・ ・ ・

“禿同”とは、ちゃんねる・ゼロ特有の言いまわしで「激しく同意」の意味だった。

ルネは冷めかけたミルクティーの残りを一息で飲んだ。めばしい書きこみが出てくるまで、スクロールしながら流し読みで進めていく。

・ ・ ・

328：匿名詩人さん

レイカ、この間、テレビに出てたよ。

ワイドショーの、有名人のお宅拝見コーナー。

彼女、生け花のエライ人の娘なんだね。

意外と可愛かったw

329：匿名詩人さん

漏れも「ヲタク拝見」見たが、それほどでもないと思ったな。
メイクがうまいだけじゃないか？

330：ピリカ

ファンクラブがあるとかいう噂だが、本当にかよ？

331：匿名詩人さん

<<330

ジサクジエーンだろ。

ネット詩人人気投票でもネットカフェをはしごして投票してたら
しいぜ。

自分のPCからだど、重複はカウントされないからな。

332：匿名詩人さん

同人サイトなんかも作って人を集めてるが、やはり嫌われ者なの
かなw

ぽえ村なんかでもレスが少ないな。

希羅々さんに人気があるので、かなりライバル意識を燃やしてる
と思われ。

333：匿名詩人さん

収録の時は夏休みで帰省してたが、東京の大学に通ってるらしい。

・ ・ ・

408：匿名詩人さん

俺は、別にいいとこのお嬢さまだろうが、何だろつが
本人に才能があるのなら、構わないと思う。

自作自演にしても、擬似イベントなんてスターの登場には珍しくないぜ。

あのビートルズでさえ、最初のアメリカ進出の時、サクラを雇ったんだし。

まあ、チヨイル新聞みたいな日本を代表する大手や有名TV局だつて(r y

409：匿名詩人さん

408はレイカのジサクジエーンですか(笑

410：匿名詩人さん

<<409

408ですが、言い忘れたけど、

別に自分はレイカに才能があるとは思っていませんよ。

多少器用に書いてはいるが、高い評価をするほどの器ではないと思う。

俺が言ってるのは、あくまでも一般論だ。

・ ・ ・

462：詩の戦士

いろいろ誹謗中傷があるようですが、根拠を示してください。憶測やでっち上げを書くのはレイカさんへの名誉毀損です。

463：BB

希羅々さんの作品は稚拙だとか、日記に書いてたことあるよ。すぐ消してしまったけどね。彼女にはそういうことが多い

464：詩の戦士

レイカさんは、現代詩の伝統を守り、発展させていこうとしていて、

僕達は、そういう彼女の姿勢に賛同し、また、才能に敬意をはらっています。

465：匿名詩人さん

<<464

>現代詩の伝統

現代詩って現代のものじゃないのか？

その伝統って何だろうね（爆

466：匿名詩人さん

何が「詩の戦士」だよ。え、darkblue（藁

みんなお見通しだよ。俺は、あっちの方のサイトも見てるんだぜ。

現代詩とは、アニヲタの荒らし厨房も偉くなったもんだな。

しかし、天網恢恢疎にして漏らさず、頭隠して尻隠さずだ。

レイカのご機嫌をとれば童貞とおさらばできるとでも思って工作員やってるのか？

おまえはネットゲあたりで遊んでるのがお似合いだよ。

467:BB

darkblueくん。

嫌がらせのカキコやメールは、やめたほうがいいよ。
立派な犯罪だ。いまにパクられるよ。

・
・
・

542:匿名詩人さん

レイカの掲示板にアクセスできましえん。
閉鎖したんでしょうか。

543:匿名詩人さん

みんなで、あんまり荒らすからだよ。

AAなんか貼りまくってさ(藁

544:BB

日記も消えてますね。

サイトの他のコンテンツは見えるようです。

・
・
・

最後まで一応、見終わった。今日のところはこれまでにしよう。
ルネはPCを終了する。

目がかなり疲労しているし、明日の朝は仕事の打ち合わせで渋谷
まで行く予定が入っているから、今日はもう寝ようと思う。

今日は、サエジマさんには別の予定があるそうで、渋谷駅前には奥さんのユカリさんが来ることになっていた。

風は弱いが朝の冷え込みは厳しかったので、八チ公前で待っていたルネに、ユカリさんは「別の場所で待ち合わせればよかったね」と声をかけたが、ルネは別に寒さが気になってはいなかった。

冷気は街に重く垂れ込めているが、それと同化することをイメージすると、ルネは意識が身体の表層から外界に広がっていくような感覚に満たされる。そして、寒さはただ客観的に、そこに存在するだけのものになり、自分にとって何の苦痛でもなくなる。

クライアントの雑貨ショップでは、先方との話をほとんどユカリさんが受け持ってくれたので、ルネは、ただ聞いていればよかった。

もともと難しい話ではなかったので、打ち合わせは1時間弱で終わる。ユカリさんは「食事でもしたいけど、娘が風邪気味だから」と資料を入れてあったA4サイズの紙袋から何かを取り出した。

「貰い物なんだけど…。中のレストランで食事もできるわ」

そう言っ、デパートの商品券が入った封筒をルネに渡す。

ユカリさんが手を振って東急の駅に消えていくのをルネは見送った。

晴れた日だったので、昼近くなると寒さを感じない。ルネは少し歩いてみたい気分になった。スクランブル交差点の歩行者用信号が

点滅し始めたので、小走りで横断歩道を渡った。

センター街を歩いて行く。行き交う人間たちの中のかなりの数は、どこか、もの欲しげだった。その時、ルネには人々がもの欲しげで街をさまよったり、立ち止まって人の流れを見ていたりするように見えた。

僅かなきっかけさえあれば誰かに話しかけたい、話しかけて欲しい。彼らは、その微妙なタイミングを測って身構えているように見える。でも、それがダイレクトに現れることはない。ネガティブな均衡が街を浸しているが、ひとりひとりはチャンスが来たら、堰を切ったように喋り始めるかもしれない。僅かでも隙を見せた人間を見つければ、溜まっていた性衝動から一気に射精する男のように。人ごみは鬱屈として濁った電磁波を発している。

公園通りへ抜けて渋谷区役所の辺りに来ると、人が少なくなつて、落ち着いた気分になる。

さっきまでのことは、自分が妄想的に、そう感じていただけかもしれない、とルネは思った。そして、たいしたものではないのだが、ビジネスがらみの慣れない、どちらかと言えば苦手な場所にいたので、精神の均衡が崩れたのかもしれないと考えたりもした。

しばらく歩くと明治神宮前駅への入り口があつたので階段を降りた。

地下鉄の窓の外は、ただ内壁の照明が後方へ規則的に走り過ぎて行くだけだ。でもルネは、それをぼんやりと見ているのが嫌いではない。

会社の同僚らしいスーツ姿の男たち。幼い姉妹を連れだ若い母親。着古したジャンパーの老人。

駅でドアが開くたび、乗客はひとりで、あるいは連れ立って、それぞれの物語の中で、この車両に乗り込んで来る。その物語は他の乗客とはほとんど交差することがなく、彼らはまた、どこかの駅で降りて行く。

ルネは、シートが適当に間隔を置いて座れる状態で、しかも端が空いている時でなければ座らない。たいていは、ドアの脇に立っている。

「これからは、俺のことを詩人って呼んでくれよ」

地下鉄の車内は普通の電車より騒音が大きい、その声は、それに掻き消されることなくルネの耳に届いた。

「何でおまえが詩人なんだよ。詩なんてどこに書いてんだ」

ルネとは反対側のドアの前に数人のグループがいた。何だかコンビニの前に座り込んでいる連中と同じような波長を感じる。

「インターネットだよ。俺は、何を隠そうネット詩人」

自称詩人は、ちよつと胸を反らして応える。セツトが乱れている茶髪。小柄で猫背の、ちよつと猿系の顔だ。

「ネット詩人なんてのもあったのかよう」

ヒップホップふうにジャージを着た、大柄の男が笑って彼の肩を叩く。

一同は声を上げて笑った。

「ネット作家なら、本が出て売れてる人なんかもあるみたいだねえ。田口ランディーとかさ」

ゴスロリっぽいファッションの髪の長い女の子がシニカルに言う。

「おまえらは知らないだろうけどな。俺はネット詩人としては、ち

よつとしたもんなんだぜ」

彼は喋りながらルネの方をちらちらと見た。でも、ルネは彼に視線を向けていたわけではないし、彼と面識があるわけでもない。

「ちよつと某サイトに投稿するとな、そりやもう絶賛の嵐」

「ヒロは絶賛の嵐よりは、荒らしだろ？エロい書き込みとか常習の」
彼を揶揄したオレンジのソバージュは引き攣けを起こしたように腹を抱えている。

どこに投稿しているのだろう？もしかしてPoem Villa
geだろうか。そうだとすると、ルネが知っている常連の中の誰か
かもしれないが、でも、想像がつかない。

赤坂で“詩人”と仲間は降りて行き、入れ違いに初老の女が入っ
て来た。イトーヨーカドー辺りで買ったような冴えないハーフコー
トを着ている。

「この電車は北千住に行きますか？」

入って来たすぐ脇の、シートの端にいた高校生らしい女の子の二
人連れに尋ねた。たしか、入り口の横に北千住行きの表示があるは
ずだが確認しなかったのだろうか。

初老の女は二人連れの向こう側の空いていた席に合皮の手提げを
抱えて座ると、女の子たちに話しかける。茶髪やピアスを親や先生
が咎めないのかというようなつまらない話だ。

二人連れは、あまり歓迎しない様子だが、自分たちの世代では、
もうあたりまえのことだと答える。初老の女は、それに耳を傾ける
気はないらしくて、自分が若い頃の話始める。

でも、人は聞きたいことだけに耳を貸して
そうでないのは無視するものだけだね

こんな内容の英語のフレーズが、ふとルネの頭の中に流れてくる。男性二人のハーモニーとスリーフィンガーのギターに乗って。

Simon & Gurfunkleの「The Bo xer」という曲の中の一節だ。

海外へ放浪の旅に出たというルネの父が残っていたアナログ盤の1枚に入っていたが、プレーヤーが壊れたので、もう長いこと聴いていない。

そういえば、こんな言葉もあった。

―人間はつねに、自分に理解できない事柄はなんでも否定したがるものである。―

パスカルの『小品集・幾何学的精神について』の中の一節だ。ポール・サイモンは、これを読んでいたのだろうか？

パスカルといえば有名な『パンセ』の中の「人間は考える葦である」だなどと思い、HP小僧の編集システムに侵入して見た『人間は表現する葦である』というページと、そこにあった詩のことがルネの脳裏に甦る。

ルネは日比谷で降りた。あまり縁のない場所だし、別に目的もないのだが、何となく銀座へ行ってみたくなったのだ。

乗り換えを待つ間に、もう、今までの車内での人々や話の記憶からは現実感が失せていた。地下鉄の中で、しばらくの間、うとうとして、白昼夢を見たのかもしれないと思えるほどだ。

銀座で降りて、階段を上がった先にあったのは、やはり、ただよそよそしい世界だった。もちろん、何かを期待していたわけでは

ない。

ルネは地上に出てから、ヘッドフォンステレオでラジオを聞き始めた。最近リリースのJ・POPが3曲ほど流れた後、ニユースが挟まれる。それまでのパーソナリティーのお気楽な会話調とは違って変わり、アナウンサーが機械的な調子で原稿を読み始める。

<今朝早く、東京都世田谷区内の公園で、女性が倒れているのをジヨギングしていた近所の会社員が発見し、通報しました。女性は身体を数力所、鋭利な刃物で刺されて既に死亡しており、所持品などから東京都世田谷区の女子大生、高瀬川麗佳さんと見られています。また、女性のマンションを訪れた警察官が、室内で血を流して死んでいる男を発見しました。男は神奈川県在住の17歳の少年と見られ、現在確認中です。麗佳さんは京都に本部がある高瀬川流華道家、高瀬川雅堂氏の長女で、都内の大学に通っており、マンションに一人暮しでした。麗佳さんは知人に、最近、ストーリーカーにつきまといとわれて困っていると話していたそうです。>

第3話

24 >img<

「ポプラの徒然日記」

こんばんは。ポプラです。

ええと、まあ、例の事件がありまして、それはやはりショックなわけですが、それで僕も何か書き残しておこうと思います。

ここへ来る皆さんはご承知のように、僕もレイカさんの取り巻きの一人でした。レイカさん主宰の秘密チャットがあつて、メンバーは夜な夜な、そこで密談していたんです。これからの詩や詩人はどうあるべきかとか、まあ、そんなことですね。

やがて、ここにいるみんなは有名になつて、原稿料や印税など人並み以上の収入を得られるようになる。それぞれは、それだけの才能をもっており、時代もその方向に向かつて流れている。そのための戦略はどのようにするか。そういった、今考えると妄想みたいなことを、けっこうマジで議論していたんです。

話の中では当然、ネット詩の現状に対する批判も出てきます。名指しでの誹謗中傷のようなことは日常茶飯事でした。というか、みんなで意識をひとつにして、そこにいないスケープゴートを攻撃するゲームで僕らは盛り上がっていたのです。

そのメンバーは、後に少し減りましたが、最初、8人でした。それが誰か？まあ、ここに来る皆さんは、ご存知ですよ。

その頃はレイカさんもまだ19歳だったから、みんな十代でしたが、けっこういい詩を書いてたし、まあ、そこそこ才能あったんじゃないかと思います。もちろん、僕のことは別にしてね（笑）

レイカさんが有名な華道家元のお嬢さまであることは、やはり、みんなを引き寄せた大きな要素であったと思います。こういう人とお近づきになっておけば先々で、いろいろと、おいしいことがあるかもしれない…ってね。

でも、初めの頃レイカさんは、家柄のことを自分からは言っでませんでしたし、HPにも、ぜんぜん書いてありませんでしたね。

だけど、どこからかそういう噂が聞こえてきました。dark blueが流したのかな？あるいは彼女が計算の上で演出していたのかなと、今は考えられないこともないですね。

でも、華道の家元である実家への安住に反発して京都を飛び出し、東京の大学に入ったと言っでたので、その時は、なかなかかっこいいじゃないと思いました。

今、こうして思い返すと何なのかなあ。僕は小学校の頃から本を読むのが好きで、漠然と小説家になりたいか思っでました。でも、中学生くらいになって実際書いてみると難しいんですね。やはり自分には、こちらの才能はないなと思っでました。

それで、高校生になっで、ギターなんかいじり始めたんですね。曲も作ったりしましたよ。でも、やはり、何か足りないんですね。友達に聴かせても時代遅れとか言われて、ぜんぜんうけないし。まあ、自分でもわかってたんですね。

僕は何の才能もない凡人なのかなと思ったりして淋しかったです。何か普通じゃない、他人に差をつけるものが欲しかった。自己顕示欲が強いのかな（苦笑）

そんな時ネットを始めで、ある投稿サイトへ辿りついたので。そこでいろんな詩を見てると、まあ、うまい人もいるけど、たいしたことないのがほとんどだなあと思っでました。詩集も少しは読んでたんですね。好きだったのは吉増剛造かな。あんまり意味わかんない

けどね。

とにかく、その場でひとつ書いてみました。

その作品を見ていて、あ、僕ならこう表現するよとか、こうすればもつと文学っぽく見えるのにとか思いましたから、それを生かして書きました。けっこういい出来だったので「投稿する」ボタンを押して、そしたら次の日にメールが来たんです。dark blue からでした。僕と同じ17歳でした。……

ここは、日記と、写真をアップできるブログ、掲示板がセットになっているものの無料レンタルだ。管理ページでフォームに文章を入れるだけだし、文字色・フォント・背景などの設定も簡単にできるので、誰でも簡単にweb上で日記を公開できる。

ルネが以前、レイカのサイトを覗いた時、リンクページにあったタイトルを覚えていたので、Poem Villageの詩人リンク集で検索したら見つかったのだった。日記の作者がレイカの取り巻きのひとりなのだろうと推測したのは、読んでみると当たっていた。

・ ・ ・

433：私も匿名さん

高瀬川麗佳殺人事件 これまでのまとめ

ネット詩人レイカ、こと高瀬川 麗佳（20歳）は
京都市生まれ。華道高瀬川流宗家の娘で将来の後継者だったよう。
聖神女学院大学文学部2年。世田谷区のマンションで一人暮らしだ
った。

ネット詩人。ただし、数人の取り巻きを除いてネットでは嫌われ
者（笑）

HN darkblue、こと松阪 昭典（17歳）はレイカ取
り巻き中でもリーダー格。

神奈川県相模原市生まれ。西神学園高校中退。
家は相次ぐスーパールの進出で潰れかかった洋品店。

darkblue、こと松阪 昭典は、自分たちが詩のシーンに
君臨するため、

ライバルや自分たちに批判的な人たちに対して

嫌がらせ・ウイルス添付のメール送付、

サイトの掲示板荒らし、誹謗中傷などの攻撃を行った。

レイカがその計画に同意していたかどうかは定かではない。

・
・
・

552：私も匿名さん

しかし、この事件の報道は、いやに控えめだと思わないか？
何かがマスコミを裏で押さえてる二オイがするな。

553：蛮記者

レイカが公園に倒れていて

darkblueがマンションで死んでたつてことにも
明確な理由付けがされないまま、捜査は終結みたいです。
どうも、不可解。

553：私も匿名さん
はげしく同意！！

・
・
・

事件は警察発表によると、レイカに一方的な恋心を抱いた少年A
が、ストーカー行為の果てに無理心中を図ったというものだった。

二人がインターネットを通じて知り合ったことはマスコミも報道
していたが、ネット詩のことには、あまり触れていない。レイカに
詩作の趣味があつたことを一部の週刊誌が短く書いてあつたくらい
だろう。レイカのサイトは事件の翌日に手際よく閉鎖されていた。

だが、この話題は当然、ちゃんねる・ゼロの掲示板を賑わしてい
る。少年Aがネット詩のサイトを徘徊していたdarkblueで
あることや、未成年なので報道されなかった本名が晒され、個人情
報も、かなり書き込まれた。もつとも、この中には真偽のほどがわ
からないようなものも含まれている。

どこから入手したのか彼の写真が複数、画像のアップローダーに
置かれ、そのURLがあちこちに書き込まれていた。

レイカのサイトは事件の翌日に手際よく閉鎖されたが、サーチエ
ンジンのキャッシュには残っていたので、それがコピーされ、無料
スペースにアップされている。そのURLも、とことどこに貼ら
れていた。

数ヶ月前、クラッキングの実行犯であることが露呈して閉鎖に追い込まれたdarkblueのサイトも、Internet Archiveには保存されていた。これは1996年から行われているWeb上のページを保存して後世に残す試みで、アメリカの資産家が運営しているらしいが、自由に閲覧できる。

彼のページも無料スペースに置かれたり、圧縮ファイルでダウンロードできるようになったり、Winnnyに流されたりしているようだ。

その時、メールの受信を知らせるサインが出ている。

ルネのサイトにあるBBSからのレポートメールだった。書き込みがあると、その都度メールが送られてくるからチェックの必要がなく、なかなか便利だ。

そのレポートは、このような内容だった。

□ □ □ □ □

送信者：BBS report

宛先：Rene

件名：掲示板に書き込みがありました。

name：悪夢

subject：警告

message：ネット詩は呪われている。

25 > m a r q u e e <

ルネは“警告”というタイトルの不可解な書き込みを削除せず、そのままにしておいた。削除することは、怖れとまではいえなくても何かを意識していることになる気がして、抵抗を感じたからということもあった。

その書き込みには、何人かのビジターがレスをつけていた。

n a m e : 悪夢

s u b j e c t : 警告

ネット詩は呪われている。

n a m e : t a k a y o

s u b j e c t : R e : 警告

ルネさん、こんばんは。
なにこれ、荒らし…？
削除しないの？

n a m e :

s u b j e c t : R e : 警告

IPわかるのかな？

と言っても、仮に相手をつきとめたところで、
たいした罪にもならないでしょうしね。

n a m e : m a y u

s u b j e c t : R e : 警告

これ、なんか怖いよ

荒らし、やめてくださいです。

インターネットはデジタルに作られた、まったく無機的な存在なのだが、ルネは、その中で時々、ある種の“におい”やオーラともいえるようなものを感じることがある。

それは、サイトの空間性のどこかに混入しているようなものだったり、あるいはメールや投稿や書き込みの、テキストや行間から滲み出てくる気体のように見えたりする。それらは何らかの情報といえるのだろうが、たぶん四次元的に包み込まれた世界の裏側に存在しているので、知覚できる領域から見ても、クリアーに捉えたり言葉で表現することはできないものだろう。

この書き込みに恐怖感を感じなかった。でも、単なるいたずらとは少し違うような気がしなくてもなく、心のどこかに何かしら引っかかるものではあった。

ルネは、ただ日頃の鬱憤や欲求不満を解消するために荒らしをする人間たちに、ある共通の波長があるような気がしている。それは、ちゃんねる・ゼロでの卑猥な言葉や偏見・差別が露骨な発言から受けるのと同じもので、腐った魚類が放つ臭気や、不健康な内蔵の中

で生まれ食道を逆流してくる気体に例えたらいいだろうか。

でも、この書き込みからは、それとは違って明確な対象に向けられている悪意のようなものが感じられないでもなかった。しかし、ルネには自分がその悪意を投げかけられている実感がなくて、そのあたりが、どうも不可解だ。

だからかえって彼がどんな人間かということに興味がわかないでもない。

いずれにしてもディスプレイの向こう、ラインの彼方には、質量のある肉体をもった誰かがいて書きこんだはずなのだ。

いちばん下に、こんなレスが書かれていた。

n a m e : H e l t e r

s u b j e c t : R e : 警告

ルネさん、おひさです。

最近、新しい詩は書いてないんですか？

まあ、書けばいいってもものでもないけどw

ところで、これと同じカキコ、

うちのBBSにも、あるんですよ。しかも3回!!

いったい何考えてるんでしょうね???

IPは一応調べてみていた。アメリカのサーバーだ。たぶん“串”を通したのだろう。

プロクシには外国にある管理のアウトなサーバーがよく使われる。それだと、かなり重大な犯罪でなければ当局がアクセスログを調べにくいからだ。

n a m e : R e n e

s u b j e c t : R e : 警告

> 悪夢さん

はじめまして。

別に、このままでも困ることはないので
削除しないでお願いします。

一種の晒し上げかもw

> H e l t e r さん

そちらではIP、わかるのかな？

一応チェックしておきたいですね。

後でH e l t e r さんのサイト、
覗いてみますね。

H e l t e r のサイトへ行ってみる。

<H e l t e rのH Y P E R P U N K W O R L Dへようこそ>

背景色が黒から明るい鮮やかな色まで輝くように変化し、画面が揺れ動く。J a v a S c r i p tを使っているらしい。E N T E Rの文字をクリックするとフレームの画面に変わる。左隅にあるメニューからB B Sを開いた。

ルネのB B Sに書き込まれたのと同じ文章が、同じ名前とタイトルで、5日前から1日おきに計3回書き込まれていた。

そのB B Sは投稿者のI Pが表示されるようになっていた。例の書き込みは3つとも同じI Pになっている。ルネはそのI Pをコピーして、ドメイン・I Pの検索サービスで調べてみた。

それはある食品メーカーのサーバーだった。

12時45分と16時前後という書き込みの時間から単純に考えると、この会社の社員が勤務中の暇な時間に、ちよつとネットでいたずらをしたとも考えられるが、ネット詩を持ち出していたりするので、ただの通りすがりとも思えない面がある。

それとも、そのサーバーは誰かに“串”として使われたのだろうか。しかし、日本にある名前をよく知られた企業のものだから、侵入などされないよう一応の管理がなされているはずだ。

それに、何か法に触れるような行為があつた場合、簡単に強制捜査でアクセスログを調べられ、自分の居場所を突き止められてしまう。サーバー管理者からプロクシとして使用する許可が出ているとも思えないから、これ自体が違法アクセスにあたるわけでもある。

もつとも、多段串といって複数のプロクシを経由させることもあるから、この“悪夢”という人物に何かの考えがあつて、最後の串をそのサーバーにしているのかもしれない。

ルネは、もう一度H e l t e rのサイトに戻った。

「profile」

HN: Helter

born in Mar. 12

Sex: maybe ♂

Occupation: musician, poet

1980年前後から、都内や関東周辺のライブハウスで活動。
音楽その他に関してメンバーと意見が対立。バンドの解散と結
成を繰り返す。

インディーズレベルより5枚のアルバムを発表。

92年頃から心身に変調をきたし、数年間療養。

1998年、衝動買いしたMacで、CGや詩作を始める。

2000年にインターネットを初め、投稿サイトに参加。

2001年1月に当サイト<HYPER PUNK WORLD

D>を立ち上げる。

作品のページは、場合によっては原型を留めぬほどに加工した画
像と配色がサイケデリックな雰囲気醸し出し、見る者をあたかも
幻覚剤を服用しているような気分に通じていく。

スタイルシートを使って、テキストの色や大きさ、フォントをあ
ちこちで変えていて、背景との関係で読みにくいところもあった。

しかし、これらについては<ABOUT>というサイトを説明し
たページで、それは意図した表現なのだし、文章の意味などよりこ
のサイトの雰囲気に浸って欲しいと断つてある。

動的な部分は、マウスを画像が追いかけるJavaScript
以外はmarqueeのタグでやっているようだ。でも、よくある
ような単純に右から左へ流れ続けるものだけではなくて、端で止ま

ったり上下運動を繰り返したりするのも使っていた。これは設定をすれば、そのように動かすことができるのだ。

ネットに不慣れた人間は、このくらいでもけっこう驚くかもしれないが、あまりスキルが高いようではなかった。

サイトを見ているうち、以前Poem VillageでHelterの投稿にdarkblueたちが絡んで、ちよつとしたいざこざがあったのをルネは思い出した。自分たちとは違う傾向の新しい動きに危機感をもったのかもしれないが、Helterの厳しい反論に打ちのめされてしまったので、それ以後、darkblueは、あまりネットに姿を見せなくなり、レイカたちのグループも衰退していったようだ。

メール受信のサインが出ている。

それはBBSからのレポートメールだった。また“悪夢”の書き込みだ。でも、今度のSubjectは<警告2>で、本文は

<君は危険な場所に足を踏み入れようとしている>

だった。

IPはオーストラリアにある名前を聞いた事のない大学のものだ。たぶんプロキシとして通しているだけだろう。

次にどうしようかと考えたルネは、ばえ村へ行って過去ログを見ることにした。Helterの投稿と寄せられたレスも残っているはずだから、もしかすると何か発見があるかもしれない。

Helterのサイトで作品タイトル一覧に目を通す。たしか、問題の作品は『fascism / fascination』だったはずだと思う。

26>/marquee<

P o e m V i l l a g eには作者別検索機能があるのでフォームにH e l t e rと打ち込んでボタンを押すと彼の作品一覧が表示された。ルネはそこで『f a s c i s m / f a s c i n a t i o n』を見つけて、そのページを開く。

H e l t e rの作品はサイトと同様に、ところどころで文字の色や大きさが変えられていた。背景が黒なのでカラフルなテキストが輝いているように見える。右から左に流れたり、上下したりする動的な部分もあった。

投稿の書き込みの時、限定されてはいるがタグが使えるので、H T M Lやスタイルシートの知識がある詩人はビジュアル効果を考えてレイアウトできる。marqueeタグが使えるので動きを与えることもできた。

H e l t e rの作品はテキスト自体がもっているイメージも強烈だが、それと視覚的なものとの相乗効果が、見る者を眩惑に誘う独特の雰囲気醸し出していた。

f a s c i s m / f a s c i n a t i o n
H e l t e r

夜空に充満する極彩色のモアレ
この都市の無意味なざわめきが

三半規管を麻痺させる

ゾンビたちが耳元で囁く言葉

「人間の本质は生臭いリビドー
それ以外のすべては妄想だ」

I'm waiting for fascism

I'm waiting for fascism

I wanna let my world

Be filled with fascination

ヒエラルキーと個人情報とに

すべての存在を固着させて

末期癌に蝕まれた国家は

ゲシュタルト崩壊の臨界値

Here comes the riot

.....

作者からのコメントは書かれていなかった。感想はかなりの数が
つけられていて長いものもいくつかあり、ずっと下まで続いている。
、

なんか、ロックっぽくてかつこいいと思いました。こういうの好きです。
：トリル

いいですね。新しい感覚だと思います。ブラウザで見るのを意識したネット時代の詩ですね。これからは、こういう方向へ進むのかも
：B B

私はバカなので英語の部分がわかりませんでした。日本語で書いてください
：トロロ

この作品は反社会的なものを礼賛しているようで嫌いです。というか、恐怖を感じます。私には拒絶反応があります。
：シズカ

僕は目が疲れていて配色とか文字が大きかったり小さかったり動いたりとか見ていてひじょうに苦痛を感じます。それに、こんなのは表現としての新しさを感じません。PCのテクニクを使った表現なんて、フラッシュにしてもそうですが、結局決まったパターンになるだけで、はつきり言っしょばいものにしかありません。もっと先達の方たちの作品を読んで、テキストの表現で勝負してみたいかがでしょう？
：dark blue

みなさん、感想ありがとうございます。

>トロロさん

ボクは日常的に洋楽を聴いてます。それに、この程度の英語なら義

務教育で学ぶ範囲の普通の日本人なら知ってる英語じゃないですか？ああ、学校へ行ってないヒキコモリの方も最近多いようですけどねw。でも、一日中ネットをやったりする人もいるから、けっこう知識豊富かも（爆）

ま、万人の満足を期待するのは無理なので、ちょっと、しょうがないですけどね。

>シズカさん

趣味の問題なので仕方ないですねw

>darkblueさん

目が疲れていらっしゃるのですか。ご愁傷さまです（笑）

そうですね。あなたのHPを拝見しましたが、通信教育のウェブマガイナー講座を少しやって挫折したと書かれていましたね。そんな状態でフラッシュを含めたHP製作のテクニックについて、どの程度語れるのでしょうか？残念ながら、ボクはあなたと反対の考えでwebの表現ってデジタルなものなのに、その人の個性みたいなものがひじょうによく現れてきて不思議だなと思ってるんですよ。

それから、詩の先達って何ですか？えーと、つまり、最近よく世の中の槍玉に挙げられる既得権所有者って事でしょうか。詩の世界でも、そんなの、ありますかねえ？ああ、そういえば、わけのわからない言葉を羅列してありがたがられてる先生方もいるようですけどね。darkblueさんは、そういう方々を見習って、将来は文化勲章でも貰おうとお考えなのでしょうか…？頑張ってくださいw

: Helter

Helterさんの詩、私は好きだけどなあ。

自分の趣味と違うからって批判的なことを書くのはどうかと思います。
: Junko.K

人の文句たれてるけど、誰かさんは自分の作品が、そんなに素晴らしいものだと思ってるの？他人を感動させる力があるの（笑）あ、この作品、抽象的、シニカル、サイケ…っていうのかな？とにかく、なんかいい感じです。 : Ken 2

今まで黙って見ていましたが、我慢できなくなりましたので書き込みます。私は今のネットの雑然とした状況の中で、どこかにちよつとだけいいところがあるのを過大に評価され、ちやほやされて、本物の感性をもった人がその陰に隠れてしまつ、そのようになつてゐるのを憂えています。そういうのは、たぶん誰のためにも良いことではないでしょう。まじめに詩を志すのなら、もっと向上心をもつてあたるべきです。私たちよりも遙かに長くこの道を歩んでおられる方には敬意をもつて接し、何かを吸収する必要があるのではないのでしょうか。そうでなければ、その人や作品が正当な評価を受けることは、けつしてないでしょう : レイカ

>レイカさん

ボクの表現における基本はパンクの方法論です。パンクロックってご存知でしょうか？70年代に出て来て、まあ、今でも細々とは（？）続いてますねw。演奏も曲も詞も、技術的な評価でいったらすごく未熟なんだけど、何ていうか、つまり、初期衝動のパワーかな？ほとんど、それだけしかないんだけど、インパクトではスーパースターや巨匠といわれるようなアーティストに勝るとも劣らないわけです。ボクの書く詩は、たしかに技術面ではいろいろ問題あるのかもしれませんが、インパクトはあるんじゃないかと思っています。だから、今、自分のもっているものを放棄し、あなたの基準に合ったものを書いて評価されたいとも思いません。 : Helter

・ ・ ・

ロックでは認められなかったから詩の方へ来て、ひとやま当てよう
っていうんですか（藁）NOT

>NOTさん
いいじゃない。パンクロッカーだった町田康は小説書いて芥川賞取
ったよ。

それと、あなたの言ってることは誹謗中傷にあたるよ。 トリル

こんなのなんにも面白くありませんよ。ロックとも純粹詩とも、ど
ちらともつかない。レイカさんの言われるように、もっと勉強して
しっかりテクニクを身に付け、多くの人に認められる詩を書いた
ほうがいいです。：かわうそ

その下に書かれている感想の名前がルネの目を引きつけた。

>かわうそさん
別にマーケットリサーチして詩を書くこともないでしょう（笑）論
理がめちゃくちゃになってきてますよ。だいぶ疲れましたか？いろ
んなHNで書きこんでますからね。ねえ、darkblueさん：

蝙蝠

そういえば、希羅々のメールに、こんなことが書かれていたのだ。

ルネさんのところには

変なメールが来ていませんか？

蝙蝠さんのことを

いろいろ尋ねてるんですが、

私の他にも数人の詩人さんたちに

同じようなメールが来ているようです。

でも、蝙蝠の書き込みは、それだけだった。

その下に、ぽえ村はコミュニティサイトなので論争はふさわしくないという意見と、それに同意する書き込みが常連から寄せられていて、そこで感想は終わっていた。

27 > c e n t e r <

からくり

蝙蝠

無意味部は
むごみへ

街の底で おもう

かれが 今 暮らしているのは
街の いちばん深いところだ
ある時は紺碧の ある時は鉛色で
人々のそれより彼方にある空を
かれは見上げる

無意味部^{むいみへ}の仕事は

この世界に 無意味を与えること
だが それは ひそやかに
行われなければならない

それは かつての語り部のように
幾世代にも渡り受け継がれてきた
誇らしい役目ではある

しかし この世界で かれには
いささかの栄誉も特権もなく
生活の糧は すべて日々の
卑しめられた行いに頼るのみ

そういうわけで彼は今日も
ひたすら無意味な言葉を産卵する

ああ

世界が無化しつくされるのは
いつのことか

今日も回る此の世のからくり
から から からくり

作者のコメント

「部^へ」というのは古代日本で職種を表した接尾詞（？）です。
「語り部」なんてのは今でも使われる言葉ですね。

ルネは蝙蝠というHNに興味をもった。作者別検索で探すと5篇の作品が、それぞれ、だいたい1ヶ月から1ヶ月半ほどの間隔で投稿されている。常連といわれる人たちなら、もつと速いペースなのだが、HNが印象に残っているのは、感想をしばしば書き込んでいるからかもしれない。

蝙蝠の作品からルネが受けた印象は、どこことなく思索的で落ち付いた雰囲気だった。

若い頃は詩を書いていたが、その後ずっと中断していて、ネットで詩のサイトに出会って詩作を再開した、ある程度大人といえる人たちも多い。ルネは、蝙蝠も、そんな人たちの中の一人かもしれないと思った。

トップページに戻り、投稿ページの『メイン』をクリックして覗くと、前に見た時から後、10篇程の作品が投稿されていた。

HNに見覚えのある常連の作品がほとんどだ。タイトルから推察して、ほとんどが恋愛や日常をうたっているようだったが、その中

で『表現する葦』というのは、やや異質な感じがした。それに何となくデジャヴュのようなものも呼び覚まされる。

表現する葦

蝙蝠

夢の圧力に
歌ふ造花たち
青い船着場と
蜜の地 図
そして破滅する

まだ 固有な
少女の嘘 は森に
繁 茂する
その理由
狼男よ

白き 子供らの
溶 鉱 炉に 星と
偽 詩人が
重なり佇む 暁

200X年01月23日XX時XX分XX秒
作者のHP:*****

- この作品の著作権は 蝙蝠 さんに帰属します。
- 無断で転載することは禁止します。

作者からのコメント

隠された謎を解くには再投稿してみるのも、ひとつの方法。
あなたが何かを変えると…。

感想は、まだ、ひとつも書かれていなかった。
ルネには見覚えのある詩だ。HP小僧の編集システムに侵入して、
最後にノミネートされていたページにあった文章だ。

たしか、ページのタイトルは「人間は表現する葦である」だった。

URLにアクセスしてみた。

<このURLは、現在、当サイト内に存在しません。

3ヶ月間更新がなかったため、削除された可能性があります>

そのページのソースは保存してあったので、テキストエディター
で開いてみた。

```
>html<
>head<
>title<人間は表現する葦である>/title<
>/head<
```

> b o d y <

t t

夢 の 圧 力 に

歌 ふ 造 花 た ち

青 い 船 着 場 と

蜜 の 地 図

そ し て 破 壊 す る

ま だ 固 有 な

少 女 の 嘘 は 森 に

繁 茂 す る

そ の 理 由

狼 男 よ

白 き 子 供 ら の

溶 鉱 炉 に 星 と

偽 詩 人 が

重 な り 佇 む 暁

> / c e n t e r <

> / b o d y <

> / h t m l <

文章の行末や空行の部分に、改行させる
のタグがないので、ブラウザで見た場合、文章は繋がって表示されてしまう。

それから、よく見ると1連5行目の「破壊」が今回の投稿では「

破滅」に変わっていた。これは文章が推敲された結果なのか、それとも、この部分に何かの意味をもたせているのだろうか。

何かのメッセージがあるとしたら、それは、両者を見ていて、比較することが可能な誰かに向けられたものはずだ。つまり、Poem Villageをしばしば訪れ、かつ、「人間は表現する葦である」のページか、あるいは、それ以外の場所で、あの文章を見ている者がいることになる。

もしかすると、そのメッセージが自分に向けられている可能性も考えられるが、だとしても、どうしても、そんなことが起きるのか、ルネには、まったく思い当たることがなかった。

テキストエディターを閉じると、それまで後に隠れていたPoem Villageの『表現する葦』が再び画面の前面に出てきた。それをぼんやりと眺める。

しかしルネは、個々の言葉の意味するところや暗喩などを考えたり分析するわけではなかった。ディスプレイに表示されたものと溶け合って一体化していくといったらいいのだろうか。

しばらく、その状態を続け、それからページの最下部にあるくりストへ戻る>をクリックする。スクロールして行くと、こちらのページのいちばん下には<投稿する>のボタンがあり、それを押して投稿フォームのページに入った。

投稿する時は、文字色、背景を指定できる。また、左右に詰めることやセンタリング、縦書きについては、好みの方式に選択が可能だった。限られてはいるが、タグを使うこともできる。

ブラウザのバックボタンを2度押して『表現する葦』のページに戻る。作者からのコメント欄をもう一度確認した。

<隠された謎を解くには再投稿してみるのも、ひとつの方法。
あなたが何かを変えると…。>

2 8 > / c e n t e r <

ルネは『表現する葦』の本文をドラッグした。“Ctrl”と“C”のキーを同時に押し、反転している部分をコピーする。

投稿ページに移動して、フォームにそれを貼りつけてみた。でも、これだけでは元と同じで、何の変化もない。それで、さっきふと気がついたことをやってみようと思った。

ページのソースにあった>/center<は“>”と“<”のタグで挟まれているからブラウザでは表示されなくて、また、このタグひとつだけではセンタリングが動作することもない。>center<と>/center<に挟まれた時に、その部分が中央に寄せられるからだ。

文章をセンタリングしてみたら、何かがわからないだろうか。

この投稿ページには左右に寄せたりセンタリングすることなどができるメニューがあった。「隠された謎を解くには再投稿してみるのも、ひとつの方法。あなたが何かを変えると……。」というコメント欄に書かれていたことも、これを示唆しているのかもしれない。

センタリングを選択して― Preview ―のボタンを押した。これだと、どのように表示されるかを確認できるが、実際に投稿されるわけではない。

夢の圧力に

歌 ふ造花たち

青い船着場と

蜜の地図

そして破滅する

まだ固有な

少女の嘘は森に

繁茂する

その理由

狼男よ

白き子供らの

溶鉱炉に星と

偽詩人が

重なり佇む暁

ルネは、それをしばらく眺めた。もうこれで、だいたいはわかったのだが、もう一度、フォームのページに戻って、文章全体をタグで挟んだ。

> t t < と > / t t < 。

文字を等幅にするタグだ。通常は文字によって微妙に幅が違って
いるのだが、これを使うと罫目に書いたように文字ごとの幅が揃え
られる。

“Preview”のボタンを押した。文字は縦の列でも、それ
ぞれ上から下に一直線に並んでいた。

やはり、自分の推測したとおりだったとルネは思った。あのサイ

トに書かれていたtは誰かのイニシャルやHNではなく、等幅のHTMLタグを指し示していたのだ。

ルネはメモ帳を開いて、中央の列の文字を上から下の順で並べてみる。次のようになった。

庄・花・着・地・破 固・嘘・茂・理・男 子・炉・詩・佇

それぞれの読みを書いてみる。

(あつ) (か) (つき) (ち) (は) (こ) (うそ) (も) (り) (おとこ) (こ) (ろ) (し) (たたず)

「歌 ぶ」や「白き」という表現があるので、この文章は旧仮名遣いで書かれる方がふさわしいのかもしれない。そうすると、“おとこ”は”をとこ”になるわけだ。そして、読みの最初の文字を並べると次のようになった。

あかつちは こうもりを ころした

“赤土は 蝙蝠を 殺した”というようにも解釈できる。

赤土と蝙蝠のどちらも、Poem Villageで見かけたことのあるHNだった。二人の間に何かトラブルがあったことを述べているのか…。でも、この作品の作者名は殺された方の蝙蝠になっている。

けれども、他の誰かが蝙蝠の名前で投稿することもできるから、実際に赤土が蝙蝠を殺害していて、それを知る者か、あるいは赤土自身がこれを書いた可能性だってないことはない。

しかし、HP小僧の編集システムの中に、あのページのデータがUPされていたのは、どういうことだろう。その頃すでにメルマガ

は廃刊になり、主宰していたタツヒコも、この世にはいなかったというのに。

例えば社会的な生命を奪うというような意味で“殺す”と表現している場合もあるだろう。でも、そうだとすれば、何かを告発する目的があるのだろうか。また、誰に対して、それを訴えようとしているのか。

その時、サウンドが鳴り、小さなメッセージボックスが現れた。メールの着信を告げるサインだった。

29 > u1 <

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

送信者 takayo

宛先 Rene

件名 takayoとえす。

ルネちゃん、

メッセで話そうと思ったんだけど、

いつまで待ってても、ずーっとオフラインだからメールするねっ。

3・4時間前にラジオのニュースで聞いたんだけどさ。茨城だったかな？

まあチバラギのどこか、ダサイタマじゃないっす。

まあ、そんなどこかの車の中で練炭自殺があつてね。
それだけなら、よくある話なんだけど、
その自殺した人たちの中にちよつと心当たりがあるのだよ。

男性二人に女性二人なんだけど、その男性の一人、
「広田啓一（36）」ってのがね。

実は私、Helterさんがサイトで売ってたCDを買ったことがあるの。

意外でしょ？www

いや、まあそもそもHelterさんのところを見るのがサプライズかな。（^ー^；

それでCDのことだけど、
彼の自宅から本名で送られてきたし、
お金を振り込む口座の名義もなんだけど
広田啓一だったのさ。

たしか、小学校の頃、友達の間で呼ばれるのが広田からヘロタになつて、

バンドをやりだしたあたりから、

ビートルズの曲にヘルタースケルターっていうのがあるんで
Helterと名乗るようになったって、そんなこと、
彼のブログに書いてあつたと思つたよ。

一緒に死んだ女の人は、あの人なのかな？
前にかなりトラブってるような相手があつただけで、
そのこと、ルネちゃんには知らないかも。

あ、でも一緒に死んだ女性は二人だね。o(＜ー＞θ(xーx)

と、今回はこれで。
バイナラ（^^）／

文章の感じや顔文字を使うところなど、十代の少女のようだが、takayoにはそのうち、そのくらいの年齢になる子供があるはずだった。ふつうの世界で言えば、いい年をしたおばさんがモー娘やゴスロリのようなファッションで街をうろついているようなものだろうが、ネットでは別に異常なことではなく違和感も感じない。

コギヤルのように振舞ったり、まるでラッパーのようにかっこつけていても、オフで会ってみると年齢を重ねるうちに図々しさをが身についた中年女だったり、頭が薄くなった冴えないおじさんの場合もあるようだ。もちろん、そうとばかりは限らなくて、実年齢より肉体も精神も若い人たちもいるのだろうが。

いずれにしてもネット上では、そこに表れている姿こそが彼女あるいは彼に他ならない。ネットゲームのバーチャルな都市で、バーチャルな名前や経歴や家族をもち生活するのはその極端な例だろうが、ネットでのことだけなら別にリアルな自分と違っていても、それで他人に迷惑をかけるわけでもない。

まあそれをうまく演じられればの話だが性別だって別のものになれる。もつとも、いわゆる“厨房”が大人ぶってみても、それだけの経験や知識をもっていなければボロが出てバカにされるのがオチだ。

ネット上ではオフの世界での外見や社会的地位や財産や学歴などといったもので、その人の価値が計られることは少ないようだ。いや、結局それらはみな虚構であって、ディスプレイの中に現れる姿こそがその人の魂あるいは真我と言えるものなのかもしれない。ルネは、そんなふうに考えることもあった。

ルネは、お気に入りの中に入れてあるPoem Village常連のサイトにアクセスした。『ネオ・プラトニク』という名前のサイトだ。管理人の女性は大学で美術史を専攻していたとプロフィールに書かれていただけあって、ゴシック建築を見るようなモントーンの重厚で趣味のよいデザインが画面に現れる。一度リンクのページを覗いてざっと眺めてからトップページに戻り、アドレスバーからURLをコピーした。そして再度またお気に入りを表示する。いちばん上に作ってある“Search”のフォルダを開いて、その中にある“Internet Archive”をクリックした。このサイトはウェストコーストの資産家が運営しているというところだが、Web上にあるすべてのページを保存しておこうというプロジェクトが行われていて、誰でも利用できる。

フォームにURLを貼りつけてボタンを押すと次のページに2000年から年数回ずつの月日が掲載された一覧表があった。その時点に存在したさっきのサイトが保存されているのだ。そのトップページに「Since 2000 May」とあったのをルネは見ていた。

ルネのサイトも毎年5〜6回のペースで保存されているからファイルを取り込むロボットは、そのくらいのペースで周回しているらしい。

表の中から2年前の8月21日をクリックした。

2年前のトップページは、やはりゴシックの雰囲気だったが現在

のものより明るい色調で、主としてパステルカラーに近い青が使われていた。それはそれでセンスは悪くないが、どちらかといえば今の方が洗練された感じた。

リンクのページを開いた。さつき見て来たページよりサイト数は少なく、多くはその中であつたのだが、ここだけ見られるものもある。その後、閉鎖したり交流が途絶えたりしたのだろう。

でも、以前。『ネオ・プラトニック』を覗いた時の記憶は確かだつたようで、目当てへのリンクはそこに存在していた。

ルネは「Unballoons」というサイトの、表示されていないバナーの部分をクリックした。

<このサイトには薬物やリストカットに関するコンテンツがありません。そういうものを不愉快に感じる方は閲覧しないことをお奨めします>

黒い背景の中心に剃刀の刃の画像があり、その下にサイズ10くらいでENTER。そして上記のテキストがある。閉鎖したサイトの場合、画像はサーバーから消えているので表示されないことが多い。素材サイトに直リンクしているのかもしれないが、たいていの場合、直リンクはお断りなのでルール違反をしている可能性もある。

画像をクリックして入るとフレームのページで左側がメニューになつていた。

++ + A b o u t M e ++ +

H N : トリル

s e x : 大好き、いや、♀。(^ | ^ ;

b i r t h : すいーくれっとう

好きな食べ物：海老チリソース、スパゲッティポロネーズ、マロ
ングラッセ、苺、

シフォンケーキ、じゃがりこ、カップヌー

ドルシーフード、

・
・
・

トップページは一見UG系を思わせる黒を基調としたデザインだ
ったが、中に入るとピンクがやけに目立つ配色だ。フルーツの壁紙
や動物のアイコンはフリーの素材屋で調達したのだろう。かわいい
系のデザインで、あか抜けないわけではないのだが、洗練というに
は引かかるものがあるような気がした。

コンビニの前に座り込んでいる少女たちの方向から流れてくる微
風。コロンと汗とペパーミントの入り混じったなまぬるい空気の感
触を、何かがルネの中でフラッシュバックさせる。

上から順に、次の項目をクリックした。右フレームにそのペー
ジが開く。

+++Drug++

主として私が通っているクリニックで処方される薬について書いてみます。

●リタリン

成分：塩酸メチルフェニデート。

他の抗うつ薬の効きが悪いときやナルコレプシーの治療に用いる。

●レボトミン

成分：マレイン酸レボメプロマジン
精神神経安定剤

●アナフラニール

成分：塩酸クロミプラミン
うつ病やうつ状態の治療に使用。子供の夜尿症の治療にも用いる。

●トフラニール

成分：塩酸イミプラミン
うつ病やうつ状態の治療に使用。子供の夜尿症の治療にも用いる。

●ハルシオン

成分：トリアゾラム
睡眠導入剤

・ ・ ・

次は詩のページを見ることにする。クリックすると、作品の目次が別画面で開いた。

題名を見るとルネは、かなりの数がPoem Villageの投稿版にあつたのを覚えている。まだ読んでいないと思った題名でも、本文のページに行くと内容が記憶に残っているものだったりした。

それ以外のコンテンツがダークなのに比べ、トリルが書くのはアイドルの曲の歌詞のようなジャンクな恋愛詩がほとんどだ。

どこかに例えばHeiterとの関係を暗示するような部分でもないかと、何篇かを開いて流し読みしてみたが、頭の中で想像したよくある恋愛のイメージが綴られているものばかりで、特に注目すべきことはなかった。

日記のアイコンをクリックした。ファイルはちゃんと存在するようだ。Internet Archiveでは掲示板のようなcgiを使ったコンテンツは残っていないことも多かったので、トリルが多くの場合のように無料で借りられるcgiの日記を使っているとしたら、果たして見る事ができるのかどうか、ルネは疑問に思っていた。

書きこみはcgiのシステムで行うがHTMLとして表示される形式だと比較的保存されているのかもルネは考えた。とにかく見られるのだから、そこに何か興味深いものがあるかもしれない。

+++Diary+++

12月4日

ひさびさにサキから電話があった。

駅前のマックで待ち合わせて、渋谷に行こうということになった。久しぶりに繁華街に出たせいもあるだろうが、

とても楽しく、幸せだった。

シヨップピングもした。買ったものの写真をアップ。かわいいっしよ。

サキちゃん是我的ことをいろいろ心配してくれていた。

ありがとう。感謝している。私はみんなの中で幸せだ。

あゆみちゃんだったたまにメールをくれる。

それから、よくしてくれるネットの人たち。

ウザいと思う事が多い父や母にも、いつもは気が合わない妹にも、私にとっては唯一優しい人だが、年寄り臭くてダサイおばあちゃんにも、

ほんとうは、みんなに感謝している。

感謝は大事だ

世界中のひとりひとりにも感謝している。

そして、みんなを幸せにしてあげたいと思う。

でも、今の私の状態では無理だ。

病気を治して、そして私の夢を実現すれば、

みんなの幸せのため、はたらくことができる。

どこかで見たような文章だとルネは思った。そして“感謝”という言葉が駅前で配られていた宗教団体の本の中でも大安売りされていたことに気づく。もう随分前のことで、顔色の悪い中年女が配っていた。「イイ本デスカラ読ンデクダサイネ」と手渡しながら「アリガトウゴザイマス」と作る笑みは卑猥な感じがしなくても、ちよつと無気味だった。

もちろんトリルがその宗教団体に関係しているという根拠は何もなかったが、あるいは家族とか友人とか、周囲にそんな人間がいて影響を受けているのかもしれない。

12月3日

今年ももうすぐ終わる。

いろいろなことがあったようで

何もなかったような1年だった。

来年はとにかく何か結果を出したい。

長年の夢のひとつが叶うかもしれない。

そんな出会いがあったから。

12月4日

今日は一日中雨で、

部屋に引きこもって（それはいつもだけど）

あの人の曲を聞いている。

まだ世の中に認められていないけど、

あの人はとても才能があると思う。

パンピーとは違うものをもっている。

尊敬する。それは恋愛感情とは違うだろう。

いや、違っていないてはならない。
なぜ、こんなことを考えるのだろう。
おかしな私。

12月7日

メールのレスが来た。

ケータイの番号を教えてもらった。

12月10日 明日だ。

たぶん明日で私の運命が変わる。

有名な人にも会えるらしい。

来年はいい年になりそうだ。

それから、しばらくの間、日記は書かれていない。
そして

12月22日

最近は両親の顔を正視することができない。

私は不良のようなことだって多少はしてきたが、

やはり人間には、そして女性には

大切にしなければならぬものがあると思っていたので
道を踏みはずさないようにしてきた。

でも、それをあんな奴に奪われてしまった。

私が作詞を担当して一緒に曲を作る打ち合わせだと言って…。
でも、ラブホにのこのこついていった私だって

悪いといえば悪いのだ。

もう私は誰かと愛し愛されることはできないだろう。
だって、その人にあげるべきものが、もうないのだから。

最近、また切ってしまっている。

これは自分への処罰だ。やらずには、いられない。

私は自分の血の色をじっと見つめる。

何かと想像を呼び起こす部分だった。

この後の日記はない。トリルのサイトがいつ閉鎖されたのか、詳しいことをルネは知らなかったが、Internet Archiveには翌年2月時点でのサイトが保存されているので、この頃まではサーバー上にあったのだろう。

31>/lik<

【またまた】36歳ニートが女性二人と車内で練炭ジサーツ【大ブーム】

1：シッポライター

XX日8時30分頃、茨城県龍ヶ崎市の農道に停められた車の中で数人の男女が動

かなくなっているのを農作業に出かけた近くの農業男性（65）が発見した。

ドアにはガムテープで目張りがされており異常な状況だったため警察に通報。

駆けつけた龍ヶ崎署員がガラスを割ってドアを開け男性1人、女性2人を外に

運び出したが3人とも既に意識はなく、到着した救急隊員によって死亡が確認された。

調べによると男性は市川市在住の無職広田啓一さん（36）で、

女性は埼玉県三

郷市の会社員沢野厚子さん（24）。もうひとりの女性は東京都内の21歳フリー

ターとみられている。3人はインターネットを通じて交流があり、21歳フリータ

ーが昨日、友人に当たて自殺するとのメールを送っていたため、家族が搜索願を出していた。

ソース <http://www.....>

2：ニュースキャスターの名無しさん

2ゲット!!

3：ニュースキャスターの名無しさん

もう練炭の話題は飽きた。削除キボンヌ。

4：ニュースキャスターの名無しさん

女性二人を道連れとは…。また貴重なマン（ry

5：ニュースキャスターの名無しさん

36歳無職。ゴクツブシでつね（ワラ。練炭グツジョブ、マンセ
I。

6：ニュースキャスターの名無しさん

どうせ年金払ってないだろうしナw

7：憂国烈士

こんなことをやるのは、きまってチヨソ。
通名でなく本名を公表する。

ちゃんねる・ゼロを覗いて見た。

ニース板にはH e l t e rと思われる人物の練炭自殺のスレが立っている。

相変わらずニートやフリーター、そして土木作業員、鉄筋工といった底辺の労働者や低学歴者を揶揄している書きこみが多い。眉をひそめたり差別などと目くじらを立てる人が出てきそうだが、ルネはそういうものにそれほど抵抗を感じなかった。

初めてここを訪れた時には、ちよつと違和感があったかもしれない。異臭のなかにしばらくいると、慣れてしまつて匂いを感じなくなるようなものかもしれない。

でも、一般的には非常識で輦轡を買うようなことも、ひたすら過激に語られていることによって、むしろ差別を無化しているのではないかと考えられないでもなかった。

342に“銭形”という名前で書きこみがあった。ただURLを貼つてあるだけだ。でもルネは、それに見覚えのある気がしたのでクリックしてみると通った通りH e l t e rのサイトだった。

そういえば“銭形”というHNも以前、どこかのスレで見かけたように思うがコテハンの常連なのだろうか。

ネットでのH e l t e rの知り合いの誰かが貼ったのだろうか。
ちゃんねる・ゼロでは滅多に得られない決定的な情報を提供した者が“神”と呼ばれて崇められたりするのだが、それを狙ったにしてはURLだけで自己を顕示するような文章は添えられていなかった。でも、その投稿者は自分の書きこみによってスレッドが新たに展開するのを見ていれば、それだけで満足なのかもしれない。
とにかく、これで自殺した広田啓一がH e l t e rである可能性がかなり高くなったような気がした。
ルネは、さらに下へ読み進めていく。

352：ニュースキャスターの名無しさん
<<342のURLは広田容疑者のサイトでつか？
管理人はH e l t e rでHNみたいだけど。

・
・
・

356：ニュースキャスターの名無しさん
<<342のサイトには、以前、ライブハウスに出てたと書いてあるけど、

バンド名など知ってる方は晒し上げきぼん。

357：ニュースキャスターの名無しさん
ヤフオクに広田のバンドのCDが出品されてるそうですが、どこにあるか知ってたら教えて。エロい人。

・ ・ ・

368：ニョースキヤスターの名無しさん

洩れはPoem Villageという投稿サイトに出入りして
たことがあるが、

その頃、Helterも常連だった。

それで、今度のことに関係あるかどうか、

Helterのサイトの掲示板に

変な書きこみがされたことがあったのを今でも覚えている。

奴はよく論争とかやってて敵は多かったんだが、

そういう手合いのものとはちょっと違うような印象を受けた。

もちろん単なる荒らしとも違う。

何だか異様だったので印象に残ってるんだがな。

369：ニョースキヤスターの名無しさん

<<368

トリルとのことだろ？

・ ・ ・

376：ニョースキヤスターの名無しさん

<<369

<トリルとのことだろ？

なんだか気になりまつ。

トリルって一緒に真だ女でつか？

心臓のバルブの運動に異常が生じたような気分になった。もちろんそれが実際に起きているわけではなく、心理的な要因で生じた感覚に過ぎない。でもルネはつい今しがた、トリルの以前のサイトを見てきたばかりだった。

下へ読み進めても369への直接的な答はなかった。

Heiterのいたバンド名やや定期的に出演していたライブハウスについて、当時を知る者が懐かしむ気持ちを込めたセンチメンタルな書きこみをしていた。

誰かがアップローダーにインディーズ時代のジャケットを送ったようだ。メンバーが全員写っていた。スリーピースバンドだ。細身で髪を立て、レスポールを持っているのが彼のようだった。

. . .

448: ニュースキャスターの名無しさん

心中する前の男女は文字通り必死でセクスして
凄く燃えるらしいです。ウヒヒ。

449: ニュースキャスターの名無しさん

<<448

それじゃ Helter とトリルも…。イヒビ。

その後には Helter やトリルに関する情報と言えるものはないようだった。もつとも、前に書かれていたのだって、彼らと関わりのあった誰かが事実を述べているのではないかもしれない。

多くの注目を集め自己顕示欲を満足させるためにでまかせを書きこむ者もいるし、その場を混乱させて喜ぶ奴もいる。何らかの意図をもって釣りや煽りをする場合もあるのだ。

さらに読み進める。もう書きこみの末尾に近いところに、こんなものがあつた。

481: ニュースキャスターの名無しさん

問題の BBS のログをうpしたよ。

その後に URL が貼つてあつた。よく知られたフリー HP スペースを使っているようだ。

ルネはログを見る前に何気なくスレッドを更新してみた。書きこみがひとつ追加される。ほんの少し前のものだ。書きこんだ者は、今もどこかの PC の前にいるはずで、ルネと時間を共有していると言える。

502: ニュースキャスターの名無しさん

Helter と一緒に死んだ人はトリルではありません。

32>/u1<

He1terと一緒に練炭自殺した女性がトリルでないとすればトリルは生きていることになる。それでは死んだのはどういう女性なのだろうか。でも、その書きこみをすぐ信じるわけにもいかなかった。単なるいたずらは、よくあることだ。何かを隠蔽したり攪乱を狙っているのかもしれないが、それならHe1terやトリルに関係のある人間がやったことになる。

ルネには何かひつかかるものが残る書きこみだったが、とにかく481に貼ってあったHe1terのBBSというURLを開いてみることにした。

本来、他人の管理下のものを勝手に公開しているのだから、いつまでUPしてあるかわからないし、犯罪に関与・猥褻・差別・著作権侵害などといった問題があることに気づけば、スペースのレンタル側で削除する場合も考えられる。だからルネは、今すぐ見ておいた方がいいだろうと考えた。

デザインに見覚えのあるBBSが表示される。481の投稿者が保存してあったコピーをアップロードしたのだろう。

...

name/tril title/no title

あなたは、よくもぬけぬけとこんなことをやっていられるわね。

ネット詩人だと？ミュージシャンだと？
笑わせるんじゃないよ。

4月21日20時41分31

name/trill title/no title
私がサイトを閉鎖してネットから姿を消したから
安心していた？

そうは世の中、甘くないのよ。

あなたは自分のしたことの報いを受けなくてはならないわ。
神が裁かないなら私があなたに罰を与えましょう。

ま、メールしてよ。

trillじゃない方のメルアドは、まだ生きてるわ。
昔、あなたとの連絡に使ってたやつよ。

4月21日20時45分03

name/trill title/no title
私のことを荒らしと呼ぶ？

どうでもいいわ。

文句があるなら告訴したら？

裁判上等よ。

あなたが、いつもは隠している素顔が、
そこで白日のもとに晒されるのだから。

でも、ネットストーリーカーなんて、どこか別の世界の話かと思ってた
けど、

それも、詩の投稿サイトで目をつけられるなんてね。
怖い怖い。

4月21日20時49分27

name/trill title/no title
ねえ、Hiroterさん。

ふたりで組んで曲を作ってレコ大を取ろうだって？

パンクロッカーなら芥川賞くらいにしておくのがよくてよ。

それなら過去の栄光（笑）を汚さないわ。

それから、ラブホで打ち合わせはいけないわ。

騙した女の乳房をいぢりながら何を打ち合わせするの？

4月21日20時52分49

name/trill title/no title

メールくれないかな。

その方が、あなたのためよ。

こんな夜は、じっくり話すにはもってこいだわ。

それにきつと、こんな夜は人恋しいでしょう？

けっきょくあなたは、ひとりではいられない、

どうしようもない寂しがり屋なんだからね。

4月21日21時03分22

name/trill title/no title

あなたにはまだ、メジャーになりたい気持ちがあるのよね。

でも、もう駄目よ。そんな望みは私がすべて断ち切ってあげるわ。

ここに集まってる自称詩人さんやアーティストさんたちからだって

愛想をつかされるのは時間の問題よ。

4月21日21時06分14

. . .

問題の部分の書きこみは数分程度の間隔で行われていた。連続してと言ってもいいペースだろう。掲示板の文字数制限は1000字程度のはずだから、それほどまで分割して投稿する必要はない。意図的に分けて目立つようにしたか、あるいは混乱した精神状態で思いつくままに書いたものを送信したと思われる。トリルは精神科系の薬を処方されていたから、そのオーバードーズで錯乱していたような場合もあるだろうとルネは考えた。

このBBSの文字色は五つある中から選択できるが、一番目立つ赤で書かれていた。血の色を暗示させているようにも思えた。

ルネはこの時期にも時々、Heiterのサイトを覗いていたのだが、この書きこみを見たことはなかった。たしか、この頃、突然BBSがなくなっていた期間があったが、たぶんHeiteが掲示板ごと削除したのだろう。

練炭自殺のスレッドを更新してみたが、その後、新しい書きこみはないようだった。PCの時計を見ると午前0時を回っている。ラジオからもその時間帯の番組が流れていた。まだ眠気も疲れも感じなかったので、もう少しネットを徘徊することにする。

詩板を開いて、まずスレッド一覧を見た。

1・ネット詩の現状について語り合いましょう。2・あなたの詩に感想を書きます。3・リーディングのイベントに行ったことある？
4・今までに最も感動した詩はこれだ。5・詩人さんたちの噂話・裏話。6・谷川俊太郎は本当にエラいか？7・あなたの彼（彼女）に告白するポエム。……。

書きこみがあるとそのスレッドはトップに表示され、その後書

きこまれた他のスレがあると、それが上がることによって押し下げられていく。ただし、スレッドが多く目のつきやすい上部に行つて面白半分に投稿されるのを避けようと投稿者がメールアドレスの欄に“ s a g e ”と記入すればこの限りではない。

ルネはいちばん上にあるスレッドからクリックした。

第4話

33>blockquote<

ネット詩の現状について語り合いましょう。

1：詠み人

HPやブログなどで自分の書いた詩を発表している人の数はひじょうに多く、もはや

、その数の把握は困難でしょう。また、いくつかの投稿サイトはビジターの数もひ

じょうに増え、巨大な規模になってきています。

その一方で、派閥に分かれての論争が目につくようになったり、また、これまで活

躍していた詩人さんが、あまり姿を見せなくなって、サイトが閉鎖されることも多いようです。

ネットの問題に限らず、書店で詩の本や詩誌を見かけることがない現状や、プロを

目指す場合の問題なども含めて、広く語り合い情報交換していたらこうと思い、このスレを立てました。

このスレが立てられたのは今年の6月だった。もう半年以上前の話だ。ニュース板の人気スレだと1日も経たない内に書きこみがリミットの1000に達してしまうが、詩板はニュース板ほどのアクセスはなく、書きこみも頻繁ではないので全体的に動きがスローペースだ。

流し読みしながらスレッドを降りていくと、話し合われている内容にちよつと惹かれる部分があったので、ルネはそこをじっくり読むことにした。

389：名もない詩人さん

日本では詩集も詩誌もマイナーであるという現状は皆さんの書きこみでわかりましたが、外国ではどうなんですか？

ランボオとか、ハイネとか、いろいろ有名な人、いますね。

390：名もない詩人さん

>ランボオとか、ハイネとか、それ、かなり昔の人だよ。

391：389

<<390

すんまそん。無学なものでw

392：名もない詩人さん

ドイツにはゲオローク・ビュッフナー賞というのがあります。ゲオローク・ビュッフナーは19世紀の非常に政治色の濃い劇作家ですが、

同賞は1923年に、その出身地ヘッセンで設立されました。

設立当時は芸術全般を対象にする賞でしたが、

後に、詩・小説・劇作が対象の純粋な文学賞になりました。

日本で言えば芥川賞のような権威をもったものといえいいでし

ようか。

もちろん芥川賞は小説の分野のみに対して与えられるものですけど。

そのゲオローク・ビュツフナー賞の多くて約半分、少なくとも3分の1は

詩の分野にたいして与えられていると言っていると思います。

2004年の受賞者はWilhelm Genazinoですが、1989年以降の受賞者はすべて、

詩人として、あるいは詩人としても有名な人たちです。

このようにドイツでは、詩が他の文学分野と同じように評価されていることは事実でしょう。

残念ながら、やはり日本では詩に対する認知が低いのではないでしょうか。

393：名もない詩人さん

ロシアでも詩集を読むのが人々の間では一般的で、むしろ詩集は小説より売れているくらいだという話を聞きました。

394：アル中る

韓国でも詩集はポピュラーな存在らしいです。

例えば崔^チ泳^{ヨン}美^ミの詩集『三十歳、宴は終わった』は

100万部以上の売上げを記録するベストセラーとなっています。書店でも、日本のように片隅の目立たない場所に置かれているのと違って、

有名書店には、かなり広い詩のコーナーがあるとか。

395：名もない詩人さん

崔泳美って韓国の銀色夏生みたいなものでしょうか？

396：アル中る

うーん、銀色夏生の詩はJ・POPやコバルト小説寄りですよね。独断と偏見で言ってしまえば、崔泳美の作品は

日本で言えば現代詩の範疇に入るような感じ

韓国女性詩人としては大胆な性表現もあります、

397：詠み人

韓国では金芝河や尹東柱といった社会運動の中で活躍した詩人もいて、

社会的な詩は日本より重視される傾向があり、影響力ももっている。

また、自費出版で出版社が儲けるシステムの日本と違って韓国では売るために作るから、本の作りもハンディで、価格も低い。

だから、ますますよく流通するようになる。

ここに、韓国詩に詳しい佐川亜紀さんの文章があるよ。

<http://www.poetry.ne.jp/zambaoba/sagawa.html>

398：名もない詩人さん

なにしろ、日本でいちばん権威のある（？）N会では自分の詩集を出していないと正式会員になれないんですからね。詩人さんたちは出版屋さんのいいお得意先です。

399：名もない詩人さん

社会的に認知されていて詩集も売れれば

海外の詩人は詩を書いて生活できてるわけですね。

400：名もない詩人さん

日本の詩人は詩で飯を食ってるんじゃないの？

401：名もない詩人さん

それは谷川俊太郎オンリー（爆

402：名もない詩人さん

別に本業があつたり、雑文書きや講演で収入を得たり、中にはカルチャースクールで詩の講座をもつてたり、という人もいるね。

403：名もない詩人さん

詩では生活できないどころじゃなくて

日本ではかなり有名な詩人でも、詩集の出版経費は自己負担ですよ。

けっこう有名な出版社から出していたりするので
凄いと思われるかもしれませんが、

事実上の自費出版で、実は発行部数も数百程度（笑

それでも、身内と詩壇の知り合いと数少ないファンに配って、
かなりの数は押入れに眠ってたりが現状ですが。

404：名もない詩人さん

それでもネットには、詩で有名になって食っていきこうと、
野心満々の香具師が、いっぱいいるわけだが（藁

405：名もない詩人さん

銀色夏生とか、魚武とか、あいだみつお…、
なんてのをめざしてるわけで。

406：名もない詩人さん
ねじめ正一ってのもいたね。

407：名もない詩人さん
ねじめは、もう、どちらかといえば小説家でしょう？

408：名もない詩人さん
ま、肝心の作品が独り善がりだったり、
女学生がノートの端っこに書くようなお粗末さではな。
もつとも、いいものが売れるとは限らんが。

409：名もない詩人さん
まあネット詩人なんて敗者復活戦みたいなものじゃないの？
小説で賞を取ったり、音楽でメジャーデビューできるような才能
がない負け組が、

それでも「自己顕示欲は人一倍もってるから、
書くのも読むのもイージーな詩の世界で一旗上げようってところ
かな。

それを言うならネットの自称アーティストの皆さんに、
当てはまっちゃうかもしれないけど。
（あ、本当のこと言っちゃったwゴメソ

410：名もない詩人さん
そういえば、最近、

練炭自殺したネット詩人もいたね。
昔はインディーズにいたらしいから、
348さんの説の典型的な例だね。
一緒に死んだ女もネット詩人だと
ニユース板で晒されてたよ。

411:

Heilterとトリルですね。
なにか情報をもってる人、いませんか？

次の発言が、このスレッドでいちばん新しいものだった。時間を見ると十数分前に書きこまれたようだ。ルネがこのスレッドに来たのより僅かに速い時間だろう。

それをただ読み流してしまうことに対して、何かが摩擦を生じさせているようだった。それは彼の背後にいる、もうひとりの自分のようなものだ。

34>/blockquote<

412:名もない詩人さん

Heilterと一緒に死んだのはトリルさんではありませんよ。
トリルさんはご健在です。

いくら、ここがちゃんねる・ゼロだといっても、
根も葉もない噂はやめてください。

そういえばニュース板でもHeilterの道連れがトリルであることを否定する書きこみがあった。彼女の知り合いだろうか？オン

ラインの付き合いでも、あの事件の後にメールやチャットなど何らかの接触があればトリルの生存は確認できる。

ルネは日付の右に表示されているIDに目をやった。

A 5 c + K p :

IDはBBS管理者が投稿者一人一人に割り当てるもので、いつでもコンピューターが自動的に行うのだが、これは投稿者がHNやメールアドレスを変更しても変わることがない。プロバイダーによつてはモデムを再起動すると別のIDになるようだが、とにかく短時間のうちに同じIDで書きこんだのは同一人物ないしは同じ接続場所と考えていいだろう。

掲示板などで時々目にする同じようなものに、8ビットごとの数字をドットで4つに区切ったIPアドレスや、リモートアクセスサーバー名があるが、前もってメールなどでソフトを送りつけられ不用意にインストールしていると、これを使ってPCに侵入される場合もある。

ニュース板に戻って502 “H e l t e rと一緒に死んだ人はトリルではありません。”のIDを見ると、やはりA 5 c + K p :で一致している。二つの書きこみのタイムラグは3分弱だった。モデムを再起動してIDを変えられるか微妙なところだ。しかし、ちゃんねる・ゼロでは二重投稿を防ぐため、120秒経過しないと次の書きこみができないシステムになっているので、そのタイミングを測って投稿したと考えるのが妥当なように思う。

詩板の方にはあらかじめ行っていてトリル死亡の書きこみを見ていたのだろう。それで、あちらでも否定しなければと戻ったのではとルネは考えた。

“ ネット詩の現状について語り合いましょう。”のスレッドにま

た戻ると新しい書きこみがあった。

413:

<<412

あなたはトリルさんではありませんか？

投稿者名は何も書かれていない。その前にある書きこみと同様だった。

411:

Heiterとトリルですね。

なにか情報をもってる人、いませんか？

名前の欄に何も書き込まないまま送信すると自動的に“名もない詩人さん”が表示されるから、そこを空白にすることで発言を目立たせようとする意図が感じられないでもなかった。スペースキーを打ったのか、あるいは何か別の方法があるのかも知れない。右端に表示されるIDを比較してみるとまったく同じだった。

ニュース板に戻って、ちゃんねる・ゼロ専用ブラウザの検索機能を使い、スレッドからふたつのIDを検索してみた。

351のIDでは502の“Heiterと一緒に死んだ人はトリルではありません。”が出て来た。

詩板の350と352は銭形というHNが書きこんだもののID

と一致している。ここにはH e l t e rの掲示板をコピーしたU R
Lが貼られていた。

銭形は相手が何らかの動きを示すことを期待して釣っているのか
もしれない。でも、その後の書きこみに、まだ、反応のようなもの
は見られなかった。

詩板に戻ってみたが、まだ、次の書きこみはされていない。

もう少し経てば何か変化があるかもしれないので、ルネは時間潰
しに他のスレッドを覗くことにした。

スレッド一覧に、“ 5 . 詩人さんたちの噂話・裏話。 ” というの
があり、ここに何かあるかもと期待したのだが、H e l t e rの自
殺に触れているものはなかった。“ 2 . あなたの詩に感想を書きま
す。 ” と“ 3 . リーディングのイベントに行ったことある？ ” は内
容的につまらないので終わりの方へ飛ばしたが、最近の書きこみに、
めばしいものは見当たらない。

“ 4 . 今までに最も感動した詩はこれだ。 ” に移っても、たいし
て面白いものに出会うことはなかったが、最後にこんな書き込みが
あった。 1 時間弱くらい前に投稿されたものだ。

2 3 8 : 詩人は夜明けを待っている

ここでは場違いかもしれませんが、
私は尾崎豊の「太陽の破片」をあげたいと思います。

失望や絶望と戦っている彼と
自分の姿がオーバーラップするのかもしれませんが
そんな時、いつも、この詞に力づけられます。

人に勇気を与えたり、幸せにしたりするのが
詩の本当の役目だと思うので、

私も詩人として、できるだけ多くの人に
影響を与えられるようにしたいです。

これは彼が覚醒剤で逮捕され、カムバックした時の作品です。

私は、リアルタイムな尾崎ファンではありませんが

生前、彼が住んでいたマンションは、

私の家から比較的近いところにあり、

落ち込んだ時などは見に行ったりします。

尾崎の作品全般で言うと

「15の夜」や「卒業」のような若い世代の主張もいいですが、
個人的には彼のラブソングがひじょうに好きです。

例えば「Oh My Little Girl」

私も、こんな愛の詩を書ければと

日々、精進しています。

実は最近、私と関わりのあった詩人さんが亡くなったと聞きました。

尾崎のようにメジャーではありませんでしたが、
以前に音楽をやっていた人です。

まあ、彼に対しては複雑な思いがあるのですが…。

何気でIDを見た。

トリルの死を否定しているふたつの書きこみと同じだ。

サーチエンジンの検索窓に“尾崎豊 マンション”を入れて調べた。ネット上にある尾崎の情報は相当な量のようにヒットするページ数も多い。マンションが北千住の近くにあることは、すぐわかった。

3 5 > s p a n <

カーブが小刻みに連続している。身体と車体の両方を傾けて曲がっている間は間に合わない。上半身は垂直に保った状態で下半身を左右に曲げMTBを傾ける。

ほとんどスピードを落とさずに5・6回カーブを切ると、その先400メートルほどはほとんど直線だった。ペダルを踏むが車輪の回転の方が速くて、空回りの感触が足に伝わるだけだ。左と右の手首を順に捻って前後のギアともトップに上げた。ペダルから少しだけ重さを感じる。回転を少しづつ早めて加速し、足を停めた。

もう50キロを超えただろうか？メーターを見るのは危険だ。前方への注意がおろそかになるしバランスを崩す怖れがあった。自転車は顔が向いている方向に曲がる傾向がある。よくママチャリのおばさんが、すれ違う自転車を除けようとしながらぶつかっていつてしまうのは、相手の方に目をやって顔を向けるからだ。

緩いS字カーブの先は鋭角に左折して、その先は眼下の樹木の中に隠れていた。

ルネはブレーキレバーを握る手に少し力を入れた。カーブに差し掛かるやや手前で対向して来る白い乗用車が目に入る。充分スピードを落とし、道路の中央に出ないよう慎重にカーブに入った。

下り坂がやや急だったので、ブレーキレバーを小刻みに握ったり放したりしてスピードが出るのを押さえる。ブレーキを効かせた状態を続けてシユールが焼けるのを防ぐポンピングというテクニクだが、ここでは、使う必要はないかもしれない。

緩いペースを保ってゆつくりとターンした。

対向車はセンターラインをだいぶ越えて曲がって来た。運転が下手だが、それは想定内だった。ルネは路肩から2メートルくらいのところを走っていたのでぶつかることはなくすれ違う。自分の安全は自己責任で守る方がいい。知らない相手に無闇な期待をかけたり信頼を寄せたりするのは平和ボケというものだろう。

次の右カーブを過ぎると遙か下方に御殿場の市街地が広がっている。道の脇は切り立った崖なので、ガードレールに突っ込んだら自分の身体はそれを飛び越えて空中に投げ出されてしまいそうだ。

しばらく行くと左カーブの端に路面の白い部分があった。おそらく一日中日陰なのだろう。凍結しているようだった。ちょうど、後ろから4WDが来ていたので、スピードを落とし、抜かれてから道の中程まで出て問題の個所を迂回した。

慣れていない道を走る時は緊張度が高い。ルネは、外界のあらゆる方向に注意を払いながら走っている自分を、いつどこから攻撃を受けるかわからない兵士のようなと一瞬の間、思う。ガードレールを飛び越えて落ちてしまう想像もだが、路面に石や枝が落ちている場合もある。蓋のない側溝も不安な気持ちを生じさせた。時速40キロ以上は出ているからタイヤが踏みこんだら転倒して下手をすれば死ぬこともあるだろう。生命への執着はたいしてないのだが、た

ぶん、それは動物的な本能の中に存在する恐怖で、いつも聞こえるか聞こえない程度の通奏低音として鳴りつづけている。

想像の中で崖を落下していくルネ。

石を踏んでバランスを崩し転倒する自転車。

側溝に前輪が落ち路上に打ちつけられる身体。

イメージはリアルな世界に浸入してルネの神経に過剰な電流を送り、そこかしこで微細な火花を生じさせる。

テンションは高まるが、その時もう危機は未知のものではない。イメージは例えば危機に対するワクチンなのだろうか。イメージすることによって人はその内部で危機への対処をトレーニングする。想像力はもとも危機を回避するために存在しているのかもしれない。

今までは片側1車線のところが多かったが、両側1車線が定着してきて道幅も広くなったように感じた。間もなく138号線に出るのだろう。

ルネは芦ノ湖から仙石原を通り138号を登って来たのだが途中で長尾峠を越えるルートを取った。こちらは旧道で迂回することになるから、ほとんどの車は乙女峠のトンネルを抜けていく。

自転車の場合トンネルは道幅が狭いし、追い越していく車から受ける風圧が強い。反響音も気色悪いのであるべく避けたかった。

長尾峠への道は通る車も少なくて快適だった。多少の上り坂が続くがギアを落とせば漕いで登って行ける。芦ノ湖は、それほど登って来たのかと思うくらいの方の遠くにあった。峠の短いトンネルを抜けると、そこからはずっとダウンヒルになる。

前方に車の行き来する道路が横切っていた。信号機も見える。たぶん138号線だろう。

ルネは100メートルほど手前でひと休みすることにした。ハンドルを握り続けていた手が少し痺れている。MTBをガードレールに凭れさせ、周囲の山々を眺めた。

下界の輝きと身体に届く時の暖かさで、太陽の光線が強まっているのを感じた。

大気が湿り気を含んでいるためか空に鮮やかさはないが、少し前までのように凍てつく色ではない。天頂の薄い青から山の稜線の向こうのほとんど白までグラデーションがかかっていた。

今、この世界の中で何人が空を見ているのだろう。もちろん地球の半分の上空は暗い。そこが昼間でも、曇っている地方もあるだろうし、また、その土地によって空の色は違うだろう。

例えば自分の父も今、どこかで空を見ているだろうか。父はルネがまだ幼い頃、バックパッカーとして日本を出ていったらしいが、その後どうしているかを彼は知らない。誰かに聞くと何か当たってみれば消息が掴めるのかもしれないから、むしろ知ろうとは思わなかったと言った方が正しいのだろう。

ルネの脳裏を白昼夢のように、ヨーロッパの古い建築物に囲まれた風景や、緩やかな地表の曲面が連なる砂漠や、熱帯植物を背景に波の打ち寄せる浜辺の情景が流れる。次のイメージは実物を覚えていない想像上の父のシルエットが、チベットの奥にあるシャンバラに消えていくものだった。

いつか写真集で見たのと同じで、チベットの空は深い青だ。

父親と一緒に暮らしていたら幸せだったとも思わない。もっとも幸福感というのは差異から生じるものにすぎないだろうから、求めなくても意味はないのかもしれない。

幸せというのは、その人間が今の自分の境遇を肯定すれば簡単に

感じられるもので、そして、たぶん奴隷のような人間ほど自分を幸せだと思いたいのだ

もうすぐ針葉樹や常緑樹でない木々も緑の葉をつけ山肌を草が覆うようになると、山々が生命力を含んだゼリー状の緑の皮膜で覆われているように見えることだろう。世界はその前段階にあった。

時が流れ、冬は終わろうとしている。

Heiter たちの自殺以後、もうネット詩人に関わる事件や自殺の話を書くことはなかった。

36 > / span <

車の多い138号を下って御殿場の市街地に入った。まだ町外れの地域だろう。区画整理がきれいになされていて、建物は皆、比較的新しいようだった。

大型車がよく通るので車道を走るのに神経を使う。今日はかなり走ったので少し疲れていた。歩行者がほとんどいなかったし道幅も広いので、信号待ちを機会にルネは右側の歩道を走った。

横道から出ようとしているバンがいて、車の列が途切れるのを待っていた。ルネがその前を通りすぎようとする直前に、突然、向こうから来た車が停止してパッシングする。バンの運転者は左側を確認したらしくルネが通りすぎるまで待っていた。パッシングでそのまま発進したらルネにぶつかっただかもしれない。

ふつうなら、ルネの自転車がすぐ近くに來ているのは目に入って

いるはずで、下手をすれば事故を誘発する。親切心で道を譲ったにしては奇妙な行動だった。

止まった車のフロントガラスの向こうに顔色の悪いダークスーツの男が見える。無表情だ。病弱なようにも見えたが、とにかく、あまり幸せそうな人間でない印象を受ける。被害妄想と言われそうだが、ルネはその男が自分に対して殺意をもっていたように感じた。

自転車で走っているルネが健康そうだからとか、自由な時間があるって遊んでいるように見えて嫉妬の感情を抱いたとか、もっと他の理解不能な動機だってあるだろう。自分の不満やコンプレックスを他者への攻撃に転換するのはよくあることだ。

殺意というものは確たる理由がなくても、ぜんぜん見知らぬ相手に対してでも、どこかで不意に起きるものではある。

御殿場駅からＪＲで輪行してもよかったが、まだ日も高いので三島まで行くことにした。三島からなら新幹線に乗れるが御殿場線は乗換えがあつて面倒だ。

折りたためる自転車か、あるいは車輪を外して専用袋に入れば手荷物として列車に持ち込むことができる。以前は持ち込み料を取られたらしいが今は無料で、マニアの間では輪行と呼ばれている。

東名高速に沿った道を南下していくと２４６号線に出た。２４６と言えば東京では六本木や渋谷辺りを走っているが、それがここまですべて続いているわけだ。

この道は以前、来たことがあった。歩道は広くて路面に自転車用の表示が見える。車の量が多いので歩道を走ることにした。ずっと緩やかな下りなのでまあ快適と言えるが横道のところに段差があつて、かなりスピードが出ているから、なるべくチューブを痛めないよう気をつかった。危険な側溝にしてもそうだが、日本の道路はあまり自転車のことを考えて作られてはいないようだ。

左に見えてきた自衛隊の駐屯地では轟音を上げて戦車が動いている。太陽は右側の山の上に傾いていた。三島駅に着いた時は日没だった。

三島から東京までは1時間しかかからない。

PCのスイッチを入れ、起動する間に着替えをした。もう乾いてしまっているが、山の上りでだいぶ汗をかいている。

ぼえ村の投稿板は相変わらず賑わっていた。でも、そこで見られる顔ぶれは少しずつ変化しているようだ。以前は速いローテーションで盛んに投稿していた常連たちも、最近は時折、姿を見せる程度になってしまっている。

もうすぐ新年度になる。進学や進級を機会にPCやネットを始めるのも多いだろうから、ここにも新しいメンバーがどっと入ってくるかもしれない。

ルネは投稿の一覧に“伯爵”というHNを見つけた。HelloのBBSに時々書きこみがあつた記憶がある。作品は『アンダルの猫』というナンセンスのようなアドリブで書いたようでもあるものだった。ブンガク的な雰囲気はあるのかもしれない。

サイトURLをクリックした。

開いたページはブログで、書かれた日付を見ると1ヶ月以上前だ。更新は平均すると月に1回もないようだった。そういえば、投稿されていた詩もコメント欄に高校時代の作とあつた。だが、もしリアルな生活が充実していて楽しいのなら、あえてネットジャンキーになる必要もない。

伯爵の徒然なるBlog

黒粋

最近、俺がweb上で知ってる人たちに訃報が相次いだ。メールやチャット、掲示板での付き合いほど直接関係のあった人もいるし、知り合いの知り合いといった人、投稿された作品を見たりHPを覗いたことのある人などさまざまだが、まるで1960〜70年代にロックのミュージシャンが次々死んでいったのを彷彿とさせる出来事のような。

えーと、調べてみたよ。

ジミ・ヘンドリックスは1970年9月に死亡。ジャニスジョップリンはそれからちょうど1ヶ月後にこの世を去っている。その前年の7月にはローリング・ストーンズのメンバーだったブライアン・ジョーンズが、自宅のプールで溺死体となって発見され、Doorsのジム・モリソンはジミヘンやジャニスの翌年7月にパリで死亡。まあ、ちよつと後になってDeep Purpleのトミー・ボリンとかプレスリーとかマーク・ボランも死んでいるわけだ。

しかし、なんかこのあたりの時代って華やかな感じがするな。

聞くところだと60年代あたりには占星学でいうアクアリアン・エイジの始まりがあったんだとか。春分点の実際の位置は少しずつ移動するので、古代にはおひつじ座にあったのが、その頃からみずがめ座に入って、人類にとって大きな変革の時期だったとか。

まあビートルズなんて、このあたりで出てきてるが画期的なものなこの頃確立されたロックのかたちが今に至るまで続いているわけだしね。うーん。

ということ、今また時代の転換期。21世紀のカルチャーをリードするのは詩なのだから、かつてのロクシーンにおけるミュージシャンの死みたいなのが詩人さんたちの間で起こっているのかなんてちよつと勘違いしてみたり（苦笑）

ところで、ネット詩関係の方がたの死因は報道されているところでは自殺が多いようだね。無理心中らしいものもあるが、これも含めれば、だいたいが自殺……。

俺は、ぽえ村に投稿している人たちをはじめ、ネット詩人さんのサイトを暇つぶしにしばしば覗いていたのだが、そこでよくあるのが精神科や心療内科に通院しているってことだった。

ま、日記にカウンセラーとのやり取りを書いたり、飲んでる薬のリストがあったりするサイトは詩人さんに限らず珍しくないね。おれもネットサーフィン（死語）してるとよく見かけるよ。

自分の周囲ではそういう治療を受けている人など、ほとんど聞かないんだがね。いや、実は案外多いのかもしれないな。日本ではまだ心の病気に対する偏見がかなりあるからオフレコにしているのかも。じつは周りにいっぱいいるのかもしれないね。

Comment（） Trackback（）

60～70年代に自分はまだ生まれていない。ロクのようなサブカルチャーは、自分くらいの年齢だった父親がリアルタイムで体験しているはずだ。今日はやけに父を連想することが多いとルネは思った。もしかして彼が世を去ったりしているのだろうか。病院が路上か人里離れた場所か、とにかく世界のどこかで。

ルネは、そういう虫の知らせのようなものが存在することを否定

するつもりはなかったが、この場合は、そういうものでないような気がした。そして、サイトからサイトを巡るうちに彼の想念の中にあつた父は、いつしかフェイドアウトしてしまう。

希羅々、水野達彦、高瀬川麗佳、darkblue、Helter。Helterと一緒に練炭自殺したのがトリルかどうかはわからない。

ネット詩関係に限って短期間にこれだけの者が世を去っているが、そのことをちよつと多いと思つてはいても、それ以上の疑問を抱く者はないようだった。

でも、takayoから得た情報では、この中では何ら関係のなさそうなタツヒコも

希羅々と繋がりをもっている。だから自分は、そこに地下茎の存在のような何かを感じて好奇心をもつのだろうか。

ディスプレイの奥に深い陥穽が存在するような、妄想とも幻覚ともつかないものがルネの意識に広がっていった。

37>dl<

コノ セカイニ アイヲ
Helter

この世界のどこかで
誰かが手首を切っている

彼女の足元にしたり落ちる血液
ちぎられた睡眠薬のパッケージの山
WEBの日記に書かれたSOS

相手がまわらず送った被害妄想のメール
ひとりよがりです勝ったと思ひ込んで
でも誰も気にとめず即削除 レスも来ない
そんなもので傷つくおめでたい奴はいないぜ
地球のどこかでは必ず戦争が起きているのに

コノ セカイニ アイヲ
コノ セカイニ アイヲ

都市の暗がりから湧き出す悪臭の泡
通りすがりのリーマンからせしめるのは
攻撃と破壊のアドレナリンに
ウォレットから引き抜く何枚かの紙幣
だけど もっとポジティブにもっと遠くへ

境界線を越えれば向こう側の世界がある
そのことを知ってしまうENFANT TERRIBLE
行ってしまうはどうってことないし
モラルと法律の重力圏を抜けたその時
DNAの二重螺旋に隠れていた快楽が解放される

コノ セカイニ アイヲ
コノ セカイニ アイヲ

コノ セカイニ アイヲ
コノ セカイニ アイヲ

ごらん 生命は何かして生き続けようとしている
抛り所になるならどんなものでも支えにして
頭が悪いことや病氣や貧乏やねじれた性格
おぞましいルックスや前科やあらゆるコンプレックス
何でも好きなものをアイデンティティーにできる

そして みんなが還かえっていきたがる場所
始源ゲマインシャフトの母胎で安らぎを得るのは
みちづれなしに叶えられないことだから
傷口を舐め合いながらねばつく地獄に堕ちて行く

回転する青い地球と銀河を背景にシヤム双生児は踊る
あたしのハートは阿修羅 あたしの神経は光ファイバー
すべての快楽にC o n g r a t u l a t i o n s !
あらゆる恍惚にC o n g r a t u l a t i o n s !

コノ セカイニ アイヲ
コノ セカイニ アイヲ

この世界にある椅子の数は限られている
もし あなたが席を空けたら
すかさず誰かがそこに座るだろう
時にはあなたを突き飛ばして
誰かがそこに座るだろう

コノ セカイニ アイヲ
コノ セカイニ アイヲ

コノ セカイニ アイヲ

コノ セカイニ アイヲ

コノ セカイニ アイヲ

コノ セカイニ アイヲ

200X年3月21日XX時XX分XX秒

作者のHP:

- この作品の著作権は Helter さんに帰属します。
- 無断で転載することは禁止します。

いつものサイト巡回の途中でばえ村にアクセスすると、リストのいちばん上にこの作品があった。数分前に投稿されたものだったが作者がHelterであることが特別ルネの目を引いた。

ネット上のさまざまな情報から、報道されている練炭自殺のメンバーの一人がHelterだと思っていたのだが、そうではなくて彼は生きているのだろうか。

ルネは『コノ セカイニ アイヲ』という作品に既視感デジャ・ヴュのようなものを感じた。だが、かつて、この詩を読んだことがあるというのとは少し違うような気がする。

Helterのサイトは事件がメディアに乗って数日を経てから閉鎖されていた。彼の友人や親族が対応したのかもしれないし、フリーのHPスペースを使っていたから、その管理者の権限で処置したことも考えられる。3ヶ月間更新がないと削除される規定にはなっているが、まだ、その期間を経てはいないだろう。著作権侵害や他人の名誉毀損や、それほどの反社会的内容があったとも思えないが、警察から連絡があって閉鎖を暗に仄めかされたり、あるいは

自主規制でそうなることは充分あり得る。あまりにアクセスが集中するのでサーバーの状態が悪くなり、他のユーザー様に多大なご迷惑がかかります…、とか、まあ理由などはどうとでもつけられるのだ。

Internet Archiveに保存されているHelterのサイトを見たが、『コノ セカイニ アイヲ』は見つからなかった。デザイン変更の更新が頻繁だったので十数回分をざ見て回る必要があり、ざっと回ってもかなり疲れたが、それを経るうちにルネの中で、既視感がどこから来ているのか、しだいに明確になってきていた。

『表現する葦』という詩が投稿されていたのを見た時と似たような感覚なのだ。

『表現する葦』は、それより前、“HP小僧”の編集システムから覗いたページにあったのを見ている。“HP小僧”はタツヒコが運営していたサイト紹介のメルマガで希羅々やtakayoはスタッフだったらしい。

『表現する葦』には何やら暗号めいたメッセージが隠されているように考えられなくもないことをルネは発見している。

ルネはぼえ村に戻って、もう一度『コノ セカイニ アイヲ』を見た。

作者からのコメントは空欄になっている。

感想

あ、Helterさんだ。おひさしぶりです。
相変わらずロックして快調に飛ばしてますね¥（ハ〇¥）（ノ〇

^) / : 野呂

本当だ。H e l t e r さんだ。突然 H P がなくなっちゃって
、変な噂も聞いたんですが、デマだったんですね。 : s a s u
k e

. . .

翌朝、メールチェックをすると、その中に差出人がトリルとなっ
ている 1 通があった。

送られてきているメールアドレスはプロバイダーとの契約時に与
えられたもので、ルネはそれを仕事上や公的な場合にしか使わない
ので公開していない。

トリルがどうやってそれを知ったのか、少し訝しく思ったが、と
りあえず、そのメールを開いてみた。

第4話（後書き）

33>blockquote<中での、ドイツの文学状況について
では

世界を駆ける詩人、m・qyiさんから情報をいただきました。

m・qyiさんのサイト <http://page.freedom.com/mqyi/>

第5話

38 > d t <

突然、映画の中のある場面に投げ込まれ登場人物になったかのようだった。麻醉性のある気体に似たものに自分は浸されている。そして、ルネはその中空を浮遊するような感覚がしばらく続いていることに、今しがた、まったく突然に気づいたのだった。

その登場人物は、どこか外国の空港に降り立ってまだ間もない。そして、その国のとある川にかかる橋上の歩道を歩いている。そこは彼の祖国よりずっと暖かい土地だから、微風がやわらかく優しく、身体を包むように流れていた。それまでずっと暮らしていた吝嗇で陰鬱な国と違って空が光を出し惜しみしていない。ルネは周囲の明るさが増して、華やかに感じられる世界の中にいた。

頬や額の皮膚が強まった午後の日差しを感じているが、それは触感にかなり近い。

昨日まで、いや、今朝まで世界は冬の帳の中にあって、すべては冷えきっていた。それは自分が生まれてからずっと、いや、たぶんすべての始まりからそうだったのだろう。その状態が永遠に続くことに誰も何の疑いもたず、変化が起きる僅かな兆しさえ、世界のどこにも見当たらなかった。

でも今、ルネは自分が春の中に投げ出されていることに気づいたのだ。それは突然だった。と言っても、それまで何かルネを悩ませていたものが存在して、それが晴れることで世界が眩しく感じられるようになったわけではない。変化はまったく無作為に、突然起きたのだった。

4号線を車が行き交っている。東北方向だと埼玉を抜けて日光へ向かう道だ。ルネは千住新橋の歩道を中ほどまで歩いたところでもと来た方に引き返した。荒川にかかる橋で、北千住のはずれにあたる。

かなりの人とすれ違う。もう放課後の時間だから子供たちも多かった。暖かい空気の中で、人々は集団で躁状態に陥ってでもいるような不自然に浮かれた表情をしているように見えた。

ある意味、世界は祭の中にあるといってもよかったが、ふつうその裏に見え隠れするいかがわしさはなかった。ただ、影をもたない不気味さが、あたりに満ちていたかもしれない。

堤防にまわると数メートル先の道端に吸血鬼の屋敷のメイドのような黒と白2色だけのコスチュームの少女が座り込んでいた。そこは草いきれのするような場所で、ゴスロリはなんだか場違いだったが、もつとも、そんな格好は世界のどこだろうと多くの人の目には異様に映ると言えるだろう。歩いていくルネに、その少女はずっと視線を向けて逸らさない。ルネは少女の前で立ち止まった。

「ルネさん？」

少女は視線を無表情のまま尋ねる。でも、彼のかすかな表情の変化も見逃すまいと細かく観察しているようでもあった。

白っぽいメイクが晴れた空と陽光に似合わない。彼女は世界のそこにだけ開けられた暗い穴のように見える。

ルネが頷いたのを見て、彼女はキューが振られるのを待っていたアナウンサーのように口を開いた。あらかじめ頭に入れてあった原稿を読むように、抑揚の少ない喋りだった。

「あたし、ネットではトリルってHNを使っています。本名は明日香

つていうんだけど」

風が肩先で軽くカールしている髪を揺らした。ナイロンでできた人形の髪のように見える金色だ。左手首に黄緑色の包帯を巻いている。HPのプロフにはリストカッターであると書かれていたが、実際に切ったからなのか、それともファクションでやっているのかはわからない。

「あ、何というか、まあ、はじめまして」

例えば初めて会ったのに懐かしさを感じるとか頭や胸の中で特殊な振動が起きるとか、別にそういうことはなかった。そういうコスチュームは街でも雑誌の中でもネット上でも時折見かけるし、二言三言なら彼女たちと言葉を交わすこともある。ルネはただ風景から切り取ったものと対峙しているだけだ。

「どうしますか。どこかでお茶する？でも、天気がいいから、とりあえず向こうの方に歩いてみますか？」

トリルは立ち上がり、ルネの横に並んで一緒に歩き始めた。何だか手でも繋ぎそうな雰囲気だった。ルネがそうすれば、彼女は拒まなかったかもしれない。

「やっと会えたわ」

どこかで聞いたような台詞だった。たしか、元ミュージシャンの作家がパリの空港で女優に初めて会った時に言った言葉が「やっと会えたね」で、二人はその後結婚している。

「もう何回メールしたかしら？」

トリルの話し声のトーンが微妙に変化して聞こえた。それは自分の意識の内部に潜り込もうとしているように感じられ、でも、しばらく間を置くうちに浸入して来た何かは薄れて消滅する。それを確認してからルネは口を開いた。

「たしか6回」

「そのくらいだったかな？でも、とにかく会いに来てくれたんだから……。やっぱ、ネットより、こうやって実際に顔と顔を合わさなくっちゃ。ちよつと気が合った人とはそうするでしょ？」

ルネは、ネットの付き合いはそれだけにしていて、オフで会うことはほとんどなかったが、あえて、それをトリルに話すことはしなかった。

「なんだ、何回だったか自分で覚えてなかったの？」

「私んところへはスパムは別にして一日に100くらいはメールが来るからね。それにレスして、それから私も出すのがあるから、自分ではもつと書いてるわけか……。何がなんだかわからなくなるわ。ルネさんは記憶力がいいんだね。そういえば、頭のよさそうな顔してるわ。」

—頭のよさそうな顔してるわ。—

なんだか違和感のある言葉だった。それは成績が悪くて友達もいない子供や自分の都合よく単純化した世界に住んでいる中年女や脳の処理機能が衰退した老人といった無知でデリカシーのない人間たちの領域に存在するもので、その響きがルネの内部で減衰していく間、彼は不味い食べ物を反芻しているような気分になる。

「最初にメールくれたのは2月だったっけ？」

河川敷には運動場があつて、堤防側に舗装された道がある。千住新橋の向こう側でも上流の方へ伸びていたはずだ。どこまで行くんだろう。かなり上流まで続いているのなら自転車で走るのもいいなとルネは思った。

「2月の終わりが、3月の初めだったと思った。それから6回ね。こんなこと珍しいわ」

河川敷を眺めるのにも飽きると、時折風が通り過ぎる度にトリル

の服の黒いフリルが揺れるのに目を移す。

「なるほど」と、ルネは無意識に呟いていた。

「え、何？」

「うつん、もう、すっかり春になってるわけだってこと。」

「そう言えば、今日、急に暖かくなっただんだよね。出てくる時、着るものに迷ったよ。随分時間が経ってるわけだけど、まあ、あなたはちよつと違つたってことね」

トリルは話を続けた。まるで、ルネに何かを伝えなければならぬ任務を遂行しているかのようなだったが、それはトリルの無意識の中に存在するものなのかもしれないかった。

39 > d d <

前方の堤防の上を電車が横切り、鉄橋を渡って行く。JRと相互乗り入れしている地下鉄千代田線の車両だ。北千住駅を出て間もない地点だからまだスピードが出ていなくて通過時間が比較的長い。最後尾が通り過ぎるのに合わせたようにトリルはルネに顔を向けて言った。

「ルネさんは、ちよつと違うね」

何が違うのかルネにはよくわからなかったが、そのことをトリルに質問しようかどうか考えているうちに、彼女は堤防の斜面にある階段を降り始めた。

河川敷に下りて鉄橋の下をくぐる。といっても線路の位置はかなり高い。

「この辺でよく金八とかの撮影をしたんだよ。知ってた？あの校舎は建替えがあつて、もうないけどね」

そついわれれば堤防や周囲の風景はドラマの中で見覚えがあるも

のだった。

「トリルさんはあの中学へ行ってたの？」

トリルは首を横に振った。

「ううん、私の住んでるところは学区が違うから」

そのあたりの河川敷には雑草もかなり生えていて、丈の高いものも多かった。

鉄橋の影の部分を通り過ぎて明るい場所へ出ると、地面からオーラが沸きあがっているように感じる。

「あの番組、よく見てた？」

ルネはさっきから感じていたのが春の気配だったと気づいた。というか、それにもっともふさわしい言葉を見つけ言語化できたということになるだろうか。

“春の気配”という言葉が頭の中でリピートしている。

都市の中のまったく人工的なものが春の息吹を発することはない。夏だったらアスファルトやコンクリートが熱をはらみ輻射もあるから、その存在をありありと感じさせられる。冬はそこに凍結した大気があれば、いやおうなしに自分がその只中にあることを知る。

春は、たとえばビルの連なる中でも花壇の草花のようなものから、その来訪に気づくのだ。

トリルはルネのやや先を、ただ前を見て歩いていた。ルネはトリルの質問にどう答えたら適切な表現になるか、少し推敲のような作業をしてから口を開いた。

「あれは好きじゃなかったから、そんなに見てないよ。子供の頃のことだけど、それでも再放送だったのかな」

少し先にもうひとつ鉄橋がある。クリームイエローの電車が渡っていくのが見えた。東武線で、日比谷線と相互乗り入れをしている。「あの中で言ってたことで、ずっと疑問に思ってることがあるんだ。

“人”って字は人と人が支え合ってできてるって盛んに言ってたけどさ、どうしてもあれは人間が足を開いて歩いてる姿の象形文字としか思えないな”

「そうだよ。結局あれはつまり屁理屈なんだけど、ああいうこと言う奴に限って自分に反論してくる相手の言うことは屁理屈って決めつけるんだよね。でも、この辺の人間ときたら本当にあんなもんだわ。まあ、この辺は田舎ってことよ。東京って言ってもね。」

風が渦を巻きながら通り過ぎて行き、トリルの服のあちこちについているフリルが激しく踊った。布地の黒と白のコントラストは、愛らしさを振り撒くよりむしろ柔和な陽射しに和もうとする世界を威圧していた。世界の緊張を孕んだ複数の対角線が交差するポイントにはルネの視界の中で彼女がいる場所だ。

トリルは階段の方に向かって足を速めていた。ルネは彼女を追って、また堤防の上に登った。

「向こう側に東京拘置所があるの知ってる？」

P o e m V i l l a g e の常連たちの間で結婚や婚約や妊娠といった話題があるのをネット上で目にしていたが、予想に反してトリルからそんな話が振られることはないようだ。そういう井戸端会議的な内容はルネの脳内で消化不良を起こしそうだったから、ないのに越したことはない。

ルネは対岸に目をやった。

「東京って言っても、ここらはちよつと違う感じでしょ？」

向こう側の堤防に沿って高速が走っていて、その上で目につくのは見張り塔のようなものと共同住宅らしい古い建物くらいだ。

「それに、何しろあつちは“川向こう”だから、いろいろあるよ。

昔、DQNたちが女子高生を監禁して、さんざんやりまくったりいたぶったりしてから殺し、コンクリ詰にした事件。ほら、ちゃんねる・ゼロで、今でもよく話題になってるやつ。あれがあつた場所は

綾瀬っていつて向こうにあるんだし」

“川向こう”というのは、本来、隅田川の外側を指して言われていたはずだ。ルネが乗ってきた日比谷線は北千住の手前で隅田川を渡ってきた。綾瀬までは地下鉄の路線なのだが三ノ輪の先からは地上を走っている。その言葉は差別的なニュアンスが含まれているので放送で使うのをはばかられていると何かで読んだような気がする。「例の王子とかいうヲタがいたマンションも同じく綾瀬だよ。やはりネットでナンパした女の子を監禁してたとかいう有名な話ね。やばいよね」

線路のこちら側でも堤防を歩いている人の数が多いように感じた。「急に暖かくなったからね。みんなうきうきして出てくるんじゃないの。この辺をぶらつくのならお金もかからないし、何かいいことがあるそうな気がしてさ。そんなこと、まずないんだけど」

すれ違う人たちの多くはトリルに何らかの関心を向けているようだった。さり気なくゴスロリのコスチュームに視線を向けたり、通り過ぎてから忘れ物をしたように振り返ったりする。彼女の全身をしげしげと無遠慮に眺めていく老人は、ルネの視線に気づくと慌てて目を逸らした。

彼らはまるでゾンビの群れのように見えたが、そのどこかに不気味さを隠してはいても、ほとんど恐怖感を感じさせなかった。

「親戚のおじさんでね、広告代理店に勤めてる人がいるの」

トリルはルネに近づいて脇に身体を寄せて来た。離れていると反対方向へ歩いている人たちとすれ違うのがスムーズにいかないということは言える。

「その人の業界の知り合いはね、みんな港区とか渋谷区とか中央線沿線の方に家があつて、こっちの方に住んでるのは、その人以外、本当にひとりもないんだって。そのおじさんは長男で両親も生まれた時からこの人だし、実家にいるしかないんだって言ってるけ

どね。でも見た感じダサいけどなあ。何かにつけてクリエイティブな仕事をやってるようなこと言うけど、案外、営業あたりかな」

ルネとトリルの身体は触れ合ったまま歩いていた。でも、それでルネが彼女に親しみを感じることをそこに生じた違和感が妨げていた。

「この辺にはね、古くからの地主とかを別にしたら、そんなに大金持ちもないんだよ。中小企業をやっていたり、そんなとくに勤めたり、ちよつと大きい会社にいても、それほどやり手じゃないからうだつが上がない。みんな同じような生活状態でね。そういう土地で育てばガキはみんなDQNかアホにしかなるしかないよ」

公団住宅と思われる数棟の建物が立ち並んでいる。反対側の河川敷にも人は多かった。土手の人々も含めてみんな、そこや周囲の小さな家々から湧き出て来たのだろうか。

トリルはまだ言いたかったことをすべて話していないようだった。「ある意味、平等かもね。だから、お金がなくても学歴が低くても劣等感を感じずにすむわ。山の手ほどにはね」

彼女は続けた。

「区役所にいる知り合いの話だと、福祉で暮らしてる人なんかも都心よりこっちは何かと住みやすいから移ってくるらしいわ。障害者みたいな人を見ることも、この辺の方が多いみたい」

そろそろ太陽は傾き始めているようだった。

夕食の材料らしいレジ袋を下げた主婦や子供が通る。

「次の食事に何を食べるかや他人に何かお節介ができないかを考えたり、いい女とやれないかとか、いい思いをさせてくれる金があるて顔もいい男とつきあえないものかとか、そんな妄想をするだけで結局は自分と同じような性格の悪い貧乏人と一緒になって、周りから遅れていくことにいつもびくびくして、自分よりちよつとできの悪い奴を差別することで自尊心を満足させて、テレビを見て、ギャンブルをやって、居酒屋やキャバレーで自分と同じような人間を探して喋っての毎日。そして人生の中にはそんなことばかりしかなく

て、ただ年をとっていくんだわ。くだらない奴らよ。そんな人間じゃないよね」

40 > / d d <

「ルネさんはミュージシャンなんだね」

しばらく話題が途絶えた後、トリルは言った。でも、あらかじめ用意してあった質問を、ここで出したのかもしれない。

「ミュージシャンって、プロだったってわけじゃないよ。今はPCでDTMやるくらいだし」

「ギター？」

トリルは、ちょっと通ぶった尻上がりのイントネーションで尋ねる。

「まあ、楽器でできるのは、それくらいかな。キーボードはコードが押さえられるくらいだし」

「ライブハウスなんて出てたりしないの？」

以前やっていたバンドで、そういう場所にも何度か出たことはあった。出演する連中も客も何だか芸能界の箱庭を作ってその気になっている感じで、ただ他人の辛辣な悪口を言って楽しんでいるような記憶が甦るだけだったので、ルネはトリルに、その頃のことを話すこともなかった。

「もしかして、ヘルターさんと、その頃の知り合いかなと思って…」

「ネットでちょっと見た限りでは、やってた時期が何年かずれてるみたいだった。場所もちよっと違ってるし」

メールが入ったらしく、トリルはケータイを取り出した。歩きながら画面をしばらく眺めた後2・3度ひとりで頷いて、それから茶髪

の少女たちがよくやっているような手馴れた感じで素早く親指を動かしていた。返事を打ち込んでいたのだろう。

間もなく送信を終えたようだったが、トリルはその後もケータイの画面を見つづけている。どこかのサイトにアクセスしているらしい。歩く方向に視線を向けていないので堤防の端へ踏み出しそうな場所まで行ってしまい慌てて方向転換した。

「ねえねえ、携帯サイトって、どうやって作るの？」

トリルはネイルアートを施した手でルネの方に画面を向けた。

「『どうやって』って、携帯のにしたってインターネットであることは同じだから基本は普通のPCサイトと変わらないわけだけど、携帯の小さい画面でも見やすいようにデザインするとか、容量が大きいと表示できなくなるので、その辺に気をつけるくらいかな」

表示されている文章にはケータイ特有の絵文字が多用されている。でも、むしろルネが目をやったのはトリルの爪の方だ。群青の中にラメやスパンコールが輝いている。そこは世界のリアリティーから隔絶された、トリルのこじんまりとした宇宙のように思えた。

「HTMLで書けばいいの？」

「将来的なことを考えればxhtmlを使った方がいいけど、今のところは普通のHTMLでもほとんど問題なく表示されるみたい。

でも、スタイルシートは機種によってしか使えないし、JavaScriptは多くの場合、動かない」

「xhtml？」

トリルは黒いデイパックにケータイを入れ、ペットボトルを2本取り出した。1本は3分の1ほど飲まれている。口を開いてない方が手渡され、ルネはちよつと掲げて謝意を表わしてからキャップを捻った。

「基本的にはHTMLと同じだけど、違ってるのはタグを全部閉じなければならぬこと」

「あたしはホームページを作成ソフトでやってるから、ソースのこ

とはあまり詳しく知らないの」

もつとも、トリルが見ていたのはフォームに打ちこめばすぐ作れるテンプレートのサイトかもしれないとルネは思ったが、それまでの話題を続けた。

「例えば太字にする>b<タグだと終わりのところにスラッシュの入った閉じるタグを書くだろ?。>b<sample>/b<という感じ」

「そのくらいならわかるわ。リンクを作る>a<タグなんかでもそうだよな」

「でも、例えば改行の
ではHTMLだと閉じるタグは必要ない。」

「じゃあxhtmlでは</br>というのも書くの?」

ルネは首を横に振った。

「
というふうにスペースとスラッシュを入れるわけ。

こうすれば、ひとつのタグでいいんだ」

「ふうん」

「画像を表示させる>img<のタグも、
と同じで閉じるタグとのペアはないよね。だから>img src="sample.jpg" /<というように書くわけ」

トリルは一口飲んだペットボトルをデイパックに戻し、左の肩片方にだけ掛けた。

「マニアックなことにずいぶん詳しいんだね。ウェブデザイナーなの?」

「そういうこともやるけど、要するに便利屋みたいなもんだよ。まあ、仕事を回してくれる人がいるから…」

「でも、そういうスキルを持てれば就職もできるしね。あたしみたいなニートと違って。あ、今、少しはバイトしてるけどさ」

駅の近くの居酒屋に週4回出ているらしい。マックの方がいいのだが採用されなかったと言って、トリルは口を尖らせた。

「IT企業なんて、みんなタコ部屋だよ。C言語なんか書けるプログラマーにしたって徹夜とか多くてたいへんみたいだしさ。それに今時の会社なんてみんなサービス残業だから時給に換算してみたら悲惨な金額にしかないって。今の日本の会社なんて、みんなそんなものかもしれないけどね」

「そうだねえ。じゃあ自分で会社を作っちゃったら？そういう仕事ならあまり元手がなくてもできるんじゃない？あ、でも、うちの父さんも中小企業やってるけど、今日潰れるか明日潰れるかだもんね。下請けで車の部品とか作ってるけど」

このあたりには高層の建築物はほとんどない。ずっと西の方には池袋や新宿のビル群が見渡せる。かろうじて30階程度のマンションらしい数棟の建物が右斜め方向に建っていた。

「あそこに尾崎豊が住んでたんだよ」

トリルが指差したのは、その建物だった。ちよつと前なら“近未来的”などと表現されただろう悪くないデザインだ。

尾崎豊は死の少し前に北千住のどこかに倒れていたのだが、その近くの家が“尾崎ハウス”と呼ばれてファンのたまり場になっていることならルネも知っていた。でも、彼が子供時代を過ごした実家はたしか埼玉県朝霞市だったはずだ。朝霞市は東武線でも池袋から出ている東上線の沿線で、この辺りを走っているのは東武伊勢崎線だ。

「奥さんは足立区の人だからね。西新井って、東武線で四つ目のとこだけ」

ルネの疑問を察知したかのようにトリルが半ば独り言で呟いた。

トリルは次の階段がある場所に来ると川とは反対側に降りた。人影がほとんどなく、たまに車を通るだけの道を所々で曲がりながら歩いて行く。

宅地いっぱい家が建てられている場合が多く、建物と建物の感

覚は数メートルもない。庭というより緩衝地帯のスペースに草花の入ったポットが並べられているのがルネには人々がかかるうじて持っている自負を象徴しているかのように見えた。

とある横道を入ると、車は入れないほどの通りの両側に商店が建ち並んでいて、買い物客でごった返している。

スーパーなどと違って、店頭には干物や惣菜が剥き出しのまま置かれていた。その先には短いアーケードがあったが、そのあたりは薄暗くて湿った感じがする。どこか影が薄く生命力が乏しい感じのする店の女主人と、肌目のコントラストが強い顔の客らしい中年女は、ルネたちが通り過ぎた時、知り合いの誰かの噂話をしているようだった。

あちこちで立ち話をしているのは地域内での顔見知りが多いからだろうか。それぞれの内容に聞き耳を立てたわけではないが、そこではあらかじめ設定された共同の物語をなぞるような予定調和の会話を交わすことが義務付けられ、誰もがけっしてそれを逸脱することはないようにルネには思われた。

商店街を抜けるとまた以前と同じような街並みが続く。所々にアパートと思われる2・3階建てと駐車場があった。人々の定型化された毎日が発する澱んだ気体があたりに沈殿しているかのようなのだ。トリルがさっき言っていたように、この町は世界から少しづつ押し出された人々を招いている蟻地獄のようなものかもしれないとルネは思った。

トリルにはどこか目的の場所があつて、そこに向かっているのかどうか、ルネにはわからないし尋ねることもしなかった。

ふと気がつくと尾崎豊のマンションが斜め前に見え、かなり近い。そこからも狭い道の角をいくつか曲がった。

、比較的車の多い通りに出て少し歩くと『京成関屋』という駅の前

に来ていた。小さな駅なので外から改札が見える。その近くにももうひとつ駅があるようで、少し歩くと線路が見え電車が左方向に走り出て行った。さつき河原で見た東武線のようなようだった。

突然、ルネの頭の中に衝撃が走った。でも、それは殴られるといったような物理的な打撃を受けたのではなくて、突発した出来事のためだ。それまでは緩慢に流れていた時間が急に奔流に変化したように感じるが、それは血液の流れだったのかもしれない。

咄嗟のことで、それが何なのかルネにはすぐに掴めなかったが、とにかくそこに突然現れたのは黒い影のような濃密さをもった気配で、犬小屋や動物園の檻によくあるような臭気を伴っている。

黒い影は後方からいきなりトリルに飛びかかった。小さな驚きの声を上げ、バランスを崩したトリルは影と折り重なって路面に倒れる。その時になって、ルネはトリルに抱きついているのが頭頂部の薄くなった中年男だとわかった。

男は笑い声とも動物の鳴き声ともつかないものを断続的に発している。

そんなに人通りは多くなかったが、たまたま通りかかった老女が危険を避けようと思ってか十数メートル先まで逃げるように走り、立ち止まって様子を見ている。駅の入口には待ち合わせらしいスーツの男が携帯電話で何か話しながらこつちを見ていた。自転車を通りかかった作業服の中年男が、やはり少し離れた場所で停まってなりゆきを見守っている。

そのうちルネは男のあげているのが笑い声だと気づいた。トリルも一緒に笑っているようだ。二人は笑いながら立ち上がった。男はトリルの手首を掴んで走り出す。東武線の駅の方角だった。怪訝な顔で見つめている人々の前を通る時に「何でもありません、何

でもありません」と繰り返し、もう一方の手を横に振った。

「兄ちゃん、あんたもだよ。来るんだ」と早口でルネに指示する。ルネも二人の後を追って走っていた。

京成関屋のすぐ近くにあるが、こちらは『牛田』という駅名だ。切符の販売機の前で立ち止まろうとしたルネに、男は「大丈夫。切符はあるからよお」と手招きし、自動改札の端にある入口に向かった。「ちいーす」と窓口の駅員に声を掛けて通り過ぎる。駅員はただ無表情で何の反応もしなかった。

41 > / d t <

男はホームで電車が来るまでの間、周囲にせわしなく目を走らせていた。

アナウンスがあつて、駅の隣にある踏切が警報を鳴らし始める。電車が見えた時、彼はまるで幼児のようにはしゃいだ。

男に押されるようにしてルネたちも電車に乗り込んだ。比較的空いていて、男は背泳の選手のスタートみたいに座席に座り込むと、自分の横を両手で叩き、舞い上がった埃に顔をしかめながら二人に座るよう促した。

「さつきほら、関谷の駅の脇にリーマンがいただろう」

男のすぐ隣に座っていると、さつき感じた犬小屋とも動物園の檻ともつかぬ臭気が断続的にルネの方に流れてくる。男の身体が発しているのか衣服に染みこんでいるのかだろう。赤いトレーナーの肘のあたりが伸びてたるんでいる。色も少しくすんだ感じた。しばらく洗っていないのかもしれない。

「あの野郎、110番してやがったからさあ。やばかったよ」

ああいう状況でも彼は周囲を観察し、聞き耳を立てていたらしい。

「まあ、俺とこいつはダチだからよお。ちょっと歳は離れてるけどな。あ、援交じゃねえよ。俺は金ないしな。久しぶりだったから、ほら、ハグってやつをやって再会を喜び合ってたんじゃねえかよ。なあ、明日香。何も疚しいことはしてねえよな」

男はトリルの肩に手を回した。車両が空いているといっても多少の乗客はいたのだが、そんなことは意に介せず、馴れ馴れしく身体を凭れさせる。男がトリルのことを明日香と呼んだので、ルネは、それが初対面の時に聞いた本名であることを思い出した。

「とにかく通報が入ったら、必ずポリ公が見に来るからな。電話で何もありませんでしたって言ったって来るんだよ。そういう規則になってるんだ。本当に何かあったら責任問題だしな」

トリルが少し姿勢を正したので、男は凭れかかるのを止めた。

「ネズミヤさん、大丈夫だよ。おまわりが来たら、あたしが説明してやるからさあ」

「いやいや、ポリが来たらな、当然なんだかんだ職質やられるだろう？そいでもって住所不定ですなんて言ってみな。『はい、では任意同行お願いします』になるわけ。事実上逮捕だけだな。ワッパかけられないだけのことさね。罪状なんて後でなんとでもつけられるしさ」

トリルにネズミヤと呼ばれた男はジーンズの上端を摘んで引き上げた。ウエストのサイズが合っていないのかもしれない。一見、ストーンウォッシュだが自然に摺り切れてきたようにも見え、色の薄くなった部分は汚れが目だった。

「それで所轄署へ行って取り調べだ。余罪の追及とか言って、ねっちりとな。未解決の大きな事件で、ちょうどその時アリバイがなかったりしてみな。犯人だとでっち上げられ、死刑台までベルトコンベアで送られちまう。ほんとだよ。特に俺みたいに前科があったりしたら裁判でどう申し開きをしても駄目。判事が『こんなのは人間の屑だから社会にとって害にはなってもいいことなし』で死刑。これにて一件落着。世の中そんなもんよ」

次の駅から乗って来て近くに座った初老の女は手持ち無沙汰げで、ネズミヤの話に耳を傾けているようだったが、一般ピープルにはちよつと刺激の強すぎる内容らしかった。ネズミヤの語気が荒くなるのに合わせて目をぎゅつと瞑るので、目尻に深い皺が寄る。時々目を開いてずり落ちかかった細いメタルフレームの眼鏡を元に戻した。どこか離れた場所に移りたいように感じられたが、それはネズミヤが話すたびに唾を飛ばすからだけではないだろう。でも、彼の前であからさまな行動を取るのをためらっているのが想像された。

「なあ、死刑囚って学歴の低いのが多いだろう？ 字も満足に書けない奴だっているぜ。まあ要するに、そういうのが生贄にされるんだよ。根性があるから再審請求やって通る人もいるけど、でも判決が間違ってたってどういうこと？ なにしる死刑だぜ。3年や5年のシヨンベン刑でそんなこと訴える奴ってあんまり聞いたことないんだよなあ。まだ命があつて出て来てるのによお。それだけ裁判はいいかげんっていうか差別があるってことだわさ。きっと無実で殺されちゃった奴はいっぱいいるんだろうぜ」

ネズミヤは女を横目で一瞥してから正面を向き、ちよつと間を置いてからぼそりと言った。

「俺はいろいろ苦労してるからわかるんだよ」

電車が鉄橋を渡っている。間もなく終点浅草に到着との車内アナウンスがあると、窓の外はもう浅草駅のホームだった。

電車から下りるとネズミヤは「ああそうだ」と言つてジーンズのポケットを探り、数枚の小さな紙片を取り出した。裏側の磁気面上を向いているのがあつて、それが切符だとわかる。地下鉄やJRのものも混じっていた。

ネズミヤは、その中から東武線の切符を選んで前に出し、駅名と料金を1枚つつ確認している。

「えーと、この松原団地からののは160円精算だな。北千住から1

40円だと50円精算。あとは春日部とか遠いところのしかないな。しかも最低区間の140円。まあ、この切符で入った奴は定期を持っててキセルをやってやがるんだよなあ。窓口の横から駅員に定期を見せて出ていけば、自動改札の機械に引っかかることはない。ケチな野郎だぜ。まったく。じゃあ、こつちのを使って……」

ネズミヤはルネたちの方を見て笑った。

「そうすると、おい明日香、全部でちょうど260円だ」

ネズミヤは右手の掌を上にして差し出す。トリルが財布を取り出し小銭を数えようとすると、ネズミヤは「あ、そっちでいい。OK」と千円札を抜き取り、精算窓口へ小走りで向かった。

「あの人、駅のホームをうろついて、落ちてる切符があると拾ってるんだよ。もちろん切符だけじゃなくて、金目のものがあつたら何でも拾うけどさあ。何というか、もう習性ってより病気だね」

ネズミヤは精算を終えたらしく、窓口の横を通って外へ出るというジェスチャーをしている。

駅から出るとネズミヤは額に手をかざし、前方にある交番を遠目に覗き込むようにしていたが、反対方向に行くよう二人を促して歩き始めた。

「ああ、おつり。740円だったよ」

ネズミヤは手のひらを開いて硬貨を見せると、すぐにそれをジーンズのポケットに押し込んだ。トリルは少し不満そうな表情だったが、何も口には出さなかった。

「おお、それはそうと明日香、男ができたのか？まあ、よかったよな」

「ルネさんだよ。ぽえ村の常連」

北千住もそうだったが浅草の町も静かだ。今歩いているあたりは、このあたりの繁華街を外れた場所ではあった。それにしても都内では常にノイズともいえる通奏音が世界の底部で鳴っているような気

がするのだけれど、ここではそれがほとんど存在しない。

「常連でわけでもでもないですが、よろしく」

ネズミヤは外股で上体を少しのけぞらせる独特の歩き方をしながら手を上げてルネに応えた。

「ああ、ネット詩人さんか」

面と向かって“詩人”と言われたのは初めてだったが、ルネはその言葉に多少の違和感をもった。たしかに詩のサイトであるPoem Villageで投稿することもあるのだが、それは自分の中では詩というより曲のついてない歌詞のようなものだ。

日本語そのものがそうだけれど、特に語彙や表現によつて曲に乘りにくいものがあるから、日本語のテキストを見せることで脳内にグランジやプログレのような洋楽を鳴らすことを試みるといったらいいだろうか。もっともこれは、ルネがよく行つて、かなり影響を受けたサイトの管理人が言っていることだ。

「ネズミヤさんもばえ村に姿をお見せになるんですか？」

web上に自分の写真をUPしているような場合を除けば、オフで会つても誰が誰だかわからない。個人情報明らかにしていないことが多いし、それがあつたにしても年齢も性別も彼あるいは彼女のテキストの中から推測するしかないのだ。そういうわけでアイデンティティーがきわめて希薄だから物足りなかったり、続けていくのに不安を感じる人たちも多いらしく、最近ではオフ会やイベントなど、生身の人間とコンタクトしようとする動きが一部で盛んになつていくらしい。

「うん、いや、まあ、そういうわけでもないけどな。そのうちわかるさ」

ネズミヤは歩いて行く道筋で、その辺りのおばさんや店主ふうの人間を見つけては声を掛けた。相手は顔見知りのようではあるが、たいいてい、あまり歓迎しない雰囲気苦笑いを返すのが常だった。

川に沿つた公園に入り、歩いて行くとダンボールの箱を組み合わ

せ青いビニールシートで覆ったホームレスの住居が点在している。その中からちようど住人が出て来るのに行き会う毎にネズミヤは手を上げて声を掛けた。多くは比較的清潔な身なりで、中にはスーツの男もいた。

ネズミヤは長細い公園のずっと奥まで入っていく。もうそこは公園ではないかもしれない、ダンボールハウスも、あまり密集して建てられてはいなかった。

「おう、ここだよ。ここ」

ビニールシートにスプレーで抽象画のようなものが描かれているハウスの前でネズミヤは立ち止まった。

「お、着いた着いた。ここが懐かしの我が家よ」

ゴミ収集で出たものを拾って来たようなストーブや発電機や車のホイールが周囲を取り囲んでいる

ルイガノのミニベロが表に出た支柱にワイヤーロックで繋いであった。たしか、前が内装の3段、後が外装6段変速だ。ルネが眺めているとネズミヤは「それ、ギアが壊れてるんだよな」と言っ入口の施錠を解き、先に立つて中に入った。

「さあ、どうぞ。まあ本当に汚いところですが」

夕暮れが近い時刻だった。

ビニールの匂いを含んだ空気がハウスの周囲を取り巻いていて、それは異世界を防護しているバリアーのようにも思えた。

42 > / d l <

エスニックぽい古びたキャンドルスタンドに点火すると、光の輪の中に古い型のテレビやラジカセ、オーブントースターや電子レンジなど、それぞれ簀の子のような物の上に置かれているのが浮かび

上がる。ネズミヤは室内をひと通り見回し、ふんふんと頷きながら備品を確認しているようだった。純文学や漫画や実用書などの古い本が無造作に並べられた書棚の横にはギターケースが立て掛けてある。サイドボードには食器やグラスがひと通り並べられていた。

「いやあ、ちよつと出ているうちに何かかつぱられちまうこともあるからさあ。こういう貧乏人の物を盗ろうなんてとんでもねえんだけど、いるんだよなあ、そういう奴が。そんな奴は人間じゃねえから絶対死刑にするべきだな」

点検が終わると彼は、隅に置いてあるケータイの電源を入れ、座卓の上にあるノートPCを開いてスイッチを押した。ケータイとは細いケーブルで接続されている。電源は隅に雑然と置かれた物の中に伸びてその先がどうなっているかはわからない。

Windows 98の画面を見るのがしばらくぶりだったルネは、なんだか懐かしく感じられた。

PCが起ち上がるとネズミヤはIEのお気に入りの中からひとつをクリックした。どこかのサイトが表示されたがブロードバンドよりはちよつと遅い感じだ。

「これ、ネットに繋がってるんですか？」

「そうよ。ははは。まさかホームレスがこんなふうにしてインターネットをやっているとは、お釈迦さまでもびっくりだろうぜ。なあ、兄ちゃん」

「プロバイダーなんかは……？」

「うん、ケータイは知り合いのヤクザからせしめたんだがな。奴らから金を借りて返せないと、それで利子のいくらかでも払えってんで通帳とかケータイの契約をさせるだろう。まあ通帳はオレオレとかに使っただがケータイのほうがさばけなかったりするわけだ。それで俺がその辺のヤンキーなんかに10個くらい売りつけてやるんだよ。そうすると1個くれるわけ。料金の請求は来ないかわり、いつ電話会社が通信停止するかわかんないシロモノだけだな」

「ほら、こつちにもあるぜ」とネズミヤは、その辺りにあるセカンドバッグやリュックや紙袋を開いて中に入れてあるケータイを見せた。

「プロバの方はUGとかいう、そっちの方にちよつと詳しい連中ならすぐわかるような、まあ、そんなやり方よ。でも俺はメルアドもつてるし、サイトもあるんだぜ」

ネズミヤのハウスには冷蔵庫も備わっていた。独身者が使うような小型で古びたものだったが、開くと中のランプが点灯する。ネズミヤは氷の容器を取りだし、やはり古びたアイスペールに移してテーブルに置いた。

「ああ、電源はどうしてるかっていうとだな。まあ、そのうちわかるさ」

ギターケースの横にあつた焼酎の3リットル入りペットボトルを取ってテーブルの中央に置く。3個のグラスにそれぞれ氷を入れ焼酎を注いだ。

「はいどうぞ。そいでもって、俺はまあ見た通りのこういう者ですよ。この明日香、あ、トリルだったっけ？ まあ、こいつとはネット友ってやつかな。てことにしとこう。そいでもって、いわゆるホームレス。フォークシンガーに泉谷しげるってのがいるんだけど、あんた若いから知ってるかな？ その人に似てるってんで周りからはネズミヤシゲルって呼ばれてます」

ネズミヤはちよつとあらたまつて自己紹介をした。

中に入った時は例の犬小屋とも動物園ともつかない臭気に襲われ、それはまるで身体の全感覚を圧迫されるような気がするほどだったが、だんだん嗅覚が慣れてきていた。それでもビニールシートの匂いと混じつて辺りに充満しているものは、意識からすべて消え去つたわけではなかった。

アルコールで感覚が麻痺すれば気にならなくなるかもしれないと思ひ、ルネはグラスの焼酎を3口ほどですべて飲んだ。

ネズミヤは笑顔を見せ、どんどんやってくれとペットボトルを取ってルネのグラスを満たした。

「ああそうだ。この間はマツケンサンバを見つけてよお」

「マツケンサンバ？」

「いや、マツキントツシュだった。ここいらの野郎どもはマツキントツシュなんてハイカラな言葉は覚えられねえからよお。林檎のマークはマツケンサンバって教えてるんだ。上物だから見つけたら知らせろってな。ゴミ収集の場所を回って、まだ使える資源があれば持ってくる。そうすれば、ひいては地球環境を護ることもなるじゃないか。そういうのは俺たちホームレスの使命でもあるわけだ」

ネズミヤは上体を起こしてナチス式の敬礼をすると、また寝転がった。

「あの時捨ててあったのはなかなかいいのだったよなあ。それも、かなり新しくつてさ。OSXだぜ。でも、デスクトップだったから運んでくるのに難儀したってもんよ。一緒に行った野郎どものひとりが本体を自転車の荷台に乗つけて、もうひとりがモニターを担いでよお、そいで俺が残りのスピーカーだのキーボードだのを持って来たんだが、何しろ白金からここまでだからな。いやあ、きつかった。もつともそういう場所でなきゃ、お宝には巡り会えないわけだけど。とにかく俺にはマツクなんて扱いにくくていけねえから、知り合いの古物商に引き取らせて金にしたけどな」

「兄ちゃん、何か欲しい物があつたら言っとけよ。もし見つけた時は連絡するからよお」

それからネズミヤは、金持ちに囲われたホステスやモデルはパトロンが変わると部屋も引越すのだが、その時、もちろん金は男持ちで家財道具も全部買い替えるので、そういう地域を回るとよく掘り出し物があるんだと言った。

「まったく、最近の人間は物を粗末にするよなあ。外にある自転車、

ほら、兄ちゃんがさつき見てた輪っかの小さいのだけど、あれは西麻布で見つけたんだ。ちょうどねえちゃんが置いてくところだったんだけど、こんなでかいゴミを収集車は持っていないよって言ったら、じゃあおじさんあげるよだってさ。まあ、ここにあるものは、みんなそういう感じで調達してきたんだけどな」

ネズミヤは脇のクッションを取ると、それを枕にして横向きに寝そべった。

「おお明日香、俺は今日歩き回って疲れたからよう、適当にそこらのサイトを回ってその掲示板に何か適当なこと書いといってくれや。前にやったからわかるだろ？」

トリルは不承不承な様子でグラスを横に移し、ノートPCを自分の前に置いた。

「そこを見る連中が男みたいだったらうんと女つばくな。こっちのサイトを見に来たくなるようなうまいことを書いとくんだぞ。おまえならほら、顔文字なんか使ったりしてうまくやれるだろ。どうも俺はそうゆうの苦手なんだよ。女が多いのならそうだな、あれあれ、ジャーニーズ系。あんなのが管理人じゃないかと思わせるようなあの。よろしく」

「まったく。人使いが荒いんだから」

「立ってるものはチンポでも使えって言うじゃねえか。まあ、頑張ってくれよ。俺の貴重な収入源だからよお。下手な鉄砲も数撃ちや当たる、アフィリエイトも数うちやポイント貯まる、だろっ？」

ネズミヤは起き上がり、役者が見栄を切るような感じで言った。

「こっに見えても、俺はアフィリエイトだからな」

ネズミヤは自分の近くにキャンドルを引き寄せると、隅の方に積んであった雑誌の中からエロコミック誌を抜き取って、また寝転んだ。

「ついでだからうちのサイトのブログも適当に書いといってくれや。」

若い美人が書いてることになってるんだから思いつきり男心をそそるようなやつな。こういうのもおまえのためになるんだぞ。おまえ、プロのものの書きを目指してるんだろ。俺はおまえの考えを考えて文章を書く勉強させてやってるんだ。これも修行だよ。修行するぞ修行するぞ修行するぞ、だ。尊師の教えに従えよ」

トリルはあまりやる気のなさそうな表情でマウスのボタンを力チカチさせて目当てのサイトのページからページを巡っているようだった。

「そういうのだったら前に出会い系のサクラ、やったことあるよ」「ああ、どうせ悪い男に引っかけた、そんなのやる羽目になったんだろ。どうだ、図星だな。ということは、あの自称ミュージシヤンか？」

ネズミヤは目と、たぶん意識もエロコミックに奪われている。だからまるで、彼の中の自動システムのはたらきで喋っているかのように見えた。

「そうじゃないよ。別のネットの友達に頼まれちゃってさ」
遠くで車の音が聞こえるが、辺りは静かだ。

「うーん。でも、あのやり方、今から考えるとマルチとかの一種かもしれないなあ。それに、もっと怪しいこともあったけど……」

トリルはPCの画面に向けていた目をルネに移した。ルネと視線が合った。

「でも、その友達の女の子は亡くなったらしいよ。従妹だって人がメールで知らせてきたんだ。PCにあたしのアドレスが残ってたからって言って」

43 > x m p <

氏名 / まどか

HP / http://user.ACCESS.xx/hellomadoka/
タイトル / はじめまして

(*^-^*) まどかつす。

はじめて来ますた。

とてもセンスのいいサイトですね。

日記もとても面白かったよ。

文章すごくうまいね。(ー)

私のサイトにまた写真UPしたから見てね。

ヨロピク。

ちよつとエロっぽさ増量かもw

お待ちしてまーす。

(^o^)/

掲示板の投稿フォームにテキストが並んでいく。

ルネは、なんだか所在ないのでトリルの横へ行つてPCの画面を覗いていた。それと、何かきっかけがあつたら死んだ友達のことについて聞いてみようと思つて、そのタイミングを窺つてもいたのだ。死後、従妹からメールが来たというのもルネの場合と一致しているので、その友達というのは希羅々の可能性があつた。

「でもさあ、こんなことやつて本当にアクセス、増えるの？」

トリルがいかに面倒そうなそぶりと言つた。

「そうさなあ。まあ、この辺でもちよつと回つてみな」

かつたるそうに起き上がったネズミヤはPCの前の位置をトリルと代わり、お気に入りの中にある『セクシー まどか サイト』をクリックした。トップページは苺の壁紙で中央の写真は少女がフラックソーセージを口に突っ込んで笑うのとセーラー服の尻の方向か

ら撮ったものが数秒ごとに入れ替わる。たぶんgifアニメだ。

ネズミヤはページの右上にある『ユーザー・ログイン』というテキストリンクをクリックする。すぐに『ACCESS - Page ユーザー管理画面』に入った。ログアウトしないで常時ログインの状態にしてあるらしい。

「ここだよ。ここ」

ネズミヤは右の方にある『来訪者リスト』というブロックの上にポインタを移動させると、その上で何回か円を描いた。

「よう明日香。ここにHNとIPが並んでるだろ？俺のサイトを見に来たお客さんなんだがな。ここがHNになってるのはACCESS - Pageでホームページを作ってるユーザーでよう、ログインして回ると足跡が残るつつうわけだ。リンクになってるからそいつらのページに飛べるんで、たいていがアフィリエイトをやってるからどんなものか見てみるのもいいぜ。あ、行った先の掲示板でもブログのコメントでもいいから、いちおうどこかにカキコしとけよ」

ネズミヤはサイドボードの前まで行って引き出しから柿ピーとポテトチップを取りだし、開封してテーブルに置いた。トリルはPCの正面に戻ってリストの上の方にあるササキ1221というHNをクリックする。

『SASAKI LAND』というサイトが別画面で出て来た。右上の最大化アイコンを押すと画面いっぱいになる。背景やテキストの色、大きさ、フォントなどはさっき見た『セクシー まどか サイト』と違ってているが、タイトルやメッセージ、コンテンツへのリンクの位置などがほぼ同じだ。

無料のユーザー登録をして、設定画面でいくつかのテンプレートから好みのものを選び、色やフォントを選択するようになっていて、用意されている以外の画像を使いたければ自分のPCからアップロードすることができる。それから例えばプロフィールのページだっ

たらHNとか年齢、住んでいる地域、職業、趣味などをフォームに書き込んだり、該当するものを選択していく。公開したくないものはパスしていい。フリーページには個々の趣味で、詩や文章や写真を掲載したりする。毎日アクセスして日記を書けるようになっているし、掲示板もついている。このように必要な事項をすべて埋めて送信すれば自分のホームページが簡単にできあがるのだ。以前、ネットでのいざこざが原因と報道されている小学生同士の殺人事件があったが、その当事者たちも、こういうシステムでサイトを作っていたのだ。

『SASAKI LAND』のトップページは画像がいっぱい並んで一見華やかだったが、そこにあるのは皆、商品の写真でアフィリエイトのバナーだ。

バナーをクリックしてショッピングのページに行ったビジターが買い物をする、その額に応じてバナーを貼った管理人にポイントが貯まる仕組みになっている。ポイントが一定数になったら、それに応じた金額が自分の口座に振りこまれる仕組みだ。ACCESS - Palで貼るのが認められているバナーは経営を同じくするACCESS - Palショッピングモール内のものだけで、それ以外の商行為は一切禁止されているはずだった。ルネは仕事の関係でwebのさまざまなサービスについて調べたことがあったが、フリーのHPスペース提供では広告の表示でさえ禁止のところが多く、アフィリエイトが許可されているのは自社関係に限定されていることが多い。

日記のページに行くと、派遣社員として働く日常をネタに、ほぼ毎日書かれていているようだった。趣味の旅行で行った先々の写真を掲載したページもある。

トリルはBBSに書きこみ始めた。

まどかと申しますです。
足跡を追っかけてきました。
ご来訪ありがとうございます。
写真がベリイファンタスティック¥（ 〇 ） / !
私も旅行に行きたくなりました。
うちも面白いサイトになるよう
毎日頑張ってますから
また来てね。（はあと

他の書きこみを見ると、自サイトへのアクセスに謝意を述べたものが多かった。来訪者リストから様子を見に来たのだろう。

トリルは“×”のアイコンでページを閉じ、再び現れた管理画面のリストから、次のHNをクリックした。

Healing Life

私とダーリンと2歳の娘と3人の家庭の専業主婦です。ダーリンは家族のため一生懸命働いてくれています。ダーリンは毎日帰りが遅いですが、このご時世ですからサービス残業（；<|>；） 体を壊さないかと心配です。このサイトは私が主婦の立場から生活に役立つたり潤いを与えるアイテムを見つけてきてご紹介しています。

日記は毎日、その日見つけてきた商品のバナーを貼って、簡単な解説と感想を書いたものだった。

ユーザーのサイトをリストの順繰りに見てまわる。“優良商品情

報”とか“必見お買い得”とか、中には“あなたも年収1000万のアフィリエイターになれる”というHNもあり、見た時に3人で大笑いした。

これといったコンテンツがなく日記はほとんど書かれていない、アフィリエイトのバナーとそれへの簡単なコメントだけのサイトも数多く見られた。プロフィールはHNと職業/学校欄に“IT系”とか“主婦”とか“学生(院生)”がやけに多かった。これは設定の時にオプションメニューから選択したのだろう。後はトップページから商品のバナーがやたらに貼られ、いかがわしげなセールスマンのトークみたいな文章が綴られていたりで、そこにはマルチャネズミ講や宗教団体や催眠商法に似た空気が澱んでいた。実際、そういったサイトに誘導しているらしきものも見受けられるが、これは既定違反だろう。

一応のコンテンツが作られているサイトも多少はあったが、いずれもあまりあてにならない人生や商売での成功法とかヒット曲の焼き直しのような詩とか水着の小学生の写真とか駅の階段や更衣室での盗撮画像といった陳腐な内容ばかりだった。

44 > / x m p <

「おお、これ、仲間がどこかで手に入れてきたんだがよお。賞味期限を2ヶ月過ぎてるけど、なかなかいけるな。明日香、その左から2番目の列の上から5番目のサムネイル。クリックして大きい写真見せろ」

柿ピーをバリバリ噛み砕きながら画面を見ていたネズミヤが、口の中に残ったものを少し飛び散らせながら言った。

「うーん、いまいちななあ。もっと過激なのをと言いたいところだぜ。ACCESS - Palが管理責任を問われちまうからヘアヌー

ドはさすがに削除だろうけど」

「ネズミヤさんのサイトの写真はどうやって調達したんですか？」
とルネは尋ねた。

「ああ、あれか、検索に“女子高生”とか“ピチピチ”とかと“画像”ってキーワード入れて、引っかけたページからいただいたのよ」

「管理人に許可は取ったの」

トリルは次のサイトのBBSに書きこみを終えて閉じたので、また管理画面が表示される。

「それはなあ、おまえ、よく言うだろ？知らぬが仏って」

「でも、まどかって女の子が管理人のサイトってことになってるんじゃない？同じ子の画像が更新されるのを待って、またパクるんですか？」

「いやあ、別の子のでもOKよ。友達の写真載せますってことにすればいいさ。それでまたリピーターが増えればポイントに繋がるわけだ。ポエムもどっかのサイトで拝借しようと思ってたら、明日香がうまいこと書いてくれたからよお」

ネズミヤはルネのグラスに焼酎を足した。PCの画面に次のサイトが表示されている。

● d a i f u k u の ス ー パ ー ア フ ィ リ エ イ ト 術

わたしはこうして4ヶ月目には
月収3百万円を達成しました。

「ちつ、よく言うよ。しかしまあ、人間てのは浅ましいもんだなあ」
ネズミヤはポテトチップの袋の背の部分も力まかせに開き「食え

よ、食べ」とルネの前に置いた。拷問を加える刑吏のように見えな
いでもなかった。

「実際、アフィリエイトなんてそんなに金になるもんじゃないぜ」

ルネは、そのポテトチップを2・3枚食べてみたが、どうも油臭
さを感じる。やはり賞味期限をだいぶ過ぎているのかも知れないが、
まあ、腹をこわすようなこともないだろう

「例えばよう、兄ちゃん。あんた自分のサイトでこんなことやって
るかい？」

「僕はやってませんけど。だってクリックするのは、いいとこビ
ジターの何百人にひとりでしょう？ いや、何千人にかもですね。そ
れで、その中で買った契約したりする人がどれだけいるか考える
と、うちのサイトのアクセス状況では、たいして期待できないです。
どんなビジターが来ても、ただアクセスが増えればいいってもので
もないし。それに、ああいうバナーを貼つてるとウザがられたり、
そこまでして金が欲しいのかって反感買ったりしそうですからね」
「そうだよな。アクセスのめっちゃ多いサイトならビジターの0コン
マ何パーセントかが買っても多少の実入りはあるだろうよ。けど、
アフィリエイトしかやってないような糞面白くもないサイト、誰が
見に来るかって」

ネズミヤはポテチを取って数枚いっぺんに口に入れた。食べ終わ
って「俺はこういうギザギザの入ってるのが好きなんだよ」と言っ
たが、油臭さについては何も触れなかった。

「だからな、ここらへんのサイトの場合、アクセスが期待できるの
は同類のユーザーしかないのよ。管理画面に足跡があれば、どんな
奴が来たのか興味が沸いてクリックしてみるからな。実は、そうい
うのを狙って、ずる賢い奴らは巡回ソフトを使って周ってる」

「結構うまく考えてるんじゃない？。カウンターが回って悪い気は
しないし。毎日来てるのをリストで見れば親近感を感じるように
なる。べつにセールスマンみたいにウザいわけじゃない。どうせ買
うものだったら、少しでもご縁のあるところでバナーをクリックし

てあげようって気になる人もいると思うわ。無料のスペース提供だから、まともにサイト作ってる人だっているしね。結局最終的に儲かるのはACCESS-Parなんだろうけど」

トリルもひと休みなのか、グラスの液体をちよつと舐めてポテチを1枚だけ食べた。でも、それだけで後は手を出さなかった。

ネズミヤは画面を一瞥して話し始めた。

「でもよお、情けない話だぜ。自分にしろ父ちゃんにしろ、いつぱしの堅気の職業についてるんだろう。会社からちよつとした給料は貰ってるだろうに、そこまでして金が欲しいのかねえ。ぶつちやけた話、アフィリエイトなんて一日中パソコンに齧りついてても100円玉いくつかにもなんないような仕事だぜ。よくやってると思うよ。初めは良くても、いいことは続かないもんだよ。うーん、それだったらアルミ缶集めた方がいくらかましってもんかな。よくホームレスがやってやがるだろ？まあ、あれだってリヤカーいっぱい集めても稼ぎは千円か2千円ってものなんだけだよ」

ネズミヤは顎の、白いものが少し混じった不精髭を遊びながら話を続けた。

「とは言っても、俺の仲間が町内会で集めたアルミ缶を持ってこうとしたら会長のジジイが現れてああ、これは町内会の財産だってんで警察を呼びやがってな。そいでもって、そいつは横領で訴えられちまったよ。アルミ缶集めなんてホームレスにとっては数少ない現金収入なのによ。まったく世知辛い世の中になったもんだぜ」

トリルはアクセスしていたブログのコメント欄に書きこみを終えたようだった。

「今日はこんなもんで終わりにするよ。さすがに疲れた」

「おお、サンキュ。しかし、俺んとこのポエム書いてもらってた時にも思ってたんだが、その場に合わせてぴったりと言葉が出てくるのは、たいしたもんだよなあ。こりゃあやっぱり文才がなければでき

るもんじゃないぜ。経験を積んでるだけのことはあるよ」

トリルは疲れたのか焼酎のロックに酔ったのか、上気した顔で言った。

「ううん、前にやったところで文才なんて全然必要なかったよ。欲求不満のDQNやオヤジが相手だったしね。文学的な表現なんかしたって向こうには全然通じないわけ」

「どんなことをやってたの？」

話の成り行きがルネにとって興味のある事柄に近づいてきたようだった。だから、もつと核心に触れるようルネはトリルに話題を振った。

「うん、まあ、さっき言っただけに出会い系の掲示板でレスしたり、指示されたアドレスにメールしたりだけだね。あなたのお好みに適合すら相手として私が指名されましたとか、まあ、そんなやつ。文章は押さえるべきポイントがあって、後は自分で考えるの。メールは専用のソフトをインストールして、それを使うことになった。同じのを一度に何百とか何千とか送る機能がついてたみたいで、それを使うこともあったね。宛先だと思うけど、時々更新用のデータが送られてきて、そのファイルを上書きするんだけどね。あたし、コンピューターには詳しくないからよくわかんないけど、そのメールだと送信元が隠されたりしてたんじゃないかと思う」

トリルは「何か飲み物ない？アルコールが入ってないの」とネズミヤに尋ね、ネズミヤが冷蔵庫を開けている間にグラスの焼酎を2・3口飲んだ。

「なんだか変だったのは登録の時、すごく細かいことまでアンケートに答えるの。本名や住所や生年月日だけじゃなくて、今まで行っていた学校名を全部とか親の職業とか学歴とか彼氏の趣味とか学歴とか、もつといろいろね。それから『あなたが勤務している会社の重要な機密を知ることになりました。それには違法な要素も含まれています。もし告発すれば会社は倒産し、あなたは職を失うことに

なります。あなたの現在の年収は2000万円です。あなたはこれからどのように行動しますか？1．社会正義のため、マスコミや警察に知らせる。2．その事実は自分の胸に収めたまま退社して誰も知らないところへ姿を消す。3．法律上はどうあれ会社がそれほど悪いことをしているとは思わないので、それまでと変わらない生活を続ける。4．その他』みたいのとか、ほかにいろいろあつて1時間くらいかったかな」

ネズミヤは缶のドリンクを3本取り出して、二人の前に置いた。トリルにはコーラ、ルネにはコーヒーだ。自分の手に残ったウーロン茶のプルトップを開く。

「そういうのはACCESS-Palでもあつたぞ。もちろん俺は全部適当に書いたけどな。高見沢まどか。17歳。紅薔薇女学園高校2年在学中。現住所：世田谷区成城…。父親の職業：医師。父親の最終学歴：慶応大学大学院。つてな具合だ。ははは、ざまあみろ。まだ、いろいろあつたぞ。明日香が言つたみたいない心理テストか適性検査みたいのとか」

ルネも缶コーヒーを開けて口に運ぶ。“微糖”と書いてあるが甘味がけっこう強い。

「ふつうは、本名でちゃんとした個人情報を書くでしょうね。アフィリエイトのポイントは換金されて口座に振り込まれるんだろっし、でたらめだと支障がでますからね」

「まあ、俺は偽名の通帳を手に入れてるけどな。例のヤクザから」ネズミヤはジーンズの後ろポケットに差してあつ財布を取り出した。皮製の意外と立派な物でブランド品かもしれない。開くと中にある紙幣は千円札が数枚のようだったが、紙片の間に挟まっていたプラスチック板を探し出し、キャッシュカードもあるぜ、とかざした。

「あたしん時も、ギャラが振り込まれる口座を登録させられたね」何気でルネは尋ねた。

「トリルさんがやってたとその社名は何ていったの？」

「アクセスパル」だったけど…。あ、今のはカタカナで書くか英語かの違いだけだね。同じ会社なのかなあ？株式会社アクセスパル 水野達彦…って、メールの最後に必ずあったのを覚えてるけど」同じ会社かどうかはなんとも言えなかった。インターネット関係の企業が社名に「アクセス」のついたものを考えるのなら、よくありそうなことだ。ただ、これでトリルの関わっていたのはタツヒコが経営していたアクセスパルだったということがわかった。

45 >div<

BBSやブログのコメント欄への適当な書きこみとはいっても、量も多かったのでトリルはかなり疲れたようだった。放心したような表情でFMのJ・POPに聴きいつている。ネズミヤは、また寝転がってエロ漫画誌を見るのに没入しているようだった。しばらく沈黙が続いていた。

ルネは手持ち無沙汰だったので、PCを引き寄せ、Googleの検索窓に「アクセスパル」と「ACCESS-Pal」のふたつのキーワードを入れてボタンを押した。いくつかのページがhitしたが、アクセスパルをM&AしたTIGERNET社が、後にACCESS-Palに社名を変更したくらいのことしかわからない。ライブドアはon the edgeに吸収合併されたが、その後、社名としてはライブドアの方が使われているのになぞらえて書いてあるものも多かった。

検索で出たページをひと回りしたがトリルとネズミヤはまだ、それぞれの世界に籠っているようだったので、ルネは詩関係のサイトをいくつか覗いてみた。

P o e m V i l l a g e の投稿欄には馴染みのないHNが並んでいる。以前の常連がこのサイトを離れつつあると言われているが、たしかに、そのようにも感じられた。

上から新しい順に並んでいる作品リストをスクロールしていくと、最下部に投稿ページへのリンクがある。ルネはそこをクリックした。投稿しようと思ったわけではなくて、ほとんど何気にしたことだった。強いて言えばページのデザインが変わっていることもあるかと思ひ、ちよつと覗いてみたのだ。

別にデザインを変えてはいないようで、背景もフォントも文章も、フォームの配置も以前と同じだった。ただ、ひとつだけ気になることがある。

それは、投稿ページの名前の欄が、すでに埋まっていることだった。これはc o o k i e の機能によって以前に入力された情報をブラウザが記憶しているからだ。c o o k i e は一度入力した名前やメルアド、U R Lなどを再度入力しなくて済むのでユーザーに取ってはなかなか便利だが、サーバーとユーザーそれぞれの意思で使わないこともできる。

名前の欄には“H e l t e r”とあった。

つまり、誰かが以前、このP CからH e l t e rというHNを使って投稿したので、その情報が記憶されたため、名前の欄にH e l t e rと自動的に記入されたことになる。

ルネは作者別のページでH e l t e rの作品一覧を開いた。いちばん新しいものは『コノ セカイニ アイヲ』だった。最近のことだし、この投稿があったことはルネの記憶にもある。

投稿された期日は20日程前だった。すでにH e l t e rが死んだ後のことになるから、誰かが彼のHNで送信したのだろう。そして、それにはこのP Cが使われた可能性も考えられた。

ルネは、またG o o g l eを開いて“コノ セカイニ アイヲ”

で検索した。

コノ セカイニ アイヲ . この世界のどこかで誰かが手首を切っている彼女の足元にしたり落ちる血液ちぎられた睡眠薬のパッケージの山WEBの日記に書かれたSOS . . .

作品自体が置いてあると思われるページはふたつあったが、そのひとつはぼえ村だったから、ルネは、もうひとつのページの方に行ってみた。アドレスバーのURLをIEの履歴にある3週前のデータと比較してみる。ルネは履歴の中に一致するURLを見つけた。つまり、このPCで投稿の頃、『コノ セカイニ アイヲ』のページにもアクセスしているということになる。HeiterのHNを使った人物が、このPCを使ってコピペと投稿を行ったのだろうか。そうだとすれば、それは誰なのだろう。

とにかく、ネズミヤに尋ねてみようというルネは思った。

その時だった。

「おい、ネズミヤシゲル。いるかあ？」

入口の向こうで男が声をひそめて呼んでいる。

ネズミヤが戸を開けると、薄茶色の作業衣上下を着た男が入口から顔を出した。笑顔が無邪気で人懐こそうな印象を受けるが、顔面の筋肉が少し緩んで動作も鈍く見える。アルコールがいくらか回っているらしかった。

「サツが巡回してるからよう、気をつけた方がいいべや。川下の方からだんだん回ってるから、こもそのうち来るかもわかんねえぞ。気いつけるや。何でも指名手配の犯人が、この辺りに潜伏してるかも知れんで、調べとるらしいっちゃ」

「指名手配だとお？イヌどもがよく言うよ。まあ、理由は何とでもつけられるんだからな。そんなのは国会だって皇居の中になって潜伏してないとは限らないわけだが、実際。要するに、奴らはこの辺

りを嗅ぎ回りたいんだよ。場所とか人間とか、自分らが把握できないものがあると、不安で居ても立ってもいらなくなるっていう犬どもの性分というか、一種の病気だな。まあしかし、こちらもやるべきことはやっとかにや。源さん、あっち頼むぜ」

「よしきた」と男は出ていった。

「兄ちゃん、パソコンを終了させてくれ」

ネズミヤはルネにそう言うのと、室内の点検をはじめた。

数分後、彼が戻って来たらしい足音が聞こえると、ネズミヤは隅の何かに掛けてあったカーテンのような布を取った。その下にあるのはコードリールで、PCの電源もそこに繋いであった。

「抜いて来たぞう」

外から源さんの声が掛かるとネズミヤはリールを回し始める。コードは結構長くて数十メートルあったかもしれない。ネズミヤは軽く鼻歌を歌いながら、結構楽しそうに巻き取りを終えた。

源さんが入口から覗いた。

「あのビルは外にコンセントをつけてくれるから助かるよなあ。

ご親切なことだ。しかし、電気料の請求を見た時、バレないかね」

「いやあ、何しろ昼間から照明を点けてるし、シーズンにはエアコンだってびんびんだぜ。こっちが控えめにやってりゃわかりやしねえよ。そうは言っても金はあっちが払うからっていい気になって使うと向こうもおかしいなってことになるからな。何事も控えめが肝心さ。まあ、あまり欲を出すと失敗するってこと。何事も程々に、だな」

「よし、いいな。ほんじゃ」と源さんは帰って行った。

「あいつはああ見えても大学中退なんだぜ。ま、この業界では中卒の俺の方がいくらか先輩だから、何かと面倒見てやってんだけどな」
ネズミヤは少し誇らしげにそう言った。

「あんたたちも、ここにはいない方がいいだろう。堅気の人がこう

いうところにいるのを警察に見られると不審がられて、いろいろ面倒なことになるかもしれんからな。ホームレスがいるのならあたりまえだよ」

ネズミヤの言葉に従いルネたちは外へ出て、彼からまっすぐ行けばいいと言われた方向に歩いた。

途中で進行方向から光力の強いライトがだんだん近づいて来る。やがて、パトロール中の警官二人とすれ違ったが、彼らはルネとトリルに特別な関心を示してはいないように見えた。彼らは何か冗談でも言い交わしているらしく、小声で笑いながら道の奥のほうへ向かった。

しばらく歩いてダンボールハウスの多い地帯を過ぎると、散歩なのか、それとも家に帰る近道なのか、時々人とすれ違う。ルネたちの後を20メートルほど離れて同じ方向に歩いている男もいた。何とはなしに、彼はこの辺りのホームレスのような気がした。ポロシヤツにコツトンのパンツで髪も比較的整えられていたが、彼らの多くは極端に不潔な格好をしているわけではない。

これといった話題もないので、二人はずっと沈黙のまま歩いていた。いや、少なくともルネにはトリルから得たい情報があったが、どのように話を切り出していかわからなかったのだ。しかしその時ルネの頭に、いい台詞が浮かんだ。

「僕のネットの友達も亡くなったことがあったよ。従妹っていう人からメールが来てわかったんだけど」

「希羅々さんでしょう？ たぶん、そうじゃないかと思ってたわ。ルネさんに会いたいと思って何度もメールしたのは、そういうのがあったからよ」

予測していたようにトリルは応えた。別に驚いたふうでもない。「それともうひとつあるんだけどね」

その時、ふたりは公園の門のところまで来ていた。その外は広い通りで、右の方向には交差点がある。二人はそちらに歩くことにして会話は途切れた。少し行くと近くに昼間降りた浅草駅が見えた。駅の建物はデパートになっている。その付近は明るくて人通りも比較的あるようだったが都内のマイナーな駅前より少ないくらいだっただろう。

46 > r u b y <

交差点を渡ると雷門方向の歩道はアーケードになっていて、その入口近くに『神谷バー』という店があった。ルネは雑誌の記事などで名前だけは知っている。トリルも初めてだということで入ってみることにした。

古くからある店というイメージを強調しているのかレトロな雰囲気の内装だったが、それなら同じような店はよくあるので、とりたてて珍しいものでもなかった。椅子が十脚ほど並べられた大きなテーブルがいくつあつて、客は、そのどこかに席を取るようだった。それほど混んでいるわけではなかったが、まったく客のついていないテーブルはひとつしかなかったので、二人はそこに席を取った。

とにかく有名なデンキブランというのを注文してみた。ちよつと薬草酒のような味だが実際、薬草も入っているらしい。結構美味しくて、それに1杯ではちよつと物足りない量だったので、二人ともお代わりを頼んだ。

話し声を周囲に聞かれてしまうので辺り障りのない話題に限定せざるを得ない。ルネは萩原朔太郎がここで短歌を詠んだことや、作者の名前や題名は忘れたが小説の中に出てくることなど、うる覚えの知識を話した。萩原朔太郎の名前は知っているが作品はというと

タイトルも忘れている。トリルも同じらしかった。

「中原中也や宮沢賢治なら覚えてるのもあるんだけどね」

デンキブランは少し甘味が強かったのでルネは2杯目までにして次に生ビールを注文した。トリルも同じように感じているらしく、それに倣った。

ルネたちはテーブルの門に当たるところで斜めに向かい合っていたが、中年夫婦はトリルの向かい側の長辺に並んで座った。

彼らはしばらくルネたちの様子を窺いながらグラスやジョッキを口にしていたようだが、やがて、まず夫の方が「ここは初めて？」と話しかけてきた。

「ええ、まあ」とトリルが応え、取りとめもない話を始める。ルネはほとんど聞き役に回った。

彼らはまるで、話をしないでいると衰弱して死んでしまう小動物で、そのため必死に喋っているように見えた。とは言ってもふたりともどちらかといえば大柄で、過剰な脂肪の付着を感じさせる体型だった。

夫婦はふたりに黒ビールを奢ってくれ、「なんでも好きなものを頼んで食べてください」と言った。

夫婦とトリルは楽しそうに喋り続けた。初めは萩原朔太郎の短歌のこととか、常連はデンキブランと生ビールを交互に飲むのだとか、その時の料理はにこごりが定番であるとかを夫婦がトリルに語ることが多かったが、そのうち北千住や金町や亀戸や小岩など下町の話になると、トリルも自分が生まれ育った地域なので積極的に喋ってかなり盛り上がっていた。

トリルの話の中で、いつしかルネは大学のサークルの先輩ということになっていた。トリルは文学部で中原中也を勉強しているのだそう。トリルの口から、ふたりや周囲に関しての捏造された出来事が次々に紡ぎ出される。なかなか見事なもので、こういうのがネズミヤの言う“文才”だとしたら、もったもなこともかもしれないな

とルネは思った

彼らが適当に口を合わせたり補足したりしている様子が、ルネには共同でひとつの物語を作り上げようとしている企てに見えた。

4人は一緒に店を出て、中年夫婦はもう1軒行こうと誘ったが、トリルも疲れたようだし、ルネたちは帰ることにした。

地下鉄に降りる階段の前で別れる。

トリルが中年夫婦と話し込んでいたので、遅くなっただけにルネは思い通りの情報を得られなかったが、まあ仕方がない。とにかく意識の中に、重金属の沈殿物のようなものが溜まっていて、その重みで地底に沈んでいくような気分だ。

部屋に帰ったルネは冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを出して、500mlの半分ほどを、ほとんど一気に飲んだ。

それからPCを起動する。Googleで検索して、ネズミヤのところ覗いた『コノセカイニアイヲ』のページにもう一度アクセスした。

その詩をずっと読み進んでいき、ある部分で目を停める。

9連の1行目は“そして みんなが還っていきたがる場所”だが、“還”の字に“かえ”とルビが振ってある。“還って”を“かえつて”と読むわけで、ソースでは“>ruby<還>rt<かえ>/ruby<つて ruby<つて”となっていた。

そして みんなが>ruby<還>rt<かえ>/ruby<つて
いきたがる場所>br<

この>ruby<のタグを使うと>ruby<と>rt<の間のテキストに対して>rt<と>/ruby<の間のテキストでルビを振ることができる。そして、コピペした場合にはタグの部分が抜けたテキストそのままになる。

これはIE対応なので、Netscapeでははたらない。非対応ブラウザで表示させたいテキストは>rp<と>/rp<の間に置くので、これを使えばIE以外ではルビの部分を“()”で括るといったような対応ができただろうが、ここでは行われていないルビは確認のため“還つて”の部分をドラッグし、Ctrl+Cを押さえてコピーした。メモ帳を開いてCtrl+Vで貼りつけてみる。メモ帳には“還かえつて”という文字がペーストされた。

次にPoem Villageで『コノ セカイニ アイヲ』が投稿されているページを開く。

9連の1行目を確認してみると“そして みんなが還かえつていきたがる場所”だった。

ぼえ村への投稿はrubyタグの入った文をコピペしたため“還”の後に“かえ”がある文になったと考えられる。そして、それには、同じ頃、元の文章と投稿フォームのある双方のページにアクセスしており、しかもcookieにHeaderのHNが残っていることから、ネズミヤのPCが使われた可能性がかなり高くなる。

ラジオではニュースが終わり、交通情報の時間だった。道路の渋滞や交通規制などを告げた後、アナウンサーが淡々と原稿を読み上げる。

東武伊勢崎線は午後9時40分頃、北千住駅において人身事故のため、下り線が不通になっておりましたが、先程、復旧しました。

浅草駅の近くでトリルと別れたのは9時を少し回った頃だったから、9時40分だと、トリルもちょうど北千住に着いた頃だろう。もしかしたら彼女の乗っていた電車で事故があったのかもしれない。そういえばトリルも酔って少しふらついていた。

でも、とルネは思った。何事につけ心配を巡らすのは不安神経症の患者に任せておけばいい。それに、電車の人身事故というのは、ほとんどが飛び込み自殺なのだ。今夜のトリルは、たぶん、リストカットもやらないような気がする。

翌朝、メールチェックの後でニュースサイトを見ると、こんな記事があった。

北千住駅で人身事故。突き落とし殺人か？

昨夜9時40分頃、東京足立区の東武伊勢崎線北千住駅ホームで男性が線路に転落。入って来た北越谷行電車で轢かれ即死した。男がこの男性を突き落として逃げるのを見たという乗客が複数いたため、北千住署で当時の詳しい状況を調べている。被害者は40歳くらいで黒のジャンパー、紺色のズボン。髪はオールバックにしていた。突き飛ばしたと見られる男は50〜60歳でカーキ色のような服を着ていたらしい。

第6話

47>/div<

チェックしたメールの中にトリルからのものはなかった。ルネの予想に反してはいたが、むしろ、それで少しほっとしたような気持ちがないでもない。

でも、トリルの場合はカウンセラーに通うような種類の病気もちらしいから、今は鬱状態で外界との接触を避ける期間という場合もあるだろう。

とにかくニュースサイトの記事によると、昨夜、北千住駅で電車に轢かれたのは男性だから、トリルではなかったわけだ。

それよりも、視界の外にあるけれど意識はその存在を感知している見えないパズルが、ルネに関心を向けるようはたらきかけている。

ルネは、まず『コノセカイニアイヲ』の掲載されているページにアクセスした。

ページのURLはhttp://world.ooo.jp/words/welcomeyou.htmlだが、これはhttp://world.ooo.jp/がアドレスであるサイトのwordsというフォルダ内にwelcomeyou.htmlというファイルがあることを意味している。この場合だと、サイトのURLになるhttp://world.ooo.jp/にアクセスすれば、index.htmlあるいはindex.htmというファイル名がつけられたトップページが開かれることが多い。

ルネはアドレスバーにあるURLのwordsから後を消して、Enterキーを押した。

白一色の背景に30pxくらいの黒いImpactのフォントで『many-worlds classics』とサイト名が記されている。その少し下のridgeの枠で囲ったボックス内に次のようなコメントがあった。

このサイトは200X年をもって更新を停止します。

その下にはコンテンツへのリンクが並んでいる。

WORDS LABORATORY PROFILE MEMOR
AND OM BBS (closed)

黒と微妙に違う濃いグレーで10pxの小さなテキストは、まるでそれぞれのページに行くことを歓迎しない意思表示をしているかのようだ。

最後にある“BBS”だけはリンクが切られているのでテキスト色の黒になっていた。他のはマウスが触れるとピンクに変わる。

まず、『PROFILE』をクリックした。

10pxくらいのテキストで中央に“name:多世界”とあるだけだった。

トップに戻って『WORDS』のページに行く。ここにはテキストのみの作品が2〜30篇置いてあった。そのいくつかをクリックしてみる

同じ作者なのだからあたりまえだが、多くは『コノセカイニアイヲ』と似た雰囲気をもっていた。サイバーパンクぽくてメツセージ性のある詩だ

『MEMORANDOM』は、“管理人がその時々、心に浮かん

だことを、とりとめもなく綴ったものです。”と前書きに示されている。エッセイふうの文章と云ったらいいたるうか。

例えばこんなものがあつた。

録音技術は初め、原音をいかに忠実に再現するかに苦心してきた。しかし、その後、ミキシングやエフェクトを駆使してナマの音とは違うサウンド空間を創造することに目覚め、それは現在に至ることとなる。これによつて音楽にもまた新しい地平が切り開かれたのだ。

また、映画が発明された頃、それは單純にそこにある出来事なり芝居なりを記録することに留まっていたのだらう。しかしその後、映像作家たちは彼ら独自の表現を見出すに至る。

それは例えば複数の映像を組み合わせてそこに新しい意味を作り出すモニタージュ理論であつた。病床の少女の次に花がぼとりと落ちるカットを見せることにより、彼女の死を表わすようなやりかただ。身体の一部といったある部分を強調することによつて、特別なメッセージの伝達を試みることもある。

映画は今や、CGやSFXといった手法も加わつて、單調な記録をはるかに超えた表現手段となるに至つてゐる。

TVが登場してきた当初、映画人はこれを<電気紙芝居>と呼んで蔑みの目を向けていたが、今や、TVの新しい感覚で作られたドラマが映画化されて多大な興行収入を上げるようになってしまつてゐる。

こうした影響は小説にも及び、従来の5W1Hで物語を順繰りに追う書き方から映像的な展開や描写がなされるように進化したものになつた。

メディアは下部構造として表現のかたちを措定しているのだから、新しいメディアが現れれば、当然、表現は新たなかたちを与えられるのだ。

しかし、詩の世界においてはWEBという新しいメディアが現れて、その上で発表が行われていながら、表現者が皆、現代詩あるいはそれ以前の形態に固執しているのは、今はまだ過渡期ということで済まされていい問題だろうか。

『LABORATORY』にはテキストを読むだけではなく、HTMLやmidiを使い、動きや音で視覚や聴覚に訴えかけることを意図した作品が置かれていた。

多世界は『MEMORANDOM』にあつた文章の中で述べられているWEBというメディアにおける詩の形態を、ここで試みているようにも思えた。

コンピューターに関するスキルは、かなりのようだ。ハッカーのようなこともやるのだろうか、と一瞬ルネは思ったが、別に根拠があるわけではない。

ルネは多世界のサイト『many-worlds classics』をひと通り覗いてみて、彼の思考や感性の傾向をいちおう掴めたように思った。ネット詩人の中では新しい領域を追及しようとする流れに属するのだろうか。

もちろんネット上の通例として、彼のプライベートな姿は、その片鱗さえも見るできない。

だが、蝙蝠のHNを使つて彼の作品をPoem Villageに投稿した者が、彼あるいは彼の作品を選んだ理由はどこにあるのだろう。それは作品や文章の中に存在するのか、それとも、このサイトだけでは見出せないところにあるのだろうか。

BBSは閉鎖されているし、サイトのどこにもメールアドレスが見当たらなかったの、それとなく多世界に質問することも不可能だった。

ネット詩に詳しい誰かに聞いてみようかとルネは考えた。

そろそろ昼食の時間だ。ルネは朝食が遅かったにも関わらず、いっになく食欲があった。自転車なら15分ほどのところにあるイタリアンレストランへ行ってみようか。

とりあえずtakayoへのメールを手早く書いて送信した。彼女が多世界について知っているかどうかはわからなかったが、何か手がかりに繋がることもあるかもしれない。

□ □ □ □ □

送信者 Rene

宛先 takayo

件名 おひさです。

もう長いこと、コンタクトがなかったですね。
お元気でしょうか？

ところで、今はサイトを閉鎖してる“多世界”さんて
ネット詩人さんのことなんですが、
何か知ってること、ありませんか。
最近、どうしてるかななどについても。

ちょっと興味があるんで
もしわかるのなら、よろしく。

それでは。

R e n e

P Cを終了している時、ラジオからニュースが流れた。

今朝5時20分頃、京都市にある華道高瀬川流本部の離れの同宗家、高瀬川雅堂氏の自宅書斎で、銃声のような音が聞こえたため夫人が様子を見に行ったところ、高瀬川氏が側頭部から血を流して倒れているのを発見しました。高瀬川氏の右手には拳銃が握られており、直ちに救急車で病院に運ばれましたが、そこで死亡が確認されました。警察では自殺の可能性が高いと見て動機や拳銃の入手経路について調べています。

関係者によれば高瀬川氏は、数カ月前に長女の麗佳さんが殺人事件の被害者となり亡くなって以来、落ち込みがちだったそうです。高瀬川流本部では昨夜の講習終了後に人の出入りはなく、家にいたのは雅堂氏と夫人、そして住み込みのお手伝いさん1名だけでした。また、警備会社によってセキュリティは万全に保たれていたということです。

48>frameset<

昼食をとって部屋に戻り、P Cを起動するとtakayoからのレスが届いていた。随分速かったが、たぶん彼女は昼にメールチェ

ツクする習慣なのでタイミングが良かったのだと思われる。

□ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 Rene

件名 RE:おひさです。

るねたん、

息災にしておられるか？（時代劇かよw

先日はぼえ村のオフ会に行って来ましたぞよ。
東京だよ。

大学の同窓会が時を同じくしてあったのでな。
いろんな人に会ったので、あゝ疲れた／（-_-）¥
でも、楽しかったけど。

ところで、お尋ねの件だが、
オフ会でお知り合いになった
某大物ネット詩人さんに質問のメルしました。
たぶん知ってるんじゃないか、と思うが…。
レスが来たら、また。

takayo

ここのところ、仕事はわりと少なかった。そういう時期なのかもしれないがサエジマさんも暇なようで、彼から直接入ってくるものはあまりない。でも、知り合いに便宜を図ってくれているようで、そちらから時々オファーがあった。

ルネは今すぐ金に困る状態ではないので、自分の時間があることは、それはそれでいいことだった。

ちゃんねる・ゼロを覗いてみると、ニュース板に高瀬川雅堂自殺のスレが立てられていた。そこそこの注目は集めているようだった。

・
・
・

184：名無しのニュースキャスター
娘さんが亡くなったのが堪えたんだろうな。
ご冥福をお祈りしますです。

186：名無しのニュースキャスター
ピラミッドの頂点に立って下部からの上納金を一身に集める。
ウマーな家元制度に乗ったお気楽な人生も
娘が殺されてから失速か。
ま、俺にとっては他人の不幸だから蜜の味だが。

187：名無しのニュースキャスター
もう華道なんて時代遅れ。
フラワーアレンジメントに押されて
落ち目だったからじゃないの？

188：名無しのニュースキャスター

いや、まだまだ婦女子の嫁入り道具として權威は保ってるぞ。
「名取り」だとか「師範」だとかをありがたがる香具師も多い。
そついうのを授けて法外な金をブツクルわけだが、
考えてみれば資格ビジネスの走りといえるな（笑

189：名無しのニュースキャスター
麗佳つてドブスも、凄くタカビーだったらしいでつね。

190：名無しのニュースキャスター
<<189

写真を見たことあるが、それほど悪くはなかったとオモフ。

191：名無しのニュースキャスター

高瀬川は脱税しまくり。

納税額を見てよく考えてごらん。

全国から集まる上納金その他の収益を考えたら
異常に低いと思わないか？

192：名無しのニュースキャスター

私はかつて某有名お嬢様大学に通っていました。

それで、地方の大地主とか実業家とか政治家とか元華族、有名人、
それに、ここで噂に上っているような伝統ある家系などの
子女の生態を間近で見ていたのですが、

たしかに彼女たちは金遣いも荒く、男性関係も華やかで、
一見自由奔放に毎日を送っているように見えました。

でも、その行く手には、どうしようもない定めが待ちうけている
のです。

学校を出たら彼女たちは一定期間、花嫁修行などをした後、
親の決めた相手に嫁がなければなりません。
これは彼女たちの拒否できない未来なのです。

上流社会では、まだまだ女は贈答品。

縁組は親たちがよりレベルの高い権力やより美味しい金づると結びついたり

ステータスを得たりするための格好の手段なのです。

だから彼女たちには自由な恋愛結婚など、けっして許されません。親から離れてOLの給料程度で生活していくことなど絶対できませんし、

だから、こういうシステムに肅々と従うしかないのです。

逃れるためには、芸術家にでもなって 成功するしかないでしょうね。

私はまあふつうのサラリーマンの家に生まれたのですが、

世の中、何が幸せといえるのかわからないなと思いましたよ。

麗佳さんという方が、そうだったのかどうかはわかりませんが。

193：名無しのニュースキャスター

<<191

華道ではないが、ある高額所得者は

代々日本の歴史を牛耳っているような某家系から嫁を迎えたため、税務当局からの追究も受けずにウハウハでやってるそうだ。

193：名無しのニュースキャスター

それでは高瀬川は何と結び付いてたの？

政治家？

194：名無しのニュースキャスター

我が日本国に巣食う害虫が自己駆除を行ったわけか。

まんせーwww

195：名無しのニュースキャスター

高瀬川雅堂は瑞穂の会の次のトップといわれている

魚田冬磨と親密な関係にある。

196：名無しのニュースキャスター

瑞穂の会ってなんでつか？

教えて、エロい人。

197：名無しのニュースキャスター

瑞穂の会は初代教祖の頃から「生涯惟芸術」とか言って

茶道・華道・陶芸など嗜む事を信者に奨励し、

また、教団の中にも習得のための機構を作っていた。

要するに月謝や資格の認定料をかき集めて儲けていたわけだが、その関係で高瀬川とは祖父（義理の…だが）の代から縁が深いのだよ。

198：名無しのニュースキャスター

<<194

このちゃんねる・ゼロの住人から忌み嫌われている

「ありがとうカルト」の筆頭と言っているいい偽善者集団。

このゼロちゃんて政府や既得権益階層に不利益な書きこみがあると反論したり、無意味な書きこみやAAを貼って

良識ある人々の注目を集めることがないよう謀略を巡らす

「ネット右翼」の多くは

瑞穂の会会員、あるいはここに雇われた者である。

199：名無しのニュースキャスター

<<194

教えてちゃんはこちらを見るべし。

<http://www.cultbuster.xx/>

200：銭形

レイカはネット詩人をはじめ、
知り合いのミュージシャンやラッパーといったメンバーで
しばしばドラッグパーティーをひらいていた。
厚生労働省の麻取が内偵中だった。

201：名無しのニュースキャスター

それは根拠があるんですか？

どこで、そんな情報を手に入れたんです？

202：名無しのニュースキャスター

<<201

高瀬川流の作業員、乙w

・
・
・

199に貼つてあるURLは最初の“h”を抜いてある。全部書くと自動的にリンクになって表示されるのだが、それだと余計にバイト数を使うから、スレッドの中にリンクが多い場合は早く容量の限界に達して書きこめなくなってしまう。それを避けるための常連の配慮だった。専用ブラウザでは“h”を抜いてもリンクとして表示される。ルネはそのリンク部分をクリックした。

49>frame<

「Cult Buster」

近年の日本におけるカルトの変遷

■瑞穂の会

瑞穂の会の創始者である魚田鎌足は1903年大阪府に生まれた。青年期には文学の道を志し、W大学に進む。書いた小説や詩を、伝手を辿っては作家、評論家、出版社などに見せて回ったが、それほど高い評価も受けず、日の目を見ることはなかった。そうこうするうち、満足に栄養の取れない困窮生活のためか結核を患うに至って大学を中退、文学の道は断念せざるを得なかった。

鎌足は病氣療養中、当時、人々の間に浸透著しかった『皆元教』の信者と知り合い、その勧めもあって“かみやどり”という一種の瞑想法を毎日行ったところ、当時は難病であった結核が完治する。そんなことがあったため彼は皆元教の教会に足繁く通うようになった。教理にも精通した彼は、教団の中でしだいに頭角をあらわしていく。やがて教主大河内龍之進も彼の能力を認め、鎌足を教団機関紙の編集長に任じた。彼にとっては昔取った杵柄の文章能力が、ここで生かされることとなったのである。

（『皆元教』のページ参照）

鎌足は教団幹部の中でも教主の信頼厚く、本人も周囲も2代目教主に任ぜられることを予想していたようだが、大河内は長女の婿に青年部部長であつた後藤多迦彦を指名したのだった。大河内は男子がないので事実上、多迦彦が皆元教の次期教主と認証されたことになる。

折りしも、皆元教の急速な発展を危険視した政府は、教義や大河内の発言などから皆元教を国体変革を図る邪教とし、憲兵隊と陸軍近衛師団は和歌山の本部を急襲、ダイナマイトを使って施設を灰燼に帰し、教主と幹部を拘束した。

この後、当局による信徒への弾圧は激烈を極める。すでに正式な後継の指名を受けていた大河内多迦彦は連日に渡る憲兵隊の拷問のため精神に変調をきたし、その影響は生涯、彼から拭い去られることがなかった。

教団弾圧時には、あらかじめ組織の詳細など多くの機密文書が持ち出されており、このため、権力側は教団の解体や幹部の公判を円滑に進めることができた。このことは、内部でも相当中枢に協力者がいたことを想像させるが、これが誰であったのかは歴史の闇の中に消え去ってしまい、今となっては知る由もない。

鎌足は次期教主の夢が破れたためだろうか、大弾圧時、すでに教団を脱会していたので、当局の追及を受けることもなかったようである。

その後、鎌足は東京の片隅でひっそりと日々を送っていたが、時が経つにつれて、かつての新興宗教系人脈との接触が復活した。また、いつしか彼のもとには、貧窮、病気、家庭の不和などの問題を抱えた人々が相談に訪れるようになって、彼もこれに丁寧に接したので、その数は次第に増していった。

この頃から彼は、内外の宗教、自然科学、社会科学などの本を読み漁り、それらを引用しながら自らの著作を書き始めた。これが『いのちの实在』であり、戦後に至っても書き続けられて全106冊、400字詰めにして3万枚に及ぶ大部となったが、これは教団がその資金の多くを出版に頼っていたため、鎌足としては次々に上梓せざるを得なかったという理由にもよるだろう。

内容的には、引用した文章を自らの論旨に都合よく配置しているだけで、元となるものの基本的な思想性はまったく無視、時には正反對の自論を展開しているというのが多くの識者の指摘するところである。また、宗教家に不可欠とも言える自らの神秘体験が語られ

ているのは、膨大な著作中、たった1箇所のみで、その内容も何かの剽竊かアレンジであるような胡散臭さに満ちている。

鎌足の我田引水を良く表わした例としてはキリスト教の原罪について述べている部分が上げられるだろう。彼は、聖書にある“人間は罪の子”という部分の真の意味を“包みの子”とし、人間は神の愛に包まれているからだと言主張するが、これは彼がキリスト教の根本である原罪をまったく理解していないことの証左でしかない。ヘブライ語や古代ギリシア語で書かれている聖書を日本語の語呂合わせで解説するとは、彼の底の浅さが露呈した笑止千万な話である。

キリスト教にしても仏教にしても、鎌足は自説の補強のため、当初は偉大な思想であるかのごとく称えて引用するのだが、結局はその根本のところでは否定するのである。例えば仏教に関してならカルマを否定する。善であり光であり愛でしかない神は、そのような人間にとつてよからぬものを創造するはずがないのだ。そして病気や死やあらゆる不幸は、すべて人間の迷妄から発する想念によって生じたというのが彼の唱えるところであった。

鎌足のもとに集まる信者の数は次第に増えたので、瑞穂の会として宗教団体の認可を受けた。神道を基本として天皇制を賛美する教団であるから権力側の覚えも目出度く、とりたてて活動に支障が生じることもない。

ただ終戦間近な頃、鎌足は、日本が負けるといふ想念をもたなければ必ず勝利できるのだと主張して頑強に本土決戦を唱えた。鎌足と瑞穂の会は、この過激な右翼思想ゆえに憲兵隊からマークされていたという話も伝えられている。

戦後、日本は表面上民主化されたが、東西の冷戦は深刻な事態となっていた。日本の共産化をなんとしても避けたいアメリカにとつて、右翼はひじょうに利用価値のある存在であり、瑞穂の会もその一端を担うことを期待された。

教団の学生組織は、60年、70年の二大安保闘争時、街頭やキャンパスで左翼と渡り合い、民族派勢力の中でその存在を多いに主張したのである。

しかし、すでに右翼思想では多くの信者を獲得することが出来ない時代になっていた。教団は、主婦層を中心に家庭の円満といった小市民的幸福の実現を掲げるソフト路線に方向転換し、過激な右翼の顔を表面に出すことは控えるようになった。教団の財政のかなりの部分は鎌足の著作の売上げで賄えるため、一般信者に多大な寄付を要求するようなことは少なくてすむ。そういうこともあって瑞穂の会は、比較的良心的で穏やかな宗教団体として新興宗教の中でも有数の信者を誇り、強力な選挙基盤として政界との関係も密接なものとなった。

豊富な財源によって大規模な宗教施設を各地に建設したのもこの頃である。このような唯物・形式主義は鎌足が著作などで述べていることと矛盾するのだが、鎌足本人はもとより信徒の多くは何の疑問も感じなかったようである。

しかし、ソ連の崩壊やバブルを経て国際情勢や日本人の意識も大きく変わっていた。

瑞穂の会は神道をベースに天皇中心の日本を奉ずる農耕文化的な思想とあっていいだろうが、そういったものは、いつしか、先鋭的発達を遂げた高度市場社会の日本にはそぐわないものになっていたのである。

今や瑞穂の会は、このような時代の進歩についていけない者たちが何とかそれなりにアイデンティティーを得ようと集まってくる場でしかなく、必然的に年寄りが増え、若い信者は次々離れていくこととなった。

そして、この頃、鎌足はこの世を去る。死は人間の迷える想念が

作り出すものだから実在しないというのが彼の説だったのだが、90代の高齢まで達したとはいえ、やはり死は存在したのだ。二代目教祖の喜代晴も、教団の大きな行事に出席する時以外は、ほとんど寝たきりらしい。教団で最も高い境地にいても死や病気の想念を払拭することが出来ないのである。これで愛想を尽かさないので、信者たちには『いのちの实在』をちゃんと読んでいるのかと聞いてみたくなるが、カルトに騙される人間というのは本当にお目出度いものである。

また、鎌足の死から間もなく、教団の広告塔の役割を果たしていた経営者の企業が倒産した。彼は親の代からの熱心な信者であり、この企業内では瑞穂の会に入信しない者は昇進もおぼつかなかったので、社員の多くが入信していた。会社のためひたすら邁進するのが神の道であるとマインドコントロールされ、サービス残業させられ放題でも文句を言わないのだから、企業の業績も伸びるというものだ。結局、無茶な海外進出を企てて失敗したのだが、これは二代目教祖喜代晴が、失敗や倒産は人間の迷える想念による。神を信じれば必ず成功すると炊き付けたからだという噂もある。

病気のため退いた二代目に代わり、教祖の座についたのは三代目冬麿である。彼は某キリスト教系大学に在学中の頃、瑞穂の会に入信した。ミッション系の学校にいた冬麿が神道系の教団に入るのも奇妙だが、この大学は、よく知られる右翼系文化人を複数輩出しているのだ。

また、過去の学長には、反社会的活動で問題を起すことが多い半島系カルト『神霊十字軍』の教祖を偉大な宗教家と褒め称えた者もいる。神霊十字軍は表面上はキリスト教を標榜しているものの、キリスト教・仏教・儒教など世界のあらゆる宗教を統合したと述べ、教祖は再臨のキリストを自称しており、多くのクリスチャンから異端視されているのは良く知られているところである。

（『■神霊十字軍』のページ参照）

世間に指弾されている霊感商法でかき集めた金の中から財政状態の厳しい私学に寄付したためのお追従と見る向きもあるが、はたしてそれだけなのだろうか。

教祖の座についた三代目冬曆は、信者の減少と老齡化に何とか歯止めをかけようと、瑞穂の会のあり方を根本的に変えることを宣言した。まず、若い層に不評だった初代鎌足の思想を封印し、教団をエコロジー運動重視に方向転換したのである。

冬曆は鎌足の著作のほとんどを絶版にするという画期的方策を断行した。鎌足の教えは文字や文章自体に立脚するものではないから、逐語的に意味を追っていくと、かえって誤った解釈に到達してしまうというのがその理由である。

これには信者の多くが戸惑いを隠せなかった。なにしろ高齡の信徒にとっては、鎌足の説いた皇室中心・家族や社会の和を強調した農耕文化的な教えこそが瑞穂の会の信仰であり、何やら今風なエコロジーという言葉に食べ慣れないファーストフードのようなイメージしかもてなかったからである。

また、専従職員や講師のように生計を教団に依存している者たちの多くも不安を隠せない。何と言っても出版は教団の財源の主要部分を占め、それは鎌足の著書、特に『いのちの實在』によるところが大きいからである。

そんなこんなで、冬曆の努力にも関わらず、集会で見るのは老人の姿ばかり、信徒数の長期低落傾向は依然として続いている。

また、教団を離れた信者たちが鎌足の思想を受け継ぐ原理主義的グループを作る動きも海外を含むあちこちで見られる。

最後にカルト関係をはじめとしてITから政治まで広い分野で活躍する社会派ライター、平次啓太郎氏の著書『地獄のメシア』に興味深い部分があったので引用しておく。

<マインドコントロールや靈感商法がメディアの追究を受け、広く人々の知るところとなった今、街頭での勧誘や訪問販売では成果を上げることができなくなった。しかし、神霊十字軍の暗躍は依然として続いている。いや、むしろ、以前にも増して活発かつ成果を上げていえるかもしれない。しかし、私たちは彼らの姿をほとんど見かけることがない。彼らはどこにいるのか？

彼らは今、別名で宗教団体を立ち上げ、あるいは既成の組織に入りこんで、そこを乗っ取るという方法で世間の目を逃れている。もう彼らは日本のカルトの多くに滲入し、その中のいくつかでは主導権を掌握している。前代未聞のテロ事件を起こした教団も、実は既に神霊十字軍の支配化にあり、その誘導によってあの事件を起こしたのだ。

特に教祖や教義が新鮮さと魅力を失い、信者に見放されて活動が停滞しているような教団は、彼らにとつて絶好の宿主である。寄生生物は、そこに住み着くやいなや、その高度な謀略のノウハウを用いて人々を欺き、善良な市民達の財産や若者をサタンへの供物とするため蠢きはじめるのだ。>

50>/frameset<

瑞穂の会について検索し、いくつかのページの内容を比較してみた。Cult Busterというサイトがカルト問題に批判的な姿勢であることを考慮して読むなら、アマチュアが書いた文章のぎこちなさはあるにしろ、内容にこれといった間違いはないようだった。かなりよくまとめられていると言えるだろう。

ちゃんねる・ゼロや、いくつかのブログでは、最近の話題をネタに瑞穂の会が叩かれていた。3代目教祖の魚田冬麿が講演に出かけ

冬曆のサイトを見ると、当時の日記には、レストランや料理店が軒並み閉店してしまつた状況下で、冬曆の妻がコンビ二弁当に不満そうだったとか、停電でホテルの客は全員ロビーに集まつて夜を明かしたのだが、若い頃の教団の合宿を想い出し懐かしかったとか、車で鉄道の動いているところまで脱出し乗車できた時、空席があつて座れたのが嬉しかった話などが書いてあつた。週刊誌には崩壊の危機にある教団という記事が書かれ、この日記からも引用され批判を受けていたそうだが、それでもまだ削除されてはいなかった。

[illegible]宛先
R
e
n
e

ルネ様

ネット詩の重鎮であるとともに、

それで、先日のお礼方々、ルネちゃんの質問も

メールで聞いてみましたところ、
早速レスをいただいたので転送しますね。

< 村岸達也です。

<

<< 村岸さん、

<< 先日はありがとうございました。

<< 初めは村岸さんのことを有名な詩人さんとは露知らず

<< ご無礼の数々、平にお許しくださいませ m (_ _) m

<

< 僕は別に有名というわけではありませんが（苦笑

< こちらこそ、失礼しました。

< お会いできて楽しかったです。

<

<< ところで、ご存知でしたら教えていただきたいことがあります。

<< 私のメル友のルネ君という人が多世界さんという詩人さんに

<< 興味があるらしくて、近況など知りたいそうです。

<< ネット詩に詳しい村岸さんに聞けば

<< わかるかもしれないと思ったのですが、

<< いかがでしょうか？

<

< ご質問の多世界さんについてですが、オンにしろオフにしろ僕とはこれといっ

< た接触のなかった方です。

< でも以前、ちょっと彼に興味をもって、ネット上限定ですが、いろいろ調べて

< みたことがあります。ネットでよくあるように彼も自分に関する情報を、あま

< り公開していないようでした。

<だから、本名とか経歴とか年齢とか、そういうことはわかりませんが、彼はも

<しかすると外国にいるんじゃないかじゃないかと思います。このBBSでだった

<か、そういうことを想像させるような書きこみを見た記憶がありますが、詳しく

<いことは忘れました（笑）

<これだけでは、あまりお役に立たないかもしれませんが。だから、どうして僕

<が多世界さんに興味をもったかということもちよっただけ書いておきましょう。

<何かの参考になるかもしれません。

<僕は一時、知り合いから声を掛けられて、あるWEBのプロジェクトに関わったこ

<とがあります。これは関係者以外にはあまり知られていません。簡単に言えば、

<まあ、ネット詩をもっとメジャーにしようではないかという企画というところ

<でしょうか。

<実を言うと、これは先日takayoさんが話しておられた希羅々さんにも多少関わ

<りのあることかもしれないんですが…。あ、もう一人の方にはたぶん無関係な

<ので、あの時は話題になかったわけです。

<その企画は、結局立ち消えになったのですが、ご質問の多世界さんはメンバー

< だったわけではありません。その過程で起きた混乱のようなこと
の中でお名前

< を目にしたのですが、けっして多世界さんから迷惑を蒙ったとい
うわけではあ

< りません。、彼はどちらかといえば被害者にあたります。

< ま、ここでは長くなるので、このくらいにしておきますが、もし、
ルネさんと

< いう方が詳しく知りたいとお思いでしたらメールをくださるよう
伝えてくださ

< い。過去の記録を調べたり、誰かに聞いたり、思い出したりする
ような場合、

< 忙しい時だとレスが遅れるかもしれませんが必ずお答えするつも
りです。この

< メールはルネさんに見せてもかまいません。

< それに、もしかしたらルネさんにも何らかの関わりがあるかもし
れませんので。

< それではtakayoさん、

< 遠くにお住まいのようですから、次のオフ会に出るのは無理でし
ようかね？

< とにかく、いつかまた、お会いしましょう。

<

<

<

< 村岸達也

<

<

takayoは村岸とあった時、希羅々の話をしたらしい。希羅々が、HP小僧というメルマガのスタッフだったかもしれないことを、ルネはtakayoから聞いたのだったが、その辺りに関してなのだろうか。それとも、ぜんぜん別の噂話をしただけだったのだろうか。

村岸の“ネット詩をもっとメジャーにしようではないかという企画”と似たようなことなら、高瀬川麗佳のグループも考えていたとどこかで読んだような記憶があった。たしか誹謗中傷のようなこともやっていたらしいから、迷惑をかけられた人間もいるのだろう。関係あるのかはわからないが、あの文章をもう一度探してみてもいい。でも、詳しく知りたいならメールするようにと村岸が言っているのだから、とりあえず彼に聞いてみるのが優先順位では早いとルネは思った。

なかなか要点がまとまらなくて、それほど長くないメールを書くのに1時間以上かかった。

ただ多世界の作品に興味があるということにして、これまでルネが知った、いわば水面下の事実には触れないでおいた。

51>strong<

レトルトの上部を千切り終わって、指先に少しいたカレーのルウを味見を兼ねて舐めてみる。コナツミルクが入っているルネの好みのカレーで、なかなかいい感じだ。へたなファミレスで食べるのでは遜色ないだろう。というか、ファミレスのメニューの多くは工場で作られ運ばれてくるのだから、レトルト食品と同じような

もののわけだ。

家で食べるのと違うのは、そこに集まるということだろうか。それぞれのグループや個人は見知らぬ間柄でも、ある場所に集まることに何かの意味が存在するのかもしれない

コンビニで弁当を買うのだって、時間差はあるが、その場所に向くという行為によって共有するものがある。人々は常に集まろうとしているように見える。

かれらは何かに参加したいのだ。ファミレスにコンビニに都市に、人々は磁性を帯びた砂鉄みたいに集まるようインプリングされている。

もしかすると、人々はコンピューターを通じて繋がるより、生身の肉体同士で集うことを根本的に必要としているのだろうか。

カレーのルウと昨日の残りのライスを入れた皿が電子レンジの中で回っている。

そうやって朝食とも昼食ともつかない食事を摂っている時、TVの画面に見慣れたオークションサイトが映し出され、アナウンサーは詐欺の容疑者が逮捕された事件を深刻な調子で語り始めた。

何度も犯行を重ねてようだが、それでも被害額は全部で数十万円程度だった。そのくらいでも、こうして実名を全国に晒されるところか、週刊誌やネット上で徹底的にプライバシーを暴かれたりする犯罪者には反論の余地がないからスケープゴートというか、まあ一般ピープルのいじめの対象にはうってつけなわけだ。

報道の仕方もオーバーなので、これではPCを使えない老人などはネットがとんでもない無法地帯に思えて近づくことに恐怖すら覚えるかもしれない。

しかし、冷静に考えれば、例えば詐欺にしてもオフラインの世界の方がそこかしこに蔓延しているはずなのだ。こうしている間にも詐欺師たちは電話帳やその他かき集めた資料をもとに電話をかけま

くり、あちこちで年寄りや頭の弱そうな住人の家のドアフォンを鳴らしていることだろう。

相手が知り合いであるため事件にならないケースも多いはずで、寸借詐欺どころではないスケールのもや、保証人になって全財産を失ったりするのは誰の周囲にもよくある話だろう。

比率で言えばネット自体での犯罪はあまり多くないような気がする。それに、ネットオークション詐欺にしても、出会い系や自殺サイト関連の事件にしても、多くは自己責任の問題だし、メールでの脅迫などに至っては受け取る側が過敏過ぎることも多いだろう。実際そこにはただ文字の羅列があるだけで、画面の向こうの相手は、自分に指一本触れることもできない。

それに、法に触れることがない限りは匿名性の世界だが、当局の強制操作が及ぶような問題なら、多くの場合、サーバーのアクセスログから個人を特定するのは簡単なのだ。

泣き寝入りの例は少なからずあるだろうが、しかしアナーキーに近い状態のネットで、これほど犯罪が少ないのは、人間の性善説を信じてもいいのではと思えるほどだった。

昼食を終え、PCを起ち上げるとサエジマからメールが来ていた。

□ □ □ □ □

送信者 Y・Saejima

宛先 ルネ

件名 営業休止のお知らせ

ルネ君、こんにちは。

急な話ですが、うちのサエジマIT（株）は

しばらく仕事をお休みさせていただくことにしました。

実は取引先のいくつかがM & a m p ; Aに会って、

これからは親会社と付き合いのある業者に発注することです。

私にはローンなどもあるので、新たな取引先を開拓するまでもちこたえる余裕があるか疑問です。

そういうわけで家は引き払い、会社は一時休止にして

妻の実家のある福島で、しばらく暮らすことにしました。

当分は運転手でもやるつもりです。

でも、そう遠くないうちに再起したいとは思っていますので、その時はまたよろしく。

君に紹介したクライアントには、

仕事が丁寧でセンスもいいと好評なので、

また何かと依頼があると思います。

ていうか、君くらい仕事ができたら

会社でも作ってやってみたらと思わないでもないが

そっというのは君の性格には合わないかな？

ちなみに、M & a m p ; Aされた先は例のA c c e s s P a l つ
てところだけど、

最近何かと話題だから、名前くらい聞いたことはあるでしょう。

そっいうことで、妻やママからもよろしくとのことですよ。

また、この業界に戻ったら、

何かお願いすることになると思いますが、

その時はよろしく。

落ち着いたらメールします。

それでは、今までいろいろありがとう。

冴島

52>/strong<

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

送信者 村岸達也

宛先 R e n e

件名 ご質問について回答

ルネ様

村岸です。こんにちは。

あなたには、やはり、僕たちのプロジェクトがどんなものだったかを簡単に述べ

ておく必要がありますね。

ひとことで言えばそれは、ネット詩をもつとメジャーにするということになるで

しょうか。いうまでもありませんが、いわゆるネット詩人さんの中には、素晴ら

しい才能をもった方が少なからずおられます。しかし、その方たちはメディアの

ようなメジャーな世界でしかるべき評価を受けているわけではあり

ません。優れた作品に日が当たり、できれば作品から得られる稿料や印税などで才能ある詩人さんたちが創作に専念できるような状況をつくれたら、と考え、あの計画をもちかけたのは、僕の古くからの友人で投稿サイトを運営しているAでした。

その計画とは、まず、ネット詩人の中からスターを誕生させるということでした

。候補は複数挙げられたのですが、結局、第1にプッシュする対象として選ばれたのは高瀬川麗佳さんです。

彼女は古今東西の多くの詩に触れ、そこから学び吸収していますから、作品のク

オリティはプロの批評家を満足させ得るレベルに達しています。しかし作風はポ

ップで、純粹詩を書く人にありがちな難解というような部分もなくおしゃれな

恋愛詩が多いのでティーンエイジャーにも受ける要素がある。ルックスもまあま

だし、名家の生まれなので話題性にも事欠かない。このような理由から麗佳さん

をメジャーな位置に押し上げ、ネット詩全体が脚光を浴びる突破口にしようと考えたのでした。

というわけで、何となくメンバーも集まりました。まずAと僕、そして麗佳さん、そして、紙メディアでも詩人として活躍されているSさん。Sさん

はコンピュータ

ーへの造詣が深く、多くのネット詩人などより早くから自身のサイトを作られて

いて、僕たちと既成メディアの掛け橋のような役割をお願いしたところ、快諾し

てくださいました。

それから、SさんのサイトのBBSの常連でオモニさんという方が、この計画に興味

をもっているということで、Sさんに紹介されて加わりました。

後は麗佳さんと親しい方が3人。そのうち一人はあの事件の時亡くなったdarkblue

さんです。

でも、結局僕は、そのプロジェクトを離れることになりました。AとSさんもです。

いつしか僕たちを除いた5人だけで、すべての話がんでいるような状態になって

いたからです。

僕たちがつんば棧敷（差別用語？）に置かれただけでなく、5人の行動には疑問

を感じることが多々ありました。ある特定の人を陥れようとネット上で誹謗中傷

したり、迷惑メールを送ったりしていたと聞いています。

私の友人のAは、麗佳さんたちのグループは「仮想敵」を作っているのだと言っ

ていました。彼はちゃんねる・ゼロふうに言えば「プロ市民」で、

反戦や環境問

題の運動に関わっているのですが、そういう団体の中ではよくあることだそうで

す。

組織にとって何らかの危機的状況を乗り切るため、仮想敵を定めて、それを攻撃

することによって構成員の結束を図るもので、なかなか有効な手段だそうですが、

これは宗教団体や、あるいは国家などでも歴史上で時々見つけられる話ですね。

まあ、僕はそのグループについてあまり把握していないのですが、その仮想敵に

されていた人たちの中に多世界さんや希羅々さんもいたようです。

麗佳さんたちの事件は僕も、報道で知っています。希羅々さんが亡くなっていた

ことはルネさんのメールではっきりと知りました。だからもう、この程度のこと

なら構わないと思うのでお知らせしました。

オモニさんという方は昨年暮れからネット上に姿を見せなくなっているそうです。

Sさんにメールして尋ねたところ、詩を発表する時は「オモニ」とは別のHNを使っていたようですが、何というのかは聞いていないそうです。

僕にわかることと言えばこのくらいですが、満足のいく答になったでしょうか？

それでは。

村岸達也

ルネがメールしてから2日経って、村岸からのレスが届いた。

内容から、村岸が関係者に問い合わせ、確かな情報を送ってくれているのが推測された。

文中にプロジェクトのメンバーは8人とある。

村岸、彼の友人A、紙メディアで活躍している詩人S氏、レイカ、dark blue、そしてS氏の紹介で加わったらしいオモニで6人だ。

ルネは以前、レイカに関連するサイトを回っていた時、村岸の言っている計画と似たような内容の記事を見た記憶があった。そこには、たしか、レイカのリンクページから行ったはずだ。

レイカのサイトはもう閉鎖されて存在しないので、かつてのURLをもとにInternet Archiveに保存されているページを探した。「ポプラの徒然日記」というブログを見つけ、行ってみる。

さて、受験はすべて失敗です。浪人して来年うまくいく自信もあります。受せんし、そのまま自堕落な生活を続けていたらフリーターやニートになってしまいそうな気もして、そのことを両親も心配しています。そういうわけで就職することにしました。すでに採用も決定しています。どんな仕事かは聞かないで下さい

もう僕が文章を書いて公開することはないでしょう。数カ月前、もう終わりにしようと思い、ここにも書きましたが、たしかにあの時からもう詩作はしてません。しかし何か残った未練のような感じで、

たまにこの日記を書いたりしてました。でも、本当にこれが最後です。
皆さん、ありがとう。お健やかで活躍されますようお祈りいたします。

2月下旬の記事を最後に「ポプラの徒然日記」は更新されていない。このままだと、数カ月にはブログの管理者によって削除されてしまう規定になっているだろう。

ルネの記憶にあった日記を探し、もう一度読んでいくと、次のような部分が興味深かった。

やがて、ここにいるみんなは有名になって、原稿料や印税など人並み以上の収入を得られるようになる。

名指しでの誹謗中傷のようなことは日常茶飯事でした。というか、みんなで意識をひとつにして、そこにいないスケープゴートを攻撃するゲームで僕らは盛り上がっていたのです。

そのメンバーは最初、8人でした。それが誰か？まあ、ここに来る皆さんは、ご存知ですよ。

その頃はレイカさんもまだ19歳だったから、みんな十代でしたが、
…

このあたりから、ポプラが村岸の言っていたプロジェクトのメンバーだったと結論づけて間違いはないだろう。

話の流れから言って、十代なのは先に脱退した村岸ら3人を除い

た5人についてだと思われる。

これでレイカのグループ8人のうち、7人のメンバーが判明したわけだ。

後のひとりだが、文中に“それが誰か？まあ、ここに来る皆さんは、ご存知ですよね。”となっているから、ネット詩人のある部分では、よく知られているのかもしれない。ポプラの文を読んだ限りでは、そのメンバーも当時十代だったのだろう。

そのページにあったアドレスでポプラにメールしてみたが、もう使われてないらしく、MAILER DAEMONからUser Unknownで戻ってきた。

第7話

53 > ! - -

P o e m V i l l a g e の作者一覧ページを開くと、HNがabc あいうえお順に並んでいる。ルネはそこから希羅々を探し出し、クリックした。彼女の投稿作品のタイトルから、気の向くままにいくつかの作品を読んだ。

希羅々の詩にファンが多いのは、何となくわかるような気がする。後を引くフレーズやうまさを感じさせる表現部分があつて、高瀬川麗佳がライバル視していたというのもなるほどと思えた。

しかし、少なくともルネについて言えば、読んでいくうちにそこに没入させられるようなことはなかった。けっして悪くはないのだが、ただテキストの上に目を走らせているだけで、そこに意識を集中させることはない。そういう印象は麗佳の作品からも受けるし、ネット上のあるいは紙メディアの詩でも同様だろう。

こんなことを考えながら希羅々の詩を見ていくうちに、ルネは、こんな作品のページを開いていた。

雷のキオク

希羅々

天国にたゆたうような
午後のまどろみのあと
まるで神のもとから
突然突き放されるように
光を失い 冷えていく世界

激しい雨音に 呆然としながら
考えてみれば

あなたの愛撫のあいだ中 ずっと
雲は湧き上がっていたのだ

醸成されていた世界の悪意が
ベランダの向こうで水煙を上げる

まるで私たちの原罪が
稲妻に打たれるようだ

やがて青空と光が戻って来ても
もう私たちは気づいてしまった

わたしたちがいたのは
きわめてみじめな世界の中だったことに

感想欄に、takayoの名前があった。

takayo：これは、まったく私の個人的な思いなんだけど、読んでいて恐くなる部分がありました。「まるで神のもとから突然突き放されるように」とか「原罪は稲妻に打たれる」のところでは身体が凍りつくような気持ちになり、悪寒さえ覚えました。あ、でも、私は雷が苦手だからで、この詩はちよつとエロチックな美しさもあるいい作品だと思いますです。

ケータイがルネにメールの着信を知らせる。

拝啓。ネズミヤだ。

急に旅に出ることになってな。

それで身辺整理してる。

ま、どっちみち今いる公園も近々、
区役所から追出しをくらうらしい。
という情報が俺には入ってる。

それで、明日香が

ノートパソコン欲しがってるから
置いてってやろうと思うが、
今、鬱病がひどくて

外に出られないらしい。

あいつが治るまで

兄ちゃん、預かってくれないかな。

とりあえず、電話下さい。

次の日の夕刻。ネズミヤが待ち合わせ場所に指定した公園はルネのマンションから2キロほど離れた場所だった。自転車ならよく乗るが、それとは違う筋肉も使う方がいいだろうと思い、歩いていくことにする。

それほど大きくもないし有名でもない児童遊園のようなものなので、ルネは、そんなところに公園があるのを知らなかったが、ネズミヤはその辺の地理にやけに詳しかった。以前住んでいたというわけでもないらしい。ホームレスの仕事といったら、やたらと歩き回ること、その時は公園が拠点だから、都内のはあらかた把握して

いるのだそうだ。

公園には人影が少なく、遊具の辺りに子供とその母親が数人と、少し離れたベンチに作業服の男がひとり座っているだけだ。遠くから見ると中年の労働者かホームレスのように見えたがネズミヤではない。日陰であるためかもしれないが、ルネには、そのあたりが音のない世界であるかのように感じられた。

男は何か物思いに耽っているように見えたが、近づいて来るルネに気づいて「やあ」と手を挙げた。

「ネズミヤシゲルはもう来るはずなんだけどね。遅いな。あいつのことだから、どっかで引つかかっているのか…」

ダンボールハウスで会ったことのある源さんだった。「まあ、座っててよ」と言ってから源さんは立ち上がって水飲み場へ行き、また戻って来てベンチに腰を下ろした。

源さんの身体には余計な肉がついていない。ホームレスは期限切れの食品などが豊富に手に入るそうで肥満体の中年もけっこう見かけるが、ネズミヤのように終日歩き回ったりするのが結果的にダイエットになっているのだろうか。

これといって話すこともない。ルネもそうだが源さんもあまり話し好きではないようだった。

ただ、隣に座っているうちに、ルネの中に何か緊張感のようなものが生じてきた。源さんは常に周囲に意識を向けている、まるでセンサーの塊のような感じがしたからなのだが、でも多分、彼が単に神経質ということなのだろう。

「まあ、ネズミヤも、そのうち来るだろうよ」

源さんはデニムのバッグから文庫本を取り出して読み始める。ルネがそれに目をやったのに気づいた源さんは「ああ、これ、ゴミに出してあったんで持ってきたんだ。月並みな言い方だけど、最近の

人は物を大事にしないね」と表紙を見せた。

『宮沢賢治詩集』だった。

54 - - <

ネズミヤシゲルは自転車に乗ってやって来た。ダンボールハウスの脇に繋いであったルイガノのミニベロだ。外股でペダルを漕ぎタイヤ痕を左右にくねらせながら、ふらふらとやって来る

「おう、その後、明日香とはうまくやってるか？」

ミニベロから降りてスタンドを立てると、ネズミヤは下半身を突き出して数回揺らす動作をした後、ルネの顔を覗き込み、意味ありげににやりと笑った。

「ま、若いんだからな。いいよなあ、若いってのは。ま、俺だって兄ちゃんくらいの年の頃には、けっこう楽しませてもらったんだけどよお」

ネズミヤにとって女性の存在と第一にまず性器であって、そういう意味では皆、同一なのかもしれない。だがルネは自分の場合、少し違うような気がした。例えて言えば、目の前に出て来た料理を必ずしも食べるわけではないというようなことだろうか。それは、見た目とか匂いとか、その時の気分によったりするわけだけれど、ルネはネズミヤのようにいつでも食欲旺盛なわけではないということかもしれない。でも、それを説明してもネズミヤには理解できないような気もした。人間の感覚は、誰のものも同じにできているわけではないのだ。

「それはそうと、これ頼まあ」

ネズミヤは背負っていたザックをルネに手渡す時、上部を開いて、

見覚えのあるノートPCがあるのを示した。

「リュックは一緒に渡すなり、兄ちゃんが使うか捨てるなり適当にやってくれよ。まあ、俺の形見つてとこかな。どうせ拾いもんだけどよお」

と不精髭の口元を緩めて笑う。「ああ、よかつたらこれもだけだな」とミニベロを指差した。

「後のチェーンがどうしても外れちゃうんだよ。そいでもって、これをちよつと引っ張ってここへ結びつけたら変速はできないが、何とか乗れるようになった。前の3段は動くからちよつと使うなら、こんなもんでもいいだろ。こいつ、これでも舶来だよな？ たぶん」

「ルイガノってカナダのメーカーですよ」

変速機のワイヤーを見ていくとアウターが潰れている個所があった。そのため中のワイヤーが長過ぎるのと同じ状態になるからチェーンが落ちてしまうのだ。

「アウターを取り替えれば不通に乗れると思います。直してあげますよ」

「おお、兄ちゃん、詳しいんだな。いや、いいよ。直してあんたが乗ったらいいよ」

ルネはネズミヤに、旅をするなら、これで世界一周だってできるし、列車に持ち込む輪行という手もあると言ったが、ネズミヤは自分の2本の足を使うのが主義だそうで、結局、ミニベロはルネが譲り受けることになった。

ネズミヤは財布の中にしまつてあつた紙片を取り出し、ルネに手渡した。

「あ、これ、前の持ち主の姉ちゃんから俺が貰った事の証明だ。もし、ポリ公に職質なんかされたら見せてやるといい」

名詞の裏には「この自転車はネズミヤさんに差し上げました。——という文章と防犯登録のナンバーなどが書かれ、印鑑が捺されていた。

ネズミヤは、やけに真顔でこう言った。

「ホームレスなんかやってると、いつ何時、どんな濡れ衣を着せられるかわかんないからな。これも生活の知恵ってやつよ」

「ワンルームだつて家賃5万はするだろう。ヤサを確保するために時給1000円としても50時間働かなきゃならねえわけだ。土地の借り賃もなく、俺たちはなんと拾い集めた物でインターネットまで楽しめる生活をしてるんだからな。なあ、源さん。あ、この人はパソコンができないんだった。まあ、リーマンやってたつて、それでリストラだろうから、早くこの業界に入つてよかったかもしれないぜ。年がいつてからの転職は大変だからなあ」

ネズミヤがカウンターを叩き、唾を撒き散らしながら喋っている。アルコールが回っているから、その勢いはいつも以上なのだろう。

ネズミヤは、彼の向こう側に並んで座っている女の子たちに盛んに話しかけている。高校生か中学生くらいの年齢だ。興が乗つて笑い転げる子の肩に手を回し、頬を近づける。

「そうよ。俺は浅草のダンボールハウスがねぐらのホームレス。ま、もうじき、そこはおさらばで旅に出るんだがな。今日は、この兄ちゃんがおごつてくださるから、こうして居酒屋で飲むことができたわけだ。どうだい、この兄ちゃん、イケメンだろう？でも、手を出そうつたつて駄目だぜ。ちゃんと彼女がいるからな」

ネズミヤはレモンサワーを飲み干すとグラスの氷を振つて鳴らしながらお代わりを注文し、ルネや源さんの方に向き直った。

「何だ、源さん、もっと飲めよ、つて俺のおごりじゃないが、まあいいだろう。今日は源さん、まだ“泣き”が入らないな」

ネズミヤはルネに説明を始めた。

「この人はな、飲むとよく泣くんだよ。昔の女を想い出してさあ。よっぱどいい女だったんだろうな」

今度は源さんの方に顔を向けてネズミヤは続けた。

「韓国人なんだよな。源さん」

源さんは聞こえていないかのようにポーカーフェイスを続けている。

「韓国人なんですか」

別に詮索するつもりはないが会話が途絶えてもしらけると思い、ルネは呟くように言った。

「そうさ。名前はミヨン…何かいったなあ」

「おじさん、何て名前だったっけ？」

「さつき、ネズミヤさんと呼ばれてたよ」

「えーっ、ネズミヤ？ イズミヤシゲルみたいだねー。そう言えば、なんか似てるー」

女の子たちが赤らんだ顔で喋っている。ひそひそ話のつもりかもしれないが、アルコールが回っているのか、かなり大きな声だ。

「この人は泉谷しげるの師匠だよ」

源さんは女の子たちに向かって唐突に口を開いた。ルネには源さんが話題を変えるタイミングを見計らっていたように思えないでもなかった。

「泉谷にギターを教えたのもこの人だし、彼が売れない頃、いろいろ面倒を見てやったりしたんだよ。ねえ」

話を振られたので、ネズミヤは源さんの過去の追及を打ち切って、自分の昔話に花を咲かせ始めた。渋谷の道玄坂にあった青い森というライブハウスには泉谷や古井戸というフォークグループやキヨシローのいたRCサクセションも出ていたとか、ギターのコードを教えたやつたとか、ボブ・デランのレコードを貸したまま返してもらってないとかいう話に女の子達は聞き入っていたが、信じていたかどうかはわからない。ルネも半信半疑で耳を傾けていたが、それが虚言だという証拠があるわけでもなかった。

「ああ、そうだ。パソコンの中に俺が集めたエロ画像がいっぱいあるんだが、もし、暇があつたら消しといってくれねえかな。別に見られて困るってもんでもないけどよお」

居酒屋を出て別れ際に、ネズミヤは急に思い出したように言った。

「それならリカバリーすれば、みんな消えちゃいますよ」

「そいつはいいな。できたら、それやつつといってくれよ。その中に一緒にあつたCDが入ってるからよお」

「でも、メールなんかみんな消えちゃいますよ。いいんですか？」
ネズミヤは「OK、OK」と指でサインを示した。

「どうせ、たいしたものはないんだ。みんな消えちゃうんなら俺が見たエロサイトの履歴も消えるな。どうでもいいが、ま、明日香が見て馬鹿にされるようなのはない方がいいべ。よしよし」

源さんの方が安堵したように微笑んでいる。

「じゃあ、また、どこかで会おう。ごちそうさま」

二人は行く手にある自動販売機の返却口に手を入れて、誰かが忘れていったつり銭がないか確かめながら遠ざかって行った。

55 > s <

□ □ □ □ □

送信者 トリル

宛先 R e n e

件名 おひさ・・・というほどでもないけど

ルネさんへ

ネズミヤのおっさんからメールが来ました。
ノートPCの件、よろしく願います。

このところ、ずっと鬱で、

出かけたり、誰かと会ったりするのは

とても無理な状態が続いています。

でも、そのうち治ると思います。

今まで何度もそうということがありましたから。

薬を飲むと、意識がどろりとした状態になり、
不安感や自虐的な衝動は宥められて

でも、その代わり、動作も思考も緩慢になり、
だから、こうしてPCのキーを打つのに、
とてつもない意志と集中力が必要なのです。

心の病といっても、実際に身体の苦しさや痛み、
それも耐えがたいものを感じることがあつて
のたうちまわるのです。

そんなわけで、よろしく。

病気が治ったら、また、飲みに行きましょう。

トリル

ネズミヤのPCの件でトリルに連絡しなければと思ったが、ルネがメーラーを開くと、すでに彼女からのメールが届いていた。やはり彼女は今、鬱状態らしい。ネズミヤのメールに書いてあった通りだ。

ネットの巡回コースになっているPoem Villageに行ってみた。暇があれば1日1回は覗いている。

投稿作品の一覧を見ても、興味を引くタイトルやHNはなかった。最近はこのサイトへ来るたび、投稿するメンバーが変化していることに気づく。以前はHTMLを使ってテキストの色や大きさを指定するとか、精緻なタイポグラフィの作品とか意欲的なものが興味を惹いたが、そういうものも最近は少ないようだ。

ルネは掲示板のページに移った。

【16:12】近況報告

しばらくこのサイトや詩人さんたちから遠ざかっていた方。これまで、どんなことをしていましたか？

最近の様子はどうですか？

このスレッドで知らせてください。

・
・
・

セーラーM / HP / mail

ご無沙汰してます。妊娠・出産がありましたので、しばらくネットをお休みしました。

娘は順調に育っていますので、また詩作にも復帰することにしました。

テルユキ / H P / m a i l
プラスバンド

部活が忙しくて、こちらはサボってましたが、定期演奏会も終わったので、復帰します。また、感想よろしくお願いします。

・ ・ ・

ポプラ / H P / m a i l

就職して、サイトは閉鎖しました。

まだ時折、ネットをふらふらしていますが、そういうこともだんだんなくなると思います。

近況のスレッドにポプラというHNがあるのにルネは注目した。記憶に残っている名前だった。同じHNというのはよくあることだが、最近就職したというあたりは似ている。

ポプラはメールアドレスを記入していたので“m a i l”の部分にマウスを当てると反応があり、クリックするとメーラーが起動した。そのメルアドは、以前、ポプラの日記のページにあったものは違うような気がしたが、ルネはそれをアドレス帖に保存しておいた。

もし彼がレイカやdark blueのグループにいたポプラなら尋ねてみたいことがある。でも、いきなりメールを出すのも不躰だし、相手の不信感や反発を招くかもしれない。まあ、何かそれらしい理由を思いついてから、とルネは考えた。

次にどのサイトを覗こうかと考えた時、ルネはネズミヤから預かっていたPCのことを思い出した。リカバリーする前に消したらまずいファイルがないかどうか、中を見て確認しておいたほうがいいだろう。ネズミヤのノートPCをハブに繋ぎLANの設定を終えると、自分のPCは終了させた。

My Documentの中をチェックすると、pornoというフォルダにエロ画像が積み込んであるくらいだった。というか、他にはフリーのテキストエディターが生成したらしいフォルダがあるだけで、その中は空だった。

メールソフトを見たが、受信フォルダにスパムが数通残されているだけだ。

このままりカバリーして不都合はなさそうなので、ルネはこのPCでネットの巡回をしてみようと思い、IEを開いた。

一部の動画などを別にすれば、Win98でも多くのサイトを見るのに支障はない。お気に入りを開くとブックマークされているのはエロサイトかネット上の違法な手段について解説したUGサイトで、それらが雑然と並ぶ中に、ひとつだけ“重要”というフォルダが作られている。開くとそこにあったのはフリーメールのページだった。ソフトでメールサーバーへアクセスするのではなく、ブラウザ上で届いたメールを読み、送信もするシステムになっている。

クリックして開いたページでは、IDとパスワードがクッキーに残っているのでログインできた。

受信の欄に未開封のメールが1通だけある。時間から推測すると、ネズミヤが出かけてから届いたのだろう。

□ □ □ □ □

送信者 銭形

宛先 ネズミヤシゲル

件名 緊急連絡

はじめまして。

と挨拶してる場合ではない。

したがって自己紹介も省略。

それで用件だが、単刀直入に言うと、

貴君と貴君の周囲の人間にに危険が及ぶおそれがある。

私がどうしてそれを知るに及んだかは説明しない。

しかし、貴君は薄々それを感じやのか、姿をくらまそうよしている。

まあ、それは動物的直感とでもいうべきもので、

貴君はそれが何であるのかを具体的には知らないだろう。

とにかく、私を信じるなら、

貴君が今使っている携帯電話は処分すること。

刑務所大学で犯罪者諸先輩の講義を受けただろうが、

携帯電話は電源が入っていれば、

常に微弱な電波を発しているので現在位置を掴むことができる。

多くを徒歩で移動する貴君を捕捉することは比較的簡単だ。

こう言うと貴君は警察の捜査と考え、

身に覚えがないというだろう。

警察は時に非合法的な捜査もやるが、

それは、容疑の固まった凶悪犯に対して、

あるいは公安関係においてだろうな。

だが、今の相手は警察のように間が抜けた輩ではないぞ。

おそらくは携帯電話だけでなく、

インターネットにも彼らの手が回っていることだろう。

よって、このメールは読了後、削除することをお勧めする。

5 6 > / s <

——貴君が今使っている携帯電話は処分すること。——

銭形からのメールはまだ未開封だから、ネズミヤはこれを読んでいない。しかし、ネズミヤに知らせようにも、文中にケータイでは問題があるらしいことが書かれていた。

——携帯電話は電源が入っていれば、

常に微弱な電波を発しているので現在位置を掴むことができる。
多くを徒歩で移動する貴君を捕捉することは比較的簡単だ——

通話やメールの送信をすれば、その時電波が強くなるから、ネズミヤにとって危険な事態を招くことも考えられる。

しかし、他に彼への連絡方法といえば浅草のダンボールハウスに行って直接彼に会うことくらいだ。でも、ネズミヤは旅に出るからと荷物の処分をしていたのだから、もう彼は、あそこにいない可能性もある。

それにメールは単なる悪戯かもしれなかった。

とは言っても、文中の“ 刑務所大学で犯罪者諸先輩の講義を受けただろうが ” という個所から、送信者はネズミヤの個人情報を含なり把握しているようにも思える。

いくら刑務所が満杯になるほど受刑者が多い世の中でも、無作為に悪戯メールを送って相手がムシヨ帰りである確率は、そう高くないだろう。

しかし、“ 貴君と貴君の周囲の人間に危険が及ぶおそれがある ” という部分などは何だか大仰で、かえって現実味が乏しく感じられた。“ 今の相手は警察のように間が抜けた輩ではないぞ。 ” という部分からも荒唐無稽な印象を受ける。

誰かネズミヤの知り合いが遊びで送ったメールだったら、やたらに騒ぎ立てるのもまるでピエロだな、とルネは思った。

とりあえず、リカバリーはしばらく様子を見てからということにする。

翌日の夜、ルネはまた、ネズミヤのPCを起動してみた。

フリーメールのページにログインすると、また1通受信があった。

□ □ □ □ □

送信者 源

宛先 nezumiya@.....:jp

件名 ネズミヤは死にました。

ルネ様（ご覧になつたら…）

ネズミヤシゲルと一緒にいた源です。

昨日はご馳走様でした。

つて、それどころではないのですが。

もう、PCをリカバリーしちゃったのでしょうか？

そうすると、このメールを見ることはないですね。

リカバリーの前にメールチェックしてくれて

何とかルネさんの目にとまってくれることを祈ります。

ネズミヤシゲルは、亡くなりました。

昨晚、あれから二人で

府中を目指して歩いて行きました。

我々ホームレスは

道に落ちているものや自販機に忘れた釣銭、

ゴミ出しされた有用物などを目当てに

歩きまわるのも商売のうちです。

ネズミヤがアフィリエイトの金を下ろし

軍資金もあったので、

翌日は府中の競馬場でちょっと

遊んで来る予定でした。

途中、何者かに襲撃され、

俺は何とか逃げ延びましたが

ネズミヤはだめだったようです。

今日は一部マスコミで

少年たちのグループがホームレスを襲撃と

報道されていましたが

俺たちを襲ってきたのは、

少年ではなかったです。

もしかすると狙われていたのは私かもしれないんですが、
詳しいことはお話できません。

ネズミヤのケータイには通話しないようにして下さい。

PCに設定してあるプロバイダーは使わないで、

このメールアドレスも抹消し、

急いでPCをリカバリーして下さい。

あなたに迷惑が及ぶといけませんから。

失礼しました。

某ネットカフェにて

源

ニュースサイトをいくつか見て回ると、それらしい記事を読むことができた。ホームレス襲撃などはもうあまり珍しい事件ではないためか、どのサイトでも取り上げているわけではなく、あっても小さな扱いだった。

調布でホームレス襲撃。一人死亡。

3月28日未明、調布市の神大植物公園近くの路上で、血まみれの男性が倒れているとの匿名の通報があり、男性は搬送先の病院で死亡が確認された。警察の調べで男性の身元は北海道出身の住所不定無職、石黒清吉さん（58）と判明。鉄パイプや工具のようなもので全身を殴打されており、死因は脳挫傷だった。警察では殺人事件と見て目撃者を探している。石黒さんは多年にわたり都内で路上生活をしていたもよう。

他にはホームレスが襲われたという記事はなかった。被害者がホームレスであっても、死亡したのなら、どこかにひとつくらいは出ているはずだ。

源さんのメールによると府中へ行く途中ということだから、調布ならそのルート上で場所的にも一致していた。そうすると、この石黒清吉さん（58）というのがネズミヤなのだろうか。前科があるから身元の判明は早いだろう。

ページの下にひとつだけ、関連記事へのリンクがあった。UPされた時間を見ると、こちらの方が新しい。

調布のホームレス殺人。少年グループが自首。

3月28日未明、調布市の神大植物公園近くの路上でホームレスの石黒清吉さん（58）が殺されて事件で、15〜19歳の高校生を含む少年グループ6人が警視庁調布署に出頭、全員が犯行を認めため逮捕された。少年たちはこの地域の遊び仲間で、取調べに対し、日頃のうつぶんが溜まり、むしゃくしゃしていたのでやった、

などと話している。

とにかくフリーメールのアカウントは抹消した。残っていた2通のメールも消えたわけだ。銭形からの悪戯ではなかったのかもしれないが、結果的には遅かったということになる。

しかし、ネズミヤは居酒屋で源さんがPCを使えないと話していたけれど、彼はメールを送れるのだから、そうでもないようだ。

57 > sup <

ちゃんねる・ゼロのニュース板には、案の定、ネズミヤが殺された事件のスレが立っている。“またまた起きた陰湿な事件。人非人少年たちがいたいけなホームレスを惨殺”というタイトルがついていた。

1：恋するジャーナリスト

空き缶を集め、期限切れ食品を有効利用し、低エネルギーの住宅で暮らすなど

地球に優しい生活を続けている、いたいけなホームレスを低学歴で凶暴な下

層労働者やニートとその予備軍の鬼畜少年たちが惨殺する事件が続発しており

ますが、昨夜、調布市では住所不定無職の石黒清吉さん（58）が悪魔の餌食となりました。

・
・
・

462：報道する名無しさん

税金や年金を払わない者に生きる権利はない。

DQNども、乙w

463：報道する名無しさん

この少年たちは、学歴もなく、勤勉でもないから
どうせろくな職に就けず、一生負け組。

将来はホームレスになるしかないだろう。

つまり、未来の自分を殺したわけだ。

いやあ、輪廻とは、こういうことなのだな。

464：報道する名無しさん

この場合、DQNどもはGood Job!!

世の中の役に立たないゴクツブシを駆除したのだから
表彰するべきだ。

465：報道する名無しさん

<<461

社会保険庁の工員でつか？

466：報道する名無しさん

君たちのやってることは、ただ弱い者をスケープゴートにして
日頃の鬱憤を晴らしているだけ、

つまり、このDQN少年たちが物理的な暴力で行ったのと同じこ

とを

君たちは匿名の言論でやっているということだ。
考えようによっては、君たちの方が陰湿で
よっぽど人非人ではないのか？

・ ・ ・

実際の知り合いが事件の当事者となって、こういった巨大掲示板のネタにされているのを見ると、ルネは多少複雑な気持ちにならないでもない。でもそれは、センチメンタルな気分にしたものだ。過度に差別的なようにみえる書きこみの口調は、ここでの偽悪的な様式に倣っただけのものだから、別に胸が痛むということでもなかった。

固定ハンドルで、こんな書きこみがある。

そう言えば、銭形と言うHNをルネはこのサイトで何度か見かけたことがあったのだ。

483：銭形

ご当地板の三多摩スレに、こんな力キコがあったぞ。

＜今日、報道されてる調布のホームレス殺人ですが、
＜タイフオされた中にどうも洩れのダチがいるみたいなんスが
＜そいつは昨日の夜の、ちょうど犯行時刻の前後あたり、
＜洩れに電話してきて、2時間くらいダベってたんすよ。

<ニュースでは全員自首したって言ってますが、
なんかおかしいんすよね。

・
・
・

そこまで見てルネはPCを終了させ、作業着に着替えて自転車や
工具を置いてある部屋に入った。ネズミヤに貰ったミニベロも、そ
こに置いてある。

ミニベロは、やはりアウターを取り替えると正常にギアチェンジ
ができるようになった。

取り外したアウターの潰れている部分は強い力で圧迫されたよう
に見える。名の通ったメーカーの製品だから、いいかげんなパーツ
を使っていないだろうし、隣に留めてあったバイクなどが将棋倒し
になった時、この部分を挟んだことも考えられた。

工具などで意図的に潰したということもあり得る。ギアのワイヤ
ー部だったからワイヤーが伸びたのと似た状態になって、チェーン
が外れるだけで済むが、もし両方のブレーキのアウターを適度に押
さえておけば走行中に潰れ、制動が効かなくなることもあるだろう。
下りでスピードが出ている時だったら重傷や死亡事故になりかねな
い。まあこの場合はわからないが、何かの恨みを買って、あるいは
無差別的な殺意の攻撃対象になるのも、こんな世の中では起こらな
いとは言えない。

ルネはミニベロの試乗がてら、あの日、ネズミヤと待ち合わせた
公園に行ってみることにした。もしかして源さんが来ていないかと
思ったのだ。

ミニベロはタイヤが20インチと小さいから、ネズミヤが外股で乗っている姿は、まるで、子供自転車に乗っている中年のコメディアンだった。ルネは走りながら横目で、カーショップのウィンドウに映る自分の姿を見たが、別にそれほど悪いこともないと思う。

公園のフェンスの外を周りながら中を見ると、子供とその母親らしい数組がいる。

ルネにはそこに自分とは別の時間が流れているように見えた。それは遊具や砂場や水飲み場のような人工物の時間だ。それらばかりではなく、管理された花壇や樹木だって、いや、この公園そのものが人工物だし、その中に存在する子供や母親にしてもそうなのだ。

すべての時間はタイムテーブルの通りに動いている。離乳食や幼稚園や塾や受験や就職とか、結婚を前提にした交際や夕食を作っている時ケータイに入る夫の力エルコールやPTAやカルチャースクールといったものが、そのタイムテーブルの内容だ。

樹木に日光を遮られ、湿った感じがする領域の一角にあるベンチ。そこに座って宮沢賢治詩集を読む源さんの姿は欠落している。その辺りはたぶん、この公園の中で、あらかじめ欠落した空間なのだが、源さんの不在によって、より欠落がその輪郭を際立たせているようだった。

夕食の後、しばらくテレビを見てから、ルネは昼間見たちゃんねる・ゼロのスレッドを覗いてみた。書きこみは増えている。そのほとんどは興味を惹くような内容ではなかったが、スルーして行くうちに、思わず目を留めた個所があった。

732：報道する名無しさん

三多摩スレで、銭形さんの力キコを見たので来ました。

僕は夜間に甲州街道でジョギングするのが習慣です。

住宅地だと不審者と思われ、職質されたりして気分悪いこともあるので、

家に近い3キロ程の区間を何度か行ったり来たり走るんです。

事件のあった辺りの時間帯にホームレスらしい二人連れの中年男が歩いていたのは記憶にあります。

それと、数人の男女も見かけました。

その人たちはホームレスと2百メートルくらいの間隔を空けて歩いていて、

往復する僕は何度かすれ違い何度か追い抜きました。

ホームレスが長い距離を歩くのはわかりますが、

普通の人間が3キロも歩いているのは、あまり見ないし、

その時は、まるで、前の二人を尾行しているようだなと考えたりしました。

少し後に、同じ人物からと思われる補足の書きこみがある。

738：732

→でちよつと書き足りないことがあったので、続きです。

実は二人連れのホームレスをつけているように見えたグループの中に

見覚えのある顔がいました。

駅の近くで変なパンフレットを配っている人たちです。

「瑞穂の会」という宗教団体らしいですが、

僕がパンフレットを受け取ると

「ありがとうございます。あなたは神の子です」と手を合わせて僕を拝みました。

いい話が聞けるからと集会所のようところに誘われましたが、あまりにもキモいので、僕はその場をすぐ離れました（笑）

それから、たぶん同じ人たちなんですが、

近所の家から出て来たのに出くわしたことがあります。

セールスをして回っていたみたいです。

健康食品のパッケージや木の箱を持っていました。

友達のところ売りつけに行った話を聞いていたので、

ああ、これかと思ったんですが、

たしか、瑞穂の会というのは別のカルトがやってるはずなのでちよつとおかしいなと思いました。

人手不足になったりすると宗教団体同士で助っ人に行ったりとかするんですかね？

58 > / s u p <

483：三多摩を愛する名無しさん

今日、報道されてる調布のホームレス殺人ですが、

タイフオされた中にどうも洩れのダチがいるみたいなんスが

そいつは昨日の夜の、ちょうど犯行時刻の前後あたり、

洩れに電話してきて、2時間くらいダベってたんスよ。

ニユースでは全員自首したって言ってますが、

なんかおかしいんスよね。

・

492：銭形

<<483さん

てことは、実行犯は別にいて、

お友達を含む少年グループが身代わりに自首したって事ですか？

それとも、お友達は関わらなかったのに

付き合いで自首したのか・・・？

でも、それで、他の連中の罪が軽くなるとかあるんでしょうかね。
おかしいですね。

・

497：三多摩を愛する名無しさん

我が地域から異臭を放つホームレスが一匹消え、
目障りな不良も檻の中に行った。

しかし、ま、未成年だから程なく出てくるんだろう。

498：三多摩を愛する名無しさん

これってTとかPとかいうゲーセンにたむろしてる奴らスかね。

去年、弟がカツアゲされたって言ってました。

社会に戻すのなら、その前にロボトミーきぼんぬ。

・

512：三多摩を愛する名無しさん

さつき、中学の時のクラスメートから電話で知らされたが、逮捕された中に当時の知り合いが何人かいるらしい。

最近はやクザに手なずけられてるみたいな連中で、

ヤバイから付き合わないようにしてただけだね。

513：銭形

このホームレス襲撃事件はニュース板でも話題になってます。

その辺りで活動してるカルトが（駅前でパンフの配布とか物売りとか）

後をつけてたという情報も寄せられていました。

何かありましたら、どんどんカキコしてね。

<http://www.news.och...>

ご当地板は、東北、関東、都区内、都下、東海、近畿というような地域ごとの板があつて、それぞれの中で区市町村のようなさらに小さなエリア限定のスレッドが立てられていたり、あるいは、心霊スポット、空港建設の是非、いい雰囲気の居酒屋やよく出るパチンコ店についてというような特定の話題で語り合うスレもある。

ネズミヤへの襲撃と殺害について触れられているのは東京板に立てられた“三多摩の話題について語るスレ”の中だった。“調布市と神大植物公園周辺について”というスレッドもあったが、そこらでは事件についての書きこみは見当たらない。

516：三多摩を愛する名無しさん

893の社会では身代わりで塀の中に行くのはよくあること。

やり手の兄貴は娑婆でいろいろ忙しいからブランクを作りたくない

いわけ。

まあ、殺人でおつとめをしておけば、極道界ではキャリアのようなものだし、

少年なら、すぐ出て来れるから、身代わりになると何かと美味しいかもね。

517：三多摩を愛する名無しさん

この少年たちは在日もしくはBのヤクザ予備軍に違いない！！

518：三多摩を愛する名無しさん

<<512

<最近はやクザに手なずけられてるみたいな連中で、

そのヤクザって地元の組織なの…？
情報きぼん。

519：三多摩を愛する名無しさん

<<513

<その辺りで活動してるカルトが（駅前でパンフの配布とか物売りとか）

<後をつけてたという情報も寄せられています。

ホームレスへの慈善事業で、

何か食わしてやるつもりだったんじゃないかと思うぞ。

520：三多摩を愛する名無しさん

全国的規模の某大手カルトに絡んだ事件では、

施設の建設にからむ反対運動や強引な勧誘、寄付の強要などのトラブルで、

運動のリーダーや関わった地方議員などが謎の死を遂げたりして

いる。

ヤクザと親密な仲という噂もあり、この地域でも会員が多い。

内部に諜報機関のようなものを持っていたりするといつから恐ろしいな。

宗教団体と言つのは百害あつて一利なしの手合いである。

教祖を国会で証人喚問して違法な事実を追求の上、解体すべきだ。

・
・
・

ちゃんねる・ゼロの書きこみの中にはマスメディアに乗らないような裏情報もけっこうある。しかし面白半分や受け狙いでだらめを書いたり、何らかの意図で行われる誹謗中傷や捏造も多い。世論操作を狙ったり、都合の悪い事実を書きこまれた側の隠蔽や攪乱もあるようだ。

だから確かなソースがない場合、その情報を信じるか信じないかは自己責任ということになる。

メール受信を知らせる表示が現れた。ルネがネット上の付き合いに使っているフリーメールの方だ。送受信はブラウザ上で行うのでボックスの中をクリックするとIEが開いた。

□ □ □ □ □

送信者 鈴木信紘

宛先 R e n e

件名 突然メールします。

ルネ様

突然のメールで失礼します。

トリルさんの友人で鈴木信紘と申します。

ご存知と思いますが、

トリルさんは現在、心身ともにすぐれない状態にあり、
助けを必要としています。

精神的な援助が必要なのです。

というわけで、ルネさんに

お力になっていただけないでしょうか？

個人的事情でこのメールアドレスは、間もなく使えなくなります。
また、メールでのやり取りでは要領を得ないことも多いので、
私の携帯に電話していただければ幸いです。

090XXXXXXX

それでは、良いご返事がいただけることを期待いたします。

鈴木信紘

メールアドレスは使えなくなるといったことが、ルネは、いちおう保存しておくことにした。アドレス帖を開いて鈴木信紘を追加した後、一覧に目をやると、少し前にポプラのメルアドがあった。Poem VillageのBBSで近況報告していた時、記入されていたのをいちおう登録しておいたものだ。

ポプラ―高瀬川麗佳グループのメンバー―t s z m t @

それは鈴木信紘のものと同じだった。

第8話

59>sub<

・
・
・

538：三多摩を愛する名無しさん

<<520

<全国的規模の某大手カルトに絡んだ事件では、

<施設の建設にからむ反対運動や強引な勧誘、寄付の強要などの
トラブルで、

<運動のリーダーや関わった地方議員などが謎の死を遂げたりし
ている。

<ヤクザと親密な仲という噂もあり、この地域でも会員が多い。

何の証拠もないことを書きこまぬように

通報されますよ。

私は、その大手カルトの信者ではありませんが、知り合いの会員
の方から、

事件の背後で某瑞〇の会と某神聖〇字軍が動いていると聞きました。

と言つても、

<内部に諜報機関のようなものを持っていたりするといふから恐
ろしいな。

というわけではありませんよ。

「天網恢恢疎にして漏らさず」ということです。

539：

<<538

< 知り合いの会員の方から、（ワロタ
法華信奉会の工作員に認定。

540：三多摩を愛する名無しさん

このスレではカルト工作員たちが暗躍しているようですね。
釣ったり煽ったり、お疲れさまです。

541：三多摩を愛する名無しさん

<<541

それって銭形さんのこと？

542：三多摩を愛する名無しさん

コテハンを使ったり使わなかったり、

書きこみのたびにIDを変えたりorz（爆

・ ・ ・

次の日“三多摩の話題について語るスレ”を見たが、ネズミヤが
殺された事件に関係した書きこみはこの辺りまでで、後はラブホの
情報交換や、ルックス、親のステータス、学力による高校のランク
付けや、昔からの住人が自然に恵まれていたかつてを懐かしむ発言
と、それに対するレスが続いている。

ルネがちょっと目を留めたのは538の書きこみだった。これ見よがしに1文字だけ伏字にしてあるが、それぞれ瑞穂の会と神聖十字軍を指しているのは明らかだ。

でも、事実だという根拠があるわけではない。でたらめを書いて混乱させるのを喜んだり、都合の悪い事実から人々の目を遠ざけたり、あるいは何らかの誘導を謀る関係者の工作ということもあり得る。

ポプラこと鈴本信紘のケータイに電話するのは公衆電話を使うことにした。ネズミヤのことがあったわけだし、自分のケータイや自宅の電話を使うのではあまりにも迂闊だろう。

と言っても公衆電話の番号から位置を割り出すソフトがあることをルネはどこかで見た記憶があった。たしかチケット予約の時の裏技を扱ったサイトを暇つぶしに見ていた時だったと思う。

ケータイをPCに接続して相手の電話番号を知るようなツールだって、どこかで作られていて、一般には知られていなくても、例えば公安とか工員は使っているかもしれない。ポプラがそういった人間であるかどうかはわからないが、絶対違うとも言えない。

源さんのメールではネズミヤのケータイから位置を割り出されたようだから、そういう相手ならどちらにしても居場所を把握されそうだった。でも、自分の電話番号を知られるよりはましだろうとルネは考えたのだ。

というわけで、比較的人通りの多い場所にあるコンビニの公衆電話を使うことにした。相手がどんな連中かはわからないが、人目につく場所で行きなり襲ったりして騒ぎになるのは避けたいだろう。

184を使えばこちらの番号を非表示にできるが、それだとポプ

ラが良い印象をもたないおそれがある。不信感を生じさせては会話がうまく運ばないので、それは避けた方がいいとルネは思った。

ポプラの就職先がどんな業種なのかわからなかったが、いちおう土曜日の午後7時にコールしてみた。

「はい、鈴本です」

「メールをいただいたルネですが、はじめまして」

電話機とは半身になって不審な通行人や車に注意する。

「あ、ルネさんですか。突然のことで失礼いたしました。鈴本です。HNはポプラと申します」

店の入口付近に数人の男女がたむろしている。活舌の悪い話し方をする茶髪の少女や、頭にタオルを巻いたりニツカーボツカー姿の土木作業員や解体屋や鉄筋工といった職種らしい連中で、二十歳前後のようだが中には顎鬚を生やした者もいる。

いつもなら目障りな、いわゆるDQNたちだが今日は別に気にならない。というより、そこにいてくれるとありがたい。

「私はHPを閉鎖して、近々プロバイダーとの契約も解除します。ネットは会社で見れますので。といっても仕事関係の調べものに使うくらいでしょうが」

ヘッドライトがルネを照らした。駐車スペースにワゴン車が入って来る。逆光で中がよく見えない。まさかとは思うが、ヤクザだったら銃をぶつ放されることもあり得る。

「それで、あのメルアドも使えなくなりますので、携帯の番号をお知らせした次第です」

ライトが消え、ドアが開いて女が下りる。反対側からは小学生くらいの子供。親子らしい。それを確認していて少し間が空いたが、ルネはポプラに尋ねた。

「今、電話、大丈夫ですか？お忙しいようなことは…」

「大丈夫です。今日は休日で、さっきまで本を読んでいたんです。仕事の関係で勉強しなければならぬ事が多くて大変なんですよ」

ポプラは就職後の新人研修で仕込まれたような丁寧な言葉遣いで喋った。ルネは彼の話を聞きながら、ホラー映画に出てくる容姿は子供だが声音や口調が大人の人物を連想していた。

「いやあ、最近就職したんですが、実社会は想像してたよりきついです」

ルネが喋り出さないためか、ポプラはまるで沈黙を埋める強迫観念に取りつかれてでもいるように話し始めた。彼は実社会が学生時代と違ってきついと繰り返し、職場でのエピソードや家に帰ったら後は寝るだけという毎日を語ったり、高卒がこの業界でやっていくのはたいへんで、ニースなどでは銀行強盗に身の危険も顧みず立ち向かって行く銀行員がいるが、たいてい高卒で、そうでもしなければのし上がれないのだと言った。また、ニートやフリーターをカリカチュアライズした姿で語り、彼らは将来が不安で、自分はいっかかりした職と収入を得て家庭を築きたいのだと話したようだが、それは何か意味のよくわからない弁解のように聞こえないでもなかった。

ルネが電話したのはトリルについて話があるということだったからでポプラの愚痴を聞くためではない。だから、その時ポプラが喋った内容はルネの記憶にほとんど残らなかった。

自分の話をしばらく続けてから、彼は我に返ったような少し気まずそうな感じで言った。

「ルネさんのフリーのお仕事というのみたいへんでしょうね。仕事がいっつまで来るかわかりませんしね。まあ、特に最近のような世の中になると、そういうのは私たちのような銀行にしても同じなんです」

ポプラはルネの仕事を知っているようだ。おそらくトリルから聞いたのだろう

とにかく、彼の就職先は銀行であるらしい。

「僕のはフリーというよりフリーターみたいなものですよ。あまりお金にはなりませんを取り柄と言え、まあ、自由な時間があるく

らいで…」

ポプラはルネが個人でやっているのは大したもの、ITはまだ伸びる分野だから将来に夢がもてると言い、今はブログが全盛だが次は何になるだろうかとか、マーケティングや時代の流れを掴む話とか、法人の設立や各方面への人脈などを経営コンサルタントが講演でもしているように喋った。

「僕はそんなに大きくやるつもりはないですよ」

ポプラの話を聞いていると胸の中に比重の大きい気体が降りてくるような気分になったので、ルネは彼の言葉を遮った。

「それと、そういうのは世の中によくあるやり方ですよ」

「ええ、でも、何の商売でも金は儲けなければ…」

ポプラはルネが自分に話を合わせなかったのが少し意外なようだった。農耕民の社会での会話は先に自分の考えを言った方が勝ちだ。二番目以降はそれに同調する意見を述べることしか許されない。

社会人になって、そういう思考が身についたのだろうか。あるいはポプラがもともとそういう人間だったのかもしれない。

「もちろん僕も金は欲しいですけど、世間一般にありきたりのやり方ではつまらないですね」

「じゃあ、他にどういうのがあるんです？」

「好き勝手に自分のやり方でやって成功し、世の中にザマアミ口つて言ってる。そうじゃなきゃリベンジになりませんよね」

「リベンジって、ルネさんは世の中に何か恨みがあるんですか？」

「いえ、特にこれといってないんですが。だから、そんなに大きくやるつもりはないって言うてるんです。まあ、今のところは」

ポプラはしばらく沈黙した。

彼は自分の作った話の水路に水が流れて行かないのを不満に思っている。目の前に姿があるわけでもなく電話線で繋がれているだけのポプラの内面に、その時ルネは感応していると思い、たぶんそれ

は正しかった。

「まあ、自由な時間があるのは羨ましいですけどね」

ポプラはすこし引き攣ったような声で言った。

「やっぱり、何をするにも時間が必要です。創作にしても、女の子とつきあうにしても」

“女の子とつきあうにしても”とポプラが言った時、ルネはポプラが歪んだ苦しそうな笑みを浮かべているのが見えたような気がした。ルネとトリルがすでに男女関係のよくある手続きを踏んでいるのがわかっていると匂わせているのだろうか。彼のジェラシーのよくなものを感じられないでもなかった。

ポプラは、この話題について、それ以上、触れず、「時間があり過ぎるのはどうもね」と繰り返した。それは自分自身に確認しているようにもあった。

「あまり時間があるのも考えものです。それから頭がいいのもね。頭が良くて時間があるとんでもないものを引っ張り出してしまう」それからポプラは、少し意味ありげに言った。

「まあ、Helterさんにしてもね」

60 > / sub <

「Helterさんて、ネット詩人の…ですか？」

「そうです。Helterさんはフリーターだったらしいですから自分の時間を充分おもちゃだったんでしょう。考える時間が豊富で頭が良過ぎると、普通の人間ではわからないことに気づいて、かえって悪い結果になってしまうんです」

これだけでは何のことをいっているのかルネにはまったくわからなかった。それにポプラは就職で仕事に時間を奪われたため表現が

ら遠ざかってしまった自分自身を合理化しているか、あるいは慰めているように受け取れないでもない。

「ああ、ルネさんには時間がありなんでしたね。だからと言ってルネさんは頭が悪いというわけではありませんよ」

ルネは会話に気を取られて周囲への警戒が疎かになっていたことに気づき、辺りを見まわしたが、通行人や車にこれといって危険な兆候は見出せなかった。

ポプラは話を続けた。

「それに、ルネさんのところには、あのメールが行ってないかもしれませんしね。けっこうあっちこっちに送られてみたいですけど」

ポプラは独り言のように呟いた。ルネは「メール？」と語尾を上げて、どんなことかポプラに尋ねたつもりだったが、受話器の奥からは「いえ、たいしたことじゃないんです」という言葉が返ってきただけだった。

細かく質問するのは止めておいた。もしポプラがルネにも周知の事実という前提で話しているのだとしたら、ここで中断させないでおけば何か興味深い事柄が出てくるかもしれない。

「とにかく、その辺に自殺の原因があるわけですか？」

「自殺？ いや……」

しばらく沈黙があった。その間、ポプラは何かを考えているようにも思えたし、呼吸を整えているのかもしれないかった。

「私も詳しいことは知りませんよ。知っていたらあぶない」

彼はそれから話題を変えた。

「ああそうだ。トリルさんのことなんですが、彼女にはその、何とつか、つまり心の病があってカウンセラーに通ったり、そういう薬を飲んだりしています。リス力を何度もやっています。わかりますか？ リストカット。手首をカッターナイフで切るんです。まあ、自傷というやつですが」

リストカットという言葉聞いて、ルネは『コノ セカイニ ア
イヲ』という詩のことを思い浮かべた。

この世界のどこかで

誰かが手首を切っている

彼女の足元にしたり落ちる血液

ちぎられた睡眠薬のパッケージの山

WEBの日記に書かれたSOS

冒頭の部分はこんなだったと思う。

これは多世界の作品なのに、何故かPoem Villageには作者名がHeiterで投稿されていた。それはどうもネズミヤのPCから行われたようなのだが、誰がどういう意図で投稿したのかはわからない。

内容にはリスカのことを書かれているが、これはトリルのことを書いたものなのだろうか。そうでないとしても、あの投稿はトリルに向けた何らかのメッセージだったのかもしれない。

考えているうち、間が空いてしまったので、ルネは慌ててポプラとの会話を続けた。

「リスカのことは以前、サイトに書いてあったのを読みました。今は閉鎖されてますけどね。でも先日、僕が会った時は、そんなに落ちこんだ状態には見えなかったんですが、それで、いわゆる鬱のよ
うな状態になったのには何か原因があるんですか？それとも、何も
なくても悪い状態になるものなのでしょうか」

「ええと」とポプラは何か言い出しかけてから口籠もった。

「それについてはノーコメントです。というか、ルネさんはご存知

なのと違いますか」

コンビ二の入口にたむろしていた連中は、すでに車に乗って走り去っていた。客は次々にやって来て、常に数人が店内にいる。

ポプラは、それ以上喋らなかった。何か感情を害したように感じられないでもなかったが、ルネにはその原因の心当たりもない。

「トリルさんとHeiterさんについてですけど」

Heiterの名前が出たためだろうか。話が途切れた間にルネの脳裏に浮かんだことがある。それを質問してみた。

「以前に何かあったんでしょうか」

「何かと言いますと？」

「ちよつとトラブったとか」

「トラブル？何のことかわかりませんが」

ポプラの言葉には何か裏がある感じもした。とぼけて具体的な事実をルネに言わせようとしているのかもしれない。

「Heiterさんがコラボで曲を作ろうと提案して、トリルさんをラブホに呼び出したとかいう話のことです」

「そうか、トリルさんはそんなことを言っただんですね」

ルネは何だかポプラが感情を押さえて声を出しているような気がした。

「ああ、それは逆ですよ」

「逆…？」

「私がそれを言ってしまうのはどんなものでしょう。トリルさんがそう話したのならそれでいいでしょう？私はあなたたちの仲を壊そうとは思いませんから」

ポプラの声のトーンが上がっていて、時々、ファルセットになりそうな感じた。それに“仲”という言葉が出たが、トリルとは恋愛関係にあるわけではないし、ルネにそんな感情はない。ポプラは何か勘違いしているようだ。

「トリルさんが話したわけではありません」

「え？」

「ちゃんねる・ゼロにそういう書きこみがあつたのを見たんです。Heiterさんが亡くなったあたりのことでした。」

正確に言えば、ちゃんねる・ゼロには別の掲示板のログのURLが書きこまれていて、そのログで見たのだが、細かいことを言うと話がややこしくなる。

「ちゃんねる・ゼロですか。2・3度アクセスしたことがあります。が、読んでいて気持ち悪くなりました。」

ポプラは小声で笑った。

「ああ、こういう場合には“なりますた”と書くんですね、あの変な文体。内容的にも差別とか偏見が露骨に出ていて病的で知性を感じません。ルネさんは、あそこの常連さんなんですか？」

ポプラの声の響きからは、ほっとしたようなものが覗えた。トーンももとの調子に戻っている。

「時々覗いてますが、たいていはROMです」

ポプラは「そうでしょうね」と言った。まあ、ルネが常連だったら病的で知性のない奴ということになってしまいうわけだ。

公衆電話の番号から位置を確認している可能性があるのも、ルネは、そろそろ切り上げた方がいいだろうと考えた。

「すみません、これからちよつと予定がありますので、また電話させていただけます」

「あ、そうですか。わざわざすみませんでした。何でしたら私の方から電話いたしますが、この番号は……」

ポプラが単純にナンバーディスプレイを見ているのなら「公衆」の表示が出ているわけだから、“この番号”という言葉は不自然なようにも思えたが、それは考え過ぎかもしれないかった。

ルネは会話を続けた。

「ケータイを持って出なかったんで、公衆電話からです」

もしポプラが電話番号を聞いてくると面倒なので、機先を制するため、ルネはすぐ口を開いた。

「ケータイは仕事で必要のある時以外、電源を切っていますので」これは言い訳ではなく本当の話だった

「そうですか。よろしければこちらから電話するんですが、それは、また」

と言ってから、ポプラは付け加えた。

「ちょっと失礼なことを言ったかもしれませんが、忘れてください」ポプラは電話を長引かせようとしているのかもしれない。ルネの意識にそんな警戒心が生じていたがポプラは続けた。

「あのメールはルネさんのところには行ってなかったんですね」

「メールって、それはH e l t e rさんに関係のあるメールですか？」

「まあ、そうです」

「どんなメールでなんですか？」

「ネット詩人さんたちにわりと送られてたようですから、誰かに聞けばわかるかもしれません。いや、わからないんですが、H e l t e rさんは別にして」

「ネット詩人さんて、例えば……」

「うーん、何というか、まあ希羅々さんでしょうか。あ、亡くなってますけど。いえ、よくわかりません」

ポプラは逃げるように早口で意味不明なことを言った。これ以上尋ねても答を得られることはなさそうだった。

「では、どうも」と電話は切れた。

ルネは店内に入った。コンビ二の通例として、正面のガラスの中に雑誌が置いてある。立ち読みを装いながらしばらく外を監視していたが、それらしい車も人間もやって来ない。どうやら今日のところは何者かが電話番号でルネの居場所を調べていることはなかったようだ。

61>nobrk<

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

送信者 R e n e

宛先 J u n k o Y o k o e

件名 お尋ねします

横江潤子様

ルネです。

ご無沙汰してます。

お変わりありませんか？

ところで、ちょっと伺いたいのですが

希羅々さんのところに来ていたメールで

脅迫めいたものは以前、転送していただきましたが、

あれほどではなくても、どこか不審というか、不可解というか

少し変わった印象を受けたものがなかったでしょうか。

もちろん、お知り合いや友人とのメールやスパムは別にしてです。

希羅々さんに関するものは

すでにP Cから削除してしまわれたとは思いますが、

もし、何か記憶に残っていましたら

よろしければ教えてくださいませんか。

僕が何気に思い出したことがあって気になったので、

別に何か変なことが起きているわけではありません。
ご心配なく。

それでは。

ルネ

ポプラが言っていたメールのことがルネの心のどこかに引つかかっている。ネット詩人たちにはわりと送られていたというメールだ。それに関してポプラが希羅々の名前を出したから、とにかく従妹の横江潤子に尋ねてみようと思った。まだ以前のメールアドレスが使えるかわからなかったが、潤子は希羅々の家に寄宿して大学に通っているから、プロバイダーがそのままならメルアドは生きているかもしれない。

送信後、User Unknownで戻ってくることはなかったから、メールは潤子に届いたのではないかとルネは思った。

そのあと、ルネはPoem Villageの会員名簿にアクセスし、見覚えがあるHNのサイトをいくつか周ってみた。ポプラの話から推測すると、Helterは何かから何らかの方法である事実を知ったらしい。それからまた何かが起こったのかもしれないが、とにかくルネは、どこかでそれと結びつくものに行き当たることを期待したのだ。

無意識の赴くままにサイトからサイトを巡り歩けばユングの言うシンクロニシティのような現象が起きて、意味のある偶然によってその糸口に辿りつけないものかと考えたのだが、どうやら、そううまくはいかないようだった。

ルネはPCを終了させ、ベッドに入った。FMのイーजीリスニングを聴きながら、ゆっくりと眠りに入っていく。

夜の中に横江潤子からのレスが届いていた。

□ □ □ □ □

送信者 Junko Yokoe

宛先 Rene

件名 Re: お尋ねします

ルネ様

横江潤子です。

おひさしぶりです。

ルネさんのお名前を見て、なんだか懐かしく思いました。あれからだいぶ経ったような、それほどでもないようなでも、時の流れを感じてしまいます。

お尋ねの件ですが、従姉のPCに残っていたものは消してしまうに忍びないので

CD-Romに保存してありました。

ただ、迷惑メールのようなものはあまり残ってなくて、

あつたのはルネさんに転送したもののくらいでした。

従姉は何かの時に、時々気味の悪いメールが来るけれどすぐに削除することが多いと話していたような記憶があります

でも、ルネさんに転送しなかったメールが1通だけありました。

何故送らなかったかと言いますと、本文に何も書いてなかったからです。

それと、ファイルが添付されていたのですが、ウイルスかもしれないので

転送してはまずいのではないかと思いました。

添付ファイルは削除してしまいました。が、メールの方は、いちおう転送しますね。

草々

横江潤子

つぎに受信しているのは“Fwd：重要事項”という件名の転送メールだった。横江潤子が書いていた通り本文はない。末尾にsecret.vrsという添付ファイルがあつたことが表示されているけれど、潤子が削除してしまっているからファイル名がわかるだけだ。調べてみたらvrsという拡張子は存在しなかった。

送信者は“耳口王”となっている。宛先を見るとメールアドレスは希羅々のものではなかった。このメールはブラインドカーボンコピーで送られているのだと思われた。Bcc欄に複数のメルアドを記入して送信するとそれぞれに同じメールが送られるが、受信者は

自分以外の誰に送られているかを知ることはない。

発信者が確認のため宛先を自分にするのよくあることだったが、必ずそうと決まっているわけでもなかった。

宛先にもう一度目をやると、それにルネは見覚えがあった。takayoのメルアドだ。

でも、takayoが保存している可能性は低いだろう。彼女がBccで送った張本人だとしたら証拠隠滅をするだろうし、そうでなかったら、添付ファイルのvrsという拡張子は何やらvirusを連想させて怪しげだ。ウイルスメールだと思って削除する方が普通だろう。ウイルスメールやスパムというのは多くの場合けっこ来るものだから、それをいちいち覚えておくこともないだろう。ルネは、それでも、いちおう尋ねてみることにして、takayoへのメールを打った。

62>/nobr<

□ □ □ □

送信者 takayo

宛先 ルネ

ルネ様

おひさ。

このメールのことかなあ？
知らない相手からのだし、ウイルス添付みたいだから、

普通なら即削除なんだけど
どういうわけか残ってたんだよね。
なんちゃって、ちゃんと理由はあるのさ。

実は、ちょうどその頃新しいPCを購入して、
古いPCは、その後ずっと放置してた（^| ^ ;
そういうわけで、開けてみたらメールも残ってたんだね。

ルネくん、最近はウイルスを調べる仕事してるの？
大変だね。

ま、IT音痴の私が言うべきことじゃないけど、
PCを壊さないよう、気をつけて取り扱うのだよ。

らぶ（^ - ^）／

t a k a y o

- - - o r i g i n a l m e s s a g e - - -

送信者：nezumiya@.....

宛先：takayo

件名：Fwd：重要事項

● s e c r e t . v r s

ルネはsecret.vrsの部分をクリックし、メニューから“名前をつけて保存”を選択した。添付ファイルにはウイルスやマシンを壊す者が含まれている場合があるが、実行してよいかというダイアログが出るので、「はい」をクリックする。takayoが転送してくれたメールにはファイルもちゃんと添付になっているようだ。ルネはそれをひとまずMyDocumentの中に作ったフォルダに保存した。

それからLANで別のPCに送る。リサイクルショップで見つけたデスクトップでCPUはK6、メモリは64MB、OSはWin98だ。時代遅れだが、まあ、いちおうの役に立つしるものだとは言える。安かったので何かの時にと買ってきたのだが、もしsecret.vrsがウイルスだとしても通常使っていないこのPCに影響が出るだけなら、たいした被害を蒙ることはない。

ルネは移したファイルを右クリックしてみた。“ファイル・secret.vrs”を開くアプリケーションを選んでください…”というダイアログボックスが出て来るがキャンセルする。vrsという拡張子はないのだから、どのアプリでも開くことはできないだろう。

拡張子とはWindowsファイルで、ファイル名の末尾にあるピリオドの後の部分をいう。例えばstartup.exeやwelcome.swf、readme.txtでは.exe、.swf、.txtが拡張子で、これはファイルの種類を表わしている。exeなら、それを実行できることを意味し、.swfはフラッシュ、.txtはテキストファイルであることを表わす。

ポプラの話していたことは、H e l t e r が自分に送られてきたメールから何かを掴んだため、悲惨な結末に陥ったと解釈したらいいのだろうか。だとすると、そこあった何かをH e l t e r は知ったのだろ。メールはネット詩人を含む多数に送られたようだが、H e l t e r 以外は気付かなかったようだ

メールはt a k a y o が何か隠しているのでなければB c cで複数に送られているはずだ。そして、その本文には何も書かれていないのだから、何かはこのファイルの中にある。

ルネは、ゆつくり考えることにした。朝食を摂ってなかったのでキッチンへ行き、輪切りにしたフランスパンにチーズとサラミとオニオンやピーマンの細切りを乗せ、オーブントースターに入れる。昼前のニュースを見ながら食べ終わると、少し眠くなったのでソファに横になった。

眠りからの帰還はゆるやかに執り行われる。意識と身体は海底から水面へ、潜水病に陥るのを避け、時間をかけて浮かび上がるように現実の中に凝固していくのだ。

周囲にある、世界のひとつひとつの要素は不定形なものからしだいに形をなしてくる。ルネと現実との両者が互いを認識しながら再び出会い、そして時間が流れ始める。

帰還の途中でルネは、淡い色彩の遠いものの姿を見た。それはH e l t e r に関する何かの記憶のようでもあった。

カーテンを透過して差し込む陽光やテレビの映像や音声がはつきりとしたかたちを取り始める間、それはルネの脳裏を漂っていたが、果たして記憶なのか、それとも夢なのか判然としなかった。

ルネはチャットの画面を見ているようだ。どこかのサイトにアク

セスし、そのコンテンツにチャットがあるので覗いてみたのだ。
でも、たぶんROMだろう。今まで、自分がチャットに加わったこととはあまり多くない。

……最近スパムが多くて頭きちゃうよ（、へ）プンプン…そうだねみんなはどうしてる…メルアドや文中にあるURLのドメインをWHOISで調べて送り返す…そんなので効果あるかなあ奴ら屁とも思わないのでは（へーへ…だからみんなでやるんだよ…そういう運動を起こすかw…レンタルサーバーの管理者に転送してもしそこがスパムやエロサイトやマルチにきびしいところならあぽーんされるんだけどね…Helterさんキタ（。。）

ッ！！…俺はファイル添付で送り返してやってるよ…ファイルって何？ウイルス？…テキストファイルでも画像でも何でもいいからファイル名をvirus.exeに書き換えて添付するんだよ…相手は驚くね…でもすぐ削除でしょ？…めっちゃ重いのなら少しは嫌がらせになるかな……

ルネはWin98のデスクトップを起動した。

拡張子は簡単に書き換えることができるのだ。

ファイルのアイコンを右クリックし、“名前の変更”を選択すればファイル名と同じように拡張子の部分も好きなように変えられる。「拡張子を変更するとファイルが使えなくなる可能性があります。変更しますか？」というダイアログボックスが出るが、「はい」をクリックすればいい。

ルネはsecret.vrsの.vrsの部分を.txtに書き換えてみた。

テキストエディタで開くと、文字化けが延々と並んでいる。アル

ファベットの大字と小文字。大小のカタカナ。よく使われる漢字もあるが、漢和辞典を引かなければならないような、あるいは文字として存在するかどうかわからないようなものもあった。ところどころを区切るように縦線が入っていたり、それが、いくつか連続していたりする。記号や絵文字のようなものもところどころに見られた。

プロパティをみるとファイルサイズは300KB台で、それほど重くはない。ルネはPCの中にある画像ファイルを探しGIFの拡張子を.txtに書き換えた。そして、それをテキストエディタで開いてみる。

やはり文字化けが続いているが、初めの辺りに“GIF89a”という部分がある。もしかしてGIFファイルであることを表しているのだろうか。それとも、偶然こんな文字列になっているのか…。

ルネは、もう一度secret.txtをエディタで開いた。冒頭部分に“JFIF”というのが見える。JFIFを検索してみると、これは“JPEG File Interchange Format”の略であることがわかった。そうすると、これはJPEGの画像ファイルなのかもしれない。

JPEGの拡張子は.jpgだ。ルネはsecret.jpgに書き換えてダブルクリックした。ブラウザが立ち上がって、画面いっぱいに近い大きさの画像が表示される。

それは数枚の紙片を撮った写真だった。手帖を破ったものと思われるが、多くはその中に、小さな文字で文章がびっしりと書き連ねられていた。

たぶん、あのチャットの記憶は夢ではなかったのだろう。チャットを覗いたのがいつごろか詳しくはわからなかったが、と

にかくHelterなら、このファイルの謎を解くことができたわけだ。

63>map<

PCの画面をほぼ埋めているsecret.jpgには7枚の紙片が写っている。それぞれは皆、同じ手帖のページを破ったもののように見えた。紙片と紙片の間に微妙な境界が見える部分もあるのも、1枚ずつ撮ったものを合成したのかもしれない。

紙片の多くには罫線を見捨ててびっしりと文字が書かれている。綴られた文章が長いものは元の大きさでも最低限判別できる程度の細かい文字だろう。この写真では実物よりさらに小さくなっているのも、読めない部分が多い。

ルネは、まず画像編集ソフトで写真を紙片ごとに切り抜いた。そして、それぞれを拡大する。潰れて判別しにくい文字もあるが前後から推測して、だいたいこんな文章になるようだった。

「紙片1」

オモニは言った。「例えば、探検隊が人跡未踏の密林の奥深く入って行き、そこで原住民の村に入った時、まず、そこで行われるのは何でしょう。隊長は、まず、その酋長に贈り物をします。そして酋長からも返礼としての贈与があるはず。ここで交換が行われたわけですね。交換、すなわちトランザクションは、この世界の基本なのです。例えば化学変化でも物質間に電子やエネルギーの受け渡しがあるし、太陽と惑星の間にも重力子―グラヴィトンの見事な

交換が行われています。だから均衡と調和を保ちながら公転が永續しているのですよ。このようにマクロからミクロに至るまで贈与／交換の法則は一貫しています。人間社会でもそれが日常的に執り行われる重要な事項であることは否定できないでしょう。商売上の取引ばかりではなく、恋人同士にしてもそうですし、その他、人間関係のあるところ、必ず贈与と交換が存在するのです。そして、神と人間との間でも、それは例外ではありません。あなたが今、いちばん大切に思っているものを放棄して、神に捧げるなら、返礼として神の愛を受け取ることになるでしょう。あなたは、いちばん大切なものを神に捧げなくてはなりません。何故ならその返礼の愛は、この世界で最高のものだからです。神は必ず最高のものであなたにお応えになるのですから、あなたはもつとも大切なものを捧げなくてはならないのです。わかりますね。ある人は何十億円もの価値のある預金や株や土地といった全財産を捧げました。もちろん、お金の問題なのではありませんが、その人にとってで得る限りのことをしたので。ある女性は、ひじょうに愛し、また愛されていた恋人との関係に終止符を打ちました。彼女にとつてもつとも大切な恋愛を神に捧げたのです。そうしなければ神との交換は成立しません。あなたは神の愛を得るため、何を捧げますか？」たぶん教団の上部の詐欺師が、その頃流行っていたニューアカデミズムの本でも斜め読みして作ったマニュアルを基に、オモ二是喋っていたのだろう。俺はそれを聞きながら、自分にとつていちばん大切なものとは何かをずっと考えていた。自分は貧乏学生だし親にだって財産と言えるようなものはない。彼女もない。官僚になつたり大企業に就職するような輝かしい将来が約束されているわけでもない。自分が今、大切に思うものといったら、部屋で一人、ノートを文字で埋めていく、あの時間だ。いつか出版されて多くの人が読み、感動して、賞賛されたり歴史に残ることの夢想くらいだ。他人から見たらつまらないものかもしれないが、これを失ったら、自分が自分でなくなってしまうくらいの重大な何かであることは間違いない。それで、俺

はオモ二に言った。今から思えばどうしようもなく青臭いことだし、その時だつてかなり恥じらいを感じながらだった。「僕は詩を捧げます。今、自分にとって心の支えとも言える大切なことです。それを神に捧げましたから、もう今後、詩を書くことはありません」俺はオモ二の嘲笑を予想していたが、それに反してオモ二は満足そうに微笑んだ。その時の俺にはオモ二の微笑が崇高な、マリアの像のそれのように見えた。

「紙片2」

俺が壺や健康食品を売りに歩いた時、よくペアを組んだミヨンスクという女性がいた。教団内では教祖から与えられたということになっている韓国語の名前を呼び合う。クリスチャンの洗礼名のようなものだ。俺を引き入れたオモ二は母という意味だった。教団内では導き入れた者とその相手に親子関係が成立し、彼女は多数の信者を勧誘しているのでその名を与えられたのだが、彼女自身もそれを大いに誇りにしていた。ある日、俺とミヨンスクは公園で休息を取った。ミヨンスクは照り付ける太陽の下で両手を組み、目を閉じて祈っていたが、やがて、日陰のベンチにやって来て俺の横に座った。俺は手帳に書きつけたいくつかの詩を彼女に見せた。彼女は、しばらくそれを見ていたが、それから顔を上げて言った。「スンナム（これが教団内での俺の名前だった）は詩を書くことを神のために封印したんでしょう？」俺は頷いた。「神にいったん近づいて、そこから離れたため、雷に打たれて死んだ人がいるらしいわ」それは信者の間でまことしやかに囁かれている話だ。ミヨンスクの顔は青ざめていた。「君は神を裏切ることはないから、そういう心配はないね」と俺が言うと、彼女はうつむいて何か考え込んでいるようだった。

「紙片3」

地区本部からオモニがやって来た。教団内で彼女は、まあ出世していたのだ。「元気？」というオモニに、俺は目の中を覗き込まれているような気がした。俺は少し動揺して、それを彼女に覺られたかもしれない。その頃もう俺は既に教義にも教団にも疑問を感じていて、かといって疚しさを感じる必要もなかったのだが、何か彼女に気圧されるものがあつたのだ。その夜、俺は礼拝室に呼ばれ、そこにいた寮長とオモニから転勤命令を言い渡された。転勤は告げられた明朝出発が通例になっている。世間一般でならいやに急な話だが、出家信者にとつて珍しいことではない。手渡された封筒には何枚かの紙が入っている感触があつたが、それにしては若干重かつた。ポケットに入れようとした時、中で硬貨の触れ合う音がした。後で開いた時、入っていたのは駅名を示すメモと最寄の駅からそこまでの切符を買うのにぴったりの金額だつた。「スナム伍長。あなたに神とメシアのご加護がありますように」オモニの言葉で俺は昇進を知つた。俺はそれほど嬉しくもなかったのだが、目の前の二人は俺に向かつて偽善的に微笑んだ。それまでは上等兵だつたから二階級特進ということになる。俺は靈感商法や折伏の成績が悪いから、その褒賞としての昇進は滞っていた。教団のシステムは人間の心理を掴みコントロールするよう巧妙に作られている。階級制度もそのひとつで、恩典といえば毎月の小遣い銭の額が微妙に上がるくらいなのだが、人間というものは、そういうニンジンを目の前にぶら下げられると競争心や見栄も相俟って、けっこうその目的に精力を傾けるようになるものなのだ。世間と隔絶されてよくある楽しみや目標が存在しない世界では、なおさらそういうことになる。だから信者

たちが教団にのめり込んで行くのは単純にマインドコントロールのためだけとは言えないだろう。

オモ二というのはレイカのグループのメンバーにもいたようだが、同一人物だろうか。でもこの、母という意味のハンゲル語は比較的良好に知られているから、オモ二というHNを使う人間は、よくありそうな気がする。

ルネは次の紙片の写真を拡大した。

「紙片4」

メモに記されていた先は日本海側の小さな駅だったが、そんなところに来たのは初めてだった。その駅で降りた乗客は9人で、二人は地元の人間らしく、それぞれ迎えの車が来ていた。2台の車が走り去ると、俺たちよそ者らしい7人は駅前の小さなロータリーに残された。俺には自分たちが、まるで世界中から見捨てられた難民のように見えた。俺たちは互いに視線を走らせてはいたが、会話を交わすことはなかった。やがてひとり、またひとりと道路に出て歩き始める。皆、同じどこかを目指しているようだった。俺も、出発前に口頭で指示されていたように海沿いの道へ出て歩いて行った。やがて、後からやって来た10人乗りのワゴン車がそれぞれの脇で止まり、俺たちを拾った。ワゴン車は周囲に人家のない脇道に少し入って止まった。助手席にいた男が、夜までやることは何もないと言った俺たちに菓子パンと飲み物を配った。車内ではほとんど言葉が交わされることはなかった。多くの者は目を閉じてじっとしている。たぶんメシアに祈りを捧げていたのだろう。夜9時ごろになって助手席の男と運転手は車を降りて海岸の方へ歩き去った。俺は窓際の席にいて、車内の空気が澱んでいたのを窓を僅かに開けた。す

ると海辺の二人が何者かと会話しているのが聞こえる。海岸から車まではかなり距離があるはずなので、かなり大きな声でなければここまで届くことはない。何だか彼らには警戒心が希薄な印象を受けた。パトカーらしい赤い回転灯が走り抜けて行くこともあったが、見咎めて止まる様子はない。海辺での会話はハンゲル語で行われていた。教団では世界の中心であるメシアの母国の言葉として初歩的な講義を受けるので、内容はあまり理解できないまでも、それがハンゲル語であることはわかった。やがて声は聞こえてこなくなり、しばらくして二人が帰って来た。彼らは俺たちに降りるよう促し海岸に行くよう告げると、車は走り去った。指示された通り行ってみると漆黒の海よりはやや明るい夜空を背景に体格のよい男の影が見え、彼に導かれて行った所には船の影があった。漁船ほどの大きさで、明かりはなくエンジン音も聞こえない。前にいた連中が船に乗り込み始めたので俺も彼らに続いた。船が動き始める。インスタントコーヒーのような飲み物が配られ、それを飲むと急に眠気が襲って俺は壁にもたれて眠った。目覚めると俺より早く起きた連中は甲板に出ているようだった。俺も船室を出る。外は明るくなり始めていた。俺たちは朝の光の中に輝くように連なる陸地に目をやった。「さあ、エデンに着いたよ」と乗組員らしい軍服姿の男が、それほど不自然でない日本語で言った。

「紙片5」

試験の日。まず、俺は教官の部屋に呼ばれる。笑顔で迎える将校服の教官。いつもの厳しい表情ではない。彼は椅子に座るよう勧める。背後のドアが開いて、入って来たのは事務服を着た若い娘だ。彼女は俺の前に液体の入ったグラスを置く。「どうぞ。一息で飲みなさい」教官は無表情で言う。その口調には遠慮などしているのを許さない強制力が感じられる。俺は軽く会釈してグラスを手にとった。液体はミックスジュースのようだが、少し薬品のような味を感じる。

飲み終わってしばらく沈黙が続いた。教官は無言で書類のチェックをしていたからだ。小さな音量で音楽が流れていて、俺は自然とそれに耳を傾けることになる。バロツクのような、数学的図形を思わせる曲だった。15分程して彼は腕時計に目をやり、ひとり頷いて顔を上げる。「では、試験です。これからあなたが案内される部屋にはある男がいます。彼は器物です。いろいろな意味で人間として既に失格しています。もし、あなたがこの試験に不合格の場合、あなたは次の受験者の器物になります。もちろん拒否した場合もです。わかりましたね」やって来た兵士は俺を地下のとある部屋に案内した。そこで器物が来るのを待っているうち、俺の意識に高揚感が満ち溢れてくる。さっきの飲み物の効果だということは想像することができた。俺は試験の内容を反芻した。要するにそれは、ここに来てから学んだ、というか訓練を受けた技術の集大成だ。器物をサンドバッグのように殴りつけたり、蹴りを入れたり、四肢の骨を折ったり、耳や鼻を刃物で削いだり、皮膚の上から内臓を掴んで握り潰したりした後、首を締めるか頸椎を破壊して息の根を止める。これらを手際よくこなすことも評価の対象だが、重要なポイントは器物に感情移入しないことだ。ノックの音がする。迎えが来たのだ。案内の下級兵士は俺の先に立って地下への階段を降り、ある部屋の鍵を開けてからキーを俺に渡し敬礼して去って行く。中にいた器物の顔には見覚えがあった。俺と一緒に行程を辿ってやって来た連中の一人だ。俺は試験を実行した。教官の部屋に戻ると、たぶん日本人ではない彼がアナウンサーのような正確な日本語で器物の名前や経歴や家族関係などを記した書類を俺に読んで聞かせた。器物として処分されることとなった理由は日本に手紙を出して、同じ支部にいた信者の女性と連絡を取ろうと企てたからだそうだ。試験は計5回行われた。器物は教団の情報をマスコミに流そうとした信者や、信者同士で結婚したが夫のもとから逃亡しようとした女性や、器物と知り合いだったためらって試験に失敗した受験者や現地の政治犯だったりしたが、俺はすべてに合格点を取った。そして最終的合

格を告げた後、教官は言った。「日本の法律では殺人などの凶悪犯罪の場合、国外での犯行でも国内での処罰の対象になります。だから、あなたが帰国してから、もし、ここでの行いが発覚すれば当局の追及を受けることとなるでしょう。仮に緊急避難的行為として法的な処罰を免れたとしても、あなたはとにかく自らの手で5回も殺人を犯しているのです。そのような人間が日本社会に受け入れられるのはひじょうに難しいでしょう。」その場には教団のある幹部も同席していた。彼は俺にこう言った。「メシアはすべてを理解しておられますよ。ただメシアにおすがりなさい。メシアのために働きなさい。メシアを喜ばせて差し上げることです。あなたを救うのはメシア以外にないのでから。わかりましたね。スンナム少尉」

65 > / m a p <

「紙片6」

軍曹は俺が助手席のドアを閉め終わると同時に車をスタートさせる。「お疲れ様です。大尉」車が幹線道路の流れに入って落ち着いた時、軍曹は口を開いた。「検問をやるでしょうかね」「そうだな真昼間から新聞社の支局が襲われて、記者が殺されたとあっては当然やるだろう」俺は隣の車から見えないよう低い位置で、銃身を短く切った散弾銃を手早く分解した。「共産主義思想をばらまくサタンの使徒、左翼マスコミを処刑したとはいっても、警察にしたら何らかの対応をしないわけにはいきませんからね。大尉」特殊要員の間では、教団から与えられたハングル語の名前さえ互いに知ることではなく、ただ階級で呼び合うだけだ。俺と違って軍曹はミッシェンの内容を知らされていなかった。あの記者はそういう理由で殺され

たわけではないのだ。だが、そう遠くないうち、信者たちの間ではひそやかに、そして迅速に、重苦しい怖れの感情を伴った噂のリリースが行われるだろう。それは軍曹にも届く。その夜のニュースでは計画が着々と進行していた。被害者の自宅まで強引に踏みこんだTVカメラが妻の顔をアップで捉える。モザイクはかかっていない。必ずしもマスコミ関係者の身内だから取材に協力的なわけではないと思う。たぶん裏で、ある力が働いているのだ。とにかく、どこかのテレビの前で、それを見ている者が妻の顔に見覚えがあるのに気付く。講師がやけに激昂した調子で語ったり、意識が浮遊したような状態になるビデオを見せられたり、一同が不気味なほど静まり返って祈る集会で、あるいは、健康食品や壺の入ったバッグを持ってセールス先の町に運ばれていったマイクロバスの中や出家信者たちの混じり合った体臭で奇妙な雰囲気に含まれた合宿所で確かに見かけた顔であることを思い出すだろう。彼女はいつしか姿を消していたが、そうか、結婚して市井の生活を送っていたのか。しかし、それは神に背を向けたということに他ならない。彼女の顔を覚えている何人かは、こう確信するだろう。彼女は雷に打たれたのだ。いったん神に近づいたが、そこから離れたため、雷に打たれて死んだものがいます。教団の中でまことしやかに囁かれている言葉。それは現実に形をとって現れた信仰の中の奇跡かもしれないが、同時に忌まわしく恐ろしい事実でもあるのだ。しかし、神のみわざはあまねく述べ伝えられなくてはならない。噂はドミノ倒しのように、あるいは液体が布に染み込むように、瞬く間に信者の間に広がっていくだろう。そして、各々の意識の深層に刻み付けられ、かれらの行動を規制する。メシアは人間をコントロールする方法に長けている。いったん、その手中に絡め取られた者は、どんどん深みに嵌っていく。

昼は灼熱、夜は酷寒。都市の砂漠をさまよう我々ホームレスにとって冬の夜は特にきつい。外で寝るアオカンにこだわって意地を張る者もいるが、もし幾ばくかの金があれば、暗くて寒い時間帯は屋内でやり過ごしたいと思って当然だ。収入源といえばアルミ缶集めや、電車の網棚や駅のゴミ箱から拾った雑誌を露店で売ることや、自販機の返却口に忘れられた硬貨を集めること。暇な時間をただうろつきまわるのが仕事で、おそらく一日数十キロは歩くから、犬も歩けばで、現金や財布を拾うことも意外とあるものだ。そんなこんなで小金を手にした時、これまでは深夜営業のサウナや喫茶店、ファーストフードなどに潜り込んで朝を待ったのだが、先日、ある仲間に教えられてネットカフェという所に入ってみた。俺はもちろんパソコンの扱い方などまったくわからなかったのだが、その店員が暇を持て余していたのか人恋しかつたのか丁寧に教えてくれた。おかげでインターネットというものをなんとか閲覧できる程度にはなった。それはもの凄い経験だった。パソコンの画面は世界に連なる窓であり、俺は、向こう側に広がる世界を覗いたり、そこに集う人々に向けて何かを書きこむことができるのだ。俺はネットサーフィンのかいうやつであるサイトへ行った。そこでは、自分の書いた詩を送ると瞬時にして掲載され、誰もが読んだり、感想を書いたりできるのだ。俺はかつて、自分の詩集を作って多くの人間に読まれるのを夢見ていたが、自費出版するような金があるわけはなかった。しかし、このネットというものなら、自分の作品は多くの人の目に触れることだろう。出版するといっても僅かな部数で、それもどれだけ読んで貰えるかわからないが、ネットならむしろ、それより遙かに多くの人間に俺の想いを伝えることができるのではないだろうか。そうだ、これからは、暗く寒い夜からこの椅子の上に避難して俺の言葉を画面の向こうに投げてみよう。もしかして、それを誰かが拾うかもしれない。ホームレス生活を始めてからは暇な時間が多いが、冷房暖房の行き届いた図書館はそんな時の行き場所として

皆よく利用しているようだ。だからホームレスには博学で世の中の動きに詳しいものが多い。何かを語らせればテレビのコメンテーターに勝るとも劣らないのではないだろうか。そういうわけで俺は図書館で今更ながら宗教書など読むようになった。学生時代に戻ったような気分だ。今まではメシアの『宗教統一理論』を通して知識を得ていたのだが、そこには歪曲や捏造の多いことがよくわかった。この世界の真実とはまったくもって遠い代物である。あんなカルトに関わるのは、人生の一部を無駄に費やす以外の何ものでもない。仏教では他人の時間を奪うことも盗みに含まれるというのを読んだが、神聖十字軍は人の生のある期間を取り返しのつかないものにしてしまうのだから、それは一種の殺人と言ってもいいのではなからうか。それなら、どのような人生を選べたらそれが真に自分のものと言えるのか？となると、その確かな答は思いつかないのだが…。もしかしたら、この人間社会というものが、まさにカルトなのかもしれない。

紙片7の一部には既視感があった。かつて読んだ詩の中に同じような内容のものがあった気がする。Poem Villageの投稿だったろうか。ルネはぼえ村でログのページを開いた。そこには検索機能があるので記憶に残っていた“昼は灼熱、夜は酷寒”というフレーズで探してみる。

『物語を編む人』という作品がヒットした。

物語を編む人

赤土

物語を編む人

夜となく昼となく

春となく夏となく
秋となく冬となく

・
・
・

読んで行くところという部分があった。

昼は灼熱

夜は酷寒

世界は砂漠で

そこをさまよう私に

水分といえば自分の唾液だけ

これは紙片の中の“昼は灼熱、夜は酷寒。都市の砂漠をさまよう我々ホームレスにとつて…”に似ている。

暗く寒い夜から避難した椅子の上

物語を窓の向こうに投げれば

誰か拾う人がいますか？

ここも“暗く寒い夜からこの椅子の上に避難して俺の言葉を画面の向こうに投げてみよう。もしかして、それを誰かが拾うかもしれない。”と、きわめて近い表現だ。

紙片1から紙片6まで、これを書いた人物はどこかのカルトの出家信者で、テロのような役目を担っていたことが窺えるが、紙片7では、おそらく脱会してホームレスになっている。

世界のためという妄想
殉教者の悲壮感に駆られ

この部分は、彼の過去に対する思いを綴っているようにも感じられた。紙片7によれば、カルトは神聖十字軍らしいが、7枚の紙片は赤土が書いたものなのだろうか。

第9話

66>blink<

……はい、今、これを見ているみなさん。このブログにはコメントを書いてもいいんですからーつつ。さあ、ためらってないで、勇気を出して何か一言力キコしてみましようね……。……。

午前中に書かれたブログの最後にこんなことが書いてあるが、文章の下を見るとまだcomment(0)だ。ルネは何だか管理人が、ひたすら他者との繋がりを求めてあがいているような印象をもった。

このブログにも数日に一度くらいは書きこみがあるが、皆、自分のサイトに人を呼びたいアフィリエイトのもののように、おぎなりの感想が書かれている。

自作詩は夫や子供や義母との日常や、パートの仕事や地域の人々との交流が題材だった。誰かを励ましたり癒したりする作品を目指していると書いてあるが、いちばんに励まされ癒されたいのは彼女自身なのかもしれないとルネは思う。

いわゆる現代詩系の作品が集まっているWEB同人誌。

現実のどこにもないイメージの世界を作り出して、そこへ逃亡することが幾度となく試みられている。狂気というのは現実が耐えがたいものである時の避難先であり、身を隠す場所がなかったら人は死の中に逃げ込むしかないと精神医学の本に書かれていたのを思い出す。かれらが文字を奇形的に組み合わせ陰鬱なイメージを織り続け

るのは、とにかく死を避けるためなのだろうか。

かなり詳細に書かれた Poem Village オフ会のレポートがあった。集まった面々の行動のデテイルから、カラオケで歌った曲やその感想まで書かれている。カラオケというのは往々にして自分が歌うことにしか関心がなく、他人の歌には興味を持たなかったりするものなのだが、この筆者はレポートを書く必要があつて細部まで観察していたのだろうか。

詩人たちは多くの場合、それぞれ個々で集まって来ているようだった。オンラインの投稿板でも日常の友人や知り合いに教えて連れて来る例は少ないような気がする。

ルネは何かで読んだこんな事柄を思い出した。

尾崎豊のコンサートチケットは1枚づつ売れたのだそうだ。つまり、彼のファンは友達と連れ立ってというより、それぞれひとりづつで足を運ぶ方が圧倒的だったらしい。

ネット詩人たちにしても、日常の世界で何らかの意味で孤立した存在のように見えなくもない。

ペトロニウスの原作をもとにフェリーニが作った映画『サテリコン』では、主人公がローマ帝国をさまよい巡りながら、さまざまな人や事物に出会う。

ルネは今、自分が幽体離脱して自らの肉体の背後に浮かび、サテリコンのようにネットの世界を彷徨している彼自身を眺めているような気がした。

もっとも、ここにあるのは必ずしも映画のようなかたちの享樂と

退廃ではない。しかし、例えば表面的に一般市民の日常の姿をとっていても、水面下には鬱屈したものが満ち満ちていて、それはローマ帝国の退廃以上のようにも思えた。

そうやってネットを経巡っているうちに、例の紙片の写真について、ルネの頭の中でだんだん整理されてきたようだ。

紙片1〜7は、いずれも同じ手帖から破り取ったと思われるが、横書きで、それが縦長の写真の中の左に4枚、右に3枚配置されている。実際に番号が振られているわけではないが、左上から左下、続いて右上から右下という順序とするのが内容から見ても妥当と思われる。

紙片1は、これを書いた当人と思われるスンナム（ハングル語による教団内部での名前）という男が教団に入った時の模様が綴られている。彼を誘い入れたのはオモ二という女性だ。

オモ二は、スンナムが神の愛を得るためには彼が最も大切にしてあるものを放棄しなければ交換が成立しないと言う。ルネはこの辺りで、以前、文化人類学関係の本で読んだポトラッチを連想した。贈答の応酬が激しさを増すと、より価値のある自分の持ち物を破壊して優越を競うようになる北米先住民の習俗だが、神と人間との間にも贈与／交換の原則があり、また、それは世界の基本的なシステムであることがオモ二によって語られている。

紙片2は同僚であったミョンスクという女性信者との想い出だ。この頃スンナムは既に、神との交換のため封印した詩作を再開しているらしく、それをミョンスクに見せるのだが、彼女は、いったん神に近づいたものがそこから離れた場合、雷に打たれて死ぬという話を信じ、不安を感じているようだ。

紙片3でスンナムは転勤を命じられる。彼を教団に入れたオモニは内部で出世しているらしい。彼も、軍隊式の階級制度での2階級昇進を告げられる。このことから単なる転勤でない重要な事実であることが想像される。このカルトが神聖十字軍であることは後の紙片7に書かれているので、ルネは検索して調べてみた。そのような階級制度が存在するのは事実だった。

紙片4では、スンナムは命令に従って日本界側のある場所に赴き、そこで合流した、おそらく彼と同じような者たちと共に、夜、密かに船に乗る。おそらく半島に渡ったのだと思われる。

紙片5は、おそらく渡航先の半島での出来事だろう。スンナムはそこで軍事的な訓練のようなものを受けているらしい。そして、試験が行われる。その内容は“器物”と呼ばれる人間を、それまで学んだ技術によって殺すことだ。“器物”には教団の規律違反者や試験の落伍者や、その国の政治犯があてられている。スンナムは試験に合格するが、それは殺人を何度も実行したことに他ならない。殺人者が日本の一般社会に戻ろうとしても、忌むべきものとして受け入れられないことを教官は彼に告げる。つまり、スンナムは今後、教団からの指示のままに行動していくしかないということだ。

紙片6は、たぶん国内に戻ったスンナムの様子だろう。紙片5で彼は少尉だったが、大尉になっている。教団のテロ要員で、重要な活動を行っているらしい。

ルネはここに書かれている新聞社の支局襲撃と記者の殺害について検索した。数年前によく似た事件があったようだ。

「朝売新聞社支局襲撃・記者射殺事件」

199X年3月24日午後2時20分ごろ、三重県津市にある朝売新聞社三重支局に目出し帽を被った男が乱入し、そこにいた同新聞小山内修二記者にいきなり発砲した。記者は散弾銃の弾丸を胸部に受け、救急車で病院に運ばれたが出血多量で2時間後に死亡した。犯人は現場近くに待たせてあった車で逃走。三重県警はただちに緊急配備を行ったが車は発見できなかった。その後の捜査にも関わらず犯人の手がかりはつかめていない。

朝売新聞社は、その論調が左翼的であるということで右翼から度重なる嫌がらせや脅迫を受けており、この事件も右翼のテロとの見方が有力だが、右翼関係者の多くは事件への関与を否定している。

紙片7では彼はホームレスになっている。教団を脱会したのだろうか。すでに教義や教祖には愛想をつかしているようで、でも、教団がテロ要員を簡単に手放すとも思えないから、彼は逃亡したのかもしれない。

彼は夜間の寒さを凌ぐためネットカフェに入り、そのPCでWEBを巡るうち、詩の投稿サイトを知る。彼は若い頃のような詩に対する情熱を甦らせているようでもある。

67 > / blink <

静岡県の沼津から富士川までは、途中の田子の浦港近辺で公道に出る以外、自転車で防波堤の上を走れる。そこから西も、由比で旧東海道に回ると清水港近辺を除けば阿部川まで、車は通行できない道を海沿いに走ることができる。この辺りは千葉県の銚子から和歌山県の加太までの、太平洋岸自転車道でも比較的良く整備されて

いる部分らしい。

静岡県でも西部の方になると、自転車道に砂が被さったりしている所もあるようだ。ルネはチャリダーが管理人のサイトで、そんな写真を見たことがあった。

ルネは輪行で沼津駅まで来て、千本松原から防波堤を走り始めた。この辺りのような暖かい土地では、もう春というよりほぼ初夏なのだろう。午前の空は青く、水平線近くを除くと雲は少ない。側壁には250メートルごとに沼津港と富士川双方からの距離を表示したプラスチック板が貼りつけてある。初めのうちは目につくたび確認していたが、面倒になったので止める。時々、競技の選手らしいロードレーサーとすれ違った。彼らは時速40キロ程度出しているけれど、ルネはMTBだから、そんなに飛ばしては長い距離がもたない。

そうは言ってもルネはママチャリの倍のスピードで走っているのだったが、単調なコースなので、感覚的には思ったより遅くて少しまだるっこしい。

iPodのHDに入っている音楽をランダムで流すように、頭の中で曲が鳴り始める。昔、自分でギターを弾いて歌ったり仲間とセッションしたようなロッククラシックとか、あるいは一時期ラジオやTVでマインドコントロールのように盛んに流されていたJ-POPやアイドルの曲が突然甦ったりもした。

富士川の河口近くではパラグライダーがモーター音を響かせ、上空を舞っている。ルネは粗いモーター音の周波数を皮膚で感じながらカーブに近づいて行った。防波堤は河口から川上の新富士川橋に向かう。河川敷の緑地公園に沿って橋の手前までは緩やかな下り坂だった。

ペダル感触が軽くなるのに合わせてギアを上げて行き、前後と

もいちばん高い状態で、軽く脚に力を入れて漕ぎ続けた。やや向かい風を受けて、ルネは自分の身体がパラグライダーのセイルに変身したように感じる。そのまま坂を走り降りた。

1・5キロほどある新富士川橋を渡って、しばらく防波堤を走ると、その先は自転車の走行できないバイパスになる。公道に降りて旧東海道の由比宿を抜けた。その先はしばらく、国道1号と平行して防波堤を走れる。興津から清水港の辺りは公道で、三保からは、また海沿いのサイクリングロードがある。

右側の山の斜面には日本平や菰畑や東照宮が見えて、変化に乏しいわけではないが、走り自体は単調になった。

空が青く、明瞭な視界とは対照的に、ルネの頭の中には靄のような想念が生じ、その中でさまざまな思考の微粒子がブラウン運動をしている。

それは、あの写真の紙片に書かれていることについてだった。

あの中の文章には、*P o e m V i l l a g e*で見かける詩人、赤土の『物語を編む人』という作品に似た個所が複数あった。あの紙片を書いたのは赤土だろうか。そして、書かれている内容は赤土が体験した事実なのだろうか。

あの中にはオモ二という人物が2回出てくるけれど、彼女はレイカのグループのメンバーだったオモ二と同一人物だろうか。だとすれば、神聖十字軍の幹部的な信者であるオモ二が、ただの趣味でネット詩人たちと結びついたとも思えない。何か目的があつて、あのグループに加わったのだろうか。

紙片を書いた人間は、かつて神聖十字軍の出家信者であり、その

後半島で軍事訓練のようなものを受けた後、教団のテロ組織のメンバーとなって破壊工作を行っていた。今は組織を離れてホームレスの生活をしているようだ。もしかして逃亡中なのかもしれない。彼は教団が世間に知られたくない秘密を知っているだろうから、教団は彼を消そうとしているのではないだろうか。ルネの身近なところでホームレスといえばネズミヤだが、彼は何者かに殺害され、ちゃんねる・ゼロに書きこまれていた情報では、事件の周囲に神聖十字軍などカルトの影もちらほらしている。

しかし、あの紙片に書かれているのはちょっと荒唐無稽な話だ。誰かが悪戯で、あるいは妄想に憑り付かれて書いたことも考えられた。

でも、ポプラによると、Heiterは、この内容を知ったために自殺する羽目になったということだ。はたして悪戯や妄想でそんなことになるだろうか。

もしかするとHeiterは自殺に偽装して殺されたのかもしれない。あの文章が事実を書いたものだったら、そんなことがあってもおかしくないだろう。

前方の遠い位置に何か塔のような物が見えた。それはルネが進むにつれて大きさを増して視界の中で目立つ存在になっていく。風車のような羽根が付いているのがはつきりわかるようになった。それはかつて、神戸の児童殺傷事件の時、サカキバラが使っていたマークをルネに連想させた。

午後になると雲の量が多くなったが、天候の悪化を予想させる程ではない。低めの雲は陰影がはつきりしていて、時折、宗教画のよう雲の端々から光線が放射される。

今日はもう60キロくらい走っているはずで、それも自分としては少し速いペースを続けていた。休息といえば水分を補給する時に止まる程度だ。

やわらかな疲労が身体全体を覆い、意識の中へも滲入し始めている。脚の筋肉だけはまるで独立した存在のように、変わらぬペースでペダルを踏み続けていた。

走り続けていると、疲れた肉体に連続する外界とは別の、自分の内部に世界が開けていく。そこは輝く闇で満たされた世界で、だが、そこと外界を含むすべての世界との背後に共通して存在している何かを、ルネはフィルターを通してようにおぼろげにだが確かに認識している。

それを指す言葉は神だろうか。かれは沈黙したままだが神に言語があるのかどうかはわからない。ただ、それを感じる時、ルネは自分の根本的な部分が解き放たれているように思った。神というのはカルト信者が求める時、それに応えるようなものとはたぶん異なるのだろう。そんな考えがルネの頭をよぎる。

巨大な風車は安倍川の河口近くにそびえ立っていた。風力発電の施設らしかった。

68 > b a s e <

ルネが部屋に帰るとメールが届いていた。1通は村岸達也からで、もう1通は t a k a y o からだった。

□ □ □ □ □

送信者 村岸達也

宛先 R e n e

件名 多世界さんの情報、ほか。

村岸達也です。

こんにちは。

ルネさん、お元気にされてますか？

ところで、多世界さんについて、ちょっと情報が入りましたのでお知らせします。

こちらに新しいサイトができたようです。

<http://m-world.xxx/>

今度のサイトも相変わらず動的ですが、以前のようなJavaScriptよりもFlashが

多く使われ、WMPやRealPlayerで見る作品もあります。
まあ、ブロードバンドが

普及してファイル転送のストレスが軽くなったので、より、彼のやりたいことが

できるようになったということでしょうか。

言葉の面では、カットアップなど、シミュレーションイズムの方法が使われている

ようです。（という印象を私はもちましたが…）

百聞は一見に如かずですから、サイトの方を、ぜひ、ご覧ください。それと、ルネさんの方でも何か、多世界さんについてわかったことがあったら、

お知らせいただけませんか？創作活動に限らず多世界さんの個人的

なことでもけ

っこうです。あるいはルネさんなら多世界さんとコンタクトできる
かもしれません

ん。私の方でも興味があって調べていますので協力してください。

これは別の話なのですが、高瀬川麗佳さんたちのことについては、
もう過去のこ

とですし、詮索するのは終わりにしたらと思うのです。ルネさんも
ご存知のこと

と思いますが、関係者の中で亡くなっている方もおられるわけで、
そんなこんな

で、あの頃の細かい事をついたり人目に晒したりしては故人の霊
も安らかでい
られないでしょうから。

それから私の友人には今、真面目に、そして純粋に詩作に励んだり、
詩が日本で

より多くの人たちの間に入っていくよう活動している者たちがいて、
彼らの努力

により、だんだんいい方向へ行きかけている事が、水の泡になって
しまうような

事態も考えられるんです。

あまり具体的な事を書くわけにはいきませんので、まあ例えば出版
界とか文壇と

か、世の中にはいろいろあるということ、よろしくご配慮くださ
い。

それでは、また。

村岸達也

takayoのメールは、この前のファイルがウイルスか何かだったりして危険なことはなかったかと尋ねたものだった。

ルネは、拡張子を書き換えてみてJAPEGの画像だとわかった経緯を書き、読み取った文章のテキストファイルを添付して返信した。

ルネは、それから村岸のサイトにアクセスした。

村岸達也の最近のお仕事

言葉の残像（評論） 季刊現代詩ノート：0X年冬季号

浮遊するポエマー（ネット詩論） ポエトリー・トレイン：0X年10月号

空洞の黄昏を背にして（詩作品） 現代詩ジャパン：0X年8月号

夜のボキャブラリー（詩集） 詩蝶舎

吉増剛三の世界（評論） 月刊読書の友：0X年7月号

・

村岸のサイトには詩の投稿板もあった。Poem Villageのように大規模ではないが、それでも常連が時々投稿したり感想を書いたりしている。村岸も時間のある時にレスしているようだった。

投稿の多くはいわゆる現代詩といわれるジャンルの雰囲気をもった作品で、ここというところでレトリックやメタファーのような文章のテクニクを決めている。いずれも手慣れの詩人たちと言えるそうだ。

BBSはワークショップや朗読会の宣伝、詩誌や個人詩集の発行の告知、さまざまな近況報告のほか、お気に入りの詩人、作品の礼賛、誌壇のあり方についての意見などが書きこまれていたが、書きこんでいるそれぞれがひとかどの人間を気取って、そこにできあがっているヒエラルキーを護りながら、文化人ごっこをしている印象は否めない。

ルネは村岸のページを閉じて、それから村岸のメールをもう一度読んだが、何となく腑に落ちない部分があった。

それと、ルネさんの方でも何か、多世界さんについてわかったことがあったら、お知らせいただけませんか？創作活動に限らず多世界さんの個人的なことでもけっこうです。

村岸が多世界についての情報を得たがっているのは、どういふことなのだろう。村岸自身が書く詩はオーソドックスな現代詩だし、評論なども、その傾向にある有名無名の詩人や作品に関するものが

多いようだ。

ポエトリー・トレイン：0X年10月号に掲載の「浮遊するポエマー」は、ネット上で発表される詩についての考察だが、いわゆるポエムや歌詞ふうの作品に対してだけでなく、HTMLやCSSを使ったビジュアル詩やFlash、HTMLで動的な試みをしている作品にも批判的な論説を展開していたらしく、ちゃんねる・ぜろの詩板をはじめ、あちこちで、反発する連中の罵詈雑言を浴びている。

だから、村岸が多世界に興味をもつことに、ルネは何か不自然な印象をもったのだった。もしかしたら行きがかり上、新しい動きに対して大々的な批判の動きを起こすつもりなのだろうか。しかしそういうのは、村岸にしては、ちょっと大人気ない感じがした。

また、この部分にも何か引つかかるものがあつた。

それから私の友人には今、真面目に、そして純粹に詩作に励んだり、詩が日本でより多くの人たちの間に入っていくよう活動している者たちがいて、彼らの努力により、だんだんいい方向へ行きかけている事が、水の泡になつてしまふような

事態も考えられるんです。

あまり具体的な事を書くわけにはいきませんので、まあ、出版界とか文壇とか、

世の中にはいろいろあるということで、よろしくご配慮ください。

これ以上レイカたちのことを調べると、村岸の周囲の詩人たちが活動が続ける上で、何らかの不利益を蒙るというようにも受け取れ

るが、どうして、そんな事が起きるのだろう。レイカの父である高瀬川雅堂は自殺しているが、それと関係が起きるのだろうか。しかし、生きているなら、有名人の彼が出版関係へのパイプを使って圧力をかけることも考えられるが、高瀬川雅堂はもう死んでしまっている。

それなら、そのような場合、雅堂以外で困る人間が出てくるのだろうか。

だとしたら、その人間が社会的な影響力をもっていて村岸を動かしているのかもしれない。人物というより団体や組織のようなものだろうかともルネは考えた。最近、自分の周囲で起きた出来事の陰にカルトの姿がちらほらと見えることもある。しかし、ここで関係している明確な根拠はない。

69 > meta <

ルネは村岸のメールに書かれている多世界のサイトのURLをクリックした。

ブラウザが開くとファイルをダウンロード中の表示が一瞬出たが、すぐにFlashが開始された。

宇宙空間の、星間物質が比較的濃密な領域を想像させる画面で、細かい粒子や靄のような宇宙塵はランダムな動きをしている。

それはマウスの動きに反応して、どうやら一定の運動をする方向に移行しつつあるらしい。

やがて、宇宙塵はさまざまな周波数の光を発し始める。虹のような輝きが収束するとまた白い状態に戻り、その中で“many world”と“enter”の文字がゆっくりと形成される。“enter”は中に入るリンクだ。マウスが触れるとストロボのよう

な光が断続的に放たれる。

HP製作の仕事もしているから、これはというページがあるとソースに目を通すのはルネの習性のようなものだ。多世界のサイトはスキルとセンスの両面で興味をそそるものがあつたので、ルネは次のページに移る前にソースを見ておこうと思った。

AltとVのキーを同時に押し、次にCのキーを押して、表示されたソースを見て行くと、headの中に以下のようなタグが入っていた。

```
>META NAME="ROBOTS" CONTENT="NONE"<
>META NAME="ROBOTS" CONTENT="NOINDEX,NOFOLLOW"<
```

これはロボット拒否のタグだ。ロボットといっても、サーチエンジンが情報収集するシステムのことで、ページの中にあるリンクを辿って行った先々の情報を保存・登録する。

だから、自分のページが検索でヒットするようになるためには、まず、既に登録されているサイトからリンクを貼ってもらうことが重要なのだが、逆に検索で見つけられるのを良しとしない場合にはメタタグといわれるこれをHTMLのheadの中に入れておけば、ロボットは、そのページの情報を収集しない。

NOINDEXはページの情報を登録することを許さず、nofollowはそのページに記述されているリンクを辿ることを許さないことを表明していて、だから、もし適切なキーワードで検索しても、サーチエンジンにはその情報が登録されていないからページが発見されることはない。

そうすると、村岸はこのサイトを検索して探し当てたのではない

ことになるなとルネは思った。

だが、ロボット拒否をしていない他のページに多世界のサイトの情報が掲載されていて、そちらが検索にかかってわかったという可能性もある。ルネは多世界のサイト名やURLで検索してみたが、何もヒットしなかった。

やはり村岸は、このサイトを検索して見つけたのではないらしい。だとすると、誰かに聞いたか別の方法で情報を得たということなのだろうか。

次のページはサイトマップだった。ほとんどがFlashでできているので、ソースに特別注目するところはない。

“what's new?”の最近の作品に『世界最終戦争』と
いうがあるので、ルネはそれを覗いてみることにした。

世界最終戦争

あなたのスコア、および物質界と想像のすべての理由がそうである
あなたの神聖なゲーム脳は超越しました。肉は彼を招待した概念の
時間から腐食し、どれが無知な人々になったかの中の文化の罔がエ
ラーを熟させた一方、最後の戦争以来の精神的な「すべて」起源に
世界で続きます……

ただ、テキストで書かれただけの作品のようだったが、難解とい
うのだろうか。精神医学の本で見たことのある統合失調症患者が書
いた文章のようでもあるし、ノストラダムスの预言詩を連想させる
雰囲気もある。

意味不明で難解な文章と言うと『人間は表現する葦である』とい

う詩のことがルネの頭をよぎったが、難解だったら隠されたメッセージがあるというわけでもないだろう。

ネット詩人の中にはカットアップという手法を使う者もいる。カットアップとは美術におけるコラージュのようなものだが、文学の場合だと例えば翻訳ソフトや翻訳のサービスをしているサイトを使って日本語↓英語↓日本語↓英語…と変換を繰り返すようなことが行われたりする。文章が攪拌されたり歪曲されたような状態になるのを積極的に利用するのだ。

村岸はメールの中でシミュレーションニズムに触れていたが、この辺りの事かも知れないとルネは思った。

他のページも一通り見ておこうと思い、移動の前、例によってソースをチェックした。

```
>div onlick="x()"<物質界と想像のすべての  
理由がそうであるあなたの神聖なゲーム脳は……  
……生命オブジェクトおよび（特に）あなたを否定する必要がある  
ました、人々のグループから降りてください。>/div<
```

詩の部分が段落のタグ<div>/div<で挟まれているが、タグの中にonclick="x()"とあった。これは、この段落をクリックするとx()という関数が実行されることを表わしている。よくある書き方としてはheadやbodyの中にスクリプトを記述するのだが、このソースではheadの中に<script language="JavaScript" src="0.js">/script<とあるので、スクリプトは、このファイルとは別の0.jsという外部ファイルに書かれているようだ。

だから、このソースを見ただけではクリックしてどんなことが起きるのかわからない。

何かの仕掛けらしかったが、無分別にクリックするのは考えものだった。この場合、多世界がひどいことをするとは思えないが、破壊的なスク립トが挿入されたページもWEBにはよくあることだから、ルネは、いちおう慎重に対応づることにした。

その時、FMの音楽番組が一段落して、アナウンサーがニュースを読み始めた。

<ここでニュースをお伝えします。昨年暮れ、都内杉並区の山本宏さん宅で一家4人が何者かに惨殺された事件は発生から5カ月が経過しましたが、捜査本部はこの度、犯人とおぼしき人物の似顔絵を公開しました。これは、事件のあった当日と、山本さん宅で夜間を過ごした犯人が家を出ていった翌朝、付近の住人や通りかかった人が目撃した不審な人物があり、服装や容貌が似ているため、その人物は同一で犯人の可能性が高いと見た捜査本部が似顔絵を作成したものです。この似顔絵は警視庁のホームページで見ることができます。>

数カ月前にはマスコミを賑わし、ちゃんねる・ゼロでも祭になっていた事件なので、ルネは興味が沸いた。

多世界のサイトを見るのは中断して警視庁のサイトにアクセスした。

更新情報の中で“杉並一家4人殺人事件について捜査協力をお願い”をクリックする。

不審者の目撃談や犯人の遺留品など、情報が古い順に下から並んでいて、いちばん上に大きな目の写真で犯人とおぼしき人物の似顔絵があった。

不精髭がない点を別にすれば、その男の顔はホームレスの源さんによく似ていた。

70>script<

一家4人惨殺事件の犯人らしい男の似顔絵は源さんによく似ていたが、だからといってルネには警察に知らせようという気も起きなかった。

犯人が逮捕され死刑になったからといって、一見落着くのは時代物のドラマの中だけだ。でも、たぶん、犯罪というのは社会の構造の中から必然的に生まれてくるので、犯罪者とは、ただ、そういう場所に置かれた人間が、しかるべき道を選択しただけのことではないだろうか。もちろん例外的に、ヒトとしての機能が不全か壊れているためボーダーラインの存在しない場合もあるだろうが、そういうものに対しての妥当な対応となるとわからない。多数者の平和な生活のために抹殺するというのもひとつの考え方ではあるだろう。とにかく、裁判と処刑の儀式をつつがなく行えば物語は終わり、一般ピープルは納得して、実はそれまで味わっていた高揚から醒める。

自分を犠牲にして社会秩序を護ろうと、どんな時でもボーダーラインを超えないでいる者もある。しかし、もしかすると、そういうのも機能不全や壊れた例だが対極にあるものかもしれない。

まあ、自分だって時と場合によっては、殺人くらいやるかもしれないのだ。

ルネは犯罪の報道などを見ながら、こんなふうに考えることもあった。

そつえば、ちゃんねる・ゼロに画期的な情報を書きこむと住人

たちから“神”と呼ばれるようになるな、とルネは思った。どうせ名無しか、いいところ固定のハンドルネームでの投稿だから自己満足でしかないのだが、それにけっこう価値を認めている常連も多い。たぶん、もうスレが起っているだろうとは思ったが、源さんのことを書きこんで“神”になる気は起きなかった。

それに似顔絵の男は、ただ、源さんに似ているだけのことで、彼だという確証があるわけではなかった。似ている人間なんて世の中にいくらでもある。

ルネは、もう一度、多世界のサイトにアクセスした。『世界最終戦争』というテキスト作品のページのソースを開く。

```
headの中に<script language="JavaScript" src="0.js">というタグがあった。つまり、JavaScriptは0.jsという外部ファイルに書かれているのだ。ファイル名を0の1文字だけになっているのは気づかれ難くしているのだろうか。そういえば関数もx()と1文字で短く名づけている。
```

アドレスバーのURLから現在のページのファイル名を消し、そこに0.jsをコピーしてEnterキーを押した。ダウンロードの可否を問うメッセージが出る。デスクトップに0.jsをDLしてエディターで開き、x()という関数が出てくる部分を探した。

```
function x(){window.open("http://www...../cgi-bin/secret.cgi");}
```

これは、別画面を開いてダブルクォーツ内のURLを表示させるスクリプトだ。

拡張子を見るとC G Iのページであることがわかる。H T M Lで書かれた普通のページとは違って、例えば掲示板のようなインタラクティブな機能をもっていることが想像された。

多世界が変な仕掛けをしていることはないだろうとは思ったが、支障が起きても構わないW i n 9 8のマシンでアクセスすると、s e c r e t . c g iはチャットルームだった。

入室者はなく、以前の会話はw e b m a s t e r がXを入れた発言を並べて押し出している。ログもないようなので、ここでどんな話がされているのかは知るすべがなかった。

ビールを飲みたくなったが、冷蔵庫の中のは切らしていたのでコンビニまで買いに行った。もっと近くに昔からやっているらしい酒屋があるのだが、ルネは対面販売というのがどうも苦手だったので通り過ぎる。商売人なのだから商品を売りつけて儲けたいのは当然だし理解できるのだが、個人商店では接客する笑顔の裏に、何かもつと別の要素が存在しているように感じられて、つまりクールでないのだ。

コンビニやスーパーの店員はマニュアルにしたがって自分をアンドロイド化しているから、ルネの意識の中に磁気嵐のような煩わしさを生じさせることがない。

ルネはコンビニに入った。ただビールを買って帰るだけというのもつまらないかなと思い、雑誌のコーナーを覗いてみることにする。それほど興味があるわけではないが世の中の流れを確認するため、ファッション誌を数冊、立ち読みした。それから週刊誌を目についたものから手にとって行くと、何冊目かの目次で、こんな記事のタ

イトルが目に残った。

インターネット自殺者たちの横顔

ネットで示し合わせて自殺した男女について、それぞれの周辺を取材したもので、流し読みして行くとHK(36)というイニシャルについて書かれた部分に、以前ロックバンドに所属しライブハウスで演奏していたとか、インディーズでCDを出していたなどであって、どうやらHeiterのことらしかった。

ルネは内容のほとんどをちゃんねる・ゼロで見たと感じた。ライターは、あのサイトをよく見ているのかもしれない。

HKの次には、同じ車の中で自殺を図った女性について触れている。

SAさんは24歳。小さな頃から彼女をよく知っている近所の主婦は、こう話している。

「Aちゃんはずちの子より2歳年下で、よく一緒に遊んでたよ。子供の頃、成績は良かったけど、どちらかというと地味で、あまり目立たない方だったんじゃないかな。大学に入ってから、どこかのカルトの信者になって中退し、教団の方で生活してたと聞いたね。その後、家に戻ってM食品に就職したらしいけど」

SAさんのメル友であったJさんは「自殺の報道があった数日前にSAさんからメールがあって、詩のサイトのオフ会に行くと書いてありました。私も時々投稿してるのに誘いが無いと淋しく思ったので記憶に残っています。でも、Aさんはブログやメールに書いてあった限りでは、公務員のご主人や幼稚園の年長さんのお子さんがい

る幸せな暮らしをしているってことだったんですけどね」と語った。

H K、S Aと行動を共にしたN Jという21歳のフリーターについても書かれている。この女性はよく、リスカや自殺に関するサイトにアクセスし、そこに出入りする同士で交流していたようだが、詩のサイトに関することは書かれていなかった。

帰ってからネットでH e l t e rの名前を探す。ちゃんねる・ゼルのログ検索してみると、練炭自殺が報道された時に立てられたスレのソースとして、ニュースサイトの記事がコピペされていた。

調べによると男性は市川市在住の無職広田啓一さん(36)で、

女性は埼玉県三

郷市の会社員沢野厚子さん(24)。もうひとりの女性は東京都内の21歳フリー

ターとみられている。3人はインターネットを通じて交流があり、21歳フリータ

ーが昨日、友人に当てて自殺するとのメールを送っていたため、家族が搜索願を出していた。

それぞれ、イニシャルと名前あるいは年齢が一致している。

ルネは時折、多世界のサイトにあるチャットルームを覗いてみたが、いつも入室者はなかった。

e w b m a s t e r < X X X X X X X X X X

ただ、この発言が上から下まで並んでいるだけだ。

一見するだけでは変わりがないように感じたが、数日に1回は、同じXの羅列ではあるけれど書きこまれた時間が新しくなっていた。チャットが行われているが、その内容を多くに知られないために処置したことが想像される。

とにかく、交わされた会話はすべて枠外に押し出されていたし、ログを見られるようにもなっていないから、どんなことが話し合われていたかを知ることができなかった。

ルネは1日に2・3度だったチャットルームへのアクセスを、もっと頻繁に行うようにした。

入室者がいて会話が交わされているのに行き会ったのは、翌々日の深夜だった。

メンバー：3

ROM：1

村下冬樹<

ところで、私は詩のことに疎いので初歩的な質問かもしれませんが、現代詩って、どういうものをいいますか？

タダシ22号<

第2次大戦中には詩人たちが戦争に協力したことがあったので、その反省から、政治的なこととは距離を置いたり個人の内面を描くような傾向が出てきて、まあ、「戦後詩」というような呼ばれ方もあったんですが、要するにヒッキーなスタンスを取るようになって、今に至るのが現代詩ということでしょうか。

webmaster<

要するにヒキコモリなんだよね。キモいわけだ（笑

村下冬樹<

キモいといえば、ポエトリリーディングとやらで、冴えないルックスの連中がぼそぼそ声を出してるの、あれはひじょうにキモい。と私は感じますw

チャットの画面は30秒毎に自動的に更新される。ディスプレイが瞬きするとROMの数が2に増えていた。

タダシ22号<

聞かせようとか見せようとか工夫してる人も、いることはいるけどね。

webmaster<

今は亡きレイカも、よくイベントに出てたんじゃなかった？

タダシ22号<

イベントって言っても、ほとんどがキャパ数十人の場所。学校のクラスでやってるようなもんでしょう。それで、武道館か東京ドームにでも出たような大した気になって舞いあがっちゃってるわけだけど（爆

村下冬樹<

客が数十人じゃライブハウスでも、ごく小規模なところです。それじゃ来るのは顔見知りばかりでしょう？

タダシ22号<

出版社におだてられて経費自分持ちの詩集を作ったり、細々と同人誌を続けてるのと同じようなものですね。

webmaster<

ポエトリリーディングってWEBで誰かが言ってたけど、あ、もしかして僕か。まあ、音楽とか演劇の才能があったら、そっちへ行くだろってこと。そっちの方が何かを伝えやすいしひとやま当てれば有名になって金も入ってくるし。

タダシ22号<

それで激怒したレイカが宣戦布告したんでしょう？

野ざらし<

皆さん今晚は。

野ざらし<

その時、レイカさんが頭に来た相手はHelterさんですよ。

タダシ22号<

野ざらしさん、お久しぶりです。

野ざらしが入室して、ROMは2名から1名に減った。ルネの他にもうひとりいたROMは彼だったようだ。

webmaster<

野ざらしさん、今晚は。それで、レイカはHelterさんに刺客を送った。それは「現代詩ノート」の投稿欄によく採用されてる某女史。でしたね？

webmaster<

「現代詩ノート」の常連は埼玉県三郷市の会社員沢野厚子さん（24）。

村下冬樹<

「現代詩ノート」には本名で投稿してたんですか。

タダシ22号<

紙メディアでは、そういう詩人、わりと多いね。でも、多世界さん、なかなかの情報ツウですね。

webmaster<

「週刊文潮」で最近読んだよ。タイトルは「インターネット自殺者たちの横顔」だったかな。名前はイニシャルで書いてあったけど、本名は、あの自殺（？）があつた時報道されたし、今でも検索すれば、すぐに記事は見つかる。文潮ではSAってなってるけど、本名のイニシャルそのままだから、たぶん、彼女なんじゃないかな。

村下冬樹<

一緒に死んだということは、刺客に赴いて、そのうちに二人はできちゃったんですか？

webmaster<

そこはまだ想像の域を出ないから…。

ルネはwebmasterこと多世界の発言が、何か意味ありげに感じられた。

多世界は自分に何かを知らせようとして話題を誘導しているような気がしないでもない。

管理人である多世界はルネの環境変数を見ているのだろうか。それによって特定するまでには至らなくても、ある程度、誰なのかを類推しているのかもしれないとルネは思った。

村下冬樹<

沢野厚子はどうしてレイカの刺客になったんでしょうね。

webmaster<

フィクサーがいたみたい。

村下冬樹<

フィクサー…、ですか？

webmaster<

それはそうと、まあ、家元のお嬢様は、それなりにぐわむばってた

んじゃないかしら。

タダシ22号<

まあ、いろいろ頑張ってたとは言えるでしょうが。

webmaster<

うん、「女を武器に」ってやつで（笑

多世界は自分にある事実を知らせるという彼の書いたシナリオを進行させているのだろうか。そうだとすると、自分の役割は何なのだろうとルネは考えたが、同時に、実際、そんなことがあるのかという思いも半分は存在した。

72 >/script<

webmaster<

もともとレイカは、父親が文化人と繋がりをもって箔をつけるのを助けるため、いろんな相手に身体を提供してたんだよ。ほら、あのイラストレーターなんかにもね。

タダシ22号<

たしかイラストレーターで、家元のおホモだちって某週刊誌に書かれてたのがいましたけど。

村下冬樹<

家元だって奥さんがいて、レイカも作ってるわけでしょう？やはりバ

イセクシユアル？

野ざらしく

でも、両刀使いは、よくあることですよ。

タダシ22号く

家元の場合、セレブの嫁はあまりにも性格悪いので、女性不信に陥ってモーホの道に入ったとありましたね。

村下冬樹く

そうだったのか。だから、あの家元は自殺したのかもね。

タダシ22号く

誰かに疚しいところを握られてて、脅されてたかもしれないですね。

野ざらしく

じゃあ、多世界さんだ（笑。でも、よくいろんな情報が入りますね。感心します。

タダシ22号く

裏世界にも通じてたりしてw

webmasterく

いえいえ。僕は善良な市民だから。たまにちょっと裏技を使うだけ。

村下冬樹く

ちゃんねる・ゼロで煽ったり釣ったり…、その程度じゃないですね。

webmasterく

そんなのでも、けっこういけることあるから、馬鹿にはならないけ

ど。

村下冬樹<

まあ、とにかくレイカって親孝行な娘じゃない(藁。でも、ポエム系でいい思いした奴はいるのかな？例えばdark blueとか？

タダシ22号<

まさか、いくらなんでも、あんな不細工なデブ、相手にしないですよ(爆。実物見たことありますから。リーディングや同人誌のイベントで。

webmaster<

そうだね、関係があったと言えば、まあ、ポエムの世界ではネットだけじゃなく、紙のメディアでも活躍されてるあの方とかなら。

タダシ22号<

というと、村岸達也？

村下冬樹<

村岸がフィクサーだったのか。

webmaster<

さあ、その辺の情報がなくからよくわからないけど。

村下冬樹<

死人に口無しで助かってる人も多いのかな。

webmaster<

死人と言え、このところネット詩関係で随分と死んでますね。死ぬだけじゃないみたいけど。

村下冬樹<

多世界さん 死ぬだけじゃないって何ですか？

webmaster<

行方不明になつてゐるのも多いみたいだよ。

ROMの人数が2に増えた。でも、次のリロードではまた1に戻り、“非人間”というHNが入室している。

非人間<

お邪魔しますです。

村下冬樹<

1週間のご無沙汰でした。

非人間<

それは…、タマオオキイヒロシですか？

村下冬樹<

ところで、さつきからROMの人が約1名いますね。

誰だろう？

タダシ22号<

どうぞ、遠慮なく参加してくださいね。みんないい人ですから。

村下冬樹<

キモいネット詩人とは違いますよw

webmaster<

まあ、いいでしょう。シャイな人なのかも。

webmaster<

ところで、ちよつと話題を変えますけど、最近うちのサイトへのアクセスで、環境変数を見ると、おかしなのがあるんですよ。検索エンジンのロボットに似てるんだけど、時々来てるのとはちよつと違う。

非人間<

どんなふうにおかしいんですか？

webmaster<

REMOTE|HOSTは、わりと大手のプロバイダーなんだけど、モニタは不明でブラウザ情報もありわからない。JavaScript無効で、以前のアクセスの情報もないし。前にやってて更新を停止してる方にも来てます。

タダシ22号<

私はアクセス解析やってますが、そういうのは来てませんね。零細な詩のサイトなんて来訪者も少ないから、だいたい把握出来てると思うんですが。

webmaster<

もっとおかしいのは、うちはトップページにロボット拒否タグを入

れてるんだけど、そこからリンクしてる先まで、そのロボットらしいのが入ってるんだよね。

ルネはお気に入り登録してあるアクセス解析のページに移った。ログインして自分のサイトのアクセス記録を見る。

数日遡るうちには次のようなアクセスがあった。

回数 初めてのアクセス 前回アクセス 前ページ (JavaScript 無効)
モニタ?

HTTP | USER | AGENT Mozilla/5.0 (compatible; Yahoo! Slurp; http://help.yahoo.com/help/us/ysrch/slurp)

国/言語?

REMOTE | HOST | j2518 : inktomisearch.com

これは、有名サーチエンジンのものと思われる。

こういうものとは別に、JavaScript 無効、使われているブラウザは不明のアクセスがルネの目に留まった。REMOTE | HOST はわりと有名なプロバイダーだが、そこは有名検索エンジンと提携しているから、おそらく独自の情報収集はしていないだろう。

ということは、プロバイダーのユーザーである個人あるいは組織が、私的にWEB内で情報を収集していることになる。

多世界のサイトではロボット拒否タグが無視されていたらしい。しかし拒否タグはシステムの侵入を阻止するものではなく、そこにタグがあった場合、いわば紳士協定で情報収集を自粛するということだけのものなのだ。

もちろん、大手のサーチエンジンは、道義に反することをやらないだろうが、私的な情報収集システムなら、そんなものは、あっさりと無視できる。

73 >input<

渋谷の駅前広場の上は、そこだけ空がぽっかりと開いていて、そのため心が休まるようでもあるが、しかし、自分の内部に空虚さを誘うようにも感じられる。

周囲の動きに合わせ、ルネはスクランブル交差点を渡りはじめた。歩行者用信号が青に変わると、それまで、それなりに保たれた秩序の中にあつたものたちが、スクランブルエッグのようにかき混ぜられる。

そのカオスの中に入って行くと、周囲の建築物も含めた町全体が攪拌されているように見えた。何はともあれ秩序が崩壊するのを眺めることには快感がある。秩序に依存し、そこが居心地良くなることは、たぶん老化現象だ。

動き出した人の流れに合わせ、ルネは横断歩道を渡って行つた。船が接岸する時のように、突き当たりの歩道や建物が近づいてくる。都市が美しいのは遠景からプラスチックのレプリカのように見える時や、デジタルカメラの画像の中に切り取られて画素の集積に置

きかえられた場合だろう。間近で目に入るのは、いかなる関わりをも拒否しながら存在を続けているように思える、ざらついたコンクリートの表面だ。だが、単に無機質なのではなく、そこにあるすべてには人間たちの垢が付着し、かれらの体臭が交じり合ってそこに残留している。

道玄坂の方にある居酒屋で、たしか最近、ぽえ村のオフ会が開かれたことを、ルネは参加したメンバーのブログで読んでいた。ルネはネットのオフ会というものには行ったことがない。自転車系のサイトでもオフ会でツーリングをやっているようだが、集合場所からそれぞれのペースで勝手にコースを走り、ゴールへの到着が遅れると打ち上げへの参加もできないらしく、まあ、それはそれでクールなのだろう。

そう言えば最近のWEBでは、少し前のような“クール”という評価の仕方をしなくなったような気がするが、ルネは交差点を渡って、そのまま真っ直ぐセンター街に入った。途中の角で折れてスパイン坂へ回り、パルコの横から坂を上って行く。

NHKの横を代々木公園の方向に行くと、公園の入口近くで初老の男が露店を開いていた。路上にシートを敷いただけの店だ。画用紙のような紙にサインペンで短い文章を書いたものが十数枚並べられていて、それが商品らしかった。風で飛ばないよう、それぞれにライターや眼鏡ケースや小石の重しが置かれている。

詩板ノ渋谷のホオムレス詩人について語るスレ

1：東京無宿

渋谷のNHKに近いの辺りで詩を売ってるおっちゃんをハケーンします。

紙に手書きしたのを売ってます。

だいたいが数行の短い詩で、時々売れてるみたいです。

洩れが見ていた30分くらいの間にも2人が買ってますた。

見てるだけなのも悪いので1枚買うことにしました。

おっちゃんは、値段はつけてないからいくらでもいいと言つので、洩れは金がないからこれで勘弁してと500円払いますた。

前の人たちは2〜3000円払っていたので、ちよつと気が引けましたが、

おっちゃんは笑顔で洩れに「ありがとうね」と丁寧に頭を下げ、いい人だなと思いますた。

洩れが買った詩は『負けないう』という題で

ここに書くと著作権上の問題があるかもしれないので、やめときますが、

何だか力づけられる内容です。

ネットの投稿サイトに書きなぐられてるような、

かっこついたりインテリぶったり自分の弱さを晒してるようなのとは違い、

人生の重みというか、そういうのが感じられます。

おっちゃんはたぶん、人生経験豊富なのだと思います。

それから、少し、話をしましたが、

おっちゃんは昼はこうして詩を書いたり売ったりしていて、夜は野宿するホームレスの生活を何年もやってるそうです。

おっちゃんの名前（ペンネーム？）は司 徳馬です。

露店の主らしい男は一篇書き上げたらしく、今まで書いていたペ

ージをスケッチブックから破り取った。身を屈めて並べられた紙を整理し、その中に割り込ませる。

それぞれの詩には司 徳馬と署名があるので、彼がちゃんねる・ぜろの詩板で噂になっているホームレス詩人だとわかった。

司 徳馬はジャンパーのポケットを探しまわった後、折り畳み椅子の脇に置かれたバッグからセロテープのカートリッジを取り出して今並べた紙の上に置いた。弱い風に紙が多少はためくが、飛んで行くことはない。

再び椅子に掛けたので顔が見えた。源さんではない。

ルネはスレッドを見た時、ホームレスと詩との関連から源さんのことがちよつと頭に浮かびはしたのだが、その路上詩人が源さんだと考えたわけではなかった。そして、彼はやはり違っていた。

ルネは並べられた詩を端から順に見て行つた。詩の脇に太陽や花や子供などの簡単なイラストが描かれたものがある。ちゃんねる・ぜろのスレに誰かが、あいだみつおや武者小路実篤と似た雰囲気だと書いていた記憶があるが、たしかにそんな気がしないでもなかった。

ルネは、その中の1枚を手にとって店主に告げた。

「これ、いただきます」

「ああ、値段はつけてないですからね。あなたのご都合で、いくらでもいいんですよ」

ルネはウォレットから千円札を3枚出した。司 徳馬は「あれ、いいの？」と一瞬ちよつと驚いたような顔をして、紙幣を拝むように受け取った。ちゃんねる・ぜろに書いてあったことから考えて、その程度払うのが適当だとルネは思ったのだが、本当はもっと少なくていいのかもしれないし、司 徳馬は謙虚な人なので、いつも遠慮がちな様子を見せるのかもしれない。

「ありがとうございます。まあ値段はあつてないようなものだから……。十円玉をひとつだけ置いてく子供もいるんだけど、それで結構とにかく私の書いた文章なんかがお金に代わるってのは大変なこと

ですよ」

自分ではわからなかったが、ルネが何か意外そうな顔をしたのでそれに反応したのだろうか、司 徳馬は笑顔でこう言った。

紙幣を渡した後、ルネはそのまま立ち去るのは何だか素っ気なさ過ぎるように思えた。何か喋らなければという強迫観念に憑りつかれたのに似た気持ちで、ルネは思わず、こんなことを口にしていた。「僕の知り合いにホームレスの人がいるんですが、その人も詩が好きみたいで、宮沢賢治なんか読んでました。お知り合いつてことはないですよね」

「ふうん、何て人？通り名でもいいんだけど」

「源さんていうんですけど」

司 徳馬は風に飛ばされそうになった紙を慌てて押さえ、重しの位置を調整すると、また座りなおした。

第9話（後書き）

おそらく私のコピペ間違いで71と72が重複していましたが、72は正しい文章を入れ直しました。

ご指摘くださった和佐さん、ありがとうございます。

第10話

74 > t e x t a r i a <

部屋に帰って、ルネはiTunesにDLしたままになっていた音楽を何曲か聴いた。60〜80年代のロックやクラシックやテクノやアンビエントやジャズなどジャンルについては統合失調的かもしれない。

ルネは、それらのどれもフルコーラスを聴くわけではなく、適当なところで別の曲に移った。それぞれは名曲といえるし、おそらくアーティスト渾身の作品なのだろうが、すべての受け手に必ずしもじっくり聴かれるわけではない。

そうしている間、ルネは頭の隅で、やはり、さっきのホームレス詩人に頼んでおくべきことがあったのではと考えた。何となく源さんのことが気になって、連絡を取れたらと思ったのだ。というより、ずっと意識の底部にあった種子のような感情が発芽したのかもしれない。それは次々と曲を変えるのにしたがって、しだいに増幅されていった。

ルネは自分に宛てたメールを送れるフォームのページを作ることにした。これがあれば、メールアドレスをもっていなくても、例えばネットカフェからルネ宛てのメールを送ることができる。司 徳馬以外にも、源さんと行き会う可能性のある人間がいたらURLを伝えてくれるよう頼んでおけばいい。

まず、海外にあるサーバーのフリーHPスペースで、CGI設置

可のものを探した。フリーでは、というか、有料やプロバイダーがユーザーに提供するものでもCGIのファイルは置けない場合が多々ある。欠陥のあるスクリプトを置かれるとサーバー全体に悪影響を及ぼすことがあるからだ。

しかし、CGI設置可のフリースペースも探せば見つかる。海外のサーバーにしたのは、万一時、その方が日本からの捜査が及ぶにくいからだ。

アンダーグラウンドの情報サイトからsendmail機能を使えるフリースペースを何ヶ所か覗いてアクセス状態の良さそうところを借りることにした。ルネはメールフォームのページが欲しかったからsendmail機能は必須なのだ。

その次に必要なのはCGIだ。CGIはサーバー側で動作する一種のプログラムで、掲示板なども、これで書かれたものが多い。この場合はフォームに書かれた内容をメール送信するのだが、ルネはCGIに関するスキルがあまりないので自分で書くとなると面倒だし、自由に使うことを作者が許可しているフリーCGIが多数公開されているので、検索して手ごろなものを選んだ。多少の知識があれば、自分の用途に合わせて適当にカスタマイズできるが、この場合は単純なものでよかったから、それほどいじる必要はない。

スペースを借りたサイトのマニュアルは英文だったが、いわば定形文のようなもので要領は掴みやすい。設定したCGIをサーバーに送り、フォームに書きこんでテスト送信してみると、うまく動くようだった。

翌日も天気は良かった。ルネはメールフォームのURLをメモすると、その紙片をポケットに入れて、また渋谷に出て行った。

山手通りを上っていくと、司 徳馬は同じ場所で店を開いている。ルネは前にしゃがんで並んでいる詩に目をやった。昨日見て記憶に残っているものもあるが、3分の2くらいは新しく書かれたものに入れ替わっているようだった。

折り畳み椅子に腰掛けて新聞を読んでいた司 徳馬は、ルネに気づくと「やあ」と片手を上げた。普段の顔つきは色黒なためもあつてか、少し陰しさを感じるが、笑顔になると人を拒絶する雰囲気は消える。

「昨日言つてた知り合いを探してるのかい？」

司 徳馬は続けて「ゲンさんつてひとのことだよ」と言った。

「うん、まあ、それもありますか」

「何しろ、今、ホームレスは多いからね。役所では東京にいるホームレスの数が6000人強なんて言ってるが、とてもそんなもんじやない」

「万単位の数ですか？」

「そうだね」

司 徳馬は右手でピストルの形を作ると都庁のビルが聳え立っている方向に向けた。目を細めて狙いを定めている。

「何万人のホームレスが暴動を起こしたら面白いんだがね。世の中、引っくり返るかもしれない」

ネズミヤシゲルなら、同じようなことを語るかもしれないとルネは思った。そんな時は、たぶん目を剥き出して唾を飛ばしながら喋るだろう。でも、ネズミヤは多摩で何者かに襲撃されて、既にこの世にはいない。

「ま、それほどの根性があつたらホームレスになんかならないがね。野宿してる連中には背中に、結構立派な彫り物のある奴もいるよ。仲間うちでは元ヤクザとか粹がつてるが、いざとなると不良の子どもたちに簡単に殴り殺されちゃう」

司 徳馬は小声で笑い、強めの陽射しに汗ばんだ顔をタオルで拭いた。首をゆっくり左右に回して通りすぎる人々を眺める。

「その人は宮沢賢治が好きなんだったつけ？」

「宮沢賢治の詩集を読んでのを見たことがあります」

「賢治は田中智学の創設した『国柱会』という宗教団体に入会していたんだね。上京してその下働きをしていたこともあるそうだ。純正日蓮主義の、今でいうカルトかな」

司 徳馬は、暗唱でもするように澀みなく話を続けた。

「花巻で農学校の教師をしてたんだが、創作に専念するため退職したんだったつけね。でも、彼には文筆による収入なんて、たいしてなかったんじゃないかな。まあ、実家が裕福だから金には困らなかつたんだろうが…。その辺のことは私も不勉強なので、よく知らないが」

「詩を書かれてるだけあって、いろいろ博学なんですな」

「いやあ、要するに暇な時間が多いからだよ」

司 徳馬は笑ったが、それは自嘲気味にも感じられた。

「天気の良い日は、こうして店を開いてるが、雨の日や、冬場の寒い日なんかは図書館のお世話になるんだよ。あそこに入ってるって暖かいからね。仲間は新聞を読むくらいで後は寝てるが、私は、それでは申し訳ないんで一応本を読んです。どうせなら若い頃に勉強しておけばよかったんだがね。今更ながら思うよ」

年寄りが若い頃について語る時の典型的な言い回しだったが、語調や表情からは、実際、彼にそういう気持ちがあるのかどうかかわからなかった。

「まあ、賢治なんかも、今でいうニートだったといったら少し違うかなあ。そうだ、中原中也なんかは、まさにニートだねえ。裕福な実家からの仕送りで生活したんだし、詩集を出版する資金だって、たしか、そっちから出して貰ってたんだから」

ルネの横で、何やらぶつぶつ呟く声がしばらく続いている。その方向に目をやると、比較的若い感じの男が並べられた詩を眺めていた。

「ふうん、こうやって詩を書いて、通りかかった人に買ってもらうのか。こうゆーの、なかなかいい商売だな。俺もやろうかな」

司 徳馬か、あるいはルネにはなしかけているのだろうか。そこには足を止めて店を覗いている通りすがりもいたが、若い男は誰にともなく喋っている。

「何しろ今、金がないしさ。バイトに行く気がなくて2・3日休んだら店長からもう来なくていいって電話だよ。それで次のバイト探したけどいいのがないし、もう面倒くて、毎日部屋でネットなんかしてただけど、家賃も溜まってたし、とうとうアパートを追出されちゃったよ」

誰かが答えるでも相槌を打つでもなかった。むしろ、彼はまったく無視されているように感じられたが、そんなことは気にせず喋り続けている。精神的に壊れたているのかなとルネは思った。時々、そういう人間を見かけることがある。

「でも、この商売、いいな。俺に向いてるかも。俺も詩を書いているしさ」

こいつはどうやら、デリカシーを持ち合わせていない人間のようだ。彼が能天気口口の動くまま喋るのを聞いてルネは思った。“俺も詩を書いているし”と言っても、文字が書けるのと詩が書けるのは違うのだから、考え方がイージーだ。

それに、司 徳馬の目の前でそんなことを露骨に言うのは失礼で、配慮を欠いている。

司 徳馬は表情を変えず、彼に何か答えるでもなく折り畳み椅子に座っていた。ほとんど身動きもしていないようだった。ルネは、自分が勝手なことを言うのも司の行き方を冒瀆するような気がしたので、あえて男をたしなめることはしなかった。彼に話しかけたら何らかの関係をもってしまうので、それを避きたい気持ちもあったと思う。

「自分の詩をネットに乗せてるんだぜ。そうだ、おじさんもやったらいいよ。インターネット。あんたの作品が世界中に公開されて、

地球の上のあっちこっちの人が見るんだぜ。凄いよ」

自分の言葉に陶醉するように彼は喋った。司 徳馬の詩を、そのままネット上にUPしても、日本語圏の人間にしか理解できないはずだとルネは言いたかったが、司 徳馬は相変わらず無表情で無言だった。

男はそれから急に話題を変えたが、周囲の冷静な態度から何か考え直したというわけではないように思う。

「バイト辞めてからは金もないし部屋でごろごろしてたからさ。PCをつけて、よくネットの詩のサイトに行ってたんだ。Poem Villageってところは投稿もできてさ。俺の書いたのは、なかなか評判がいいんだ。多い時は5・6人から感想の力キコがあるなよかったですとか感動しましたとか……。まあ、そういうのは俺に才能があるからだろうけどな。あんたネットやってる？ やってるんなら見てみてよ。sasuraibitoっていうHNだからさ。アルファベットで書くんだよ。半角英数ってやつ。ま、今では本当にヤサグレのさすらい人になっちゃったから、シャレにもならないけどよ」

sasuraibitoは、ずっと、ルネに視線を向けて喋っていた。

あまり関わり合いたくない感じなので、ルネは彼と視線を合わせないようにして、話を聞いているそぶりを見せるのも避けていたが、そのうち、以前、どこかで彼を見かけたことがあるような気がし始めていた。

電車か地下鉄の中だったかもしれない。そこに乗り合わせた乗客で、自分はネット詩のサイトに入ったりしている詩人だなどと一緒にいた仲間に話していたのが彼だったような気がするが、それだけのことなのではっきりと記憶しているわけではなかった。だから、雰囲気似ている人間というだけのことかもしれない。

「オフ会にも行ってみたよ。仕事の帰りみたいでスーツ着てる人が多かったな、学生にはカジュアルなものもいたけど、でも、ブランドの新しくて高そうなのだった。ちゃんと仕事をもってるサラリーマンとか多いんだよな。中には医者とか教師とかもいたみたい。学歴高そうで、本もよく読んでるらしくて哲学みたいな話をよくしてる。俺は高校中退だし、なんか、住む世界が違う感じだった。居酒屋とカラオケ代を割り勘で払ったらぜんぜん金がなくなって、いつもみたいにネットカフェで夜を明かすこともできなくなっちゃったから、向こうの公園のギャルサーが踊りの練習やってる横で寝たっけ」

それから脈絡のないことを、彼は唐突に喋った。

「ああ、そうだ。ネットカフェでよく見かけるおっさんがいて、どんなサイトを見てるんだろうと思って後から覗いたらぼえ村だったなあ。いつも朝までいるんだけど、あの人、ホームレスなのかな？」
話が飛躍するのが、ある種の心の病の症例にあることを、ルネは以前どこかで聞いたような気がする。

司 徳馬はsasurairibitoの言うことを聞いてはいるようだったが、言葉を返すことはなかった。

詩ができたらしく、スケッチブックを開いて何か書き始める。

sasurairibitoは、その様子を一瞥してから、また、独り言のようでもあるが呟きというには大きめの声で言った。

「ようし。俺もスケッチブック買って、やってみようかな。だけど、スケッチブックっていくらするんだろう。金あるかな。まあ、足りなければノートかなんかでいいや。百均で何か探すか」

sasurairibitoは山手通り方向に歩き去った。ルネは彼が誰かに呼びとめられるのを期待しているように感じたが、ただ、そんな気がしただけだったかもしれない。

「あの若いの、真面目に働けばいいのに…、なんてことを私が言えた筋合いじゃないね」

彼の姿が見えなくなってから、司 徳馬はこう言って小声で笑っ

た。

中年の夫婦らしい二人連れが並んだ詩を見ながら品定めをしているようだ。商売の邪魔にならないよう、ルネはその場を後にした。司 徳馬に軽くてを振り、sasurabittoが行ったのと同じ方向に歩くうち、メモを預けるのを忘れたことに気づいたが、引き返すことはしなかった。

ルネが山手通りを下って行くと、sasurabittoは煙草の自販機の前で手のひらの硬貨を数えて小銭入れやポケットを探るのを繰り返していて、ルネに気づくと助けを求めるような表情を見せた。

「細かいのならあるよ」と言っ、ルネは500円玉を渡した。

sasurabittoは自分の煙草を買うと「お兄さんのは何？」と尋ねたが、ルネは、自分は煙草を吸わないのだと答え、釣銭は返さなくていいことを身振りで伝えた。sasurabittoは嬉しそうに小銭をジーンズのポケットにいれた。それから、ちょっと何か考え込んだようだったが、すぐに口を開いた。

「お兄さん、どこに住んでるの、この近く？ひとりで部屋借りてるの？それとも実家かなあ？」

ルネは「いや、まあ」と曖昧な態度をとっておいた。自分のことを詮索されるのが好きな方ではないのだ。

「ああ、ところで、さっき言っ、ネットカフェのおっさんだけど」

ルネはメールアドレスのURLを書いてあったメモを取り出し、彼に渡した。

「もし、また会ったら、これを渡してくれない？よかったら連絡してっ」

ルネは5千円札を彼に握らせ「ネットカフェ代カンパするよ」と言っ。sasurabittoはこれで、数日は夜を明かせるだろうが、その間に目当ての男に会えるかどうかはわからない。

「それはいいけど、知り合いなの？えーと、お兄さん、名前は？」
「URLを見れば、向こうはわかると思うよ」

URLにはreneという文字列が入っているから、察しが良ければわかるはずだ。ルネは、それ以上会話が続く前に「ちよつと急ぐから」と歩き始めた。

75 > / f o r m <

ネットカフェや漫画喫茶には、たしか、千円前後で数時間いられる深夜料金があったはずで、夜を明かす連中は午前零時あたりからそれを利用するはずだ。だから、もし、sasuraibitoが運良く、すぐ源さんに会えたとしても、メルフォームが使われるのには、まだ間があるだろうとルネは思った。

そんなすぐに見つかる可能性は薄いと思ったが、ルネは、一応その時間帯まで待機していることにした。何かを期待してもいいような、予感のような気持ちはどこかにあったからだけれど、そういうものが、いつも当たるとは限らない。

いちおうメールチェックをしてみると、オークションサイトからのお知らせが来ていた。ACCESS-Parはポータルサイトを作っているが、そのコンテンツにあるオークションで、ここはウォッチリストに登録したアイテムについて、終了するとメールで知らせてくるシステムになっている。

ルネがウォッチリストに入れていたのはMTBだ。買う気はなかったのだがオークションの状況には興味があった。MTBなら商品に関して多少知識があるので把握しやすい。

ネット通販の企業が出品している新品で、15台を高く入札した順にゲットできる。折り畳みでアルミリム、シマノの16段ギアだ

が、フレームはスチールなので、ホームセンターで売っている程度の品だと思えたが、説明文にはメーカー希望小売価格52800円とあった。その海外の有名メーカーの最低クラスなら買える値段だ。ロゴは違うが、ほぼ同じ形の物が同じオークションサイトに一撃落札1万円で出品されていた。

ネットショップでも同様の商品が1万円台で売っている。

メールに書かれている落札情報のページにアクセスすると、最高額の落札は3万円で2万円台が3人、1万円台は7人いた。落札の最低額にしても9500円だから、それほど得な買い物でもない。この辺りの入札のくつかは、たぶん、出品者側が値段を吊り上げるための工作で、それに乗せられて入札したのだろうとルネは推測した。他のオークションサイトでは出品者のこのような行為には厳しいのだが、ACCESS-Palはなぜか、その点が甘いと、ちゃんねる・ゼロでも少し話題になっていた。

午前1時を回った頃、メールの着信があった。

件名がMail from WebになるようCGIを設定してあったから、ルネには、それがメールフォームから送られたものであることがわかる。

あのメモが、もう源さんに渡されたのなら随分早かったなと思いながらメールをよく見ると、どうやらsasurabittoからのもののようにだった。

□ □ □ □ □

送信者 sasurabitto

宛先 rene@*****

件名 Mail from Web

渋谷で会った二トのsasurabittoです。
お兄さん、あの時はお世話になりました。
カンパ、助かりましたです。

あの時は言いませんでした、
自分にはあのおっさんに関係することで
もう少し知ってることがあります。

それで、わかりだとは思いますが
僕は今、無職で、金に不自由している状態ですから
援助して貰えたら嬉しいなと思います。

と、いきなり言っても、はたしてどんな情報があるのか
信用もできないでしょうから、
とりあえず、ここを見てみてください。

http://www.*****.com/user/1283647/

ここは、おっさんが見ている時、
ライターを借りるふりをして近づき、
URLを盗み見ました。
その前にログインして何かやっていた後、
確認していたみたいなので、
おっさんのサイトじゃないかと思えます。
小説を書いてるみたいですね。
著作権の侵害とかは、しないようにしてください。
面倒なことに関わりたくないですから。

とにかく、これでどうでしょうね？

もっと凄い情報もあるんですが、

それについては、まず、相談です（笑）

連絡用に掲示板を借りました。

パスワードを入れないと閲覧も力キコもできない設定にしてあります。

`http://www.*****bbs.net/`

パスワードはrich3618です。

CGIを置いたサーバーから送られてくるので、ヘッダにはその情報があるだけだが、CGIのスク립トで末尾にIPとブラウザなどの環境変数が記されている。IPをWHOISで調べたら、主に企業を顧客とするインターネット接続サービスだった。

まず、源さんらしい人物が見ていたというページにアクセスした。そういう心配はあまりないとは思ったが、いちおうクラッキングの危険を避けるため画像やJavaScriptはオフにしていたので、そのページに表示されているのは、そこに画像があることを示す枠とkokuhaku.jpgというファイル名だけだった。画面の80パーセントほどの大きさを占めていて、他にテキストなどはない。

“kokuhaku”からルネは“告白”を連想した。画像を見ればそう名付けた理由がわかるかもしれないが、それより先にsa

s u r a i b i t o の掲示板を見ることにした。

認証画面で画像などをオンに変え、パスワードを打ち込んで入室した。書きこみが二つあり、二つ目の方にはレスがついている。

1

■名前：s a s u r a i b i t o

■タイトル：業務連絡

この掲示板を借りました。

s a s u r a i b i t o への連絡や交渉にお使ください。

パスワードがないと入れないので、

書いたものを不特定多数の人に見られることはなく、安全です。

よろしく。

2

■名前：佐藤

■タイトル：情報希望

先日お会いした佐藤です。

s a s u r a i b i t o さんが、信用のおける方であることはよくわかりました。

例の情報ですが、ぜひ、いただきたいと思います。

3万円ならお支払い致しますが、いかがでしょうか？

3

■名前：s a s u r a i b i t o

■タイトル：Re：情報希望

やあやあ、佐藤さん。

> 例の情報ですが、ぜひ、いただきたいと思います。

> 3万円ならお支払い致しますが、いかがでしょうか？

そうですね。

その情報ですが、実は、もう一人、ご希望の方がおられて、
どちらにもご提供したいのはやまやまですが、

そういうわけにもいきません。

それで、やはり、金額の高い方になら、恨みつこ無しと思われ
ます。

まあ、お金の問題ではないのですが、

ここは、そういうことでいかがでしょうか。

もう一人の方から連絡がありましたら、決定致します。

つまり、ルネが3万円以上出せば、sasurabittoのも
っている情報を渡すらしい。まるでオークションだ。

それに、書きこんだ時間を見ると最初の書きこみから佐藤とsa
surabittoのレスのそれぞれが数分間隔で行われていた。
何だか自作自演の雰囲気を感じるのも、さっき覗いたオークション
と似ている。

ルネはもう一度前のページに行って、画像がどんなものか見るこ
とにした。sasurabittoと取引するかどうかは、それか
ら考えることにする。

随分手間取っている。
少し焦っているのだ。

俺はパソコンが得意ではない。それに触ったことがあるのはWindowsだけで、Macは初めてだ。まあ、基本的に似ているとは言えるし、Helpを見たり試行錯誤したりでやって行けば全然手に負えないことはないのだが、それでも時間はどんどん過ぎて行く限られた時間が…。

子供の肉の感触は大人のそれとは違う。クビの周りの筋肉のこわばり。その痙攣を俺の指先は感じていた。それは以前経験したことの反復だった。

日本海側の浜辺から、夜、船に乗って、向こうへついたのは朝だった。エデン…。そこで俺たちは殺人のテクニックや破壊工作などを学び、実技の試験が行われた。それは技術の習得より、むしろ俺たちの忠誠度を測る目的だったのかもしれない。その方が上部に取ってはより重要なことだろう。

あの時と同じ感覚を俺の手は感じた。それは、たぶん親の反国家的な行為により、一家こぞって収容所に送り込まれた子供の兄と妹で、年齢も今、俺の前に横たわっている二つの肉塊とたぶん同じくらいだろう。

教官は俺に指示した。少し離れた場所で拘束されている男女によく見える体勢を取るように。彼らが子供の親のようで、女は唇を振るわせているが声は上げていない。男は放心したように無表情だった。俺は二人の表情を観察しながら彼らの子供たちを次々に扼殺した。目は親たちに向けていたから子供の生命活動が弱まって停止するの

は両手の触覚を通して認識していた。

あの時と同じだ。俺は柔かな肉塊が力を失い、さらに鼓動が止まってもう復旧する見込みがなくなるまで両手の力をかけつづけた。

オモニは俺が彼女の子供たちの首を締めている間も、あの半島の政治犯のように明確な反応を見せることはなく、それでも俺がすべてを終えてから、何かを合図する義務を感じたかのように少し顔を歪めて見せた。

「慣れたものね。もう随分やったんでしょう？半島の方でも、こちらへ帰って来てからも。でも、何て言ったらいいか、ためらいもなく人を殺せるというのはね。相手が子供であつても」

幼児に対しては庇護するような本能がはたらくというのを何かで読んだように思ったが、オモニの子供は小学生か、幼稚園でも年長の方だろう。

法律や道德のタブーと、遣伝子の中にあつて私たちの行動を絶対的に既定しているものとは必ずしも一致しない。

もつとも、世間一般で信じられている一般常識というのは、あたりさわりなく毎日を送っていくのにはなかなか有効なのだ。しかし、所詮それは共同幻想に過ぎなくて、いざとなったら儚いものであるのは、ちよつとボーダーラインを踏み越えてみればたやすく実感できる。一般大衆には、そこを越える機会がないだけだ。

とにかく、この場合、本能はその行為を止めたりはしない。その時、俺は頭の中でそんなことを考えはしたのだが、まあ、オモニとそんなこと議論をする気もなかった。それに、そんなことを言つたところで、全く無化されてしまうような何か冷たいものがオモニの存在の底部に流れているのを、俺はその時、垣間見たような気がしたのだった。オモニは修羅場の中でも、ひじょうに落ち着いているように見えたが、それは意外というわけではなくて、それまで霧の中にあつて臆気だつたものがそのかたちを把握できる程度まで姿を顕わ

にしたと言つのが適當だろう。

オモ二と俺はキッチンに行った。それはオモ二の意志で彼女が先に立ち、俺はついて行つたのだったかもしれない。

「おなか、空いてない？何か食べるなら作るわ」

オモ二は包丁に手を伸ばそうとしたので、俺はそれを留めた。オモ二は俺の顔を直視して微笑した。それで俺は、彼女が抵抗を試みようとしていたのだと感じた。

「そうねえ、それじゃ」オモ二は冷蔵庫を開けた。俺は掴んでいた彼女の二の腕に力を込め、冷蔵庫に手をつ込むのを制止した。警戒するのに越したことはない。

「アイスクリームなら、いいでしょ？」

オモ二の口調には恋人と話すような共犯者的な媚が含まれていた。もし、この場面を小説に書くなら、こういった表現をするだろう。そんなことをその時俺は思った。

オモ二が冷蔵庫の中に手を伸ばすのを、もう俺は妨げなかった。少し腰を屈めて覗いたら、その先には確かにアイスクリームのカップがあつたからだ。オモ二はそこにあつた3個のカップの内2個を取りだしてテーブルに置き、俺に椅子に掛けるようジェスチャーで示した。

俺とオモ二は長方形のテーブルの向かい合う長い方の辺をそれぞれの居場所にした。

オモ二は自分のスプーンだけ用意してアイスクリームを食べ始めた。ストロベリーアイスで、俺の前にあるのはチョコレート味だった。オモ二はカップにスプーンを運びながら、時々上目使いで俺を観察しているように見えた。いや、それはたぶん確かなことだ。

俺はスプーンを渡されないで、しばらくの間、そのままカップを見つめていた。オモ二はカップと自分の口の間にスプーンを一定の速度で往復させている。

手持ち無沙汰な気分になった俺は周囲を見回してみたりした。キッチンには、よくあるそれぞれの家庭と同じく生活感と呼ばれる気体が漂っているように思えたが、それは一家の営みから自然に生じてきたのか、それとも、オモニによって偽装されたもののかと俺は考えた。まあ俺は、一般的な家庭の家の中など、あまり覗いたことはなかったし、オモニや夫や子供たちは、ともかくにもこの家で一緒に暮らしていたのだから、何らかの空気感は生まれるのかもしれないくて、けっきょく、そんなことはどうでもいいことだったのだ。

オモニが、スプーンを口に運びながら俺を観察しているような様子は続いている。俺の頭の中に『最後の晚餐』のイメージが浮かんできた。新約聖書の中の記述より、絵画の情景だ。俺は美術に造詣が深くないから、それはたぶん、いちばんポピュラーなダ・ヴィンチの絵なのだろう。

「共食」というのは共同体をかたちづくる儀礼だとか、大学の授業でやっただろうか。それなら今、俺とオモニの共食にどんな意味があるのだろうか。

まあ、俺は神聖十字軍に出家して、結局大学は中退のかたちになってしまったのだが。

画面の文章は、ここで終わっている。だが、文章の中にマウスポインターが入ると手のかたちに変わって、そこにリンクがあることを示すのに、ルネは既に気づいていた。

筆者が殺人を犯しているようなことなどが書いてあるが、sasurabbitoが“小説を書いているみたいですね。”と言っていたのはこの辺りからかもしれない。だが、ルネにはこの文章の雰囲気既に既視感のようなものがある。というより、登場人物や内容が記憶の中にあるような気がするのだ。

画面にあるのはテキストによる文章でなく、どうやらプリントアウトしたのをスキャナーで取りこんだ画像らしい。

リンク先は、この文章の続きなのだろうか？

ルネはクリックした。

77 > / style <

オモ二是比較的ゆっくりとしたペースでスプーンを自分の口に運び続け、俺は、彼女に気取られないよう、直視せずにそれを観察していた。

やがて俺も意を決した、という程のことではないかもしれないが、アイスクリームのカップを手にとった。カップを掴んだ手に力を入れ、握って側面を押す。上にはみ出して来る半溶解物に口を近づけた。上下の唇をすばめて挟み取り口腔内に収める。冷たさによる麻痺と舌の上で溶ける感触と味わいの情報が神経繊維を伝達され、脳は瞬時に、それが乳脂肪を充分含んだ高級品であるという計算結果を出した。

俺は、やはり興奮していたのだろう。12月下旬の夜だから身体は冷えた外界を感じていたのにアイスクリームの冷たさが心地よかった。

まあ、これが初めてというわけではないけれど、人を3人も殺せばそれなりにテンションは上がるものだ。

俺はもう一度カップを掌全体で緩やかに押した。液体になりかかったチョコアイスの、表面が天井の光源を力なく反射しているのを、口腔をポンプのように働かせて吸い込んだ。

視界の中に存在しなくても他人の視線を感じるということはあるものだ。俺が無意識に顔を上げると、手を止めて俺の動作を見つめているオモ二と目が合った。オモ二は底意地の悪そうな微笑を浮かべた。

「習慣というのは一度身につくと、いつまでもついて回るものなのね」

オモ二が何を言おうとしているのか俺にはすぐわかったが、俺は黙っていた。

「あなたたちは皆、そんなふうにして、売上をくすねてコンビニあたりで買ったアイスを食べていたのよね」

世界中の飢えていたり病気に苦しんだり障害のある人々を救い、貧しい子供たちに教育を施し平和を維持する活動や再臨のキリストである教祖の教えを広布するためという名目だが、実は教祖があちこちに寄付をして名前を売ったり経営する企業の回轉資金と蓄財のため。まあ、とにかく、出家信者たちは健康食品や靈的な効能があると思われるグッズや教団系企業が扱っている半島からの輸入品の訪問販売を日課としていた。それで、その売上の1パーセントにもならない額だが、俺たちは菓子や飲み物などを買うのを黙認されていたのだ。

休憩時間にはコンビニやスーパーに向かい、公園などで神に感謝しつつ飲み食いするのが教団生活の中での数少ない楽しみのひとつだった。炎暑の中、重い商品を抱えて歩き回る夏はもちろん、どういうわけか他の季節でも出家信者たちは好んでアイスクリームを食べていたように思う。

それで、その食べ方だが、揃って奇妙な方法をとるのだった。スプーンは使わず、カップの側面を握るようにして中身を上にはみ出させ、それに口をつけて食べるのだ。いつ始まったのかわからないが、俺が加わった頃、もうそれは彼らの一般的な風習になっていた。

それでも俺は初めのうち、買った時に店でくれる使い捨てのスプーンを使っ

で見られた。それが通例となると、随分と下品な食べ方でも、同調しなければ集団内では異端となる。視線の中には自分たちと同じ行動を取らないものに対してもつ恐怖のようなものも含まれているように俺は思った。陰で、私にはサタンが入っていると噂する者も少なからずいたらしい。

彼らに合わせようというつもりはなかったが、いつしか俺も同じ食べ方をするようになっていた。いや、やはり、折り合いをよくしようという気持ちがあったのかもしれない。

そもそも信者たちはそれぞれ、どこもなく下品な雰囲気をもっていて、アイスの食べ方は、その象徴のようにも感じられた。俺だって貧乏人の家に生まれ育ったから、お世辞にもあか抜けているとは言えないのだが、彼らと話したり一緒に行動したりしていると、時折彼らの発するそれが何かの匂いのように空気を伝わって来る。そして、俺を妙に息苦しくさせたのだ。

オモ二と向かい合っていると、教団にいた頃の屈折した感情がフラッシュバックする。電気がスパークして小さな火花を放ちつようにそして俺は、その後にくまってしまう青臭い匂いを感じるような気もした。

俺はカップをテーブルの上に置いた。まだ中身は残っている。ひしやげた形が元に戻らないので茶色の粘液は、それをほぼ満たした状態だった。オモ二は俺のカップに一瞬目をやってから言った。

「ミヨンスクと食べたアイスは美味しかったかな？」

オモ二はまた、意地の悪い表情を浮かべる。教団で一緒だった頃、何度も見たことがある顔つきだ。信仰の純粋な世界を目指す者がなぜ、そんないやらしい表情を浮かべるのだろうと、そのころは疑問に思ったのだが、要するに俺は若くて世界の本质が見えていなかったのだろう。

オモ二の言葉で同時に俺の脳裏に浮かんだのは、ある夏の日の休息

時、公園でアイスクリームを食べた情景だった。販売に赴く時、よくペアを組んだ女性信者がいて、彼女の教団名はミヨンスクといった。

「ミヨンスクは、よかった？」

相変わらず皮膚の裏に澱んだものが透けて見えるような表情でオモ二は尋ねた。俺は、その意味をすぐに理解したわけではなかったが、しばらくして、俺が彼女と性的な関係をもった意味であることに気づいた。

「まあ、いいわ。神に返すべき金をくすねて、さもしい食欲のために使ったり、蛇の誘惑に負けて女と快樂を貪ったり。人間というのはつくづく罪深いものよね」

そういう事実はなかったのだが、否定して言い争う気もしなかった。訪問販売の仕事についた当初、売上の一部は小遣いにしてもよいようなことを先輩から言われたのだが、正式に認められているわけではないがという前置きがついていたかもしれない。また、男女の出家信者の間では、そういった関係に陥る者たちが、かなりあったのは確かだろう。いや、俺は、教団がそういうこに対していわば放任状態なのに疑問をもったこともあったのだが、考えてみれば、それは人間をコントロールする巧妙な方法の一部だったのだ。

禁止を侵犯させて罪悪感を植付けられると、むしろ、その贖罪のため、より信仰にのめりこむ方向に追いやられていく。

「ミヨンスクと一緒にの時も、そういう食べ方だったのよね。思い出す？」

たぶん本部直属で信者の勧誘や教育が主な仕事だったオモ二も、そういう習慣については知っていたようだ。いや、むしろ上部の人間は信者の動向の把握に熱心で、工作人員のような役目の者が、俺たちの言動を逐一報告していたようだ。

ここで、このページの文章は終わっている。やはり文章部分の画像にはリンクがあつて、ルネはクリックした。
続きのページに飛んだ。

俺がそういう食べ方をしたのはスプーンを渡されなかったからだ俺はオモ二に言った。そこにこだわりたい気持ちがあつたからだが、かつての習慣から同じ方法を取つたのだとは言えるのかもしれない。オモ二はそんなことを聞き流すように微かに皮肉な笑みを見せた。

「ま、運命の悪戯というやつかしらねえ」

オモ二の体臭を含んだ空気が流れて来たのを一瞬感じる。それはどこか鯁えたような要素を含んでいる。フェロモンなのかもしれないが、オモ二とセックスしたいという気は起きない。

「再会してたわけよね。知らず知らずのうちにやってやつで」

オモ二の話す意味がよくわからなかった。こうして彼女と俺が会っていることを言っているのだと、最初は思った。

「昔取つた杵柄というやつね」

奥歯に物が挟まつたような言い方が続く。俺がちよつといらついたのが表情に出たのだらう。オモ二はまた皮肉な一瞬の笑みを浮かべた。

「なんだつたかな？とにかく記憶にあるフレーズだった。懐かしいつていうか何というか」

「フレーズ？」

「初めはスナムがネカマをやつてゐるのかと思つたわ。でも、結果的に釣れたのは二人だつたつてことになつたわね」

「結局、彼女があなたの詩のフレーズをパクつてたつてことのようにね。まあ、いい仲だつたわけだから、あなたが秘密のノートを見せていて、彼女がそれを覚えていてもおかしくないと、やがて気づいたわ」

秘密のノートと言われて、すぐ思い当たるのは出家信者時代、もっとも大切なものへの思いを断って神に捧げるという誓いを裏切って書き綴り始めた詩のノートだ。そして、それ以外に思い当たるものはない。

「そのうち、懐かしいフレーズを何度か見かけることになったわ。今度は別のハンドルで。それは、たぶんあなたよね。赤土さん」

そこまで聞くと、俺にもだいたいの見当がついた。俺はあのサイトに投稿された作品をすべて見ているわけではなかった。何しろ膨大な量だし、たまに行くネットカフェや、パソコンを持っている友人のダンボールハウスの留守番を頼まれた時くらいではなかなか網羅できるものではない。

ただ、自分が以前書いたのと同じ文章を見たことはある。その時は単なる偶然かと思っていた。言葉というものは多くの場所で使われているものだし、自分にそれほど特別な表現ができるような才能があるとは思っていなかったからだ。

だが、俺には疑問を感じることがあった。俺はオモニに尋ねた。

「そうすると、彼女はHNを二つ使っていたのか？」

オモニはこれまでとは違う、少しのけぞって声を上げる笑い方をした。そして、「ああ、こういうのもあったわね」と、俺の表情を確かめるように見つめながら暗唱した。

無意味部は

街の底で おもう

無意味部の仕事は

この世界に 無意味を与えること

ああ

世界が無化しつくされるのは

いつのことか

オモニは俺に視線を向けたまま、また、あの底意地の悪い微笑を見せたが、今度はすぐ普通の顔には戻らないで、固定された表情のまま、俺を観察しているようだった。

オモニは三連目のフレーズをもう一度、抑揚をつけずにゆつくりと唱えた。そこは俺がかつてノートに書いた『無化を待ちながら』という詩の一部だ。

「ここよね。あなたのを拝借した部分は」
俺は頷いた。

P o e m V i l l a g e で見たのは、たしか『からくり』という作品で、投稿者のHNは“蝙蝠”という記憶があった。やはり、自分のフレーズが使われていたのか。

「他の部分はオモニが書いて投稿……？」

オモニは首を横に振った。

「ある人の書いた詩を覚えててね。そこにスナムのフレーズを入れたの。でも、うまく収まってるでしょう？元よりよくなったんじゃないかと思うわ。あたしもちよつとうる覚えだから原文を正確に書けたかどうかかわからないけど、まあ、いいわよね。もう、彼はこの世にいないんだから著作権がどうこうで訴えられることもないし」

「もう、この世にいない？」

「あなたが半島で訓練中、試験で器物を始末したでしょう。その中には、あなたと一緒に行った連中の一人もいたわよね」

それと思われる顔は記憶にあった。下車した駅やワゴン車の中や船の上で、目が合うと彼は俺に話しかけたいような様子を見せていた。それは彼の弱さの顕れのように感じられたが、とにかく俺は彼を敬遠し、視線を合わせないようにしていた。最後に器物として俺の前に現れた時も同じような目つきで俺を見たが、そこには懇願のような色が混じっていた。無言で行うよう命じられていたためもあるが

俺は言葉を交わさなかった。

「つまらない文学青年よ。淘汰されたのは当然だわ。ま、あなたが最後までパスしてきたことだって、システムのエラーではあるのだからけど」

神聖十字軍の信者には、話してみると文学や芸術に関する知識の豊富な者がかなりいたように思う。詩や小説を書いたことのある者なども、わりと多かったのかもしれない。まあ多くは、文学にしろ美術や音楽にしろ感覚がどこか時代遅れだったし、あまり認められることがなかったからカルトに出家したのだろうが、彼らはいちように純真さのように見える奇妙なプライドをもっていた。世間一般の人間とは反りが合わなくて疎外感を味わっていたが、同時にそれが彼らのアイデンティティーになっているような印象を俺は受けた。まあ、人のことは言えないのだが。

「それはそうとして“灯台下暗し”というやつかしら。あれをばえ村に投稿しても、残念ながら、あなたは反応を見せなかった」

オモニの投稿は俺をおびき出すためだったのか。でも、それだけではないような気がして、俺は次の言葉を待った。

「あたしはあそこでああなたのフレーズを見た時、すぐピンと来たんだけどね。それが含まれた詩を書いていたのは二人いて一人は赤土というハンドル」

オモニが俺の顔を覗きこむように見つめて、しばらく間をおいた。

「もう一人がミヨンスクよ」

たしかに俺は、Poem Villageに投稿した詩の中で、若い頃書いたもののフレーズをいくつか思い出して使っている。オモニは俺のノートの内容を覚えていたのだろうか。いや、たぶん教団に入ってから書いていた秘密のノートだって、何らかの方法で盗み見ていたのだろう。今から考えればオモニは内部の諜報機関のような役割も担っていたのだろうと思えることがある。

「ま、背教者の恋人同士がネット上で再会してた。これも神の恩寵なのかしら」

ミヨンスクについて俺が質問する前にオモニは喋り始めていた。話が急に飛んで、コンピューターやインターネットについてだ。HTMLのタグのこととか、将来的にウェブページの構成的な部分をHTMLで記述し、例えばテキストの色や大きさやフォントのような細部はスタイルシートで指定するというような話だったが、俺はたまにネットを覗くだけでホームページなど作ったこともないし、あまり内容を把握できなかった。

それと、ミヨンスクの名前が出たこともあって、俺はあらためてオモニを始末しなければならぬという気持ちが強くなり、そっちの方に頭が行っていたのだ。

第11話

78 > a p p l e t <

文章はそこまでだった。これまでと同じでクリックすれば次に行けるようだ。でもルネは、かなり長い文章を読んできたので、ちょっと息抜きしたい気分だった。それで、続きを読むのは後回しにして、sasurabitoのBBSを、もう一度覗いてみることにした。

新しい書きこみがあつた。

4

■ 名前：オークリ

■ タイトル：私も情報希望

やあやあ、先日、某漫喫でお会いしましたね。

情報って、あの時、私がお尋ねした例の件でしょうか？

でも、なんだかここ、ネットオークションみたいになってるようで

(笑)

てことだと、最高額の人にしか情報は教えてもらえないことになりましたが。

まあ、その方がいいかもしれません。

ところで、私も入札したいんですが、

よろしいですか？

sasurabitoの自作自演のようにも、そうではないようにも思えた。ルネは、もう少し、事の推移を見た方がいいように

思い、書きこみもしないでおいた。入札しておかないと情報を手に入れる可能性はないわけだが、まあ仕方がないだろう。

s a s u r a i b i t o には顔を見られているから、迂闊な行動をとらない方がいいような気がしたのだ。

ルネはそれまで読んでいた文章のページに戻った。しかし、これは、源さんが書いたものののだろうか？もし、そうだとすれば、内容から、赤土のHNでばえ村に投稿していたのは源さんということになる。

もつとも、文章はいささか現実離れた内容だし、事実を綴っているのかどうかはわからない。だから s a s u r a i b i t o も“小説を書いてるみたいですね。”と考えたのだろう。

たしかに、これだと、源さんが子供も含めた複数の殺人を犯していることになる。しかしルネには、この文章と関連のあるような内容をどこかで読んだ記憶があつた。もちろん、それにしても事実が書かれていたのかどうかはわからない。

続きのページにジャンプした。

やがて話の中にオモ二の夫が登場した。コンピューターやネットに関して喋つたのは、その伏線のようなだった。

この家の中には彼女の夫の死体もある。夫は見た目、柔和な感じだったのだが、体は筋肉質だし、けっこうしぶとかった。激しく抵抗したので身体のおちこちを何回か刺し、戦闘能力を弱めてから頸動脈を切断した。

争つたのは2階に上がった所で、彼はそこから転げ落ち、階段の上がり口で絶命した。俺がその方向に一瞬目をやるとオモ二もそれに倣ったが、すぐ話に戻った。

オモニの夫はコンピューターやインターネットにかけて、かなりのスキルをもっていたらしい。「最近はどうでもなくなったけど、少し前までのネットはひどかったわね。素人がプログラミングしたバグだらけのアプリやCGIが恥ずかしげもなく使われてて」オモニは夫がそういった“厨房”ではないことを強調し、彼が作ったウイルスやスパイウェアその他のクラッキングツールが送り込まれたコンピューターの内部でシステムやデータを破壊したり、中にある情報を盗み出したりしたことや、フリーのメールサービスでは、文章中にあるキーワードによって選択されたコピーが管理者に送られるシステムを作り、その情報をもとに実はヤクザの企業舎弟であるクライアントが不倫や万引きや詐欺やその他の後ろめたい行為を行っているユーザーを恐喝してかなり儲けたことなどを自慢げに喋った。饒舌に話している間、オモニの表情には恍惚の色が浮かび、俺はそれが、先天的な犯罪者の性向をもつ人間と向かい合っている時に見るもののようなだと思った。たりした。

それから、オモニはサーチエンジンの話を始めた。たまにインターネットを見ることがある俺には興味のない内容ではなかったし、お蔭でいくつもお利巧になったとは言えるだろう。そして、これは夫の仕事に関する話の導入部だった。

「とにかく、サーチエンジン拒否のタグというのは、絶対的なものじゃなくて、単純に言えば紳士協定なのよ」とオモニは話を続けた。「ロボットはページの中にユーザーの指定したキーワードと符合するテキストがあれば、そのURLやキーワードの周囲の個所を提示する。そのために、世界中のアクセス可能なサーバーにあるウェブページのテキスト情報を常に採集しているわけね。ロボットとはいけどSFに出てくるような人間に近い形をしているわけじゃない。要するにコンピューターよ。まあ、そういうわけなんだけど、でもロボット拒否タグがあるページからは情報を収集しない。でもそれ

は、“できない”んじゃない”のよ。わかるかな？検索システムを作った者が、そのようにプログラムを書いているからっただけのことなの。もちろん大手をはじめネット上で知られているサーチエンジンはロボット拒否タグのあるページで情報の収集を遠慮するわ。でも、ロボット拒否タグがあっても無視して情報を得るようなシステムが作られていれば、インターネットに繋がっているあらゆるページの情報を集めることができる。いろんなツールも連携するとパスワードの必要なところだって、かなり侵入は可能なのよね」

クラッキングのツールについては時々ネットで話題になっているので、俺にも想像がついた。コンピューターに侵入して中にある情報やキーの操作をハッカーのもとに送信するので、重要なパスワードなども盗まれてしまうことがある。

オモ二は目を異様に輝かせ、喋っていた。それは自分の知識を披瀝する時の快感とに陶醉し、高揚状態にあるようにも見えた。

俺は、大学の文学サークルやカルトで同じように喋る連中がよくいたことを思い出していた。

小説や論文や詩の細部の文章までよく記憶していたり作家のエピソードに精通したりで、それらを知らないものに対しての優越感に浸りながら喋る者たち。あるいは宗教団体の信者数や本の出版部数とその比較や分析をしたり顔で述べたり、教義の逐語的解釈で他人の言動を批判したりする。

まあ、彼らにはただ他者を圧倒する意図しかない俺は感じていたから、あえて何か言う気も起きなかった。どちらにしても、こういう連中が所有していたものと言ったら膨大な知識の堆積ばかりで物事の本質は欠如していたのだが、オモ二の場合、そうばかりとは言えなかったかもしれない。

オモ二は相変わらずの居丈高な口調で続けた。

「外国の諜報機関は、政治家や財界人や、その他、日本のあらゆるジャンルの有名人の裏情報をしつかり握ってるわ。まあ、人間、誰だって表に出ていない何らかのしくじりのいくつかはあるものだしね。法律に触れるものはもちろん、そうでなくても道義的に世間からのそしりを免れないものもある。そういうのを掴んで脅かすのよ。だから、日本ていうのはまったく不思議なことに、大国はおろか取るに足りないような国のご機嫌をとったりもしてる。まあ、誰も逆らえないわ。下手なことをして秘密をばらされたら、即、身の破滅だからね」

「でも、野党とか反体制とかの人間もいるぜ。批判したり罵倒したり、結構凄い事を言うのも……。」

オモニは俺がそう反論するのを待っていたように、少し見下したような微笑を浮かべた。

「それも許された範囲内でシナリオ通りに動いてるだけよ。一般大衆の不満が高まるのを避けるためにね。ある程度のガス抜きをするのは必要だから、そういう人間もいたほうがいいのよ」

「とにかく、そうすると」

教師にレベルが低くて軽蔑されそうな質問をする時のような気持ちで俺は尋ねた。

「最近の教団では、いろいろな情報を集めて、そういうところに売るのが新しい財源ってわけか？」

「そんなに単純なものじゃないわ」

オモニから先ほどまでの高揚感は消えているようだった。

「その辺りでは、もっと別のゲームが行われているのよ」

79 > param <

オモニは、それ以上詳しいことは話さなかった。

俺は食べ終わったアイスのカップを握り潰すと立ち上がってキッチンの隅のポリバケツに放り込んだ。まだ身体は水分と冷却を求めているようだったが、それは後回しにする。

「それにしても、やってくれちゃったわね」

オモニは子供たちの死体がある部屋に戻り、ごく冷静に一瞥してから、俺を促して階段の脇まで歩いた。上り口には血まみれの夫が倒れている。オモニはそれについても立ったまま、無表情で見下ろすだけだった。もうぴくりとも動かない。さっき、断末魔の声も彼女の耳には入っていないはずだ。

オモニは小さくため息をついた。だが、俺にはそれが演技しているような作的なものを感じられた。

「ああ、まだ彼にしてみらいたい仕事はあったんだけど、でも、済んでしまったことは仕方がないわね」

そこにはなぜか自嘲的な響きが含まれているようでもあった。

「問題はこれからどうするかよ」

「これから？」

「精神科に通院歴のある変態を身代わりに用意できるわ。闇金の催促から逃げ回っているような奴をね。借金のカタに内蔵を取るのを勘弁してやれば、しばらく措置入院にはなるだろうけど法的責任は問われないから、最悪の場合を免れるんだし、楽なものよ。それから、黒社会から留学の資金を借りたものの、返すあてがなくなった中国人がいくつかある。一族皆殺しになるよりは自分の犯行と認めて死刑になる方を選ばざるを得ない。それと、日本に来たけれど言葉もマスターできず、周囲は冷たくて途方にくれている知的障害気味の外国人労働者って手もあるわ。ま、そういう連中なら警察や裁判所は、一応世間が納得するような結果を出してくれるでしょう」

「随分ご親切なことだね」

と俺は、もちろん皮肉を込めていった。

「まあ、あなたには、それなりの才能があるから」

オモニは俺の傍に寄って来た。文字通り息のかかる距離だ。

「と言っても、もちろん文学の才能なんかじゃないわよ。能力という言葉を使うほうが適切かしら。とにかく、あなたには利用価値があるわけ」

文学的才能がないのは俺自身わかっていたことで否定するつもりはないが、面と向かって言われると腹が立つというか反発する気持ちが多少起きないではなかった。まあ、とにかく、オモ二が言う俺の能力というのは決まっている。その能力によつて、今、彼女の近くには三つの死体が転がっているのだし、特に日本のような大多数の人間が武器の扱い方を知らなくて、いいところスポーツとして去勢された格闘技程度の嗜みしかない地域ではひじょうに有効なものなのだ。赤子の手を捻るように対象を死に至らしめる能力。

「あ、そうだ。女も一人必要な」

オモ二は倒れている夫を見下ろした後、子供たちの死体がある方向を少しの間、振り返った。それから、自分自身に人さし指を向けた。「あたしの分がなくてはね」

どうやら、オモ二も死んだことにするための身代わりの死体のことらしい。教団が派遣する自称親族が遺体の確認をすればDNA鑑定をすることもないだろうし、他に目にする人間と言えば見も知らぬ捜査員や検死官くらいだろう。

そう言えば、オモ二は実は半島から来た人間で、一家揃って拉致された家族の戸籍の後釜に偽装の父母や兄弟と共に入りこんでいるのだという話を耳にしたことがあった。カルトのようなところでも、というか、むしろ、口さがない噂が飛び交っているものではあるが、俺は、それを単に聞き飛ばせないように思った。彼女からは何か、そんな“おい”を感じていたのだ。

「まあ、最近は背教者が増える傾向にあるからね。訪問販売が世間の批判を浴びてやりにくくなり、売上も落ちこんでる。それで、結婚して普通の生活をしている信者には家や土地や車を買う名目で口インを組ませ、それを献金させて返済は教団が、というタテマエな

んだけど、そんな約束を実行するわけがないわよね。それで、破産寸前の信者も多くて、姿をくらます例もばち出てきてる」

オモ二の口調には微かだが、愉快そうな響きを感じられた。

「教団に疑問を感じたり、脱会しようかと迷ってる連中は震え上がって考えを改めるでしょうね。組織の中央でそれなりの仕事をしていた者にも神の裁きは厳格に降りる。それも、幼い子供たちを含めた家族全体のむごたらしい死というかたちで」

たぶん、オモ二が言うつもりであつただろうことを俺が代わって続けた。

「だが、どうして子供も含めたその一家がそんな殺され方をしたのか、ある種の人間にはすぐわかる。ニユースを見て直感的にそれを感じ浮かべる場合もあるし、それからすぐ、全国津々浦々の信者の間に次々に伝えられる。それは、いったん神に近づいたが、そこから離れたこと者の辿った結末だと。だから雷に撃たれたのだ。恐ろしいことだが、それは、この世界に信仰や神が存在することの証しなのだ」

そついうのは俺が何度も関わってきたことだった。生贄はもと信者本人であつたり、その親族であつたりだったが、幼児が変態に誘拐されたよう装うことも少なくなかった。その方が、対象に与えるインパクトは大きい。

「随分とやったのよね。そんな仕事を」

オモ二はゆっくりと言った。その事実が俺の中にしつかり刻印されるのを意図しているかのようだった。

たしかに随分やった。だが、すべてが必ずしも、離脱しそうな信者を牽制するための見せしめだったとは限らないような気もする。例えば、政治家や実業家に関する疑惑が持ちあがり大きくなった時や、与党が世論の風当たりの強い法案や条約を通そうとする時などにも上部からの命令は来るのだった。それは無差別殺人だったり列車を転覆させたりアル中の運転手を催眠状態に陥らせて多重死傷事故を

起こさせたり連休中に登山者で賑わう山で落石を起こして多数の犠牲者を出すことだったり、センサーシヨナルな方法が多く、マスメディアはその報道で埋められるので、人々の目は、そちらに集中させられたわけだ。

だが、俺にはずっと気にかかっていることがあった。それで、なんとか話題をそちらにもっていきたかったのだが、露骨にやるのはためらわれた。

80 > / a p p l e t <

しかし、はからずも、俺が求めていた話題には、オモニの方から道を開いた。

「でも、運命の巡り合わせというものかしらねえ。本当に」
彼女は思わせぶりの微笑を浮かべた。そういう態度を見せつけられるのはもう食傷していたから、俺は早く次の言葉が出てこないものかと思いつきながら彼女の口もとに意識を集中した。

「何しろ、かつては蛇の誘いに乗って姦淫の罪を犯していた二人だものね。それが再会していた。知らず知らずのうちに、インターネットの詩の投稿サイトで。文明の先端でも奇跡のようなことは起こるものなのね。まあ、神の力と言うより、むしろ、その辺りはサタンの勢力が強い領域なのかもしれないけど。たしか、教祖もそのようなことを言ってたし」

俺はミヨンスクと、そういった関係をもっていたわけではないのだが、あえて口に出し否定する気は起きなかった。そんなことで水掛け論をやる気もないのだ。

何か喋らなければいけないという強迫観念に取りつかれたというほ

どでもないが、それに近い気持ちだったろうか、そこで俺は、こんなことを喋った。

「教祖にしる教団にしる、個人が自由に情報を得られたりものを考えたりできるようなのが気に入らないんだよな。まあ、自分の支配下にある者がいろいろ知ってしまったては都合が悪いわけだが。いや、信者だって、そういう世の中が来ることは何かしら怖れているんだろう。生暖かい集団の中に埋もれているのが心地よくて、外の世界の空気に触れようとは思わないんだ。子宮の中でうつらうつらしている胎児みたいだね。外には真実があるのだが、それがどんなものか、自分たちに過酷なものであることを潜在的にわかっているからね」

オモニは俺の言うことを無視するように喋り始めた。

「アメリカではキリスト教の原理主義とかいう人たちが集まって暮らしてるところがあるらしいわね。聖書の教えに忠実な生活をするということ、電気は使わないし車にも乗らない。利子というのは神が作ったものではないから銀行を利用しない。まあ、宗教なんかをまともに信じてる愚民は、そういう状態に置いたほうが扱いやすいし、その方が世の中うまく治まるのかもしれないわ」

「その一方、上部の方ではネットでの情報収集や操作に励んでいたりするわけだ。だが、オモニがネット詩に首を突っ込んだりしてるのは、まさか趣味ってわけでもないだろう。布教でもするつもりだったのかな」

オモニは、また少し嘲るような笑みを浮かべた。すべての男は、母性を有している自分をけっして凌駕できない。そんな世界観を背景にした自信のようにも感じられたが、それは正しい認識といえるだろうかという考えが、ほんの少しの間、俺の頭の中をよぎった。

「それとも、そんなことを、もう、やってるのか？」

「まあ、自称詩人の皆さんともいろいろ付き合うようになったから、そういう人たちの書いたのとか、ちょっと有名な人の作品なんかも

読んだりしたわよ。でも、全般的に薄味で、中には変なスパイスの使い方をしてあったりする料理を食べてるような感じ。自分の料理の腕はなかなかだと信じ込んでるシロウトの家に招かれてるみたいで、それで吐き気を催しちゃったりするようなこともあったりね。

例えば、まだJ・POPなら、お子様向けの商業主義で陳腐とはいっても、この部分ちよつといいなあと思わせられたりはするものよ。コンビニやスーパーで売ってるレトルトやインスタントだって結構美味しいと思うのがあるでしょう。そういう意味でJ・POPの方がなんだか勝ってるのよねえ。詩人さんのに全くだいいところがないってわけでもないけど、言うならばシロウトのゲテモノ料理かな。あたしは文学とかに詳しいわけじゃないけど、あの連中には決定的に欠けているものがあることはわかるんだ」

オモ二は俺の言葉に直接答えることはなく、けれども饒舌に喋った。それは、はぐらかしているようでもあったが、何かの前置きのように感じられないこともなかった。

「詩のスーパーフリーを作ろうと目論むニートのガキとか、普通に毛が生えた程度の文章のテクニクでたいした気になってるお嬢様とか、好きなことをやって普通よりましな収入を得てみんなにちやほやされる就職先としての文筆業しか考えてない学生だとか、世の中とは軋轢が多いから、ブンカジンの世界なら住みやすくて自分のプライドも満足させられそうだと思ってる心の病気持ちだとか」

それからオモ二は再会した古い友達か、あるいは離婚したもと夫婦の会話を思わせる口調でこう言った。

「お世辞を言っても始まらないんだけど、あの連中のに比べれば、昔読んだあなたの詩の方が何かこう響くものはあったかもしれないね。だからといって凄く有名になったり歴史に残るとは思わないけれどさ」

オモ二の目が俺の顔を覗き込んでいた。俺は反発や不快感や、その他の動揺を示すような表情の変化がないよう顔面に意識を集中した。少しこわばったかもしれないが、そういう反応を見せてオモ二を喜

ばせるのは避けたかった。

「まあ、しかし、ろくな連中じゃなかったわ」

オモ二も顔に感情を表わすことなく話を続けた。

「わけのわからない文章に感心したり、そういうのを書くのに巧妙な奴を崇めたり。それにオンラインといわずオフといわず、やたらと集まるのが好き。いつも他人の動向を気にしてて、みんなから外れたり置いて行かれるのを怖れてる。そういうえば、あの連中は何かに似てるわね。ふふふ」

しかし、考えてみれば世の中というのはどこだってそんな構造をしているのかもしれない。俺がどうもこともしっくりいかないのは、そういうあたりにあるのだろうかと思ったりしている間、オモ二は構わず喋り続けていた。

「何ていうのかな。つまり、やむにやまれず表現したいという衝動を持ち合わせてはいない。ああ、本人にとっては大事なことを書いてるつもりかもしれないけど、けっしてレベルの高いものじゃないのよね」

だが、やがて、オモ二は演説や評論といった状態から我に帰って「あ、何だか話が脱線しちゃったわ」と呟いた。

ここで、このページの文章は終わりだ。クリックして続きに移る。

「ああ、そうだったわね。あなたが興味をもっているのはネット詩人のことだわよね」

「かなり、連中の中に入り込んでるのか？」

「あたしがけっこう絡んでるグループもあるわ。まあ、あたしのコントロール下にあるといってもいいんだけど」

「レイカとか、その辺の…？」

別に確証があったわけではない。何となく雰囲気でそんな気がしたので、会話を保たせるために、そんな話を振ってみただけだった。

「PCにスパイウェアを送り込んでるから、みんな筒抜けってことは言えるけど」

オモニはまた、必ずしも俺の求めている答を述べるわけでもない、自分に酔うような状態に入っただけに見えた。

「一定期間を過ぎたりパスワードなしで呼び出そうとすると自動的に消滅するようにプログラムを組んであるから、時々再インストールする必要がある。1週間、PCを起動しなくても、次に立ち上げた時、消滅するわ。探されて見つかりそうになってもね。正確に言えば、スキルのある人間でなければその存在に気づかないんだけど」
そこでオモニは俺の表情を確認し、自分のしゃべっていることが独り善がりなことに気づいたらしく、話の内容を代えた。

「ミヨンスクのことだって、もう、すべて把握してるわ。メルアドもホームページも、リアル住所や家族構成だってね。プロフのページにある写真は、夫が簡単にコラージュだと見破ったわ。ハンドルも本名を使ってるようで実はぜんぜん別のにしてあるから、その程度の警戒はしてるみたいだけど」

オモニが話し終えた時、俺と視線が合った。あなたが知りたいのはこのことでしょうか？という言外もコミュニケーションを感じる。

俺はダウンジャケットのポケットに手を入れた。右側のポケットには二つのものが入っていて少し重い。バタフライナイフが開かないよう注意して、愛撫するように手で包んでみた。そうすると、何だか落ち着いた気持ちになる。

「それもスパイウェアを使って調べたのか？」

これも、とりあえず発した言葉だ。長い沈黙を作るのはオモニの優

位を招くような気がした。

「まあ、そういうのもやったわね」

「そうすると。ミヨンスクはレイカとかいうお嬢様の仲間…？」

「それは、ちよつと違うわ」

「あなたの詩をパクった…、ああ、今ふうに言えばインスパイアかしら。そんなのが投稿されてたのを見つけた話はしたわよね。それで、興味をもったわけよ」

俺がもつとミヨンスクについて知りたい気持ちを楽しんでいるのか、それからオモニはまた話題を少し逸らした。

「詩人と言えば、スンナム。詩人気取りのあなたが、もう二人、同類を手にかけてしまってるのよね」

その詩人の一人は、俺が半島で破壊活動の教育を受けていた時、試験で殺った“器物”だろうということは、すぐに想像がついた。オモニは彼の書いた詩に俺のフレーズを組み込んでPoem Villageに投稿したことを先程話していたこともある。

「二人…？」

オモニは頷いた。

「そう、たしか、藤壺ってHNで、それだと女を想像させるけど、詩は男性が一人称だったからネカマと言っていいのかどうか微妙ね。彼もあなたの手にかかってあの世に送られた」

つまり、もう一人の藤壺というのは男のようだ。どこで彼と会って殺したのだろうか、俺は思いつく順にいくつかの仕事について考えた。

「スンナムの最後の仕事よ。その後、あなたは姿をくらました」

俺は記憶の中からその男の顔を呼び出そうと試みた。おぼろげなイメージが浮かぶ。何という名前だったかも、すぐには思い出せなかったが、たしか、小さなIT企業をやっていた若者だ。

どうして彼を殺す必要があったのか、その理由も知らない。任務を言い渡された時、特に質問もしなかったからだ。どうせ、サタンの

魔手から世界を護るためということで、サタンの戦略は世界の水面下で複雑に遂行されているのだから、単純に図式化することはできないと説明されることになるだけだったろう。その頃の俺は、ただ、列車がレールの上を走るように与えられた任務を遂行していたし、そういう日々を消化していくことしか、この世界に残されたものはないような気がしていた。

とにかく俺は、それが自殺に見えるよう工作して、彼を神奈川県の中に入れてたのだった。

煽れからオモ二は

「でも、まあ、詩なんか書いていたから早死にする羽目になったのかもしれないわね」とか、

「みんな所詮不完全な人間なのよ」とか、

「何かの利益を生むわけでもないし、世の中の多くの人に影響を与えるわけでもない。不完全でありながら、名声とか金とか、この世への執着は強い。生存それ自体にも」とか喋り、

そして「スナム、あなたにしてもね」と付け加えた。

「その辺につけ入って、いちばんうまく利用しているのはカルトだろうけどな。教祖や、その周りにいる奴らだ」

オモ二は少し口惜しそうだったが「まあ、いいわ」と言っ、反論することはなかった。

「まあ、あなたが生き延びたいのならね、再び神のもとに戻ったことを証明する必要があるわ。あなたは、いったん神に背き、そのもとを去ろうとしたけれど、神に敵対するサタンの手先や裏切り者、そして、神の威光を地に落とす愚か者たちに鉄槌を下すことによってその罪は赦されるのよ」

次にオモ二がどんなことを言うのか、俺には想定できた。そこにあるのは一種の方程式だ。相手にとって重要であるものを否定させることで忠誠心を確認する。その行為が単なる自己犠牲に留まらず組織に利益をもたらすものである方が一挙両得だ。往々にしてその方

程式は繰り返される。自己犠牲は賭け金であるから、ギャンブラーが少なくともつぎ込んだ分に値する額を取り戻さなくてはと考えるのと同じで、そこにのめり込んでいくしかない。ギャンブルの存在に疑問を感じることは、いつしか、自分の存在に疑問を感じることに摩り変わってしまうから、それは否定されなければならない。

「ミヨンスクについて、いろいろ掴んでいるってことは言ったわね。もう、稲妻は彼女に向けて発射されようとしている。いったん神に近づいて、そこから離れた者が受ける定めとして。でも、あなたがそれを行なうなら、神はあなたが再び自分の懐に帰ったことを祝福されるでしょう。もちろん教団も教祖も」

俺の思った通りだった。つまり、俺にミヨンスクを殺させようというわけだ。

「もう、ミヨンスクには刺客が差し向けられたのか？」

「計画は動いているけど、心もとないのよね。なにしろみんなシロウトだから。予行演習は一応やったけど」

「予行演習？」

「ま、そのうちわかるわ。ネット詩人さんの動きでも見てれば」

「お嬢様のグループと関係があるのか？それで、次に…」

「ふふふ。まあ、あなたしただけだね」

俺はポケットに手を入れた。

81 >embed<

カーテンを通して、空が明るくなってきたのがわかる。今は夜が長い時期だ。PCの時計を確認したら7時6分だった。

俺は今、2階の書斎にあるMacで、これを書いている。たぶん、オモニの夫のものだ。1階にはオモニが使っているらしいWindowsのPCがあつたが、パスワードを入れないと使えない。Mac

cにはその必要がなかったが、俺はMacに触るのは始めてなのだ。だが、試行錯誤しながら、まあ、何とかやっている。

しかし、このMacの中を覗きまわるのは、なかなか面白かった。俺は他人の身辺などを嗅ぎ回るようなことに興味がある方ではなく、むしろ、そういうことが好きな奴に対しては常日頃から嫌悪感をもっている。しかし、これは、大げさに言うと、小さな宇宙を経巡っているような感じさえする。

もちろん、持ち主が興味を寄せるに値する人間ということなのだろう。性格的にどんな人物だったのかはよくわからないが、とにかく、コンピュータやインターネットに関する知識やスキルが並外れていたのは確かだ。PCの中には彼の作ったツールがいくつかあった。コンピュータに侵入後、そこにある情報をクラッカーのもとに送ったりファイルを書き換えたり、作成やアクセスの日付を変えたりできるもの。いずれも、PCにあまり詳しくないユーザーでもよくわかるマニュアルが添えられていた。こういうツールが、オモニから例のお嬢様やニートといったネット詩人の連中に配られ使われていたのは、やはりPCの中にある情報から推測できた。

いわゆる“垢”といわれている、プロバイダーへ不正にアクセスできるアカウントもあり、これらは後で何かに利用できそうだと俺は思った。

しかし、おそらく脳の中にはPCの内容よりさらに豊穡な宇宙をもっていた彼は、今、階下に倒れている。俺が何度となくナイフで刺したことによって多量に出血、心臓が停止し、脳も既に活動していないだろう。

彼の意識はどこに行ったのだろうか。俺は、ふと考える。死によって意識はどうなるのか？それは、波が振幅を失って消滅してしまうようなものなのだろうか。

俺も時おり、死について考えることがある。特に自分が人生を終結させたいいくつかの死骸の前では、しばしば、そのようなことがあっ

た。

生前と死後では体重が何グラムか違うという話を聞いたことがあるが、自分で手を下し、死に至る状態をつぶさに見てはいても、そんなことはわからないし、測定できるわけもない。

そうやって、オモ二の夫のPCを覗いている内に数時間が経過した。この家の中に俺一人だけになってからの数時間だ。生きているのが俺一人になってから、という方が正確なのだが。

ここの家族で最後まで残っていたオモ二も、もう、階下の床で目を見開いたまま息絶えている。そうだ、そのあたりを、まだ書いてないのだった。

俺は間もなく、ここを出ていかなくてはならない。だから、あれから後のことなどは手短に書いておこう。

俺はポケットからキーホルダーを取り出して、オモ二に示した。この家の玄関の鍵がついている。

オモ二は、それを見て、ある程度状況を飲み込めたようだった。俺に鍵を渡したのは教団でやはりヤバい仕事を受け持っている男だ。彼の階級は少尉だったが、教団の日本支部会長である島崎和巳の腹心で、何かの任務でだろうか、ホームレスに紛れ込んでいた。ダンボールハウスが立ち並ぶ隅田側沿いで、俺は偶然、顔を合わせるようになったのだ。少尉は俺のテリトリーがその辺りであることを、その数日前から掴んでいたらしく、会長にも既に報告済みだった。少尉は島崎からのメッセージを俺に伝えた。その内容は、俺は神に一度近づきながら、そこから離れ、その罪は重いが、サタンに身も心も侵され、そのしもべとなった者を討つことによって再び神の御許に立ち帰ることを許されるだろう、というような内容だった。教団の者はどこを切っても同じ絵の金太郎飴みたいに、誰も決まった思考や行動になる。

少尉は、まあ取っておけと言って、俺の手に1万円札を3枚握らせた。ここのところ、俺のポケットには硬貨が何枚も無い状態が続いていたから、それをつき返すことはしなかった。

オモニは神を裏切ってサタンの配下となり、神聖十字軍の秘密をマスコミに流すと言って教団や教祖を脅迫している。既に彼女は破門された。インターネットでのプロジェクトのリーダーも代わりが任命された。少尉は言った。その時点で俺にははあずかり知らぬ事だったが、黙って聞いておいた。

彼女を始末するようという島崎の言葉を伝えた後、少尉は、けっして俺が無関係ではないと釘を刺すことも忘れなかった。

「事が公になれば、大尉も1度や2度、死刑になるくらいじゃ済みませんよね」

オモニはしばらく間を置いてから、どうせ、島崎の差し金でしようと吐き捨てるように言った。彼は、いつ自分の地位を私に奪われるかと戦々恐々だから。それに、教団だって所詮は人間たちの集まりだし、つまらない勢力争いもある。ケチな連中だが宗教団体に入る奴らなんてそんなものだとか、教団の内情をいくつか例に出して話した。

とにかく、そこにはもう神も真理も存在しなくて、ただ、オモニも含めた彼らこそが徹底した無神論者でニヒリストなのだという事実が露呈されるだけだ。

彼らはある種のピラミッドを作り上げ、その上部を居場所としている。底辺は比較的純粋というか世間知らずだが自意識過剰の田舎者で形成される虚無のピラミッドだ。

それから、例の詩人さんたちが軒並み、PCに何者かからスパイウェアを送り込まれてしまうという灯台下暗しな失敗もあって、それで漏出した情報により教団が恐喝されているのだと主張し、メンバ

「を低能と罵ったが、それは俺に殺されるのを避けるために何とか言い逃れしているようにも見えたし、実際にどうなのかはわからない。」

「いくらで頼まれたの？」とオモ二は急に話題を変えた。

俺は少尉から渡された金額を告げ、奴から、この家に多少のキャッシュがあるはずだから、必要ならそれを持って行くように言われたと答えた。

中国人の殺し屋を雇うのにだって100万程度は要するのに、4人殺るのに3万円とは随分な話で、あいつらは本当にケチな連中だ。信者にかき集めさせた金を半島には年間いや月々何億と送っているのに、とオモ二は唾でも吐きそうな勢いで喋った後、捨て台詞のようにこう言った。

「でも、あなたもよく、そんなはした金で引き受けたものだわ。いくら手持ちがなかったといっても」

それから、また、例の意地悪い表情を浮かべた。

「まさかとは思うけど、あなたネカフェへでも潜り込んで、とにかく、ばえ村を見たくなくて、居ても立ってもいられなくなったなんてことじゃないわよね。とにかく、その金が欲しくて…。だとしたら、お笑いだわ。そんなにミヨンスクはよかったのかしらね。もしかして、あなた、一生の内で寝た事のある女はあの娘だけだったりして…。ま、いいわ」

オモ二は先に立って2階に上った。夫の書斎の向かい側のドアを開くと、そこはベッドルームで、オモ二はセーター、スカート、下着を順に脱ぎ始める。

「これからは、一心同体でやっていくのよ」

ナイフがペニスの代替物というふうに心理学的解釈するのは正しいだろうか。ナイフを幾度か彼女の身体のおちこちに突き立てながら、俺は、もしかしてオモ二に性的欲情を感じていたのだろうか。

考えた。

だが、とにかく、俺の今までの人生とそこに堆積した鬱屈はオモニの身体を切り裂くナイフに集約しているような気がした。

人間はもつとシンプルに生きていけばいい。太陽が昇り降りして夜になる。寒さに震えたり暑さに気が遠くなったりすることもあるが、それは生きている証でもある。

自然や人間世界の中で美しい色や形や音や言葉と出会ったり、その真似事をして描いたり綴ったり、そうして、いつか終わる生を穏やかに消費していけばいいのだが、世の中を面倒にしている奴らがいる。奴らはやたらと他人を巻き込みたがる。たぶん自分がしていること、存在していること自体に自信がもてないのだろう。他人が自分と同じようになって、はじめて彼らは安心できるのだ。

世の中を面倒にしている奴らのために、俺はここまで来ることになってしまった。

その時、俺の頭の中を流れていた思念を何とか表現するとしたら、こんなことになるだろうか。

オモニを刺し殺す時、そこにはカタルシスが存在した。俺は、不確かにではあるけれど、そこに、これまで味わったことのない高揚感があったことだけは覚えている。

世界は、その時、カーニバルだった。

服が血で汚れていたので俺は家の中を捜し、オモニの夫の衣類を見つけて着替えた。俺が着ていたのや持ち物はゴミ収集に出されていたのを調達したものだから、髪の毛や皮膚の細片が残っていないよう気をつければ置いていても構わない。

それから俺は自分のバッグに入れてあった手袋を取り出した。教団の破壊活動部門を抜ける時、持ち出した作業員用キットも中の物だ。一見すると手術用のような薄く軟かいプラスチック製のものだが、

指先から手のひらにかけて細かい模様がつけられている。その模様は、たぶん世界のどこにもいない人間の指紋と掌紋だ。それを手に嵌めてオモ二や夫の顔を何度も擦って手袋に彼女らの皮脂を付着させる。それから俺の手に触れた場所には、どこにもいない人間の指紋や掌紋がスタンプされることになるわけだ。

意識してあちこちに手を触れながら家の中を一巡し、キッチンで俺は冷蔵庫のフリーザーに残っていたアイスクリームを取り出した。興奮状態のためか身体が熱っぽく感じ、喉の渇きも覚えていた。アイスを口を含むと、ミヨンスクとベンチに座っていた炎天下の公園の情景が脳裏で再生される。

俺は記憶の中に残っているオモ二の最後の方の言葉も反芻してみた。「まさかとは思うけど、あなたネカフエへでも潜り込んで、とにかく、ぼえ村を見たくなくて、居ても立ってもいられなくなったなんてことじゃないわよね。とにかく、その金が欲しくて…。だとしたら、お笑いだわ。そんなにミヨンスクはよかったのかしらね。もしかして、あなた、一生の内で寝た事のある女はあのこだけだったりして…。ま、いいわ」

俺はあの言葉に激昂して彼女にナイフを突き立てたのだろうか。あれは俺の自尊心をえらく傷つけるようなものだったからなのか。そのような気もしたし、少し違うようにも思えた。

この世界では物事の進行中に物語など存在してはいなくて、すべては後になってから、それらしく作られるのかもしれない。そんなことを俺は思った。

オモ二の夫のMacを覗き終えると、もう夜明けだった。あまり早朝、外に出ては目立ちそうだ。朝の散歩を日課にしている人々は多く、都会の人間とはいっても好奇心と猜疑心の強い年寄りなどだと見なれない人間はしっかりと記憶に残る筈だ。

年末なので通勤者も少ない。2・3時間後の街が動き出す時間帯なら違和感なく人の流れに入り込めるだろうと考えた。

それから俺は、何かに憑かれていたのだろうか。ひたすら、PCのキーを叩いて文章を綴った。もちろん、ブライントタッチなどというものはできないし、キーを打つスピードは、そう早くない。だが、例えばミュージシャンがアドリブを演奏する時、現やキーを次々に押さえながら、こんな高揚を味わっているのではないか、そんなふうに思える状態に俺は浸っていた。

そうやって書いたのが、この文章だ。比較的短い時間で書き上げたといえるのだろうか。

カフカは一晩で『変身』を書いたそうだが、その量は別にしても、彼のは想像力を駆使した作品で、俺は記憶、それも、ごく近いものをただ書き綴っただけなのだから、比較には値しない。

冗長な部分も多々あるし、読みにくい文章かもしれない。もちろん、カフカと張り合うような大それた気はないし、これを文学作品と想っているわけでもない。ただ、高揚した気分になんて書き殴っただけのものなのだ。文章を書いて世の中を渡って行きたいなどという妄想をもっていたのは、遠い昔のことだ。

オモニにインターネットの検索の話など、いろいろ聞いていたので、文章は画像にしてWEBのサーバーに置くことにした。

Macの中にあつたオモニの夫のツールは、送信場所を隠したり、時にはサーバーに不法侵入したりするのに何かと利用させて貰った。万全を期して、例えばファイル作成・更新の日時も操作した。

添えられていた丁寧なマニュアルのお蔭で俺もなんとか使うことができ、好都合だった。

しかし、こういった小細工は結局、人目に触れるのを避けることになるわけだが、それでは、いったい何のために俺は、この文章をネット上に公開しようと考えているのだろうか。

俺は今、底辺の人間たちの間で生活しているから、時折、塀の中の

生活を経験しているような者と話すこともある。

そんな時、不思議に思うのは、彼らの中で自分から取調べ中、余計なことを喋ったり証拠を示してしまい、そのため有罪になってしま
う者がいることだ。

「まあ、仕方がないさ」

俺が、その辺りを問うと彼らはきまっつてこう答えた。

連中には人間的な弱さがあって、孤独に耐えられなかったり、例え
刑事や検事とであつても人間関係を築きたいと思う場合もあるだろ
うが、どうも、そればかりとは言えないような気がする。

そんなことから俺はかつての大事件などにも興味をもったが、自分
が死刑台に向かうような供述をわざわざ行っているケースが多い。
余計なことを喋らなければ釈放されるか微罪程度で済むというのに
だ。

彼らの犯罪には直接の動機もあるが、多分それとは別に、世界に対
する何らかの憎悪のようなものをいちようにもっている感じがする。
それならば自白などせずに自分を貫き通す方が自然であり、むしろ
容易い筈なのだが、そのあたり、どうなっているのだろう。どこか
で絶対的善なる神にでも出会ったというのか…。

というわけで、もうじき、俺はこの家を出て行く。虚構の家族が虚
構の生活を送っていたであろう家。それでも俺に一晚、冬の夜の寒
さを凌がせてくれた。もつとも、虚構でない家族、虚構でない人生
など、どこにもないのかもしれないな。

この文章は、俺が何者かに対して行なっている告解や懺悔なのだろ
うか？

とにかく俺は、また、冷気の中に出て行く。そこで震えることによ
って生きている証しを得たいがためのようにな。

文章は終わりのようだった。関連して確かめたい事柄がいくつかあったのだが、ルネは s a s u r a i b i t o の掲示板のことが気になっていたので、とりあえず、そちらをチェックすることにした。赤土が書いたのかもしれない文章は、かなり長いものだったけれど興味深い内容なので引き込まれるように読み続けていた。でも、その間に何か次の書きこみがあつて、事態が変化しているかもしれない。なかった。

掲示板では、前に見た時、最後にあつた書きこみに、 s a s u r a i b i t o のレスがついていた。

5

■名前：s a s u r a i b i t o

■タイトル：R e : 私も情報希望

オークリーさん、はじめまして、と言いたいところですが、

<やあやあ、先日、某漫喫でお会いしましたね。

なんでしたね（笑）

ああ、よくアスリートがかけてるようになかつこいいサングラスの人ですね。

オークリーさんは、何かスポーツ、やってるんでしょうか。筋肉質の鍛えたようなお体だったと記憶していますが、

<情報つて、あの時、私がお尋ねした例の件でしょうか？

そうです。あれです。

<でも、なんだかここ、ネットオークションみたいになってるよ
うで（笑）

<てことだと、最高額の人にしか情報は教えてもらえないことになり
ますが。

<まあ、その方がいいかもしれません。

<ところで、私も入札したいんですが、

<よろしいですか？

ええ、けっこうですとも。

それで、できればご商談は、なるべく早く決着したいですね。

自分は、いつまでネットに顔を出してられるか、わからない状態
ですし。

ということなんですが、

実は今、例の満喫にいるっすよ。

この間、お会いした場所です。

朝までいるんですけど、それまでに来れませんか？

いやあ、今、あまり金も持ってなくて、心細いんで、
できれば…。

ああ、それで、例の情報についてですけど、

来てもらってから、欲しいのはそんなじゃなかった
とか言われても困りますから、

一応、どんなものなのか簡単に書いておきますね。

ある朝、いきつけのネカフェの閉店時間になって、

あのおっさんが出ていく時、パソの前に忘れてったのか、

要らないから置いてったのか、まあ、メモなんですけど、
どうも詩みたいです。

「エディプスの父」というのがタイトルらしくて

本文は、なんだか暗号みたいな意味不明の テキストの羅列なんですけど、

こんなんでいいでしょうか？

それから3日程、ルネは s a s u r a i b i t o の B B S を覗いていたが、何も変化はなく、4日目になって新しい書きこみがひとつだけあった。本文にはURLが貼られているだけで、投稿者名は“X”となっている。

クリックすると、それは、ルネがURLから想像した通り、ちゃんねる・ゼロの中の、あるレスへの直アドだった。

28 名前：タレコむ名無しさん

先日洩れのダチがジサ・ツしますた。専門学校で一緒の香具師ですが、

彼は入学して2、3か月で学校には来なくなり、その後退学しました。

洩れとは時々連絡を取り合ってた、一緒に遊んだりしてたのですが、彼はなにぶんニイトなので、実家にも居辛くなり、

ネカフエや満喫に泊まる日々だったようでありまつ。

彼の死は共通の遊び友達から聞きました。

教えられた新聞の都内版の下の方に小さな記事があり、

体のあちこちを傷つけた後、それでは死ねないので、

手を後に針金で縛って川に飛び込んだ自殺と警察は見ているようでした。

時々、洩れみたいな素人が見ても下手な詩を書いて、
いつか認められるのを夢見てたようでつが、
悪い人間ではなかったと思う今日この頃でつ。合掌。

・
・
・

3 1 名前：タレコむ名無しさん

<<28

<体のあちこちを傷つけた後、それでは死ねないので、
<手を後に針金で縛って川に飛び込んだ自殺と警察は見ているよう
でした。

こんな自殺の仕方するか？
実は他殺なのでは。ガクガクブルブル。

3 2 名前：タレコむ名無しさん

<<28<<31

金がなくて河原に寝ていたのを珍走団などのDQNにホームレスと
間違えられて襲われたのだろう。

ゴクツブシの自浄作用だからK察も関わらないのだと思ふぞ。GJ。

そのスレッドは【合掌】自殺を晒すスレ【安らかに】というもの
だった。

1 名前：閻魔の数え歌

有名無名を問わず、ジサーツした香具師について語るスレ。

ニユースやあなたの周りで起きた自殺ネタを書きこんでください。
です。

これがスレを立てた人間の書きこみのようだ。
ルネは、ちゃんねる・ゼロの中の板やスレッドを気の向くままに
覗いてみた。

【急騰】ACCESS PAL【インサイダー？】

1 名前：Σ（ ）

ACCESS PALの株価が先々週から急騰した件について、
何かありましたら。

2 名前：名無しのデイトレーダー

2 げつと

3 名前：名無しのデイトレーダー

3 なら俺の持ち株は50円高。

・
・
・

28 名前：名無しのデイトレーダー

<<23

こんなことがあるのは、やはりインサイダーじゃまいか。

・
・
・

113 名前：名無しのデイトレーダー
ACCESS PALって何をやってる会社？
エロい人、教えて。

114 名前：名無しのデイトレーダー
HPの管理人に、バナーを貼って、クリックした人が買い物をしたらマージンを払います、
何もしないでウハウハ儲かりますぜ、と騙し、
実は、利益の上がるのはACCESS PALだけ。HPがバナ
ーでウザくなるだけで
管理人にほとんど儲けは入らないという仕事をしている会社。

115 名前：名無しのデイトレーダー
昔は優良HPを紹介するメルマガを出してたんじゃないかな。
今みたいに常時接続でなくて料金が従量制の頃は
あまり時間をかけて、あちこち見て回れなかったので
なかなか役に立った。

119 名前：名無しのデイトレーダー
ACCESS PALのブログはアフィリエイトのバナー貼りま
くりの

欲の皮が突っ張った香具師らが多くてキモイ。
文章の内容は貧弱でほとんど書かずに商品紹介ばかりのところも
ある。

巡回ソフトでユーザーのところに足跡を残して
アクセスを呼び込む手も使ってるらしいな。

・
・
・

121 名前：名無しのデイトレーダー

俺は昔、ACCESS PALのコミュニティーに入会したが、それ以後、スパムメールはもちろん、セールスの電話や訪問が増え、

その中には詐欺や893絡みみたいのも随分あった。

そう言えば最初、個人情報から趣味嗜好まで細かく書かされてたなと思う、

なんだか恐いから3ヶ月くらいで退会した。

・
・
・

124 名前：資本主義ギャンブラー

<<114

昔はそれをやっていたが、もうバナークリック業務から撤退している。

ちなみに、本当に当たりが出ているのかどうかわからない賞金ウン千万の懸賞なども、もうやってない。

現在のAccess Palはブログのコミュニティーに力を入れてるようだ。

無料サービスだから広告が収入のわけだが、そこからの収益だけでは おそらく大赤字だろう。

で、あの莫大な経常利益のはどこからきているのか？

ヒント：マネーゲーム。

<<115

「HP小僧」をやったアクセスパルは「ふれんどウェブ」という会社にM&Aされた。

それで、ふれんどウェブはしばらくして社名をACCESS PALに変更した。

HP小僧は儲かったわけではないが、ネットでは名前が売れてたから、

そのイメージは利用価値があっただろう。

水野達彦は出会い系サイトも運営してて、それもアクセスが多かったしな。

出会い系が今みたいなH専門になる前の事だが。

・
・
・

167 名前：名無しのデイトレーダー

洩れの知り合いはAccess Palでブログやってました。

それで、密かに不倫やつてる事を書いたりしてたら、

誰かに個人情報つきとめられて、

世間に公表するぞと脅されたそうです。

その後、彼は消息不明になってまつ。

168 名前：資本主義ギャンブラー

<<167

ACCESS PALは893のフロントだったことを知らなかったのか？

ID貰う時、正直に名前や住所を書いて

ブログでもメールでも、ヤバイ内容があると、

何者かからカツアゲされるという話は聞いたことがあるぞ。

多分、その知り合いは、もう、使える臓器を全部抜き取られ（ry

・ ・ ・

176 名前：名無しのデイトレーダー

関連会社はマネーロンダリングに使われてるとか、週刊誌で読んだでつ。

・ ・ ・

182 名前：名無しのデイトレーダー

HP小僧」の編集長は自殺となってるけど、もしかしてガクガクブルブル

183 名前：名無しのデイトレーダー

おい、おまいら、

これ以上、ACCESS PALのことをほじくると

IP抜かれて、どこかでサーツ死体が発見されることになるぞ。

184 名前：名無しのデイトレーダー

これはもうだめかもわからんね。

・ ・ ・

第12話

83 >/k b d<

□ □ □ □ □

送信者 トリル

宛先 R e n e

件名 関係詩人様各位

このメールはポプラが書いて複数の方宛に同時送信しています。

私はトリルさんからメールの管理を頼まれ、IDとパスワードを教
えてもらってお

りましたので、皆様に、このようなメールをお送りしています。

トリルさんはリスカとオーバードースで瀕死の状態なのを家族に発
見され、救急

車で病院に運ばれました。ICU（集中治療室）に入って治療を受
け、一時は意識

が戻られたのですが、二日後に亡くなりました。

腕の静脈まで刃が入っていて出血が多かったのと薬の相乗効果があ
り、また、生

まれつき心臓が弱かったのと本人の回復への意志が希薄だったこと
もあって最悪

の結果となったのかもしれませんが。担当の医師は、そのように説明
していたそう
です。

実は、その数日前、私の携帯に彼女からの電話がありました。今、新池袋のある

ビルの屋上にいる。ここから飛び降りて死のうと思い、アルコールとODでフラフ

ラの状態だったけれど、やっとここまで上って来たのだが、とにかく私に来て欲しいのだというものでした。

私は職場で勤務中でしたが上司に適当な言い訳をして池袋に向かいました。ビル

の屋上に上がると、彼女はその一角にしゃがみ込んでいましたが、飛び降りよう

という気持ちは既に失せている様子なので私は少し安心しました。

その時の彼女

からは自殺するためだけでなく、あらゆる力が抜け出てしまっているように見えました。

私が彼女の肩に手をかけると、彼女は顔を上げて、まず、こんな言葉を発しました。

「これはデジャヴユよ。鏡に映ったみたいな逆さまのデジャヴユ」
その時は、よく意味がわからず、ただ彼女は錯乱状態にあるのだと思いました。後

で考えると自分なりの推測ができないことはないのですが、たぶん、ここに書くのにふさわしいことではないでしょう。

薬の影響で足元のふらつく彼女を支えながら屋上から降りビルを出しました。彼女

は、しきりに、ある詩人さんの名を上げ、その人に会わなければな

らないと繰り返

返しました。自分がある人から頂いたノートパソコンを預かってもらっているの

で受け取らなければならないと言うのです。

私は、まだ彼女が錯乱状態にあるのだと思い、強引に家まで送って行きました。

もしかしたら、彼女はその詩人さんに好意を抱いていたのかもしれませんが。一度
オフで会ったことがあるようですし。

まあとにかく、そういうわけで、彼女は今、某所にある墓地で眠っています。そ

こは緑に囲まれ、晴れた日には富士山の美しい姿が見えます。

つきましては、ネットを通じてとはいえ、彼女と何らかのご縁のあった詩人さん

たちが墓前に集って想い出を語り合うことも、供養のひとつになるのではと考え、

『故トリルさん墓参オフ会』を企画致しました。詳細は末尾に記載してあります。

急なことはありませんが、多くの詩人さんにご参集頂けることを期待します。

なお、参加・不参加の旨を、このメールの返信でお伝え頂ければ幸いです。

墓前には昼頃までいて、その後、近くのレストランにて会食する予定です。遅れ

て来られる方には予定をお知らせします。

- - - - -

- 期日：2000X年 5月28日 午前10時30分より
- 場所：南箱根天陽霊園（添付G I Fファイルの地図参照）

なお、御供物・御香料の儀は、ご遺族の意向に寄り、固く辞退させていただきます。

屋上から飛び降りようとしていたという個所を見て、ビルから飛び降り自殺したという綺羅々のことが、ふとルネの頭に浮かんた。それと、トリルが言ったというデジャヴュ（既視感）とは、どういうことなのだろう。

だが、別の好奇心に上書きされるようにそういったものはすぐ消えて、彼は検索のサイトにアクセスした。ニユースログを調べた、トリルの家がある辺りの地方版でも、それらしい自殺の記事は見つからない。

メールのヘッダを見ると、以前、トリルからルネに送られて来たのと同じフリーメールが使われているようだった。でも、I Dとパスワードがわかればブラウザ上で送受信できる。

このメールを送ったのがポプラであることを確認できる要素はないから、あるいは別の人間が書いて送信したのかもしれない。アドレス帖や送信済みのメールを見れば、ルネのメルアドはわかるだろう。

それと、もうひとつ疑問に思ったのは、“複数の方宛に同時送信しています”と書かれているのに、宛先がルネのアドレスになっていることだ。B C Cで、送り先を伏せて複数の相手にメールする場合、確認も兼ねて宛先をを自分のアドレスにすることが多い。でも、必ずそうすると決まっているわけでもなかった。

とにかく、このメールには、ちよつと警戒して対応する必要があるかもしれないが、だからといって捏造されたものと決めつける根拠もない。例えば、ネズミヤからルネが預かっているノートPCのこのように、トリルと知り合いでなければ書けない部分もあるのだ。

とはいえ、すぐに何か返信するのはためられた。

それから2・3回目のメールチェックの時、最近やたらと増えている逆援助交際のスパムに半ば埋もれかけて、takayoからのメールが届いていた。

□ □ □ □ □

送信者 takayo

宛先 Rene

件名 サイト閉鎖のお知らせ。

ルネ様

突然ですが、一身上の理由によりサイトを閉鎖することになりました。

ネットからも、一時、姿を消すことになると思います。これまで、いろいろ仲良くしてくれて、ありがとうございます。

でも、私の身にそれほど深刻なことが起きたわけではないので、心配なく。

ルネ君にはちよつと詳しいことをお話しておきますが、

実は私、以前から、いわゆる「心の病」というやつに罹ってしまっ
て、

それで、最近、日常生活で不安定になったりしたこともあり、
周囲にすすめられて治療に専念することとなりました。

まあ、こんな事情です。

ネットやぼえ村を通じて、ルネ君をはじめ、いろんな人と知り合っ
てみんなに親切にしてもらったよ。

ああ、そうだ、こんなこともあった。

昔、ちよつと宗教と関わりをもっていたことがあるんだけど、
その時わりと一緒に行動してた男の人がいて、

その人とは別に恋愛とかいうもんでもないんだけどね。

でも、彼は時々、手帳に詩みたいなものを書きつけたりしてて、
私に見せてくれたりしたんだ。

私の書いた詩は、けっこう彼の影響受けてるかもしれない。

それから、彼のと似たようなフレーズをぼえ村の投稿の中で見つけ
て、

なんだか懐かしくなったこともあったっけ。

偶然の一致なんだろうけど。

でも、宗教は、今はもうやめてる。

当時は真面目に信仰してたんだけどね。

で、その後、私は普通の世界に戻り、結婚した。

夫はしっかり仕事をして、家では優しくしてくれるし、
子供たちには非行や不登校もなく元気に育ってる。

ま、そんなこんなで、しばらくネットを離れるんだけど、
きつと、いつかまた戻ってきます。

とにかく、ルネ君にはご挨拶というか、お知らせしておくことにしました。

それでは、See you again .

t a k a y o

t a k a y o のサイトにアクセスしたが、トップページには簡単な『閉鎖のお知らせ』になっていた。

ルネはPoem Villageを覗いてみた。交流掲示板でtakayoのサイト閉鎖に関する話題はないようだったが、投稿のページにはこんな作品があった。

詩自体はごく短くて、意味のわからない文字の羅列のように見えるが、コメント欄には作者がかなり長い文章を書きこんでいる。

エディプスの父

赤土

pl?nl=35.5.11.922&e1=139.0.
11.467&l1=1&sc=3&p
rem=0&CE.x=273&C.....

200X年5月22日XX時XX分XX秒

作者のHP： - - - - -

- この作品の著作権は 赤土 さんに帰属します。
- 無断で転載することは禁止します。

作者からのコメント

赤土です。ご無沙汰してます。ここに来る方々の顔ぶれも、だいぶ変わりましたね。見ていただけの方でも、私のことを覚えておられる方はどれだけいらっしゃるでしょうか。

さて、私も、もしかすると、この投稿が最後になるかもしれません。これまで幾度か投稿し、その都度、暖かい感想をいただきました。あらためて、御礼申し上げます。

こちらに投稿させていただいたのは、若い頃、書いていたものの中で、まだ記憶している断片をベースにしたものが多かったですが、自分にとって詩を書くことが何かの支えになっていたような気がします。そして、どこかでそれを読んでいる人が いることは、ただ単に自分で書き散らすとは決定的な違いがあるような気がしました。何が違うのか、うまく説明できないのですが。

私はここに投稿していた頃、ずっと、かなりハードな生活状態にありました。

自分のPCも持っていませんでした。でも、ネットカフェや知り合いのところから、折を見てはこのサイトを覗きました。その辺りからできた詩もあつたりしましたが、それはともかくとして、このサイトにアクセスするのは、まるで麻薬中毒の人間が禁断症状に苛ま

れた時のようなものだったでしょう。

ところで、この作品、まるで意味がわからないですね。

私は以前、見方によっては難解とも言えるような作品を投稿したことがあります。

その時は思うところがあつて別のHNを使いましたが、別に悪いはずらをするつもりでやったことではありませんから、どうぞ、お許しください。

と言っても、その小細工は単なる自己満足のようなもので、見ている方の誰も、その意図に気づくことはなかったでしょう。いえ、私にしても、何か具体的な意味を込めたままでは言えず、ちよつとした気まぐれみたいなものだったのですが。

その作品は一種の暗号文、あるいはアナグラムと言つてもいいでしょう。ちよつとHTMLのタグを使ったインターネットならではの仕掛けを作ったのですが、もちろん私はPCに関してはほとんど無知と言つていいレベルなので、HTMLの解説サイトを見ながらかなり苦心しました。

私は、あることをどうしても、どこかに記しておきたくて、そんなものを考えました。メッセージというほどのことでもないある内容を、その詩の中に隠れさせ、見た目は難解な作品のように、頭に浮かんだ言葉を配置したのです。

海外の詩では漢詩やソネットのように文字数や行数の規則があつたり、韻が踏まれたりしますね。その時の私は、ある制約のもとに一篇の詩を考えただけです。もっと具体的な内容のものに作り上げてもよかったのですが、その時の私は、ただ、意識の深層から湧き上がってくる抽象的な言葉たちを並べる作業にひたすら没入しました。何かに憑りつかれてでもいるような感じでした。

タイトルについては、少し考えたんですが、最初は「人間は表現す

る葦である」とし、なんだか大仰なので後に「表現する葦」に変え、また、最初に書いた時は時間の制約があつて納得のいかないまま選んでいた語句を書き換えたりしましたが、多分、誰も覚えておられないでしょうね。

あれを書いた時、私はちよつと血腥い破壊的な状況の中にいたのでした。でも、何かを、誰とも知れぬ人に伝えたくて行なつた作業だったのです。それをずっと自分の胸にしまったまま終わるのには耐えられなかったのでしょう。そういうのは、好きな女の子に愛を告白するとか、犯罪者が自分に不利な事実を取調べ官に告白してしまうようなものに過ぎず、多分、詩人や芸術家のする表現はもっと別の高いレベルにあるのだと思います。まあ私は結局、表現する葦にはなれないようですが、そう呼ばれるのに値するのは人間の中的ごく一部でしょうから仕方ないか（笑）。

その詩は、何かを表現しようとする意志のもとに綴つたものとは違つたのですが、投稿すると、真面目な感想や評論の域に迫るもので、多くのレスをいただきました。まことに恐縮です。

でも、実は自分では、これまで書いた詩の中で、一番よい出来だと思ひ、気に入つてもいるのです。読み返していると自分が書いたものであるにも関わらず、そこに引き込まれ、時には高揚感を覚えたりすることもあつたりするのですが、こんなことを言つと笑われしまいそうですね。若い頃などは自分の主張だとか表現だとかに拘り、ない頭を何日も絞つて一字一句に心血を注いだものですが、むしろ戯言のように取り組んだものがこういう結果になるとは何だか皮肉なものです。

いや、何だかんだ言つても、結局のところ私には、この世界のどこかに留めておきたいものがあつたということに過ぎないのでしょ

うか。
先程も申し上げましたように、これが最後になるかもしれませんので、ちよつと、頭に浮かんだことを書いていたら、いつの間にか長

くて、しかもわけのわからない文章になってしまいました。すみません。

字数制限にひっかるかもしれませんが、ボタンを押してみます。

まだ感想は書かれていなかった。

『エディプスの父』というのは、s a s u r a i b i t o の揭示板に書きこまれていたが、これは、それと同じものなのだろうか。

第13話

84 > s a m p <

上り坂の傾斜がある程度になったら、あえて低いギアでペダルを漕いで行くよりも、チャリを押して歩いた方が体力の消耗が少ないし時間的にもそれ程の差は出ない。

今日はネズミヤに貰った軽いミニベロを持って来たから、それでも比較的楽に上れていた。

MTBはマウンテンバイクというものの比較的重くできていて、山道を長いこと上るのは疲れる。オフロード向きで頑丈に作られ、サスペンションがついていたりもするからだが、けっこう山奥の林道でも舗装されているし、落ちている木の枝や石に気をつければ車体の軽いレーサータイプでも走れないことはなさそうだった。

坂が緩くなったので、ルネは、そこからペダルを漕いで行くことにした。走り出したけれど意外とペダルが重い。緩く見えていた傾斜が、実際はもっと急なようだった。

山道で、こういう事は時々ある。坂を上りきって下りにかかるように見えたのが実はまだ緩い上りで、慌ててギアを低くしたりする。見た目での認識は脚の筋肉ほど客観的ではない。

たぶん今日一日はチャリに乗っていることになるが、まだ午前中なので、早々と疲れてしまわないよう一番低いギアでゆっくり走る。しばらくは脇が農地だったり林だったりしたが、やがて、すぐ傍にあるのが、下にいた時、前方の山中に小さくぼつりぼつりと見えていた家々の一部であることにルネは気づいた。並木のある通りは坂道でなければ郊外のちよつと瀟洒な住宅地といった雰囲気、家々はゆつたりした間隔で並んでいた。企業の保養所の所在を示す標

識があちこちに見られる。

ここは一応別荘地だが住んでいる人もかなりいるらしく、先に進んで行くと庭の手入れをしている人がいたり洗濯物が干してあったり駐車スペースに車があったりで、何となく生活のにおいを感じる家も多かった。

坂道が一段落している地点でルネはミニベロを停め、デイパックから地図を取り出して現在位置を確認した。大手ポータルサイトにある地図検索で調べプリントアウトしたA4の用紙だ。拡大率が低いものだと言物の形まで描かれているので、ルネが今どこにいるのかよくわかる。

斜め前の家の2階にあるカーテンが閉められた窓の隅から、ルネに向けられている視線があるのを感じた。ルネがその方向に目を向けても視線が逸らされる気配はなかった。見慣れない人間がいるので警戒しているのだろうか。そういえば、来る途中、ところどころで警備員の詰め所を見かけたが、不法侵入者や空き巣が多いのかもしれない。

長い間、そこで立ち止まっていると不審に思われるかもしれないので、ルネは先へ進むことにした。それほどの坂ではなかったが、しばらくミニベロを押して歩いた。左側の斜面上方に個人の別荘や住宅というには規模の大きい建造物が見えてきた。敷地が広く、樹木の間に赤い鳥居や塔のようなものが見える。

進んで行くと、やがて、その建物のある方に入る横道があった。入口に矢印と『瑞穂の会 南箱根道場』という表示のついたポールが立っている。ルネも名前を知っている宗教団体の施設らしかった。敷地の隅か隣に比較的小さな建物があるのは地図に載っている通りだ。

先に行こうと思っている場所があり、ここは後でまた来る予定だ

ったが、ルネは、その時にわかるよう、辺りで目立ちそうな場所をいくつかケータイで撮っておいた。帰りは下りだから、スピードが出ていると、うっかり通り過ぎてしまいかもしれない。下り始める時、写真を見て確認すれば、その恐れは少ないだろう。

横道の反対側にある家は1階がガレージになっていて、男が車のボンネットを開けて何か手入れをしているようだった。ルネはあまり車には詳しくないが4WD車だ。大柄だが身体に余計な脂肪はついていない。Ｔシャツから出ている腕の筋肉は鍛えられているように見える。スポーツ選手がよくかけているようなサングラスを短く髪が刈り込まれた前頭部に挟んでいた。

その男はルネが近づいて行く時、一瞬顔を向けただけだったが、意識はずっと自分に集中させているようにルネは感じた。

ルネも視線をダイレクトに向けるのを避けながら男を観察した。前世では爬虫類だったような男だ。体表の気色のよくない紋様で他者を威圧するような雰囲気があるとなくあって、彼の身体を取り巻く空気がそこだけ冷えているのを感じるような気がする。

ルネはミニベロに乗って走り始めた。坂の傾斜が思ったよりきつくてギアチェンジしたら、チェーンの噛み合いが悪く、音を発したが、男は黙々と自分の作業を続けていた。しばらくの間、背後の男が自分に意識を向けている感じは続いていたが、それは思い込みからくる錯覚かもしれない。

5分ほど上ると周囲に家は見当たらなくなり、やや坂が急になった。少し疲れたので押して行くことにする。車が上つて来る音がしたのでルネは左脇に寄った。黄色いワーゲンがルネの横で停まり、

左ハンドルの運転席から女性が話しかけてきた。

「こんにちは」

ルネも挨拶を返した。道を尋ねられるのかもしれないが、それ程、この辺りに詳しいわけでもない。プリントアウトした地図を見て事足りるだろうか。

女性は長い髪を後で束ねていた。フランスかイタリアのブランドばい大き目のサングラスをかけているので顔の詳細はわからない。

「よかったら乗ってかない？チャリはもう1台OKだし」

ルーフィタリアを見ると Bianchi のロゴが入ったロードバイクがあつた。逆さまにして取り付けられているが、普通の状態なら犬が前身を低く身構えているようなデザインだ。どうやら道を聞くのではないようだった。

「いえ、大丈夫です。それに、ちよつと先で横へ曲がるし……」

「そう、まあ自分で上がった方が運動になるしね。じゃあ頑張つて、遠ざかっていく車の後ろの窓にいくつか並べてあるフィギュアを見て、彼女はルパン3世オタクなのかなとルネは思った。

霊園の駐車場に停めてある車は1台もなかった。もう集合時間の10時半を15分ほど過ぎていたから、詩人たちは誰もトリルの墓参に来ていないのだろうか。ルネは結局、ポプラのメールにレスしていないから、日程や時間の変更があつて、それは出席予定者だけに知らされたことも考えられたが、やはりあのメールはルネだけに送られたもので、オフ会は架空のものだったのかもしれない。

霊園は、かなり広くて、トリルの墓を探したら一日費やしてしまいそうだった。ルネは入口の前まで戻って正面にある看板を確認した。

南箱根天陽霊園

メールに書かれていた通り、晴れているので富士山の眺めはよかった。3D映像のように背景の空からはつきり浮き出て見えるのはリアルな情景なのだからあたりまえだ。

ネットで調べてみたところでは、『瑞穂の会』という新興宗教団体の運営らしい。ここに来る途中にもその施設を見かけた。大手の教団ではないが、ルネもその名前くらいは、どこかで見て知っている。

この霊園を作る時、暴力団を使った強引な地上げが行なわれ、反対運動も起きた。そのリーダーは建設中の建物から転落死し、警察はその事件に事故という結論を出した。

瑞穂の会に絡んだ詐欺商法を追っていたジャーナリストや、教団をモデルにして批判的な映画を製作予定だった監督なども謎の死を遂げているのだが、どうも身代わりのような犯人が自首したり自殺として片付けられたりしていて、その真相は教団に雇われた暴力団による殺人であるとか、背後に存在する某国工作員の仕業だとか、ちゃんねる・ゼロのような巨大掲示板や陰謀史観好きのブロガーの間では、まことしやかに囁かれていた。

ルネはプリントアウトした地図を取り出して、場所に間違いがないことを確認した。メールに添付されていた画像は簡単なものだったので、地図検索でも調べてみることにした。

そして、何気にアドレスバーのURLに目がやった時、ルネの頭の中で閃いたものがある。それは、ばえ村に赤土が投稿した『エデイプスの父』という作品についてだ。

抽象的あるいは実験的な詩のようにも見えた。

pl?nl=35.5.11.922&el=139.0.
11.467&l=1&sc=3&p

r e m = 0 & a m p ; C E . x = 2 7 3 & a m p ; C ……

これはURLではないだろうか？

地図を検索している時、アドレスバーには長いURLが表示されている。サイトによって異なるが、だいたい、その冒頭にあるのはトップページのURLか、その中のディレクトリまで、後に文字の長い羅列が続く。mapのような単語やpremのような省略形らしいものも含まれていて、後は数字やアルファベットや記号がランダムに並んでいるように見えるが、たぶん、範囲などによる規則があるのだろう。

ルネは、地図検索サイトを回って、適当に表示した地図のURLから冒頭の部分の後をドラッグし、『エディプスの父』の内容を貼り付けてみた。

何ヶ所かで繰り返し返しても、そのURLは存在しないというページに飛ぶだけだったが、あるサイトで試してみると地図が表示された。その中心を示す“+”の場所は、南箱根天陽霊園と数キロしか離れていない。たまたまなのかもしれないが、ルネは、それがちょっと気になった。

偶然というのは時に、ある大きな世界の意志の現われであって、自分と呼んだりメッセージを送ってきたりする。勘違いすることもないとはいえないが、たいしたリスクがないのなら、それに従ってみるのもいいだろう。

梅雨も近いことだし、とにかく天気の良いうちに伊豆の山を走っておこうかとルネは考えた。

駐車場の一角に2メートル四方の係員詰め所があったが、中には誰もいなくて、ちょっと出かけているような様子でもなかった。ビデオカメラが何ヶ所か設置されているが、詰め所の窓から覗くと

モニターには電源が入っていない。だが、どこか別の場所から監視しているのもあり得るだろう。

駐車場の出口方向のちょうど向かい側に看板が立っていた。

リゾート・レストラン みどりの杜 ↓ 6 km

メールには“墓前には昼頃までいて、その後、近くのレストランにて会食する予定”とあったが、ここなのだろうか。6 kmというのは、ちよつと遠い感じがするが、来る途中でも別荘地の中で店舗のようなものを一軒も見なかった。行けない距離ではないが、墓参オフ自体が中止や延期、あるいは、架空のものだったのかもしれないし、詩人たちと顔を合わせて、どうということもない。

考えてみれば、ネット詩人という連中の中で、オフで会ったのはトリルくらいだとルネは思った。あと、源さんが赤土というHNの人物なのかもしれない、それと、たまたま顔を合わせた sasurabbito もネット詩人には違いない。

ルネは、先ほど前を通って来た、もうひとつの目的地に回ることにした。

時折、西の方向の視界が開けると、駿河湾が見える。道幅は普通車がかかるうじてすれ違えるくらいか、それが無理なほど細いかだ。初め上って来た両側1車線の道に戻るまではアップダウンの繰り返しだが、帰り道だから、ある程度要領はわかる。

下りでつけた加速を生かしてギアを下げながら上って行くと、急な坂でも、けっこうスピードがついたまま越えられるものだ。

ある程度勝手がわかつている道なので、アップダウンが多く曲が

りくねっているが、だいたい20km/hを切ることなく走れている。直線の下りがしばらく続けば50km/h近くまで行っているだろう。

もつと出せないことはないが、慣れない所だし、舗装されているといえ小石がかなり転がっているので程々にしておいたほうがいいとルネは思う。車や人が通るのは、多分、一日にに数えられるくらいだろうから、路上ならまだしも、カーブを曲がり損ねて崖下に落ち、動けなくなったりしたら、白骨になるまで見つけれないこともあり得る。

後方で車の音が聞こえるが、カーブの間隔が短いので振り返っても姿は見えない。そんな状態は数分続いていた。路面に30キロ制限の表示があるが、そうでなくても、この道では、あまりスピードを出せないだろう。

ルネは平均30キロ程度で走っているから、車はなかなか追いついて来られないようだった。

やがて、かなり大きくなった音に後を見ると、車は50メートルほど後ろまで近づいている。ルネは少し脚の回転を少し早めた。傾斜の具合に応じてギアを変える。

これくらいなら車は追いつく必要はないだろうと思っていたが、向こうもスピードを上げ、20メートルくらいのところまで近づいて来た。上りの傾斜が少しくつくなる。ルネのミニベロは、やや遅い走りになったが、車はそのままか、あるいは少し加速したように思えた。自分が遅くなったためにそう感じるのかと思ったが、そうではないようだ。ルネは左脇の側溝ぎりぎりまで寄って車を先に通そうとした。だが、車は右に移動して抜いて行く気配を見せない。車との距離は次第に狭まり、あと数メートルになったが、以前として右に出る様子は示さなかった。

運転者がルネに対して殺意を抱いているのは間違いないと思われ

た。

85 > / s a m p <

前方に車がすれ違うための待避所が見えてくる。左側の崖が、すれ違うために車1台分くらいのスペースだけ挟られているのだ。ルネがそこに飛びこんだのは車に追突される寸前だった。

車も急ブレーキで止まる。乗っているのは来る途中で見かけた爬虫類のような男だった。車も、あの時、彼が手入れしていたものだと思う。

男がこちらに顔を向けた時、ルネは、蛇が一瞬舌を出すのを見るような、いやな気分が身体に広がるのを感じた。

だが、そこでもたもたしてはいられない。ルネは待避所の前方と車の間隙から前に出た。前ブレーキをきつく握ったので、スピントーンした格好になる。車の右側を抜けてもと来た方向に走った。下りなので加速して行き、コーナーで車を振り返ると方向転換にてこずっているようだった。

そのまま夢中で走り、横道があったので、そちらに曲がる。車がいやと通れるくらいなので、あの爬虫類も追って来づらだろう。けれどもルネは、できる限りの速さで走った。

斜め上に道路があるらしくて、そこを白のセダンが走っていくのが見えた。この道を行けば、あそこに出来るのだろうか。人目のある場所に行けば、爬虫類も危険な真似はできないだろうと思い、ルネはひたすら走った。道というのは、どこかで繋がっているものだ。

道路の見た方向へ横道を登っていくと、背後から車の音がだんだん近づいて来た。爬虫類が追って来ているようだ。自分の脚力で

めいっぱいスピードを出せるレベルのギアより下げず、必死でペダルを踏む。ミニベロで来たのは正解のようだ。車体が重めのMTBだったら、うまく上りきることはできなかったかもしれない。

酸欠状態で頭の中が真っ白になった時、何とか交互1車線の道に出た。周りの様子に見覚えはないので、初めに来たのを更に上がった所だろう。ルネは下り方向に曲がった。

爬虫類がなぜ自分を襲撃してくるのかはわからないが、ところどころに人家があり車も通る道に出たので、あまり露骨な行動はできないだろうというルネの希望的な考に反して、4WD車は彼の後をしっかりと追って来た。10メートル程の距離でぴたりついていないが、カーブが多いので、それ以上近づけない。

100メートルくらいの直線に近い区間に入ると背後のエンジン音がトーンを変えた。次第に近づいているのがわかる。追突される寸前にルネは歩道に乗った。幅1メートルくらいだが、近くに歩行者は見当たらない。4WDはルネと並走するかたちになった。

横道やガレージの前では歩道に段差がある。ルネは、再び歩道に乗る度、ハンドルを引き上げるようにして前輪を浮かした。縁石の角でパンクするおそれがあるし、この方がスピードも落とさないまま行ける。

横の4WDをじっくりと見ている余裕はないのだが、ルネは男が薄笑いを浮かべているような気がした。獲物を追い詰めた蛇やオオトカゲがするような表情だろうか。もっとも、爬虫類が笑ったりするかどうかはわからない。

下りが終わり、その先は上り気味で右のカーブだった。ギアは前も後もいちばん上になっていたので、ルネは、いくらか下げようと思った。ちょうど横道があり、段差をいつもの要領で越えたが、タイミングが悪かったらしくチェーンが外れる。

加速がついているので、すぐにスピードが落ちることはなかったが、4WDは相変わらずルネの横にぴたりとつけていた。停まっ

チェーンをかけるだけの時間的余裕があるだろうかとルネは考えた。男は降りてくるかもしれない。筋肉質の身体で、格闘技の心得があるか喧嘩慣れしていそうな感じだったし、何か武器をもっている惧れもあった。そのまま車を歩道に乗り上げ、ルネを轢き殺すことだって遣りかねないだろう。

その時、車を挟んでルネと反対側に自転車がいるのにルネは気づいた。ロードバイクのようだ。開けられていた車の窓に何か投げ込むと滑るように加速し、カーブの向こうに姿を消す。さっきのワーゲンに積んであったのと同じビアンキで、ヘルメットの後から出ている束ねた長い髪が見えた。

男は何か叫び声を上げ運転席に蹲った。車の走行が少しブレているように感じたので、ルネは急ブレーキで停まる。男はドアを開けて筒状のものを外に投げ出すと、激しく咳込みながら大きく上半身を出し、深呼吸しているように見えた。前方を見て、慌ててハンドルを取り直したようだったが、ガードレールに激突する。車はひしゃげたガードレールを乗り越え、その時、開いているドアから男が放り出された。車も男も向こうの崖下に落ちたようだ。

ルネはカーブまでミニベロを押して歩いた。ブレーキを踏む余裕はなかったらしく、タイヤのスリップ痕はなかった。

赤いコーンがふたつ倒れていた。数個置かれていたと思うが残りは車と一緒に崖下に落ちたのだろう。行きに通った時、見た感じでは、道路の端に亀裂が入っているので注意を促しているようだった。ガードレールが車を止められずに壊れてしまったのは多分そのためだ。

路上に催涙スプレーの缶が転がっている。ノズルを押したままで固定する器具が取り付けられていた。風に乗って漂ってくる刺激臭を感じる。

ビアンキが引き返してきた。やはり、サングラスもさっきのワー

ゲンの女性と同じのだ。ルネに向かってちょっと微笑したように感じたが、そのまま、もと来た方向に、かなりの速度で走り去った。

ルネは道路の端まで行つて崖下を見た。2・30メートル下に木々が見える。ガードレールが壊れているので、身を乗り出すと、身体の深奥から冷たい微動に似た恐怖の感情が全身に広がり、呼吸が圧迫されるような気がした。

丈の高い樹木の中に落ちたので、初めは車がどこにあるのか見定められなかったが、目を凝らして見ていくと枝や葉の隙間から微かにその存在を認められる場所があった。だが、何も知らない人間だったら気づかないかもしれない。

男がどこにいるかはわからなかった。木の枝がクッションになって命を取り留めているかもしれないが、そういう可能性もあるということだけだ。

ルネはケータイを取り出し、来る途中に撮った写真を確認した。赤土の『エディプスの父』という意味不明な文字の羅列のような詩に隠されたメッセージが、地図検索サイトで、ある場所を指定しているものだとすれば、その位置は、あの辺りになる。ルネは走り始めた。

警察や救急に連絡するのはやめておいた。どういう理由でかわからないが、襲われて生命の危険に見舞われたわけだし、事情を聞かれても説明のしようがない。裏に何があるか、どんなものが絡んでいるかによつては面倒なことになりそうだった。

ちゃんねる・ゼロやネット上にしばしば書かれていることだが、警察というのは現在の世の中の秩序を維持することを第一に動くので、時と場合によつては真実や個人など、無視されたり踏みにじられたりもするようだ。だからルネに落ち度がなくても味方になつて

くれるとは限らなくて、状況次第ではどういう対応をされるかわからない。助けてくれたビアンキの女性にだって、何かと面倒なことが起きるかもしれない。

しばらく坂を下ると、さつき曲がった霊園への横道があった。周囲に見覚えがあるので表示板の文字を確認する必要はないだろうと思う。

瑞穂の会の施設が見えてくるまでに何分もかからなかった。上った時と下りるのでは時間に格段の差がある。

入口の向かい側のガレージに車はなかった。やはり、さつき襲ってきたのは、ここにいた男なのだろうか。

対向車も後続の車もないので、下りで得た加速をなるべく減らさないよう、左の小道に入る。その先はやや急な上りだが勢いがついているので、そのまま200メートル程20k/hで上がり、道が右へ折れる所まで行って、ルネはミニベロから降りた

大通り沿いは、だいたい区画ごとに家が建てられているが、奥に入っていくと土地所有者の表示だけがある更地が目につく。競売のボードが立っている敷地もあった。

瑞穂の会の施設の正面は、近くに来て見ると寂れた印象だった。エントランスに敷かれている大理石には土埃が風紋を作っている。前面一面のガラスも汚れていて、人の出入りがあるような雰囲気はなかった。建物に破損があるわけではないが廃墟の一步手前と表現しても間違いとは言えないだろう。

建物の前を通り過ぎると胸ほどの高さの金網のフェンスが続く。下の道路から見えた塔も、近くで見ると塗装の剥げかけた部分があって、縦長の倉庫のような感じだった。

ルネがフェンスに沿ってさらに進むと、塔の側面の窓が開いてい

て、そこから外を見ている男の顔が見えた。室内は暗かったが、むしろ、その男から陰鬱な何かが流れ出して、空を陰画に変えている。彼は無表情だったが、まるで、世界に向けて人間の脳や思考を攪拌する電波を発しているように、ルネには思えた。

さらに進むとフェンスは向こう側に曲がっていて、それに沿った小道がある。行く手の左にある建物の屋根は太陽光発電の装置で埋められていた。教団の敷地の外だから施設の一部ではないらしい。個人の別荘や住宅としては、やや大きめの作りだった。

100メートル先でフェンスは終わり、そこからは生垣になっている。さらに進むと道の左側は一面に芝生が植えられていて、ところどころに外灯が立っていた。その先には池がある。

周囲の様子からルネは、もしかしてゴルフ場の中に入ってきたのだろうかと思った。池の傍に、電動車椅子に座った老人がいる。ルネが近づくと老人は振り向いた。

車椅子を使っではいても、それほど身体の弱い感じには見えなかったが、精悍な顔立ちだからだろうか。血色もよく、痩せても太り過ぎてもない。

ルネは私有地に入ってしまったのかと思った。通って来た所に鎖は張られていなかったけれど車止めがあったのだ。

引き返そうとするルネに、老人は「いいよ」と言った。

「すみません。ここは私有地ですか？」

ルネは老人の脇まで近寄って尋ねた。

「まあ、そうだが、構わないよ」

老人は肘掛についているレバーを操作して、ルネのほうに向き直った。間近で見ると彼は、老人とは言ってもその表情からある種の精神的な力が感じられ、また、車椅子に乗ってはいるものの身体に弱々しさは見られなかった。

「なかなかいい所だろう。わたし一人で眺めるには勿体ないよ」

「ええ」とルネは答えた。

「いい自転車だね」

ツーリング先で会う人は、社交辞令でよくこんなことを言う。

「これで下から上がって来たのかね？」

「ええ、函南駅からです」

そこまでは輪行で来て、それから霊園まで上がったのだが話が面倒だし言う必要もないだろう。

老人は「ほう」と頷いた。

「なかなか大変だったろうね。まあ、普通の自転車とは違うだろうけど」

彼はミニベロの小ぶりのタイヤやサスペンションや変速機に、順に目をやっていた。

「学生かね？」

「昔は。もう、行ってませんけど」

ルネは若く見られるらしいから、よくされる質問だった。

「まあ、私も昔は学生だったがそうか、社会人か。いずれにしても、若い人はいいいね」

老人は苦笑して言ったが皮肉ぽい口調ではなく、むしろ、ルネの答を愉快に思っているようなので、ルネは安心した。初対面で相手がどんな人物かわからないと、ジョークやユーモアの通じないこともある。

「自転車の選手なのかね」

「いえ、競技とかはやってません。自分で好きに走るだけです」

「でも、函南からこれで上がってくるというのは、いくら若いにしても体力があるね。他のスポーツは何かやってたの？学生の頃なんかは……？」

「いえ、体育会みたいな雰囲気は好きじゃないので」

「そうか、なるほど」

老人は頷くと、また楽しそうに笑った。

老人は、それ以上ルネの身边について尋ねることはなく、それは無関心というより旧知の関係であるからといった感じに近かったような気がする。ひとしきり、この地域の季節による変化や植物や旧跡について話した後、老人はルネに尋ねた。

「ところで君、食事は、もう済んだかな」

デイパックの中にコンビニで買ったおにぎりがあったが、さっきのごたごたがあったので、まだ食べていない。ルネはこれから、どこかゆつくりできる場所へ行つて食べるつもりだった。だが、彼が辞退するより先に、これも何かの縁だからと老人はケータイを取り出し、登録してあるらしい番号に電話をかけた。

「あ、シェフ？食事をもう一人分用意してもらえるかな。それと、若い人だから、酒と何か料理も考えてくれますか？」

86 > / b o d y <

老人はルネを家の中に招き入れた。エントランスへは数段の階段を昇ったが、老人は横のスロープから入る。ドアは横開きの自動だった。内部も、段差のあるところには横にスロープがつけられていて車椅子でも不自由しないようになっていた。

老人は奥にある12畳ほどの部屋のドアを開けると、ルネに入るよう促し、後から自分で手際よくドアを閉めた。

室内はロココ調というのだろうか。けっこう手のかかった造りになっている。部屋の中央には大きな丸テーブルがあつて、ルネは勧められた椅子に掛けた。老人の定位置らしい空けられたスペースがあつて、電動車椅子はアクションゲームの画面の中のように、スムーズにそこへ滑り込んだ。

老人はルネに、間もなく料理が来るので楽にしているようにと言

ってから、テーブルにあつたりリモコンを取り上げ、ボタンを押した。部屋の壁面のひとつはスクリーンになっていて、そこにプロジェクトから投射されたのは映画のようだった。ルネは初対面の人物の家に招き入れられたので何となく落ちつかず、室内のあちこちに目をやったりしていた。

しばらくしてノックがあり、中年の男性が料理を乗せたワゴンを押して入ってきた。料理人の白いコスチュームだった。彼はテーブルに料理を並べたが、老人の前には深めの皿とオードブルのようなものだけで、ルネの前にはそれに加えて数点が置かれた。

料理人は前掛けのポケットからソムリエナイフを取り出し、ワインの栓を開けた。老人が簡単なティスティングをしてから、それぞれのグラスに注がれる。

テーブルの上をチェックするように見回してから、彼は老人の脇に立って言った。

「先生、それでは私は店の方がありますので」

「ああ、ありがとう。今日は送らなくていいのかな？リユーテナンは、出かけていて、まだ帰ってないが」

「はい、今日は自分の車で参りましたので。十国峠を通って御殿場インターの方へ、ちょっとドライブして帰ります」

「そうかね。まあ、いい気候になったことだしね。それじゃあ、気をつけて」

料理人は退出し、老人はルネに料理を勧めて、自分もリゾットの皿にスプーンを運んだ。

自分は身体が弱っているのでこんなものしか食べられないのだがフォアグラが入っている。今帰った男は一流の料理人だ。彼とは長い付き合いで、時々ここに来て腕によりをかけた料理を作ってくれる。代官山に店を持っているオーナーシェフだ。小さな看板があるだけで、知らない者は、そこにレストランがあることなど気づかな

いようなところだが上品な雰囲気で、ちょっと値段は張るが、もちろん料理は美味くて、でも、若者がカップルで行ったりすると気詰まりな感じがするかもしれない。そんなことを老人は話した。

「いわゆる“セレブ”のための場所ですね。」

「でもまあ、君が、そういう場所でさまになるような日は意外と早く来るかもしれないよ。初めウェブデザインをやっていた若者の企業が、瞬く間に時価総額数千億円にまで成長するようなこともあるわけだし」

話題が自分の仕事に及んでいるような気がするのは偶然なのだろうか。ルネは思った。もしかして、この老人は自分についての予備知識をもっているのか…？

「インターネットなんて、それほど儲からないんじゃないかと僕は思ってたんですがね。でも、大きく伸びてたりする企業もあるし」

「そう、目立つ割に実入りは少ないようだ。というか、有名どころが実は赤字経営だなんて噂も流れてたりする。君はなかなか頭がいいね。世の中のことがわかってるようだ」

年配者はよく若者に“君は頭がいい”という社交辞令を使う。ルネはそんなことを考えたが、老人は話を続けた。

「ネットの人目につくところで景気がよさそうにいろいろ仕事をしていたら、特に先端のITなどというと、多くの人間にはそれらしく見えるものだ。というか、儲かる儲からないよりそういう綺麗な看板を出していることが重要なんだよ。そうすれば、欲に目の眩んだ投資家たちの金をかき集められる。いとも簡単にね」

老人はワインを一口飲んだ。目を閉じて全神経を舌と喉に集中しているかに見えたが、やがて満足げな表情に変わった。

ルネも勧められてグラスを取った。酸味や甘味やフルーティーな濃度によって感覚の深奥の微細な領域までが虜にされ、最後にアルコールの優しい陶酔が身体の中を昇って行く。銘柄などはよくわからないが、かなりの高級品なのだろう。

「あのう、もしかして作家の方なんですか？いえ、先ほどのシェフの方が“先生”と呼ばれてましたので」

沈黙が続くのを避けるため、ふと頭に閃いたことをルネは質問してみた。この老人は知識も豊富なように思える。

「私はそんなインテリに見えるのかな？」

老人はいかにも愉快そうに答えた。

「それとも、君は作家志望…？そう言えば詩など書いてたみたいだね」

「よくご存知ですね。ネット上で披露してただけで、最近は書いてませんが」

やはり彼は、自分のことをいろいろ知っているみたいだとルネは思った。

「残念ながら、私には、それほどの文才がないよ」と老人は穏やかな口調で言ったが、その裏に謙遜を隠しているのではないようだった。

「先生といえば他には何だろうね。教師はよくあるとして、医者…弁護士…政治家…」

老人は半分ほどになった自分のワイングラスを指して、自分はいつもこれだけにしているから後は全部飲むように言って、若いからいいだろう、と付け加えた。ボトルはルネの近くに置かれている。

「ああ、そうだ。君は政治家になるのもいいね」

「え、政治家ですか？」

ルネは少し笑った。意外な話の展開だし、そんなことは考えたこともない。老人は話を続けた。

「今、非凡な頭脳をもっている若い人たちは、どんな道を目指すのだろうね？少し前なら音楽や文筆といったところだったかな。今は、やはりコンピューター関係なんだろうか」

「それだと、今はゲームデザイナーかもしれないですね」とルネは答えた。

なるほど、と老人は頷いて、君は世の中のことがなかなかよくわかってしていると再び言った。

「優秀な人間が集まるところは競争が激しいからねえ。馬鹿しか集まらない分野なら、上に行くのが簡単だ。ま、それなら何と言つても政治家だろうと私は思うね。今時、政治家になろうなんて本当に阿呆な奴しか考えない。ちよつと頭がよかつたら、もっと他のことを考えるだろう。だから政界には、他人から先生と呼ばれて優越感を感じ横柄な態度でいるのが好きだが何の能もない奴ばかりが集まる」

だから、むしろ入って行くのは簡単だ。ルネがその気ならレールを敷いてやれないことはない。ただ、下の方だと金集めにけっこ苦労する、と老人は言つた。

ルネは笑つて、その気のない事を伝えた。

この老人は政界あたりの、いわゆるフィクサーなのだろうか。それなら先生と呼ばれるのもおかしくないが…。

ドアがノックされた。老人が応えると初老の女性が一步だけ部屋に足を踏み入れ、一礼した。

「先生、それでは、また夕方参りますので、ここはその時片付けますね。買い物して参りますが、何かご入用の物がございましたら…」

今日はこれといつてないと老人は答えた。

「はい、さようですか。隣の総裁先生にも伺つてみた方がようございましょうか？」

「いや、もう自分の身の回りのことだつて何もわからなくなつてるだろうし。聞いてもしようがないだろう。人間が壊れてしまつてるからね。あんたも、あの男の近くに行くのは気味が悪くないかい？」

女性は困つたような顔で「いいえ、まあ」と曖昧な返事をした。外に出て一礼し、静かにドアを閉める。

「そうだ。先生といえば宗教家もいたね」

老人はリモコンを操作してカーテンを開けた。

「ここへ来る時、隣にある塔の窓から、ぼんやり外を眺めてる男を見なかったかな。一日中、あんなふうに呆けてるんだが。あれでも“瑞穂の会”という宗教団体の3代目教祖だよ。知ってるかな？」

「名前を聞いたことはありません。何だか古臭い主張のところで、ちゃんねる・ゼロなんかで、けっこう叩かれてたりしますね」

「うん。ま、ぼんぼん育ちには荷が重過ぎたのかもしれないな。教義が時代とかけ離れて会員数は減り続け、新しい試みをすれば古くからの信者の反発を買う。身内から崇め奉られていたので自分はレベルの高い人間と思っていたが、ネットの掲示板に踏み込んだところ論破され罵倒されて自信喪失。それやこれやで奇矯な行動が目立つようになり、それで、今はあそこに幽閉状態だ」

ルネはカーテンの開けられた向こうに目をやった。男はさっきと同じように塔の窓から外を見ている。

「あの窓から外を見てるのは魚田冬磨という男だ。瑞穂の会は魚田鎌足という彼の祖父が始めて、鎌足の奴はまあ、若い頃は文学を志してたりしたし口が達者だったな。思いつくままに喋り、自説に矛盾が出そうになると、それを糊塗するためにまた出任せの作り話をする。だが、その過程で自分の言ったでたらめを真実だと自分で信じ込んでしまうんだ。人間は死ぬという想念をもつから死ぬのだ、と口癖のように言っていたが、結局、自分も老いさらばえて病の床に伏し、死んでいった。それで今はトップがあんな状態だし、信者の数は減る一方だ。実は他の教団に事実上乘っ取られ、そのダミーになってしまってるんだがね」

老人はルネに、魚田鎌足に関する裏話をいくつか披瀝した。東京の大学に入った時、下宿に郷里の女性を呼び寄せて同棲したが、それが実家にばれて仕送りを止められてしまった。鎌足が大学を中退しなければならなかった理由は、実はそういう事だ…、などという

内容だった。

向かい側の壁と天井の境目辺りを見つめ、老人は回想しているように見えた。初代教祖と知り合いだったのかもしれない。

「人間は、超自然的なものを信じたがる傾向にある。肉体に、いつか死が訪れることは否定のしようがないが、自分の存在がそれで全く終わってしまうとは認めたがらない。自意識が並外れて強い人間ほどそうだね。だから、浜の真砂は尽きても新興宗教の種が尽きる事はない」

老人は「ああそういえば、冬磨も作家志望だったようだ。鎌足と同じだね。何かの因縁かな」

本も出したが、多分たいして売れなかっただろうな。義理で買う信者は多少いるはずなのにと笑った後、今日は楽しいからと、ルネにもう一杯だけワインを注いでくれるよう所望した。

「ああ、そうだ。さっきの話の続きをしよう。少し部屋を暗くするが、いいかな」と言って、老人は部屋の証明を落とした。

スクリーンの映像は鮮明になり、リモコンで音声も上げられた。

チャイナドレスの女性と旧日本軍の将校らしい男性が小舟に乗っている。風景からそこは中国のように推測された。

映画のテーマらしい音楽が流れる。やはり中国を思わせる旋律だ。ルネは聞き覚えがあった。昭和に活躍した作曲家が書いたもので、何人かのJ・POPのアーティストがカバーしているから、若い世代にも馴染みがある曲だ。

「かつて私は、こんなものにも関わっていたんだよ。監督や脚本家はそれぞれクレジットされている通りだが、筋書きをはじめ多くは私の考えで作られている」

「映画のプロデュースですか？ 凄いな」

「プロデューサーというより、映画会社を経営してたんだがね。で

も、日本の外でのことだ」

ルネは、そのテーマ曲が気に入っていたので、CDの解説を読んでいた。第2次大戦前に作られたと書かれていたように記憶している。当然、映画もその時期だろう。70年か、もうちょっと昔のことのわけだ。今流れているのはリメイクなのだろうか。しかし老人は、自分が筋書きを考えたと言っていた。

老人はルネが怪訝な表情をしていたのに気づいたらしい。

「私の歳はいくつに見えるかね」

ルネはあらためて観察した。老人は視線を合わさず、ルネのするがままに任せている。

顔の皮膚は血色がいい。痩せた感じはあるが、それほど体力が衰えているようには思えなかった。車椅子は病状などで一時的に使っているのかもしれない。ある程度の年齢になれば老化にはかなり個人差が出てくるから、見かけでは判断できなかった。

「私が生まれたのは19世紀だよ」

老人はルネの反応を楽しもうと待ち構えているかに見えた。

「関東大震災の頃には君くらいか、もう少し上の年齢だったかもしれない」

老人は遠い所を見るような目をしたが、具体的には、それ以上何も語らない。

「そうすると。でも、それでは…」

単純に計算しても、百歳をかなり超えていることになる。

老人は微笑を浮かべながら頷いた。

「ま、百年以上も生きていると、さすがにパーツのいくつかは交換せねばならなくなるがね」

自分の腹部に視線を向け、そこに右手を置いて彼は続けた。

「臓器移植というやつだよ。三つほど元気なのと取り替えてる。こちらの眼は角膜も取り替えた。血液を全部入れ替えたりもしている」

それが、もし本当だとしても、日本の普通の医療で、そんなことをやっているのだろうかとルネは疑問に思った。

老人はルネの考えを察したのか、こう付け加えた。

「ま、昔からの縁で、そういう商売の連中の頼み事を聞いてやることもあるから、これは役得とかキックバックというやつかな」それから彼はルネを一瞥したが、彼に何かの反応期待しているのではないように見えた。

「ま、別に信じなくてもいい、というか、表に出したくはない事だしね。でも、昭和史の裏側について書かれたものなど読んでいくと、けっこう私の名前を見かけたりするようだ」

その時、着信音が鳴って、老人はケータイを取り出した。

「え、リ्यूテナントが？そうか。ううん仕方ないね。どういう経緯でそうなったかはだいたいわかるが、これは、まあ、事故だね。そういうことにして所轄には適当に処理させよう」

通話が終わったらしく、ケータイは折りたたんでテーブルの上に置かれる。

「私が使っている者が早合点して、君にちよつと失礼があつたようだが」

ルネには電話の内容が想像できた。たぶん、自分を襲ってきた爬虫類のような男の事だろう。老人はルネに対する怒りの感情をもっているように見えなかった。それから、ただ淡々と語った。

「彼は君が私のことを探っているジャーナリストか何かだと思ひ込んでんだらしい。下で写真を撮ったりしていたらどう？」

ええ、とルネは頷いた。

「ま、ここは、いふなれば治外法権みたいな場所だからね。来る途中で警備員の待機所を見ただろう？この地帯の分譲と管理をしている企業が警備会社を雇っていて、ほとんどの事はそちらで処理され

るから、特に呼ばなければ警察は入ってこない。君は何も気に病む必要はないよ」

老人は男の生死や怪我の状態について何も語らなかったが、むしろそのことが彼にとって最悪の結果であることを暗示しているように思えた。

「あ、メールが入ってるみたいなので、ちょっと失礼します」

老人に断りを入れてルネは携帯を取り出したが、電源を切っていたしメールの着信があったわけでもなかった。老人が言った“リキュテナント”という言葉が気になったのだ。ルネを襲って崖から転落した爬虫類のような印象の男をこう呼んでいたが、どんな意味なのだろうと思ったのだった。

カタカナで携帯サイト検索してみたが、出てくるのは人名や地名でどうも要領を得ない。それで、次に辞書サイトにメールすることにした。subjectにdefineと調べたい単語とを入力して空メールを送ると、英英辞典による意味などが返信されるサービスで携帯にも対応している。

スペルがわからなかったのでreutenantで調べたが“N o definitions found for”reutenant”という返信だった。該当する単語はないらしい。reutenantで再び送ってみる。レスでは前と同じ文章に“perhaps you mean Lieutenant”が加わっていた。“define Lieutenant”で、“1 definition found”が返ってくる。

“代理人”とか“代表”という意味の他に軍隊での階級を表わしたりしているらしい。国や陸海軍等の違いによって多少異なるが、captainのすぐ下のランクだ。ルネはcaptainが大尉であることは知っていたが、そうするとリキュテナントは中尉ということになる。

以前ネット上で独白のような文章を読み、その中に“大尉”と呼ばれている男が出てきたことがルネの頭に浮かんた。文章を書いた男のようだが彼は“赤土”というHNのネット詩人だと思われ、また、ホームレスのネズミヤシゲルと親しかった源さんなのかもしれない。なかった。

その文章はカルトの指令により国外で訓練を受けた後、破壊工作に従事したり、一家惨殺事件の犯人であつたりする一見荒唐無稽な内容だつた。

Lieutenantの意味にひととおり目を通してルネはケータイを閉じた。

ルネがケータイに目をやっている間、老人は脇にあつたノートPCを前に引き寄せてマウスやキーを操作し、ディスプレイを眺めていたが、ルネの様子を見て手を止め、言った。

「ああ、さっきの話の続きだが」

ミネラルウォーターのグラスを取ろうとしていたルネは、それを止めて老人の口もとに注目する。

「ところで、君、ゲームは好きかね？」

老人は唐突に話題を変えたが、意味ありげな感じがしなくてもない。ルネは少し迷つたが、とりあえず間違いではない答えを述べておいた。

「流行っていたり評判のものだと興味をもつて、どんなものか見てみたりはしますけど」

さっきから頭の隅に引っかかっていた疑問があつて、どう切り出そうか迷っていたのだが、このままだと話が別の方向に進みそうだった。ちょうど質問の仕方を考えついたのでルネは実行に移した。

「ところで、あのリ्यूテナントという方は自衛隊あたりにおられたのですか。それとも外人部隊とか……」

「さっきも言つた通り、君は何も後の事を心配しなくて大丈夫だ。

彼はゲームオーバーになった。君はゲームに勝って、ただ、それだけのことだから」

老人はしばらく沈黙した。自分の言葉を反芻しているようにも見えたが、別のことを考えていたのかもしれない。

「そうだな、君の質問に答えると、自衛隊や外人部隊ではないが、そこにはキャプテンもいる」

老人は微かに笑ったが、何か意味ありげだった。

「セカンドリユーテナント、つまり少尉もいる。いや、いたと言う方が正しいかな」

プロジェクターはPCへの接続に変えられ、スクリーンにデスクトップが投射されていたが、それはブラウザに変わった。

北千住、転落、死亡……。老人はキーボードを打ち込んでニュースサイトのログを探しているようだったが、やがて目当てのものをみつけたらしく、ルネに顔を向けて、ごらんといい暗黙の意思表示をした。どうも、この記事には“少尉”のことが書かれているらしい。

北千住駅のホームで転落した男性が電車に轢かれて死亡した記事だったが、いつ(When)、どこで(Where)、誰が(Who)、何を(What)、なぜ(Why)、どのように(How)したかというニュースの基本要素を最低限だけ満たした数行だけの文章だった。正確に言えばWhoに関しては“警察は男性の身元を調べています”で、事故が起きたのは、たしか、ルネがトリルとオフで会った日の夜だったように思う。

キャプテンが“大尉”の意味である事は知っていた。“少尉”というのも、あの独白の中に出てきた人物だ。“大尉”すなわち神聖十字軍の破壊工作要員だった頃の赤土の部下で、ホームレスに紛れ込んで逃亡していた赤土に接触し、幹部だった蝙蝠一家を裏切りという名目で殺害するよう伝えたのが“少尉”だった。

「“少尉”は消されたんですか？」とルネは尋ねた。こういう場合、事故を装った殺人があるのはミステリーの中だけではない。

「さあ」

そう答えて老人は一呼吸おいた。

「私は、作家でも政治家でも宗教家でもない。今は映画屋でもなくて、そうだ、いうなればゲーマーかな」

老人はグラスに残っていたワインを飲み干すと、ルネがボトルに手を伸ばすより早く、それをテーブルの脇に除けて、それ以上は飲まない意思を示した。

「あの女の子をホームレスに近づけ、いろいろ情報を得ていたから、護衛するつもりで尾行していたのかな。だが返って彼自身が殺られてしまった。いや、単純に足を踏み外して線路に落ちたのかもしれないよ」

「それもあなたが進行させたゲームの中ですか？」

老人は無言だった。トリルが自分に近づいて来たのにはやはり何か裏があつたのかどうかをルネが考えている内に、スクリーンに映っているPCの画面が変えられる。見たことはない何かのアプリケーションのインターフェースだが、そこにはメールの文面らしいものがある。ルネはそれが暗号化されたメールを復元したものではないかと想像した。

report No.406

ゲームマスター様

2Ltです。

明日香は帰途につきました。

向こうの駅で降りたあたりで接触してみます。

大尉はさすがに侮れないので、近づくことは出来ませんでした。気づかれたようで、尾けられました。何とかうまくまいたようです。

敬礼。

「ま、私にもこれくらいの情報なら入ってくるが」と老人はルネにスクリーンを示した。

「2 Lt というのは 2nd Lieutenant の略ですか？」
「そう、つまり少尉だ。これが彼の最後の報告になった。大尉を見くびったのが命取りになったんだろうな」

スクリーンにある IE の中でカーソルが、お気に入りを開いている。

「これは、君も見ているだろう？」

映し出されたのは、あの独白のページだった。半島での“器物”破壊の試験について書いてある文章がルネの記憶と重なり合う。

「向こうで肉体的にはもちろん精神的にも極限状態まで戦闘能力を高められているから、普通の人間の中にある殺人という行為の前のボーダーラインは消滅している。対象の息の根を止めるのに躊躇することがなく、余裕をもってそれを楽しめるくらいだ。階級だけ少尉を貰っていても実戦経験もない自衛隊の元 1 等陸曹程度では太刀打ちできないわな」

少尉は老人に報告を送っていたらしい。それなら、とルネが思っ

たことの答は、老人から先に述べられた。

「君はもう、わかってるかもしれないが、この少し前、女の子が君とデートしていたのも報告を受けている」

「彼女は死んだというメールが来ましたが」

老人はルネの言葉に直接反応を示さなかった。

「少尉もだが、いろいろ人間が死んでるようだね。化けて出てくるかな」

老人は冗談めかして言う、画面をやはりブックマークしてあったページのひとつに変えた。

「インターネットの中にも、けっこう幽霊がでるみたいだね」

インターネットをさまよう幽霊

最近、メールで不思議なことがあるのよね。

時々 Mailer-Daemon から存在しないアドレスとして帰って来るメールがあるんだけど。

それを私、送信した覚えがないの。

ヘッダを見ると、たしかに私が使ってるプロバイダを経由してるし、おかしいんだよねえ。

ファイルも添付してるんだけど、

だけど、そんなの出してないんだよなあ。

それで、そのアドレスなんだけど、

以前、あるサイトで試聴した音楽が気に入ったんでCDを買ったことがあって

それは、まあインディーズというか、自分の演奏して録音したのをネットで通販してるわけだけど、そのミュージシャンのなんだよね。

Heilterさんっていうんだけど、最近、亡くなったって噂を聞いて、調べてみたらどうもマジでらしい。

これって、ネットの都市伝説？

老人は少し含み笑いをした後、画面をスクロールさせ、あるビクターが寄せているコメントの位置で止めた。

送信者欄に表示される名前やアドレスはメーラーの設定で好きなようにできるんだけど、偽装してもヘッダを見ればバレるね。考えられるのは、PCの中にある情報をメールで送信するようなツールを知らぬ間に送り込まれること。「トロイの木馬」というクラッキングツールの一種じゃないかな。

その方が亡くなったのなら、たぶんメルアドが契約切れになってるんだろう。それで、トロイが送信したメールは宛先が無くなってるから、Mailer-Daemonが返してよこすわけだ。添付ファイルって、どんなのかな？専用のソフトで読み込まないと、内容はわからないかもだけど。

最近のウイルスはメールの添付ファイルじゃなく、サイトにアクセスすると入れられちゃうようなこともあるらしい。まさかとは思うけど、あなたが買ったというCDも調べてみた方がいいかもね。

「僕もHeilterさんのCD、持ってますけど、ウイルスが入っ

てたのかなあ？」

「相手を選んだんだろう。だから、君に送ったCDには入れなかったんじゃないかな。君はスキルが高いしバレる可能性がある。」

「スキル…、そうでしょうか？」

PCやネットに関しては、まあ初心者ではないだろうが、スキルが高いと言われるのは妥当でないかもしれないとルネは思ったが、老人には謙遜しているように見えたかもしれない。

「敵を知りおのれを知れば一戦危うからず」という言葉がある。そういう意味でHeiter君はなかなか賢かいやり方をしてたね。その一方で、あのお嬢様たちは“知らぬが仏”というやつだったが「お嬢様たち」というと、レイカたちがHeiterさんのCDを買ったんですか？」

「うん、だが、“敵を知る”というよりは曲や詞が、どこかの剽窃だと叩くつもりで細かく分析するためだったらしい」

「そんなことまで少尉氏が調べたんですか？」

「彼ではないよ。それに、少尉はまあ端末のようなものだったしね」

「端末…ですか？」

「プレイヤーのひとつと私との接点かな」

「少尉を通して命令を伝えてたわけですね」

「私は命令などしないよ。ヒントを与えたり、時にはアドバイスする。ゲームマスターというのはそのくらいがいいところだ。だが、彼がいなくなっただので、そのプレイヤーはゲームの続行が難しくなったかもしれないな」

それはさておき、と老人は続けた。

「あのお嬢様の取り巻き連中はHeiterさんのCDを購入し、当然、それを聴くわけだ。パソコンだとディスプレイに歌詞が表示されるようにしてあるから、皆、パソコンを使って聴いた。それでスパイウェアがインストールされて、連中のパソコンの中にある情報は、みんなHeiter君に送られてしまったというわけだ。ま

だツールが削除されていなければ10回起動することに新しい情報が送られるから、このブログを書いてる人のようなことになる」

「そういうことがあって、Helterさんも消されたわけですね」
ルネは、こう質問したが、老人が不用意に多くを軽々しく喋るとは期待していなかった。

「ううん、それだけではなく、もうちょっと厄介なことがあった」
予想に反して、老人は話し始めたが、概略は、こんなところだろう。

Helterは高瀬川雅堂を恐喝していた。スパイウェアで集めた情報を分析することでレイカグループやレイカ自身の行動がいろいろと明らかになったのだが、その中に、レイカが詩壇や出版・マスコミの関係者をはじめ、朗読会を企画した各地のイベントーにも身体を与えていた事実があった。後で彼らから彼女に來たメールには、また彼女の体が欲しいという卑猥な文面もある。それらが家元に送られ、Helterは3000万円を要求した。受け入れられなければすべてをWinnnyに流す。誹謗中傷や嫌がらせの工作をしていたりしたことよりも、この決定的なショックと、レイカが死んだとはいえ、いつ世間に流布されて名家の体面を汚すことになるかわからない不安に苛まれたからではないか。Helterが消されたのは家元のために行なわれたわけではないから、彼は脅迫者ですでにこの世にいないのを知ることなく、誰とも知れぬその影に怯え続けたのだ。

「家元が殺されたということはないんですか？」

ルネの言葉に老人は首を横に振った。

「世の中のあれこれを謀略で説明するのが好きな者なら、そう考えるだろうね。でも、彼はたぶん自殺だろう。彼を殺す必要のある者はいないからね。物盗りにでも入られたのなら別だが、そういうこ

ともないだろう」

老人の言葉をルネは意味ありげに感じた。意識してそうしているのか失言なのかはわからないが、老人は話の方向を逸らした。

「あのお嬢様も、何不自由なく育ったにしては、なかなかのやり手だったね。むしろ私は感心したよ」

老人はミネラルウォーターを一口飲んだ。

「昔、戦争中のことだが、身体を張って諜報活動をしている女と関わりをもったことがある。いい家柄の生まれだったが運命に翻弄されたんだな。見た目が綺麗なだけでなく心根もよくて、いい女だったが」

老人の視線は遠方の虚空に向けられている。

レイカはどんなものを手に入れるため、詩人としてのし上ろうとしたのだろう。詩を書くのみで生活できているのは極端な話では一人というくらいだから、金儲けをしようとするのなら、他に効率のいい方法があるだろうが、文化人としてのプライドを満足させるのにはいいかもしれない。小説を書いて成功するのだと、まだ競争率が高そうだ。

そういえば、さつき老人が、政治家なら上にいくのが簡単だと言っていたなとルネは思った。

「ところで、話題を変えるが、いいかな。今、突然思い出したことがあるんだ」

これまでの話の経緯で質問したいことはあったが、それをやるのは随分不躰だし、たぶん答を得られないような気がした。ルネは老人が話すのに任せた。

それは戦争中、大陸の深い森の中のことだ。私は軍の諜報機関に関係した仕事もしていて、その時は本隊と離れて敵の状況を偵察に

出ていた。その一帯では戦闘が行われていたから硝煙が薄く立ち込めていたように記憶しているが、それは遠い過去のことと時間の霧の彼方にあるからだろうか。とにかく、そこで私はその中の木々の向こうから近づいてくる男の姿を認めた。彼は戦闘中のように身構えた姿勢をとるでもなく自然に歩いて来た。その男は、どの国かはわからないが、見た感じ、将校と思える軍服を着ていた。彼は私にやあという感じで手を上げ笑顔を向けた。全然敵意は感じられない。彼は金髪の白人で、どう見ても敵側の人間だったのに、私も彼に対して警戒の感情が沸かないのは不思議なことだった。私たちは木の根本に腰を下ろした。私は彼に煙草を勧め、マッチで火をつけてやると彼は美味そうに一服し、顔を上に向けて煙を高く吐き出した。それから私たちの間に会話があったの。私は英語と中国語なら少しわかるけれど、それ意外の外国語の素養はない。だが、彼の話す聞いた事のない言葉をどういうわけかすんなりと理解していた。初めは何の話をしたのだろうか？よく覚えていないが、故郷のことや家族のことといった四方山話だったのだと思うが、その土地の自然や母親の作る料理のようなものだったのではないかな。

彼は私にこんなことを語った。やがて、日本・ドイツ・イタリアの同盟三国は連合国に敗北する。だが、それはあなたの国にとって、むしろ幸いなことだ。日本は瞬く間に敗戦の痛手から立ち直り、未曾有の繁栄を成し遂げるだろう。

日本がやがて戦争に負けることは客観的な情報と判断能力があれば当然予測できることだった。私、いずれにしても、それは私が死んだ後のことだろうと言った。私は大陸での諜報工作に深く関わっていたから、おそらく戦犯として処刑される。場合によっては自決するのかもしれない。

彼は私の未来について語った。いや、あなたはもつと先の百歳を越えるまで生きるだろう。そして、そこで、ある世界のマスターになるだろう。長い時間を生きた後、あなたは“エディプスの父”として死ぬ。

おかしいことだが私はこのことをずっと忘れていたんだ。何十年も後の今になって突然思い出した。なぜなんだろう。何というか、以前見て、それまで忘れていた夢の内容を、また夢の中で思い出すようなことかな。だが、あれはけっして夢ではなかった。

「どうなっているんだろう。何だか変な話をしてしまった。歳のせいでアルコールに弱くなっているのかもしれないが。でも、君にあった時、何かが始まったんだ。そうだな。それはちょうど、マルチメディアのファイルをダウンロードするような感じで、先程それが終わり、記憶が甦ったのだ」

老人はまるで首の運動でもするように何度か頭を傾げた。

「ある物事を全く忘れてしまっていて、ある時思い出す。君に、そんなことはあるかね？」

「忘れてしまっていて記憶のない時期というのはあります」

「ほう」

老人はルネに視線を向けた。それは彼が興味を示したことの表れのようにだった。

「僕は小学校2年より前のことを、あまり覚えていません。その頃の友達なんかは僕のことをよく覚えてたりするみたいですが、僕の記憶の中で、その辺りはただ空白になってます」

「精神分析医なら、もっともらしい理由をつけるんだろうね。その頃、君がお母さんと離れて暮らすことになったからとかね」

やはり、老人は自分のことを調べてあるのだとルネは確信した。

「僕のことは、よくご存知のようですね。母は精神科の病棟で死んだらしいですが」

「まあ、あまり詳しいことまではわからないが」

精神科の病棟で死んだことについて、ルネはよく知らない。周囲の大人たちは彼にその話をするのを避けていたようで、それに彼もあえて尋ねることはしなかったのだ。子供の耳に入ることはないだ

ろうと大人たちが思っただけで、交わす会話を子供はしっかり聞いていたりするものだが、彼がもっている情報はそんなふうにして得たものだけだ。

「君とデートした女の子も心療内科に通ってたかな。ああそうだ。他にメル友もいたっけね。精神分析だと、また何とか言っただろうか。宗教屋ならカルマだとか持ち出すことだろう」

Heiterのウィルスか、あるいはもっと他のスパイウェアが自分のPCにも入り込んで、老人はそこから情報を得ているのだろうか。でも、それだと母親のことまで知ることはいらないだろう。PCの中に、それに結びつくようなものはないはずだから。ルネは老人と話しながら、いろいろ想像を巡らしたが、これといった結論は出ない。

「カルマなんだろうか。その二人は亡くなったみたいですね」

「同じような病気なのを知ってメル友になり、薬などの情報交換をしていたようだから、接点もあったんだね。カルマとも精神分析ともつかない話ではあるが、因果応報あるいは自業自得という言葉に近いのだろうか」

「僕はトリルが死んだというメールについて半信半疑だったんですが、あれは本当なんですか？」

「彼女が飛び降りを図ったのは不思議な因縁なのかな。それと同じ死に方をするので、かつて自分の犯した殺人を贖罪しようとする気持ちが無意識にはたらいたのか。フロイトが言い間違いの心理について述べているが、それと似たようなことではないかとかね。あの共犯の男の子を呼んだのは、むしろ、そういうのが背景にあると言ったら考え過ぎかな」

老人は軽く笑ったが、それは自嘲のようにも見えた。

「あなたにもポプラさんからのメールが行ってるんですか？それと、共犯」って……」

「あの二人は飛び降り自殺に見せかけた殺人では実行犯で、スパイ

ウェアを仕掛けたH e l t e r君の時には、彼がネット恋愛中であるのを利用し、わざと誤解を与えるような書きこみをしておびき出す役目を果たした。巨大掲示板などでよくある“釣り”みたいなものだね。ま、とにかく、あの二人は計4人の殺人に関わっている。女の子の方に精神科への通院歴があるとはいえ、口外すれば自分たちが極刑に問われる可能性は高い。ということで、他のメンバーは口封じされたが二人はそれを免れている」

「ま、あの青年はあの子に惚れてたんだろうな。だから、むしろ積極的に共犯関係を結んだ。考えてみれば、恋愛とか結婚とか、男女の結びつきは心理的に共犯関係と似ているような気がしないでもない」

「でも、随分いろいろとお調べになってますね。僕のことも含めて」
「まあ、ソーシャルネットワークキングとかを謳っている秘密めいた会員制ブログなどでの噂が実は筒抜けなのはA C C E S S P A Lに限ったことではない。それくらいは当然、君にもわかってるだろうが」

老人は画面を変えた。文字列が並んでいて、それはアクセスログのようだった。

「これは、君のアクセスログの一部だ。IT企業は時価総額の高さを競ったりしているが社員は薄給である事が多い。だから特にスキルの高い者などは不満を鬱積されているものなのだ。表向きは個人情報保護を謳ってはいるが内部の人間を手なづければセキュリティなどあってないようなものだ。大手プロバイダでも大規模な情報流出があったらどう？」

それから老人は、こんなものもあると言って、あるサイトの認証画面にIDとパスワードを打ち込み、ログインした。

氏名、 現住所、生年月日の他、電話番号、小中高大別の出身校、職業などの項目ごとにテキストボックスがあり、 が付いてい

るのは必須、その他については“不明の場合は空欄にしてください”となっている。

老人がルネの戸籍上の名前や住所を打ち込んでいる。数力所のテキストボックスが埋められるとボタンがクリックされた。

学歴、家族構成、年収、勤務先から趣味、資格、身長、体重の一覧があり、交友関係などは別ページへのリンクがある。

ルネの情報は“調査中”となっている欄が半分以上だが、それでも、これを見れば彼という人間の輪郭をつかむ事ができるだろう。

どうやって調べたのか住基ネットの番号まで載っていた。

「あるところで作っているデータベースだ。裏ルートで官庁からも情報を得ている。ここは誰もが閲覧できるわけではない。存在自体があまり知られていないのだがね」

老人はテキストボックスのページに戻ると、また何か打ち込み始めた。名前の欄に並んだテキストはルネの記憶にあるものだった。

高校の頃一緒にバンドを組んでいた女の子だ。下北沢の小さな劇団にしばらくいて、その後、結婚したらしい。現在の友人たちのコメントや夫の経歴や勤務先まで、かなり詳しい情報が掲載されていた。

「彼女もメンタル系のカウンセリングを受けているようだね」

それまでスクリーンを見ていた老人は、一旦ルネに視線を向けてからPCのディスプレイに視線を戻した。

「ところでだが、私はほとんど、このパソコンの画面でウェブサイトを閲覧したりメールの送受信をしていただけだ。ゲームはディスプレイの中で進行していたんだ。登場するキャラはハンドルネームを使い、オフとは違う姿をしていたり、むしろ別人格を演じて、それを楽しんでいることだって多い」

老人は、お気に入りの中に作成されている“game”フォルダを開き、手持ち無沙汰を紛らすかのように、いくつかのサイトにアクセスする。ルネの知っているオンラインRPGもあれば、初めて

見るものもあつた。画面は動的で賑やかだったり、幻想的なイラストの世界が広がっていたりする。

「ま、さっきも言ったように、私はゲーマーだということだ」

「ゲーマーですか？では、あなたがゲームマスターですね」

ルネの言葉に老人は「ほう」と興味があることを示す表情をしたが、それはあらかじめ計算された演技のようにも見えた。

「ゲームマスターか。では、私はどんなふうにゲームを進行させたのかな？」

ルネは、これまで頭の中でまとめられていた内容を話し始めた。話しているうちに思い出したり整理されたりするものもあつて、自分がコンピュータに変容するシミュレーションを体験しているような感覚を味わう。

「有名メルマガや人気サイトを運営していた青年に融資して起業させ、それに乗っ取って看板にする。彼が自分で作った拙いシステムでやっているようなところだけど、コンピュータやネットの事は何もわからない投資家たちの信用は獲得できた。そして、急成長した暴力団の企業舎弟にとっては用済みで、むしろ邪魔な存在となった青年を始末する。また、ここで収集した個人情報傍系組織に流れ、ヤクザの常とはいえ無慮な連中が恐喝・詐欺・売春強要のネタに使い、それに関係していたあるメルマガスタッフがユーザーの反応から不審に思うようになった。口封じの必要に迫られたので、その仕事はカルトの地下工作員や、コントロール下にある詩人グループに任せた。暴力団とカルトにはどんな接点があるのか、と言えば、それこそがゲームマスターだったわけですね。ゲームのメンバーはヤクザやカルト、そして政財界やマスコミの中にもいるわけだし」

スクリーンに映っているのは、羽根の生えた凜々しい顔立ちの若者やティアラを着けた少女や半獣半人の男が異星の荒野のような風景をバックに描かれたCGだ。

ゲームの舞台設定は神話的世界であることが多い。そこは英雄やモンスターや美女や恋愛譚や魔術やトリックスターが咲き乱れる花園のようであり、謎、残酷、カオス、生と死といった人間存在の地底が時折姿をあらわす場所でもある。

「でも、工作人員に詩人グループを始末させた辺りはゲーマーの面目躍如でしたね。さしずめ裏ワザといったところでしょうか。彼が昔思いを寄せていた、というのではないかもしれませんが、カルトが見せしめの対象として、その元女性信者の殺害を計画していて、その実行は幹部が潜り込んでいる詩人グループが行なう、という話ををさり気なく聞かせる。工作人員は女性信者を救うため、詩人たちを次々に消していった。見せかけた心中や集団自殺の状況には疑惑があつたのに警察が捜査を終了した辺りにも、ゲームマスターの手腕が発揮されたわけですね」

老人は言葉でも表情でも、ルネが述べた事について肯定や否定の意思を示すことはなく、緩やかなスタートで話し始めた。

「私の名誉のために言っておくが、私は初めから、あの詩人さんたちとの約束を破るつもりではなかったんだ。だが、スパイウェアによる情報漏出で、事態が変化した。

もし、実際Winnyにでも流されたら、そこからネットのにわか探偵たちは私の存在を推理するかもしれない。ヒキコモリやニートの戯言とたかを括っていたら足元を掬われないと限らないからね」

スクリーンには、ちゃんねる・ゼロのトップページが映っている。「殺人の請負は、お嬢様の詩集を大手出版社から刊行し宣伝には力を入れる。書店では平積みするよう営業が動く。というのが交換条件だった。そのキーポイントを手繰って行ったら私の姿が見えてしまいかもしれない。リスクを最小限にするには“死人に口無し”だったのだよ」、

「sasurabbitoの自殺も何だかおかしいと、ちゃんねる・
ぜろで、ちよつと騒がれてましたね。遺体発見の状況に疑問点が多
いけれど、警察はすぐに自殺と発表したって」

「あれについては今日、君が敵討ちをしたわけだ。図らずも、なの
だろうが」

それから老人は「Helterくんの敵討ちでもあったね」と付
け加えた。

つまり、トリルたちがおびき出して彼が実行犯であつたわけだ。

ルネの頭の隅に、オークリーのサングラスを前頭部に乗せた男の顔
が、爬虫類の紋様を思い出すように浮かんで消えた。

「何で、こんなに喋ってしまったんだろう？やはり、いつもはグラ
ス一杯で止めるワインを追加したのが良くなかったのかな。君から
見たらたいした量ではないだろうが、こんな身体になってしまつた
し、若い頃のようにはいかん」

老人は、今、何時かなと独り言を呟き、PCの時計に目をやった。
「ちよつと失礼。ま、君は、やっててよ。若いんだから、まだ飲み
足りないだろう」

「キッチンの床の開き戸を上げると下に庫があるから、好きなのを
持って来たらいい」

まだ、ボトルには半分くらい残っていた。帰りはほとんど下りだ
から楽だとはいえ、あまりアルコールが回っていては危険だ。

ルネは、今あるだけで結構だと老人に告げ、ワインを取りに行く
ことはしなかった。

老人は部屋の隅にあるデスクの抽斗から円形の器機を取り出
して来た。掌に治まるくらいの大きさでコードがついている。老

人は、そのコードをPCに接続した。ルネは初め、変わった形のマウスかと思ったが、そうではないようだった。

老人は円形の器機を片手に持ったまま、もう一方の手でマウスを掴んでデスクトップにあるアイコンのひとつをダブルクリックした。スクリーンには呼び出されたアプリのスキンが映っている。カーソルが動いてメニューと思われる中から選択し、画面が変わった。

先程の話で、老人は臓器を移植しているらしいから、その状態をチェックしているのだろうか。心臓のペースメーカーはよく知られているが、そのようなものが身体に入っているのかもしれない。

画面の中はすべて英語で専門用語らしい単語が多く、どんな意味なのかルネにはよくわからないが、医療に関係したものなのだろう。老人は器機を肝臓の上辺りにかざすようにして画面の数値をチェックしているようだ。それからメニューに戻って別のアイテムを選択した。器機を身体別の部位に当てて一人で頷いている。

それから、老人は器機を心臓の上に移動させた。画面を見てルネは、老人の鼓動と同じリズムでアイコンが点滅し、グラフの振幅が大きくなっているのだらうと推測した。老人はポインターの位置を移動させ、何ヶ所かの数値をすこしづつ増減させている。

ルネは車椅子の後から老人に手を回して自由を奪った。老人の手を押さえて器機を心臓の上に固定し、次にマウスを奪う。老人は一瞬動揺を示したがたいした抵抗はしなかった。もう身体にそれだけの力がないのかもしれない。

マウスを操ってポインターを画面の中の▼に合わすと色が変化した。ルネはクリックしたままマウスのボタンを押し続けた。警告の表示が出る。英語だが、多分、ペースメーカーに設定されている数値を下げますがよろしいですか？というような意味だろう。Yesを選択して、またボタンを押し続けた。

▼の横のボックスに表示されている数値が下がって行き、30になった時、老人から器機をもぎ取って部屋の隅に放り投げる。US

Bポートから外れていく器機のコードがPCを半回転させた。

老人はルネにやめるよう促す小さな身振りをしたが、すぐに身体力がほとんど抜けたようだった。だが、ルネを見つめる視線は比較的しっかりしていて、でも、ルネはそこに驚きとか怒りとか憎しみといった感情を見なかったように思う。老人はその時、それらを失ったのではなく超越してしまったかのように見えた。

「エディプスの父」として死ぬ。それが何を意味しているのか、まだ自分にはよくわからない。ま、例え、私が見たものが夢や幻であったとしても、もしいつか、それが現実になるのなら、それは、このリアルな世界を超えた何かが存在していることの証明になるのかもしれないと、あの白人に会った後、私は思った」

「でも、あなたは僕の父ではない」

老人は頷いた。それは自分への何かの確認も込めているかのようにだった。

「君のお父さんについてもちょっと調べてみて、チベットの近くまで行ったということまでは掴んでいるんだが、その後の情報はないんだ」

老人の顔は青ざめてきていた。目を半ば閉じ、口から脈絡のない言葉が、涎のように洩れる。

「地底の空洞に存在すると言われる高次元な世界、シャンバラを目指したのかもしれないな。あの辺りにある入口を、かつてはアドルフ・ヒトラーも探していたそうだが」

チアノーゼは、更に進行しているようだったが、彼は変わらぬ調子で話し続けた。

「そうだ、数日前、関釜フェリーで半島に渡った男もいた。その後の、消息は掴めていない。もう、結果が出る頃だが」

老人からはもう喋る力も失われたらしく、話は、しばらく途絶えた。やがて、最低限の充電がなされた携帯電話のように、彼の声が

甦った。

「そう、ゲームだ。ゲーマーたちはタックスヘブンの銀行口座に膨大なポイントを貯め込む。美味しい物を食べたり高級な服を着たり、車や女や家や何やで精一杯贅沢をしても、一生の内でもその何パーセントも使えないようなポイント。憑りつかれたようにそれをさらにひたすら増やしていく。ゲームオーバーに陥ることだけは何としても避けながらね。私はそのゲームの画面を見てプレイしていたに過ぎない。この世界のすべてを知っている神ではないのだ」

ルネの内面が老人に対する怒りや憎悪の色で塗られていることはなかったように思う。今はむしろ、どこまでも透明な世界が続いているのではないだろうか。

老人は多分、何かが衰退していたので結末の方向を選択し、ルネはただ、そこにプロック崩しのゲームがあったのでクリアしたようなものだったのかもしれない。

ドアを空けて部屋を出る。

ルネは玄関から表に出た。ミニベロに跨った時、今日は空の色が綺麗だと思った。太陽は傾き始めている。地球は自転と公転を続けているが、自分は永遠の切り口である現在が次々提示されるのを、ただ見ているだけだ。塔の男は、そこだけ静止画像のままであるように、何も変わらずにいる。

爬虫類のような男がいた家のガレージは依然として空で、人のいる様子もなかった。そこからの坂道はできる限りのスピードで下ったから、周囲に気を配っている余裕はなかった。あるいは、また、どこかの家の窓からルネを見ている者がいたのかもしれないが、その後ずっと、追って来る気配は感じなかった。

下っていくと盆地に出る。真っ直ぐ行けば観光用の牧場があるのだが、交差してジャンクシヨンのような構造になっているところを熱函道路に入った。適度な下りなので直線区間だと車体の軽いミニベロは50キロ前後のスピードが出る。沽券に関わると思うのか、それとも釣られてなのか、ここでは当然、制限速度オーバーなのだが、車が次々に追い抜いて行く。

走るに連れ、かなり傾いた陽光が左側の林の木々の間から、連続して焚かれるフラッシュのようにルネのサングラスに飛び込んだ。た。

ふと気づくと、ルネに並走している車がある。昼間のことを思い出してぎょつとしたが、見覚えのある黄色いワーゲンだった。中で先程の女性が軽く手を振り、それから、ルージユを取り出して側面の窓に赤い文字を書いた。

T T Y L

鏡文字で書いてくれているようで、ルネの側からは正常なアルファベットに見えた“Talk To You Later”を表わす、90年代あたりのWebで使われていた略語だ。

「どこで？」とルネは尋ねたが声は届かなかったかもしれない。だが、彼女は、また、ルージユでこう書いた。

M A N Y W O R L D

前方に対向車の姿が見えた。ワーゲンは加速して走り去る。

後部ガラスの向こうのルパン三世キャラたちも遠ざかって行く。

富士子…、そして銭形。ちゃんねる・ゼロに“銭形”というHNの住人がいたな。ルネはふと思う。

多世界？
MANY
WORLD...。

第14話

87 > / h t m l <

ミニベロは、下って行った先の、たぶん三島市内にある私鉄の駅の駐輪場に、できれば誰かが持ち去るのを期待して鍵をかけずに置いてきた。荷物はデイパックひとつだったから、夕方の列車が多少混んでいても問題なかった。

もし、今日あったことが事件として捜査されることになり、目撃情報があつてミニベロまで行き着いたとしても、もとはネズミヤシゲルがどこかで貰つてきた物だから、ルネへの繋がりには、そこで途切れるだろう。もちろん指紋やDNAが残っていないよう配慮したし、販売ルートを辿られることもあるので取り付けてあつたサイクルコンピューターは外した。コンビニや商店のビデオから引き逃げ犯人が逮捕された例もあるので、そちらも注意を怠らないようにしている。

神聖十字軍の信者たちが集団自殺したニュースをルネが知つたのは、東京駅のKIOSKに並んでいた夕刊紙の見出しでだった。いくつか手に取って見たが、見出しの活字が大きなりには、どれもまだ内容に乏しかった。

記事の量が多そうなものを買ったが、書かれているのは、半島の邸宅で教祖が急死して、その経緯は発表されていないことと、全国各地で信者が集まったり、あるいは単独で自殺し、中には家族を道連れにしている場合もあることくらいだった。

集団自殺については、午後になってから頻繁に報道されていたらしいが、東京駅から山手線に乗り換えた車内も、窓から見える街の様子も、別に普段と何も違いはないようだった。群集の姿を眺める

のはコインランドリーの洗濯機の中で回転する衣類を見ているのに似ているとルネは思う。そこから直接得るものは、これといったないが、退屈することもない。

帰ってから、ルネは途中のコンビニで買ったグラタンを暖めて食べた。運動が激しかった後、ルネはいつも比較的小食だ。食べながら発泡酒のロング缶を2本飲んだ。汗をかいて身体の水分が失われた時は、上質のコクでも粘性に感じられるビールより、発泡酒が喉を軽やかに流れていくのが快感をもたらすように思う。

もう、春というよりは初夏で、ちよつとした山を上ったりすれば衣類は汗まみれになるくらいだった。

テレビのニュース番組では、最初にキャスターが、今日は予定時間を延長してお伝えしますと述べた。もちろん、最初に取り上げられたのは集団自殺の話題だった。

自殺した信者の親族や友人が次々に、マインドコントロールされていたのだから自殺は本人の意志ではないと教団幹部を非難する映像の後、カルト問題に詳しいジャーナリストが、在家信者はローンを組まされての献金で自己破産寸前だったことなどをレポートした。行方不明になっている多くの出家信者は、今、どこでどうしているのか心配だ、とアシスタントが深刻な顔で話している。

取材スタッフの一人は、神聖十字軍が一部の信者を臓器ビジネスに売り渡して教祖への上納金を捻出していた噂があると興奮気味に語った。

ルネの脳裏にネズミヤシゲルの顔が浮かんだ。源さんと間違えられ、神聖十字軍の信者によって殺されたのではないかとルネは考えたが、これで、ネズミヤが浮かばれるかどうかはわからない。

そういえば、とポプラのことがルネの意識をよぎった。レイカた

ちの詩人グループは神聖十字軍と関わりがあるというかコントロール下にあったわけだし、彼の勤め先の銀行は教団の周囲に見え隠れする大物政治家、企業、さらには裏社会への繋がりが指摘されているのをネットでも他のメディアでもしばしば見かける。ポプラはそういう方面からの斡旋で就職したのかもしれない。

たぶん、ちゃんねる・ゼロでは“祭”になっているだろう、と思ったので、ルネはPCを起動しようかと前に座ったが、眠気は彼のあらゆる意思に浸蝕し、その力を無化していた。

瞼が鈍い耳鳴りのようなものを伴って押し下げられている。昼間、ハードな運動をする羽目になったので、全身の筋肉に尿酸が溜まっていて、その身体感覚が意識に滲入し、世界はざらつく。

眠りの奥で影絵芝居が上演されている。

歌うような声が聞こえるが、それは思念であるのかもしれない。

<ここは普遍的な形而上の世界です。原初ではありますが実数時間を遡行したどこかではありません。詩・物語・音楽・舞踏・演劇：はそれぞれの境界をもたず融合した状態です。ここで表現されるものは、それ自体で完成されています。そこに時間性はありません。あらゆる発展段階説は虚妄なのです。ビッグバンとその後の虚数時間。世界は分岐し、ある観測者は認識できないが、他の観測者の世界には存在する別の物語。ただ無意味に続けられる永久運動としての言語。そしてもう今、エディプスの父は世界中のどこにもいない。それは原初から不在なのでしょう？歴史を遡ったある時期、その姿を見られたのかもしれませんが、とにかく今、それは、既に失われて……>

ルネは、そこが夢の中であることをたしかに認識している。そして、ずっと前に見た夢が再現されているようであり、だが、それは

依然として不定形のまま、そこからさらに深い世界へ降下して行くようだ。

「 f i n n .
」

第14話（後書き）

長い作品をお読みいただきありがとうございました。

作品は、こちらにも置いてあります。

「モバイル」

<http://psychovirus-meta.hp.infoseek.co.jp/i/murdo00.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7759a/>

HTML殺人事件

2010年10月9日11時57分発行